〔奄羅園〕(名)【佛】中印度吠舎厘(ベーシャリ)國にあった釋迦の庵園で、この精舎で維摩經などを說いた。

あん・らく〔安樂〕(名) 安らかに樂しいこと。**—いす**〔安樂椅子〕(名) 意遣の椅子より大きく、肱掛をつけ、スプリングを設け、よりかかって、前後・左右に動きなどする裝置の椅子。**—じゅいん**…ゐん〔安樂壽院〕(名)【佛】京都市伏見區竹田町にある眞言宗の寺で、保安四年(一七八三)鳥羽天皇が鳥羽離宮の北殿に設けられた寺。**—じょうど**(やうど)〔安樂淨土〕(名)【佛】(ごくらくじょうど)(極樂淨土)。**—せかい**〔安樂世界〕(名)【佛】(ごくらくじょうど)(極樂淨土)。

あんりゅう(りう)…〔暗流〕(名) ❶表面にあらはれぬ流。❷外部にあらはれぬなりゆき。

あんりょ〔安慮〕(名) 安心。

あんるい(るゐ)〔暗涙〕(名) 人知れず流す涙。

アンレスト〔Unrest〕(名) 不穩。不安。

あんろ〔暗路〕(名) ❶暗い路。❷砲臺内の地下の交通用のトンネル。

あんろくざん〔安祿山〕(名)【人】支那唐の叛臣。もと、營州柳城の胡人。姓は康。玄宗の親任を受けたが、遂に叛して、天寶十四年大燕建武皇帝と稱したが至德二年、嗣子慶緒に弑せられた。(七五七)

い(ゐ)

い ❶五十音圖「あ行」の第二音。❷脣を平たく開き、舌の前部を高め、硬口蓋に接近させて發する母音。❸以の草體。

いぃ ❶五十音圖「い行」の第一音。❷中古までは「い」を主音とし「うゐ」を從音とした重母音で、「うい」と發音した。❸「爲」の草體。

い伊〔名・副〕❶これ。この。ただ。❷【地】イタリ

い〔膽〕(名)【生】(たんのう)(膽囊)。

い〔寢〕(名) 寢ること。眠ること。(古語)

い〔蜘蛛網〕(名) 蜘蛛の絲。蜘蛛の巣。(古語)

い〔意〕(名) ❶心。❷思。考。❸わけ。意味。❹趣意。おもむき。❺私心。私慾。❻意志。意思。❼意識。

—到りて筆隨ふ(句) 思ふままに詩歌・文章をすらすらとつくり出すといふ。**—となさず**(句) 心にかけない。**—に中る**(あたる)(句) 思ふ通りになる。**—に介ず**(句) 氣にかけない。**—に介せず**(句) 熱心に注意する。**—を得ず**(句) 理解に苦しむ。**—を致す**(句) ❶病をなほすこと。❷病をなほす人。醫者。**—は仁術なり**(句) 醫は人の危急を救ふ愛の道である。

い〔醫〕(名)

い〔異〕(名) ❶ことなること。ちがふこと。❷不思議。

い〔移〕(名) 中古、八省などで五にとりかはした文書。

い〔彝〕(名) ❶支那で宗廟の祭に用ひた銅器。❷人の常に守るべき道。則。常。**—を秉(とる)る**(句)(詩經大雅烝民篇の句)人道を固く守る。

い〔易〕(名)たやすいこと。

い〔夷〕(名) ❶えびす。蠻人。❷平らか。安らか。❸あぐら。**—を以て夷を制す**(句) 支那の傳統的外交政策で、他國民を爭はせておいて、自國の安全を計るといふ。

い〔衣〕(名)きもの。ころも。きぬ。着ること。

い〔履〕(名) ❶支那で、玉座の後に立てた屏風で、斧の形を赤地の絹に繡したもの。天子が諸侯に對面する時に用ひた。❷ついたて。

い〔氣〕(名) いき(息)。(古語)

い〔汝〕(代) なんち(汝)。(古語)

い〔蟶〕(名)【動】環形動物の一種。體は圓筒形。雌雄異體。海濱の砂泥の中に埋沒して生活する。ゆむし。

い〔五〕(數) いつつ(五)。(古語)

い〔五十〕(數) ごじふ(五十)。いそ。(古語)

い(接頭) 動詞に冠して語勢を強める語。「—行く」。(古語)

い(接尾) 名詞の下に添へて語勢を強める語。「妹—」。(古語)

い〔齊〕(接頭) 神事の場合に不淨を忌む意に用ひる語。「—垣」。(古語)

イ(名) 異本の語句を傍註する時に用ひる符號。

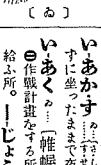
い〔井〕(名) 地を掘り下げて、地下水を汲み上げ又は吸ひあげるしかけにしたもの。ゐど。井戸。

い〔堰〕(名) 用水をせきとめてある所。(井堰)。

い〔亥〕(名) ❶十二支の一で、最後に位するもの。❷方角の名で、西北の北によった方。❸昔の「時」の名で、今の午後十時。

い〔猪〕(名) ❶【動】ゐのしし(猪)及び豕の總稱。❷「猪の牙」の略。

い〔蘭・莞草・燈心草〕(名)【植】燈心草科の多年生草本。濕地に自生し、又、水田に栽培する。個匏を地下莖を有し、地上莖を抽く。莖は細長く、一米位に達し、中に白色の髓がある。葉は莖基に鱗片狀



〔ゐ〕

箱形をなす。夏季、莖の上部に分岐した花穗を側生し、綠褐色の細花を開く。莖は還元は蠟表とし、髓は燈心とする。とうしんぐさ。

い〔居〕(名) ゐること。なること。〔ゐぐさ〕

い〔胃〕(名) ❶【生】內臟の一で、消化器の主要なもの。前方は食道に、後方は腸に連り、形は囊狀をなし、橫隔膜の下、肝臟の下方に橫たはる。內部に胃腺があって、胃液を分泌する。❷二十八宿の一で、西方に位するもの。

い〔蝟〕(名)【動】はりねずみ。

い〔緯〕(名) ❶よこ。❷よこいと。ぬき。❸(いと)

い〔威〕(名) 人を畏服させる勢。威光。**—ありて猛からず**(句)(論語述而篇の句)威嚴があってしかもやさしい所がある。**—を醫らす**(句)(唐書魏徵傳の句) 機嫌をなほす。怒を解く。**—を振るふ**(句) ゐばる。勢を示す。

い〔帷〕(名) 周圍にめぐらしたたれぎぬ。たれぎぬ。とばり。**—を下す**(句)(漢書董仲舒傳の句) 塾を開いて教授する。

い〔遺愛〕(名) ❶故人の生前に愛した遺物。❷古人の仁愛の遺風。**—じ**〔遺愛寺〕(名)【佛】支那江西省の廬山に在る寺。

いあいぃぁぁ〔居合〕(名) 卻進の一派。坐ったままですばやく刀を抜き、敵を斬倒す技。峰林重信に始まる。**—ぬき**〔居合拔〕(名) 見世物の一。身體の自由を束縛したり、極く狹い間隙に於いて、長い刀を

いあい…ぁぁ〔射合〕(名) いあふこと。

いあう…ぁぁ〔射合ふ〕(他動、ハ四)(いあうの)の口語。

いあおぁぁぉ〔位襖〕(名) 位階によって色を異にしたお襖。

いあかぁ…ぁか〔居明す〕(自動、サ四) 寢ずに坐ったまま夜をあかす。

いあくぁ…〔帷幄〕(名) ❶とばりとあげばりと。❷作戰計畫をする所。❸大元帥麾下の軍機を計畫し給ふ所。**—じょうそう**(ぢやう)〔帷幄上奏〕(名)【法】參謀總長・軍令部總長・陸海軍大臣が、內閣に相談せずに、天皇に軍要軍事問題を直接上奏すること。

いあつぁ…〔威壓〕(名) 威力を以ておさへつけること。おどしておさへつけること。「を射てあてる。

いあつ(てあてる)ぁ…(てあてる)〔射中つ〕(他動、タ下一)矢

いあつまるぁ…(あつまる)〔居集まる〕(自動、ラ四)あつまってゐる。(古語)

いあてるぁ…(てあてる)〔射中てる〕(他動、タ下一)「いあつての口語。

いあわす(あはす)〔居合はす〕(自動、サ下二)ちやうどその場にゐる。折よくゐる。

いあわせる(あはせる)〔居合はせる〕(自動、サ下一)(いあわすの)の口語。

いあん〔怡安〕(名) 樂しみ安んずること。

いあん〔醫案〕(名) 治療の方案。

いあん〔慰安〕(名) 慰めて心を安らかにする。

—かい…ゐ〔慰安會〕(名) 慰安の爲に開く會合。

いあんじん〔異安心〕(名)【佛】祖師の道とちがった教義を唱ふること。「—異端」。

いい〔易易〕(名・副) たやすいさま。

いい〔猗猗〕(名・副) 美しく盛んなさま。「た雲見。

いい〔異意〕(名) ❶そむく心。ふたごころ。❷ちがい。

いい〔彼違猗違〕(名・副) 判然と決しないさま。どちらつかず。

いい〔飯〕(名) 米を炊き又は蒸したもの。めし。ごはん。ごぜん。まま。まんま。かたかゆ。

いい〔謂〕(名) ❶いふこと。いったこと。いふ所。❷わけ。理由。

いい〔撫〕(名) ❶地中にうづめた箱樋。❷池から

いい〔逐遁〕(名・副) 斜に行くさま。

いい〔遺意〕(名) 故人の志。故人生前の意思。

いい〔唯諾〕(名・副)「はいはい」と答へて、他人のいふがままに従ふこと。—**だくだく**〔唯唯諾諾〕(名) 亦の是非にかかはらず、他人の意見に盲従すること。

いいあい〔言合〕(名) ❶話しあふこと。❷口論。いさかひ。争論。

いいあう〔言合ふ〕(他動、ハ四) 【いいおう】の口語。

いいあかす〔言明かす〕(自動、サ四) 話して夜を明かす。かたりあかす。

いいあがる〔言昂る・言揚る〕(自動、ラ四) いひつのる。言葉が激して来る。(古語)

いいあぐ〔言上ぐ〕(他動、ガ下二) 目上の人にしのびいふ。申し上ぐ。言上する。きこえあぐ。

いいあつ〔言中つ〕(他動、タ下二) ❶言中つ。言葉にあたる。❷推量でいったことが事実に當る。❸いった通りになる。

いいあつこう〔言扱ふ〕(他動、ハ四) うはさをする。いひあふ。(古語)

いいあつむ〔言集む〕(自動、マ下二) いろいろさまざまにいふ。

いいあてる〔言中てる〕(他動、タ下二) 【いいあつ】の口語。

いいあやまつ〔言過つ〕(他動、ハ四) いひそこなふ。

いいあらごこう〔言爭ふ〕(他動、ハ四) いひあらそふ。(古語)

いいあらそい〔言爭〕(名) いひあらそふこと。いさかひ。

いいあらそう〔言爭ふ〕(他動、ハ四) いひあふ。口論する。

いいあらわす〔言顯す〕(他動、サ四) ❶言葉に出していふ。❷自然する。(古語)

いいあり〔飯蟻〕(名)【動】膜翅類の小昆蟲。黄褐色で、棄所の食物を害するもの。いへあり。

いいありく〔言歩りく〕(他動、カ四) ❶いひつつ日を過ごす。❷ふれあるく。

いいあわす〔言合す〕(他動、サ下二) ❶互に話しあふ。❷申しあはせる。約束する。

いいあわせ〔言合〕(名) いひあはすこと。

いいあわせる〔言合はせる〕(他動、サ下一) 【いいあわす】の口語。

いいいい〔言言〕(名) くりかへしていふこと。絶えずぐづぐづいふこと。

いいいいて〔言言ひて〕(副) さまざまにいって。しきりにいって。

いいいさかい〔言諍〕(名) いさかひ。

いいいず〔言出づ〕(他動、ダ下二) いひだす。言葉に出す。

いいいだす〔言出す〕(他動、サ四) いひだす。言葉にあらはすこと。いひはじめる。

いいいで〔言出〕(名) ❶いひでること。❷いひながら出て行くこと。(古語)

いいいる〔言入る〕(他動、ラ下二) 申し込む。いひおこす。

いいいれ〔言入〕(名) ❶申し込むこと。❷結婚の申込。結納。

いいいれる〔言入れる〕(他動、ラ下一) 【いいいる】の口語。

いいうどかす〔言動かす〕(他動、サ四) 言葉で人の心を動かす。

いいうと・む〔言疎む〕(他動、マ下二) 告げ知らせてやる。(古語)

いいえ〔否〕(感) いな。いや。

いいおう〔言合ふ〕(他動、ハ四) ❶話しあふ。互に言葉をかはす。❷いひ爭ふ。口論する。

いいうまや〔飯驛〕(名) 蹈歌節のせちがに饗膳を用ひること。

いいおき〔言置〕(名) ❶いひおくこと。❷遺言。❸ひ殘す。話しておく。

いいおく〔言置く〕(他動、カ四) いひおくる。いひつかはす。

いいおくる〔言送る〕(他動、ラ四) いってやる。いひつかはす。

いいおこす〔言致す〕(他動、サ下二) 手紙などでいって來る。(古語)

いいおちい〔言落〕(名) ❶いひおとし。いひもらし。いひそこなひ。❷いへば却って非に落ちること。

いいおとす〔言落す〕(他動、サ四) ❶いふべきことをもらす。❷あしざまにいふ。くさす。

いいおもう〔言思ふ〕(他動、ハ四) 口でいひ、心でも思ふ。(古語)

いいがい〔言甲斐〕(名) いふだけのねうち。口をそへていふ程の效。—**なし**〔言甲斐無し〕(形、ク) ❶口をそへていふだけの價値がない。❷頼病である。役に立たぬ。意氣地なしかぬ。(古語)

いいがい〔飯匙〕(名) 飯をすくふしゃもじ。

いいかえす〔言返す〕(名) いひかへすこと。

いいかえす〔言返す〕(他動、サ四) ❶くりかへしていふ。❷口ごたへをする。さからひいふ。❸答辯する。いひわけしていふ。

いいかえる〔言變へる〕(他動、ハ下一) 【いいこう】の口語。

いいがかり〔言掛〕(名) ❶いひあって意地になること。言ひ出して引かれないこと。❷あとかたもなくいこと。❸誣ひること。

いいかかる〔言掛る〕(自動、ラ四) ❶言ひあって意地になる。❷はなしかける。❸話にとりかかる。❹あとかたもないことを誣ひる。

いいかく〔言掛く〕(他動、カ下二) ❶話しかける。いひだす。❷誣ひる。❸いひさす。

いいかくす〔言隱す〕(他動、サ四) ❶つつみかくしていはない。❷いひまきらす。

いいかけ〔言掛〕(名) ❶話始め。❷いひだすこと。❸一語を二つの意義に兼ね用ひること。かけことば。❹無理をいって困らせること。❺謎の問ひかけの言葉。

いいかける〔言掛ける〕(他動、カ下一) 【いいかく】の口語。

いいかた〔言方〕(名) ことばづかひ。いひやう。いひざま。

いいかたむ〔言固む〕(他動、マ下二) 互に固く約束する。

いいかためる〔言固〕(名) 約束。ちぎり。

いいかためる〔言固める〕(他動、マ下一) 【いいかたむ】の口語。

いいかたらう〔言語らふ〕(他動、ハ四) かたりあふ。

いいかつ〔言勝つ〕(自動、タ四) いひ爭って勝つ。

いいかぬ〔言兼ぬ〕(他動、ナ下二) いひにくい。いふのをはばかる。

いいかねる〔言兼ねる〕(他動、ナ下一) 【いいかぬ】の口語。

いいかぶす〔言被す〕(他動、サ下二) 事實を誣ひて人に罪をかぶせる。

いいかぶせ〔言被〕(名) 罪をきせること。罪をいひかぶせること。

いいかぶせる〔言被せる〕(他動、サ下一) 【いいかぶす】の口語。

いいかぶり〔言被〕(名) いひかぶること。かこつけ。

いいかぶる〔言被る〕(自動、ラ四) いひ出して却って罪をきる。

いいかみ〔飯噛〕(名) ㊀飯をかみくだいて嬰兒に食はせること。㊁酒を遊る肴のもとをつくること。(古語)

いいかもう〔言構ふ〕(自動、ハ下二)巧みにいひこしらへる。うまくいふ。(古語)

いいかよう〔言通ふ〕(他動、ハ四)(いいかわす)の古語。

いいかわす〔言交す〕(他動、サ四)㊀互にいふ。語りあふ。㊁口約する。㊂男女が互に契る。「口約束。㊃男女の結婚の直接の約束。

いいかわせる〔言交〕(名) ㊀いひかはすこと。

いいかわせる〔言交はせる〕(他動、サ下一)(いいかわす)の口語。

いいき〔異域〕(名) 外國。**—の鬼となる**(句) 外國で死ぬにいふ。

いいきかす〔言聞かす〕(他動、サ下二)いひきかせる。のみこませる。きとる。

いいきかせ〔言聞〕(名) 言ひ聞かせること。

いいきかせる〔言聞かせる〕(他動、サ下一)(いいきかす)の口語。

いいきたり〔言來〕(名) いひつたへたこと。

いいぎり〔桐〕(名)【植】桐科の落葉喬木。高さ約八米位。樹皮は白褐色で、褐色の斑點がある。葉は心臓形で鋸齒を有す。雌雄異株。雌花は綠色、雄花は淡紫色。五月頃複繖狀花序に開き、實は赤く南天に似て大。材は樂器を作るに用ひられる。

〔桐〕

いいきり〔電馬〕(名)【動】おかまこおろぎ。

いいきる〔言切る〕(他動、ラ四) ㊀いひ終る。㊁斷言する。

いいくいる〔意青〕(名)【教】志志の鍛錬・發達をはかるを目的とする教育。(知育・體育の對)

いいくくむ〔言含む〕(他動、マ下二)いひふくめる。(古語)「しりけ。口賀。

いいぐさ〔言種〕(名) いふべき事のたね。申

いいくさす〔言腐す〕(他動、サ四)わるくいふ。けなす。くさす。

いいくたす〔言朽す〕(他動、サ四)いひくさす。(古語)

いいくだす〔言下す〕(他動、サ四)いひおとす。いひくさす。

いいくらす〔言暮す〕(他動、サ四)その事ばかりいって日を暮す。

イーグル[Eagle](名) ㊀動鷲。㊁米國の十弗金貨。

いいくるむ〔言包む〕(他動、マ下二)うそをまことらしくいふ。ごまかす。

いいくるめる〔言包める〕(他動、マ下一)(いいくるむ)の口語。

いいくろむ〔言黑む〕(他動、マ下二)いひくるむ。實らしくいふ。

いいくろめる〔言黑める〕(他動、マ下一)(いいくろむ)の口語。

いいくんず〔言屈す〕(他動、サ變)いひつつ落勝する。いひつつ思ひ沈むる。(古語)

いいけ〔飯笥〕(名) めしびつ。おはち。(古語)

いいけす〔言消す〕(他動、サ四) ㊀人の話を打消す。㊁前にいつたことを打消す。

いいけつ〔言消つ〕(他動、タ四)いひけす。(古語)

いいけらく〔言ひけらく〕(名)(いいけるの)の延。いふやうには。いふことには。

いいこう〔言變ふ〕(他動、ハ下二)言を改める。いひなをす。

いいこしらえる〔言拵へる〕(他動、ハ下一)(いいこしらう)の口語。

いいこしらう〔言拵ふ〕(他動、ハ下二)㊀言葉巧みにいふ。㊁とりなしていふ。なだめいふ。

いいごと〔言事〕(名) ㊀いひぐさ。㊁口論。

いいごとなし〔言事〕(名) いひこなすも。いひまはし。

いいこなす〔言込す〕(他動、サ四)巧みにいひまはす。

いいこみ〔言込〕(名) 談じ込むこと。

いいこむ〔言込む〕(他動、マ四)申し込む。談じ込む。

いいこむ〔言籠む〕(他動、マ下二)いひ伏せる。いひ破る。論じて屈服させる。

いいこめる〔言籠める〕(他動、マ下一)(いいこむ)(言籠む)の口語。

いいこらす〔言懲す〕(他動、サ四)いひ聞かせて非を悟らせる。

いいさす〔言差す〕(他動、サ四)いひかけて中止する。中ばいってやめる。

いいさだむ〔言定む〕(他動、マ下二)口約する。

いいさとす〔言諭す〕(他動、サ四)いってきかせる。

いいさま〔言樣〕(名) いひやう。いひかた。

いいさまたぐ〔言妨ぐ〕(他動、ガ下二)人の話をじゃまする。話最中にさしでぐちをする。

イージー[Easy](英、形)安樂な。容易な。金融緩慢の。**—ゴーイング**[Easy-going](名) 氣樂な道ばりを行くこと。仕事をせずに、ぶらぶら生活すること。のんきなこと。**—チェヤ**[Easy-chair](名) 安樂椅子。**—マネー**[Easy-money](名) 低利資金。

いいしたたむ〔言認む〕(他動、マ下二)しっかり取調べていふ。(古語)

いいしぶる〔言澁る〕(他動、ラ四)言はうとしてためらひがちにいふ。

いいじまいさお〔飯島魁〕(名)【人】動物學者。靜岡縣濱松の人。理學博士。東京帝大教授。我が國の寄生蟲學の開祖。大正十年(一九二一)歿。年六十二。「動物學提要」等の著がある。

いいじゅうぎょう〔異位重行〕(名) 昔、公事などの時、親王・公卿が、內裏の庭に官位の次第によって、順次に重なって立並ばれたこと。

いいじょう〔言條〕(名) いひぶん。いひまへ。言ふべき事柄の箇條。

いいじらけ〔言白〕(名) ㊀話を中止して興ざめること。㊁話をいひさすこと。

いいしる〔言知る〕(他動、ラ四) ㊀いひかたを會得する。㊁うまくいふ。(以上古語)

いいしろい〔言白い〕(名) 論じあふこと。

いいしろう〔言白ふ〕(他動、ハ四) ㊀語りあふ。㊁論じあふ。(古語)

いいず〔射出づ〕(他動、ダ下二)外へ矢を射る。(射入るの對)

いいずかし〔飯塚市〕(名)【地】福岡縣遠賀川上流に沿ふ市。附近に二瀬・忠隈等の炭山がある。

いいすぎ〔言過〕(名) いひすぎること。いひすごし。

いいすきる〔言過きる〕(他動、ガ上一)(いいすぐ)の口語。

いいすぐ〔言過ぐ〕(他動、ガ上二)言ひすぎる。

いいすぐす〔言過ぐす〕(他動、サ四)(いいすぐす)。

いいすごす〔言過ごす〕(他動、サ四)度を過していふ。言はずともよい事をいふ。

いいずし〔飯鮨〕(名) 飯でつくる鮨。

いいすつ〔言捨つ〕(他動、タ下二)いひつ放しにする。いふだけで返答を待たない。ひっぱなし。㊁卽座の興で詠んだ俳句。**—かい**〔言捨會〕(名) 點取をしない俳諧の會。

いいすてる〔言捨てる〕(他動、タ下一)(いいすつ)の口語。

イースト[Yeast](名) 酵母。主として發芽によって增殖する微生物。

イーストマン [Eastman] (名)【人】❶(Max Eastman) アメリカ合衆國の詩人・批評家。社會主義的文藝雜誌「ニューマッセス」の中堅人物。ニューヨーク州カナンデーグアに生まる。「詩の歌」「ユーモアの意味」「レーニンの死後」「レーニン・トロツキー傳」等の著がある。(一八八三—) ❷(George Eastman) アメリカ合衆國ロチェスター市の世界第一のイーストマンコダック會社の建設者で社長。一九二七年、英國王立窮乏協會から、窮乏衛上の發明・進歩に對する貢獻の歴で進歩賞牌を受けた。(一九二四)

イーストレーキ [Warrington Eastlake] (名)【人】アメリカ合衆國の英語學者。元來はドイツ人。明治十七年來朝し、英文週刊雜誌を發刊し、明治二十二年再び來朝して「國民英語雜誌」を發行して、英語普及に力を盡くした。時人、博言博士と稱した。明治三十八年歿。(一八五五—一九〇五)

いいすべる いひすべる [言滑る] (自動、ラ四) 調子に乗って言ってはならぬことをいふ。

イーゼル [Easel] (名) 畫架。畫板を立てかける臺。

いいそこなう いひそこなう [言損ふ] (他動、ハ四) いひあやまる。

いいそこなす いひそこなす [言損す] (他動、サ四) いひあやまる。

いいそこのう いひそこのう [言損ふ] (他動、ハ四) (いいそ・このうの口語。

いいそす いひそす [言過す] (他動、サ四) いひすぎる。(古語)

いいそそくる いひそそくる [言囁くる] (他動、ラ下二) 口に出さうとして機會を得ない。

いいそむ いひそむ [言初む] (他動、マ下二) いひはじめる。

いいそめ いひそめ [言初] (名) いひそめること。

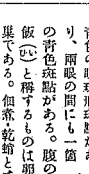
いいそめる いひそめる [言初める] (他動、マ下一) (いいそも)の口語。

いいそや いひそや [言過す] (他動、サ四) いひすぎる。

いいたいがい いひたいがい [言ひたいまま] (名) 言ひたいまま。

いいたおす いひたおす [言倒す] (他動、サ四) いひたせる。いひまかす。

いいだこ いひだこ 飯蛸・望潮魚 (名)【動】「たこ」の一種。體色蒼白。全長一二—一五糎位。體軀は楕圓形。第三對の脚の基部に暗青色の眼球形斑點があり、兩眼の間にも一箇の青色斑點がある。腹の巢である。但煮・乾蛸として賞味される。



いいだし いひだし [言出] (名) ❶いひ出すこと。❷旨らぬ所を補っていふ。

いいたす いひたす [言足す] (他動、サ四) 足ひはじめる。ことばを發する。

いいだたひこ いひだたひこ [飯田忠彦] (名)【人】國史家。通稱左馬。周防德山の人。勤王の志篤く、「大日本史」の後を繼いで「野史」を著はす。文久元年(一三五二)自殺。年六十三。

いいたつ いひたつ [言立つ] (自動、タ四) いひはじめる。ことばを發する。

いいたつ いひたつ [言立つ] (他動、タ下二) ❶申し上げる。❷とり出していふ。とり立てていふ。❸いひはる。

いいたて いひたて [言立] (名) ❶いひ立てること。又、その材料。❷張ること。❸口實。

いいたてる いひたてる [言立てる] (他動、タ下一) (いいたつ)の口語。

いいたゆ いひたえゆる [言絶ゆ] (自動、ヤ下二) ❶話が絶える。❷なかだがする。(古語)

いいたらわす いひたらはす [言足らはす] (他動、サ四) 十分にいふ。(古語)

いいちがい いひちがい [言違] (名) 言ひちがへること。

いいちがえる いひちがへる [言違へる] (他動、ハ下一) (いいちがうの口語。

いいちぎる いひちぎる [言契る] (他動、ラ四) かたくいひかはす。

いいちこう いひちこう [言誓ふ] (他動、ハ四) いひちかへる。いひまかせる。

いいちごごう いひちごごう [言違ふ] (他動、ハ四) いひかへる。いひあやまる。

いいちごう いひちごう [言違ふ] (他動、ハ下二) 筋道ちがへていふ。

イーチョウ [一莊] (名) 麻雀用語。四人が各自東西南北四風の中の一風の親をひとまはりすること。四人に一風の親がひとまはりすること。

いいちらす いひちらす [言散らす] (他動、サ四) ❶いひふらす。妄にいふ。❷いひまかす。他の說を論じやぶる。說破する。

いいつぎ いひつぎ [言繼] (名) いひつたへ。とりつぎ。

いいつく いひつく [言附く] (他動、カ四) いひかける。いひあふる。(古語)

いいつく いひつく [言附く] (他動、カ下二) ❶申しつける。命ずる。❷つげぐちする。❸なづける。❹叱りつける。

いいつぐ いひつぐ [言繼ぐ] (他動、ガ四) ❶いひつたへる。❷でんごんする。

いいつぐ いひつぐ [言告ぐ] (他動、ガ下二) ❶つげぐちする。❷つげぐちする。

いいつくす いひつくす [言盡くす] (他動、サ四) 殘りなくいふ。いふべきことはすべていふ。

いいつくろう いひつくろふ [言繕ふ] (他動、ハ四) ていよいよいひこしらへる。

いいつける いひつける [言附] (名) ❶命令。❷告口。

いいつける いひつける [言附ける] (他動、カ下一) (いいつくの口語。

いいつごう いひつごう [言繼ふ] (他動、ハ四) いひつぐ。(古語)

いいつずく いひつずく [言綴く] (他動、カ下二) ❶綴けていふ。❷いひつたへる。

いいつたえ いひつたへ [言傳] (名) ❶いひつたへて來たこと。傳說。口碑。❷傳言。

いいつたえる いひつたへる [言傳へる] (他動、ハ下一) (いいつたう)の口語。【語】

いいつたう いひつたう [言傳] (名) 「いひつたへ」の約。(古語)

いいつたう いひつたふ [言傳ふ] (他動、ハ下二) ❶言葉で傳へる。話に殘す。❷いひひろげる。❸とりつぐ。傳言する。

いいつのる いひつのる [言募る] (他動、ラ四) いひたいことを烈しくいひはる。

いいつ・む いひつむ [言詰む] (他動、マ下二) ❶極限までいふ。❷やりこめる。

いいつ・める いひつめる [言詰める] (他動、マ下一) (いいつむ)の口語。【(古語)】

いいつらいぬ いひつらいぬ [言論ぬ] (名) あげつらひ。辯論。

いいつらねぬ いひつらねぬ [言連ぬ] (他動、ナ下二) つきつきにいふ。つづけていふ。

いいつらねる いひつらねる [言連ねる] (他動、ナ下一) (いいつらぬの口語。

いいつろう いひつろふ [言論ふ] (他動、ハ四) いひあらそふ。口論する。あげつらふ。(古語)

いいて いひて [言通す] (他動、サ四) どこまでも自分の所存を言ひ張る。主張をとおす。

いいとおる いひとおる [言通る] (自動、ラ四) すらすらといふ。(古語)

いいとく いひとく [言解く] (他動、カ四) 辯解する。說明する。いひ聞く。

いいととのう いひととのふ [言調ふ] (他動、ハ下二) 言葉をつくしていひきかせる。(古語)

いいとよ いひとよ [偏鄙] (名)【動】「ふくろう」の異。(古語)

いいとる いひとる [言取る] (他動、ラ四) 言葉にうつして述べる。

イートン [Eton] (名)【地】英國ロンドンの西南約三五粁のバッキンガムシャにある大學町。英國貴紳の來遊するものが多い。**—カレッジ** [Eton College] (名) 英國九大公衆學校中最も有名な學校で、イートンにある。生徒は富裕階級の子弟に限られてゐる。

イートン・ボップ [Eton bob] (名) 女の斷髮で、「男のやうな恰好のもの。

いいなおし いひなほし [言直] (名) いひなほすこと。

いいなおす いひなほす [言直す] (他動、サ四) 前言を訂正する。いひあらためる。

いいなおすけ いひなほすけ [井伊直弼] (名)【人】德川

幕府の重臣。彦根の城主。直中の子。幼名鍵之介、又、鐵三郎。掃部頭と稱す。安政五年大老となり、外交の事に當り、繼嗣問題を定めて紀伊家から家茂(もち)を迎へ反對黨を幽閉・殺戮したので、水戸派士の爲萬延元年(一五二〇)櫻田門外に襲殺せられた。年四十六。

いいなか〔好仲〕(名) ㊀なかのよいこと。㊁男女の互にすきあってねること。「㊀いひすてる。

いいなし〔言做〕(名) ㊀いひなすこと。とりなし。㊁いひこしらへたこと。

いいなしずし〔飯無鮨〕(名) 魚肉を酢につけておしてならした飯なしの鮨。

いいなす〔言做す〕(他動、サ四) ㊀さうでないことをさうらしくいふ。㊁とりなしていふ。㊂形容する。「から婚約あること。又、その人。

いいなやむ〔許嫁言名附〕(名) 幼少の時

いいなやむ〔言惱む〕(他動、マ四) ㊀いふことをはばかる。㊁言って心配する。

いいならわし〔言習〕(名) ㊀いひつたへ。㊁口ぐせ。

いいならわす〔言習はす〕(他動、サ四) ㊀習慣としていひ傳へる。㊁口癖にいふ。

いいなり〔言成〕(名) いふがままになること。—**しだい**〔言成次第〕(名) いふがままにすること。—**ほうだい**〔言成放題〕(名) ㊀いなり。㊁口から出まかせ。

いいなる〔言馴る〕(他動、ラ下二) ㊀呼びなれる。㊁なれなれしくいふ。

いいなれる〔言馴れる〕(他動、ラ下一)(いいなるの口語。「くし)の口語。

いいにくい〔言惡い〕(形)(いいにくし)

いいにくし〔言惡し〕(形、ク)言ひかねる。いひづらい。

いいにくむ〔言惡む〕(他動、マ四) あしざまにいふ。(古語)

いいぬけ〔言拔〕(名) いひぬけること。遁辭。

いいぬける〔言拔ける〕(他動、カ下一) 口實を設けて責任をのがれる。

いいね〔言値〕(名) 賣り手のいふ値段。

いいのがる〔言遁る〕(他動、ラ下二) いひぬける。

いいのがれ〔言遁〕(名) いひのがれること。

いいのがれる〔言遁れる〕(他動、ラ下一)(いいのがるの口語。

いいのく〔言退く〕(他動、カ下二) いひやぶる。「ひのがれる。

いいのくる〔言退くる〕(他動、カ四) いひのこと。

いいのけ〔言退〕(名) 言ひのこすこと。

いいのこす〔言殘す〕(他動、サ四) ㊀いはなければならぬことをいはないで止める。㊁後にいひおく。㊂詞を殘して去る。

いいのこり〔言殘〕(名) 話のこのこり。

いいのこる〔言殘る〕(自動、ラ四) いふべきことがあとに殘る。

いいのぶ〔言延ぶ〕(他動、バ下二) いろいろにいって時を延ばす。(古語)

いいのぶらす〔言紛らす〕(他動、サ四) いひまぎらす。いひぬける。口でごまかす。

いいはげます〔言勵ます〕(他動、サ四) 詞で勵まして勢をつける。

いいはじむ〔言始む〕(他動、マ下二) ㊀言ひ出す。語り始める。㊁男女が言葉をかけて言ひ寄る。「いひそ・なふ。

いいはずす〔言外す〕(他動、サ四)

いいはち〔飯鉢〕(名) めしびつ。

いいはつ〔言果つ〕(他動、タ下二) いひをはる。「いひはなつ。

いいはなす〔言放す〕(他動、サ四) 思ったことを遠慮なくいふ。斷言する。

いいはなつ〔言放つ〕(他動、タ四)

いいはやす〔言囃す〕(他動、サ四) ㊀ほめていふ。ほめそやす。㊁言ひひろむ。

いいはる〔言張る〕(他動、ラ四) 思ふ事を飽くまで通さうとする。主張する。「情人。

いいひと〔好人〕(名) ㊀好人物。㊁惡ひあふ人。

いいひらき〔言開〕(名) いひ開くこと。辯解。辯明。

いいひらく〔言開く〕(他動、カ四) 仔細を明らかにいふ。言って理由を明かにする。申し開く。いひわけする。

いいひろぐ〔言擴ぐ〕(他動、ガ下二) だんだんにひ傳へる。いひふらす。

いいひろげる〔言擴げる〕(他動、ガ下一)(いいひろぐの口語。

いいひろむ〔言擴む〕(他動、マ下二)(いいひろめ。

いいひろめる〔言擴める〕(他動、ヤ下一)(いいひろむの口語。

いいふくむ〔言含む〕(他動、マ下二) ㊀會得せられるやうにいひ聞かせる。㊁いひ聞かせて旨をさとらせる。

いいふくめる〔言含める〕(他動、マ下一)(いいふくむの口語。

いいふす〔言伏す〕(他動、サ下二) 詞で凰伏させる。ときふせる。いひやぶる。

いいふせる〔言伏せる〕(他動、サ下一)(いいふす)の口語。

いいふらす〔言觸〕(名) いひふらすこと。

いいふらし〔言觸らす〕(他動、サ四) 人に多く知られるやうにいふ。いひ擴ぐ。評判する。

いいふる〔言觸る〕(他動、ラ下二) ㊀いひかける。いひよる(古語)。㊁いひふらす。

いいふるす〔言舊す〕(他動、サ四) いひ慣れて珍しくないやうになる。口癖にいふ。

いいふれざま〔言觸種〕(名) 噂のたね。

いいふれる〔言觸れる〕(他動、ラ下一)(いいふるの口語。

いいぶん〔言分〕(名) ㊀いふべきことがら。口實。㊁いきかひ。「と。

いいべた〔言下手〕(名) いふことの下手なこ

いいぼ〔飯粒〕(名) めしつぶ。(古語)

いいぼ〔疣〕(名) いぼ。(古語)

いいぼぐす〔言解す〕(他動、サ四) わけをいって疑を解く。いひ解く。いひ開く。

いいほどく〔言解く〕(他動、カ四) 言ひ開く。言ひ解く。「實。口まへ。

いいまえ〔言前〕(名) いひぐさ。いひ方。口

いいまかす〔言負す〕(他動、サ四) 詞爭ひをして勝つ。いひふせる。

いいまきらす〔言紛す〕(他動、サ四) ㊀こまかすといふ。いひくろめる。㊁人の話を側からまぜかへす。

いいまきらわす〔言紛はす〕(他動、サ四) いひまぎらす。

いいまく〔言負く〕(自動、カ下二) 言ひあらそって負ける。

いいまぐ〔言曲ぐ〕(他動、ガ下二) 理を非にまげていふ。

いいまくる〔言捲くる〕(他動、ラ四) 盛んに論じて他人の說を破る。

いいまける〔言負ける〕(自動、カ下一)(いいまくの口語。

いいまげる〔言曲げる〕(他動、ガ下一)(いいまぐの口語。

いいまつわす〔言纏はす〕(他動、サ四) ㊀話してつきまとはせる。(古語)㊁いひ惡めてなつかしがらせる。(古語)

いいまろむ〔言丸む〕(他動、マ下二) だます。ごまかす。いひくるめる。

いいまろめる〔言丸める〕(他動、マ下一)〔いいまるむ〕の口語。「ひやう。

いいまわし〔言廻し〕(名) 巧みな言ひ方。言サ四) 巧みにいふ。

いいまわす〔言廻す〕(他動、サ四) 巧みに言ひ方。言

いいみだる〔言亂る〕(他動、ラ四)〔いいみだれる〕〔言亂れる〕(自動、ラ下二) 道っていふ。いひあらそふ。(古語)

いいむこう〔言逆ふ〕(他動、ハ四) 道っていふ。いひあらそふ。(古語)

いいもよおす〔言催す〕(他動、サ四) 催促らしくいふ。いってそそのかす。(古語)

いいもらし〔言漏〕(名) いひもらすこと。

いいもらす〔言漏らす〕(他動、サ四) ❶いひおとす。❷秘密な人にもらす。

いいもりやま〔飯盛山〕(名)【地】福島縣若松市の郊外滝澤村にある山。山頂から若松市を一望の中に眺め得る。明治元年八月、會津藩白虎隊の自刃した處。

いいや〔否〕(感) いや。いな。

いいや(感) 鼓などの拍子に發する聲。

いいやぶる〔言破る〕(他動、ラ四)〔いいやぶれる〕〔言破れる〕(自動、ラ四) 說きふせる。いひふせる。いひかかす。

いいやむ〔言止む〕(他動、マ四) 言ひかけて中止する。いひさす。❷言ひなほる。

いいやる〔言遣る〕(他動、ラ四) ❶使をやっていはせる。手紙でいふ。❷言って心をはらす。

いいよう〔言樣〕(名) いひかた。

いいよどむ〔言淀む〕(他動、マ四) いはうとしていはれない。いひしぶる。

いいよる〔言寄る〕(自動、ラ四) ❶物をいひかけて親しみ近づく。❷慕って來る。ことをその人にかかす。「から内、矢を射るべ射出つの對」

いいいる〔射入る〕(他動、ラ下二) 外へ射ひかけて中止する。

いいわく〔言分く〕(他動、カ四) ❶使なやっていはせる。手紙でいふ。❷言って心をはらす。

いいわたる〔言渡る〕(自動、ラ四) 是非を述べて處置する。

いいわく〔言分く〕(他動、カ下二) 住みかれて他へ浮かれ出る。住み浮かる。

いいわけ〔言分〕(名) ❶申しわけ。辯明。辯解。❷過を謝すること。

いいわける〔言分ける〕(他動、カ下一)〔いいわくる〕の口語。

いいわずらう〔言煩ふ〕(他動、ハ四) 言ひにくく思ふ。言ひ疲れる。(古語)

いいわたし〔言渡し〕(名) ❶いひわたすこと。宣告。❷法判決を口頭で被告に言渡すこと。

いいわたす〔言渡す〕(他動、サ四) 命令する。命令を傳へる。宣告する。

いいわたる〔言渡る〕(他動、ラ四) ❶言ひつづけて日を經過する。❷言ってあるく。❸言ひふる。

いいわぶ〔言侘ぶ〕(他動、バ上二) いひにくく思ふ。言ひ出し兼ねる。(古語)

いいわん〔飯椀〕(名)【人】支那殷の名相。名は摯。成湯を輔け、桀を滅して天下を平定したので、湯は之を尊んで阿衡と稱した。殁した時、百歲歲。

いいん〔遺音〕(名) ❶前人の此の世に殘した言葉、又は其のひびき。❷後に殘ってひびく音調。

いいん〔醫員〕(名) 醫療・醫務に從ふ職員。「家又は病院。

いいん〔醫院〕(名) 病を治療する所。醫者の病院勤務の醫師。

いいん〔委員〕(名) 團體の中から選擧せられ又は任命せられて、特定の事項を調査する人。—**ふたく**〔委員附託〕(名)【法】議會などで、或議案の審査を委員に託して調査整理せしめること。

いいん〔遺胤〕(名) 遺兒。わすれがたみ。

イヴ[Eve](名)【傳】イライの古傳の人類最初の女の名。アダムの妻。禁斷の木の實を食ひ、アダムにも食はせたので、二人はエデンを放逐されて勞作して食を得なければならぬやうになった。死んだ時は九百三十歲であったといふ。舊約聖書創世紀第二章第二十一節から第二十五節にある傳說。

イヴニング[Evening](名) 夕方。日暮。夜會。—**スター**[Evening star](名) 宵の明星。金星の通俗的名稱。—**ドレス**[Evening dress](名) ❶婦人の着る夜會服。❷燕尾服。—**ペーパー**[Evening paper](名) 新聞の夕刊。—**ペーティー**[Evening party](名) 夜會。

いえ〔否〕(感) いいえ。いや。いな。

いえ〔家〕(名) ❶人の住む建物。❷法戶主の統轄する家族團體。❸自宅。❹妻。❺家族。やから。❻祖先から傳って來た家。❼家産。❽家柄。門地。—**給し人足る**(句) 各家の人人が衣食に不足せずして皆滿足するといふ。—**に杖つく頃**(句)〔禮記王制第五の句〕五十歲の頃。—**を出づ**(句) ❶自宅を出て他に行く。❷僧侶となる。—**を知る**(句)「やしきあり。家を治める。家の主人となる。

いえあと〔家跡〕(名) ❶先祖傳來の名跡。❷

いえあり〔家蟻〕(名)【動】蟻の一種で、巢所で食品を食害するもの。いひあり。

いえあるじ〔家主〕(名) いへぬし。戶主。いへぎみ。(古語)

いえい〔遺詠〕(名) 故人の後に遺した和歌。

いえい〔家居〕(名) 家にゐること。住居。すまひ。

いえいえ〔家家〔名・副〕いへごと(家毎。一軒毎に。

いえいる〔家居る〕(自動、ワ上一) 家につくって住まふ。(古語)

いえうつり〔家移〕(名) 家を移ること。轉宅。やっつり。ひきっこし。

イェーツ[William Butler Yeats](名)【人】イギリスの詩人。愛蘭文藝復興運動の中堅者。一八六五年、ダブリン市郊外に生まる。一九二三年文學賞ノーベル賞金を受けた。其の著に「心願の國」「カスリン伯爵夫人」「砂時計」「愛蘭劇場の爲の脚本」「善惡の觀念」等がある。

いえかぜ〔家風〕(名) ❶自分の家の方から吹く風。(古語) ❷わが家につたはる風儀。いへのかぜ。かふう。(古語)

いえかど〔家門〕(名) 家柄。かもん(家門。(古語)

いえがまえ〔家構〕(名) 家の造り方。❶身分のある家がら。名家。門閥。❷づくり。

いえがら〔家柄〕(名) ❶家の地位。家格。❷

いえかり〔家借〕(名) ❶家を借ること。❷たなかり。しゃくやすまひ。

いえき〔胃液〕(名)【生】胃の粘膜の胃腺から分泌する透明無色の酸性反應を呈する消化液。—**かたしょう**〔胃液過多症〕(名)【醫】胃液の分泌が多量となる疾患。激しい胃痛と共に起り、嘔吐を催すことがある。—**けつぼうしょう**〔胃液缺乏症〕(名)【醫】胃液の分泌の少量となる疾患。腐、下痢を伴なふ。

いえぎみ〔家君〕(名) 一家の主人。家ぬし。

いえくら〔家藏〕(名) ❶家と藏と。❷家の內に設けた土藏。

いえごと〔家毎〕(名・副) 毎戶。一軒ごと。

いえごと〔家言〕(名) 我が家からの傳言。古

いえごと〔家事〕(名) 家の職業。家業。(語)

いえさかり〔家離〕(名) 自分の家を離れること。(古語)

いえさかる〔家離る〕(自動、ラ四) 自分の家を離れる。

いえさくら〔家櫻〕(名) 自分の家に植えてある櫻。(古語)

いえざま〔家樣〕(名) ❶わが家のある方。(古語) ❷或家の方へ行く路。❸我が家に歸る路。❹自分の通ふ女の家。

いえじ〔家地〕(名) 甲冑の下地に張る布帛。藍色に染めたもの。

いえじち〔家質〕(名) 家屋を借金の抵當にすること。家金。家從。(古語)

イエス[Yes](英、副) 然り。さうです。その通りです。はい。

いえずかさ〔家司〕(名) 家事を扱はせる人。けいし。家令。家從。(古語)

イエス・キリスト[Jesus Christ](名)【人】救世主。「主基督。

いえすぐく[家附く]〔自動・カ四〕家に近づく。(古語)

いえずくり[家作]〔名〕やづくり。

いえすぐじ[家筋]〔名〕家の血統。家系。「げ」。

いえすぢ[家苞・家裏]〔名〕家に持歸るみや。

いえつ[怡悅]〔名〕うれしく思ふこと。よろこび。

いえつ[夷悅]〔名〕安んじ喜ぶこと。

いえつき[家附]〔名〕㊀もとから其の家に附屬してゐること。㊁娘が生家に居て婿どりなする。「又、その人。

いえつぎ[家繼]〔名〕家督を相續すること。

いえつどり[家鳥]〔名・枕〕㊀〔動〕雞。㊁「かけりの枕詞。

いえで[家出]〔名〕㊀家を出ること。㊁家を一門の子。きんだち。㊂庶子及び其の族類。分家。

いえとうじ[家刀自]〔名〕(いえとじ)。(古語)「居。(古語)

いえどころ[家所]〔名〕すみか。住所。住主婦。內儀。(古語)「ともどもどもどもといつても。

いえども[雖]〔助詞・動詞〕「と」の下に續く。

いえな[家名]〔名〕姓氏。家號。苗字。

いえなみ[家並]〔名〕㊀家の並んでゐること。又、その場所。やなみ。㊁家ごと。毎戶。かどなみ。

いえにれ[家楡]〔名〕(植)ぜつ〻ん〻そう〻節。「分草・蒐葵。

いえぬし[家主]〔名〕㊀一家の主人。戶主。いへぎみ。(古語)㊁其家の持主。やぬし。

いえのいも[家芋]〔名〕(植)さといも(里芋)。(古語)

いえのいもと[家妹]〔名〕我が妻。(古語)

いえのおさ[家長]〔名〕一家の主人。(古語)

いえのかぜ[家風]〔名〕㊀名家の家風。㊁傳へられた一家の風儀又は流儀。かふう。(古語)

いえのきみ[家君]〔名〕一家の主人。だんな。いへぎみ。(古語)「ぐ。(古語)

いえのぐ[家具]〔名〕一家に必要な道具。かい。

いえのぐそく[家具足]〔名〕(いえのぐ)。

いえのこ[家子]〔名〕㊀良家に生まれた子。名門の子。きんだち。㊁庶子及び其の族類。分家。「歌を集めた書。

いえのしゅう[家集]〔名〕家集。個人の和

いえのつたえ[家傳]〔名〕㊀一家のいひつたへ。(古語)㊁一家に傳へられた記錄。(古語)

いえのときぎ[家研]〔名〕刀劍鑑定の本家本阿彌(ほあみ)家の刀のとぎ。

いえのにょうぼう[家女房]〔名〕(こてんにょうぼう)〔御殿女中〕。

いえのぬし[家主]〔名〕一家の主人。

いえのひと[家人]〔名〕㊀家族。㊁家に使はれる人。

いえのほうがん[家判官]〔名〕諸代の

いえのみち[家道]〔名〕一家に傳はつた職業又は藝道。

いえのもん[家紋]〔名〕衣服・道具などに通に人家にゐる蠅。「とするがいはれない。(古語)

いえばえ[家蠅]〔名〕〔動〕雙翅類の昆蟲。普

いえばえに[家蜂]〔名〕〔動〕家に飼ふ蜜蜂。

いえばと[家鳩]〔名〕〔動〕鳩類の鳥。「かはちばと」の變種。體色純白色又は赤褐色等。嘴は灰黑色、脚は紅色。體長大で飛翔力強く、足は短小である。多く家に飼ふ。どばと。

〔鳩家〕

いえびと[家人]〔名〕㊀一家內の人。家族。㊁家に仕へる人㊂貴族の家に出入する人。(古語)「金工が彫つた小道具の彫刻。後藤彫。

いえぼり[家彫]〔名〕〔美〕後藤祐乘の家系の

いえみ[家見]〔名〕新築又は轉居の家を見舞ふこと。

いえみつ[家蜜]〔名〕家蜂のつくつた蜜。

いえむら[家群]〔名〕人家の群り建つてゐる處。(古語)

いえもち[家持]〔名〕㊀家屋を所有してゐる人。㊁世帶持。戶主。家長。㊂家計のやりかた。

いえもと[家元]〔名〕㊀藝道の本家。㊁嫁した婦人の里方。

いえもり[家守]〔名〕家の番人。

いえやしき[家屋敷]〔名〕家屋と宅地。

いえよう[家樣]〔名〕(おいえりゅう)〔御家流〕。「うに。いひけうく。

いえらく[謂へらく]〔連〕いふには。いふやの西部パレスチナの首府。キリストの墳墓のある宗教市で、ユダヤ人・基督教徒・回教徒等の聖地とする所。今はイギリスの委任統治地。人口の三分の二以上はユダヤ人である。

イエロー[Yellow]〔名〕黃色。黃色人種。

イエルサレム[Jerusalem]〔名〕〔地〕アジヤ大陸

レス[Yellow press]〔名〕黃色新聞。惡德新聞(米國の惡德新聞は黃色)。

—ペリル[Yellow peril]〔名〕黃色人種が白色人種を壓迫すると想像する恐怖。黃禍。

いえわらわ[家童]〔名〕召使の子供。「見。

いえん[胃炎]〔名〕〔醫〕(いかたん)〔胃加答

おいを[魚]〔名〕(うお)。

—の・ふえ[魚鰾・脬]〔名〕〔動〕魚類の浮袋。

は、これによつて浮揚を調節する。うきふくろ。

おい[庵・菴・廬]〔名〕草木を結んで造つた小さい家。又、僧の假居。くさのや。いほり。

—さす(句)庵を造る。庵を結ぶ。いほりする。(古語)

おいい[五百]〔名〕數の多いこと。(古語)

おいおい[五百・數]〔ひゃく。(古語)

おいおう[五百・數]〔ひゃく。(古語)

おいかふ[射合ふ]〔他動・ハ四〕互に矢を射る。

おいかふ[齊ふ]〔他動・ハ四〕けがれをいみ慎んで神をまつる。(古語)㊁守護する。大切にする。かしづく。(古語)

おいかふ[祝ふ]〔他動・ハ四〕㊀事を賀する。ことほぐ。㊁將來の吉事を祈る。

おいおう[易往]〔名〕〔佛〕阿彌陀の本願によつて極樂淨土に往生し易いこと。

—いきょう[易往易行]〔名〕〔佛〕極樂淨土に往生し易く、阿彌陀如來に對する信仰の得易いこと。

—むにん[易往無人]〔名〕〔佛〕極樂に往生する事は易く、他人の信心決心がむつかしいかと、實際には極樂往生をなし遂げる人がないといふこと。

おいう[硫黃]〔名〕(ゆおう)の轉。

おいう[醫王]〔名〕〔佛〕㊀法を說いて無明の病に施藥する佛菩薩。㊁藥師如來の異名。

おいうじ[家童子]〔名〕女の家主。主婦。

おいうびょう[萎黃病]〔名〕㊀〔醫〕一種の貧血病。皮膚・粘膜などが蒼白となつて、體力減退し倦怠し易く、勞働に堪へぬやうになる。青春期の女子に起る。㊁〔植〕植物が光線の不足又は地中の鹽分不足の爲に、葉綠が白色若しくは黃白色となること。

おいえ[五百枝]〔名〕多くの枝。(古語)

おいえ[五百重]〔名〕多く重なつたこと。(古語)波。㊁立ちてもねても」の枕詞。

—なみ[五百重波]〔名・枕〕㊀重なつて立

おいおち[五百代小田]〔名〕廣大な

おいおち[五百箇]〔名〕數の多いこと。(古語)

おいおち[五百箇]〔名〕數ごひゃく。(古語)

—すばる[五百箇統]〔名〕多くの玉を一本の絲に貫いたもの。「すばる」はすべ集める意。いほつみすべる。(古語)

—つどい[五百箇集]〔名〕多くのものの集まつたこと。(古語)

—つなぎ[五百箇網]〔名〕多くの網。(古語)

—ぬすぎ[五百箇野薊]〔名〕葉の多く繁つた薊。(古語)

—まさかき[五百箇眞榊]〔名〕葉も枝も多い常綠樹。(古語)

—みすまる[五百箇御統]〔名〕(いおつすばる)。(古語)

おいつ[五百箇]〔名〕數ごひゃく。(古語)

おいとす[射落す]〔他動・サ四〕射て落す。

イオニヤしき[一式]〔名〕〔建〕ギリシャ古典建築三樣式の一。小アジヤのエーゲ海岸地方のイオニ

ヤ地方から出たからこの名がある。アテネ全盛時代から一世紀を支配した様式で、優美・軽快、柱には蛞蝓があり、柱頭には曲線状の渦形がある。アテネのエレクテオン殿堂は、この様式の模範である。

〔式ヤニオイ〕

いおのり[いおのり]〔五百入・五百節〕(名)親[しん]の中に多くの矢のはひつてゐること。(古語)

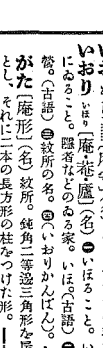
いおはた[いおはた]〔五百機〕(名)多くのはた(機)。(古語)**—ごろも**[いおはたごろも]〔五百機衣〕(名)多くのはた(機)で織つた衣。(古語)

いおひきいわ[いおひきいわ]〔五百引岩〕(名)動かすのに多くの人力を要する岩。(古語)

いおもり[いおもり]〔庵守〕(名)庵に居つて田の番をする人。

いおり[いおり]〔庵・庵・廬〕(名)❶いほること。いほにゐること。隠居などのゐる家。いほ。(古語)❷軍營。(古語)❸紋所の名。

いかがた[いかがた]〔庵形〕(名)紋所。純角二等邊三角形を屋根とし、それに二本の長方形の柱をつけた形。**—かんばん**[いかがたかんばん]〔庵看板〕(名)❶劇場の前にかかげる看板で、木板の上に屋根形の木を附け、名高い俳優の名を書いたもの。❷庵看板に名を出し得る地位の俳優。**—てん**[いかがたてん]〔庵點〕(名)文字の右肩に加へる「へ」などの記號。**—もっこう**[いかがたもっこう]〔庵木瓜〕(名)紋所の一。庵形の下に「もっこう」を描いたもの。


〔板看庵〕

いかる[いかる]〔庵る〕(自動、ラ四)❶庵を建てる。(古語)

イオン[Ion](名)【化】酸・鹽基或は鹽類を水に溶かした時に電離作用によつて生ずるもので、陽電氣を帶びた成分と陰電氣を帶びた成分とがある。

いおんびん[イオンびん](名)發音の便宜上、或音が變じて「い」となること。「吹いて」が「吹いてと」となり「長し」が「長い」となる類。

いか[いか]鳥賊・墨魚・烏賊・鯨魚(名)【動】頭足類の軟體動物。體形は圓筒狀で、○本の脚が口の周圍にある。脚には抗狀の吸盤を具へ、内、二本は觸脚と稱し、特異形を呈し、特に餌物を捕へるに適する。腹部に烏賊墨の甕を貯へ、外敵に會へば墨を出して其の身を保護する。種類が多い。**—の—こう**[いかのこう]〔烏賊甲〕(名)「まいかい」の體腹内にある石灰質の甲殼で、白色・舟狀をなす。粉にして齒磨粉の原料とする。**—のすみ**[いかのすみ]〔烏賊墨〕(名)烏賊の體内にある紫墨色の液。いかのくろみ。

いか[いか]〔五十日〕(名)❶ごしふにち。(古語)❷子供が生まれて五十日に當る日。又、その祝の日。(古語)

いか[いか]〔紙鳶・凧〕(名)凧。いかのぼり。たこ。

いか[いか]〔醫家〕(名)醫術を行ふ家。醫師。醫者。

いか[いか]〔衣架〕(名)(いこう)〔衣桁〕。

いか[いか]〔以下〕(名)❶これから下。❷江戸時代に、將軍直轄の家臣で、將軍に謁見する資格なきもの。おめみえいか。

いか[いか]〔嚴〕(接頭)いかめしい意をあらはす語。「—物語」。

いか[いか]〔醫科〕(名)醫術に関する學科。

いか[いか]〔毬〕(名)栗の實の外方を包む刺の密生したもので、小毬の縮形としたもの。

いか[いか]〔衣蛾〕(名)【動】鱗翅類の蛾。頭部は灰褐色、前翅は淡黄褐色で、三箇の淡黒褐色・圓形の斑紋があり、後翅は稍〻淡色である。幼蟲は體長約一糎、色白く、衣服・毛布等を蝕害する。

いかい[いかい]〔懿戒〕(名)善美の教訓。

いかい[いかい]〔位階〕(名)位の等級。天皇から賜はる叙爵の稱號の一。現今では、一位から八位までで、各〻正・從があつて十六階となる。

いかい[いかい]〔遺誡〕(名)後人の爲に遺し留めた訓戒。

いがい[いがい]〔意外〕(名)おもひの外。案外。

いがい[いがい]〔以外〕(名)そのほか。このほか。

いがい[いがい]〔遺骸〕(名)死骸。なきがら。

いかがい[いかがい]〔貽貝・淡菜・東海嬰人〕(名)【動】貽貝科の二枚貝で、殼は三角形をなし、外面黒褐色、厚い輪唇をなす。内面は真珠色。肉は味がよい。

いかえ[いかえ]〔威海衛〕(名)【地】支那山東省文登縣にある地。旅順口と相對して渤海の咽喉を扼する。清の光緒十四年(一八八八)北洋艦隊の軍港となり、同二十五年、英國の租借地となつたが、一九二一年の華府會議の結果、英國は支那に還附した。

いかいかし[いかいかしい]〔嚴嚴し〕(形、シク)大層いかめしい。あらあらしい。

いかいちょう[いかいちょう]〔居開帳〕(名)(佛)他所へ出すに本尊のみを寺でする開帳。(出開帳の對)

いかいよう[いかいよう]〔胃潰瘍〕(名)【醫】胃粘膜に生ずる潰瘍。卽ちただれて胃の壁面の剝がれる疾患。

いかえす[いかえす]〔射返す〕(他動、サ四)❶矢を射て敵を退かせる。❷敵の射た矢を取つて射る。

いかお[いかお]〔伊香保〕(名)【地】群馬縣榛名山中腹の温泉町。眺望雄大。泉質は鹽類性含鐵泉でリウマチス・貧血病・皮膚病等に效がある。上越南線渋川驛から一三粁。電車の便がある。

いかが[いかが]〔如何〕(副)❶どんなに。どのやうに。❷どうか。どうであらうか。❸どうしてか。

いかがく[いかがく]〔醫化學〕(名)人體内の消化狀態を研究する榮養上の化學。

いががやつり[いががやつり]〔毬莎草・水草・三方草〕(名)【植】莎草科の一年生草本。高さ四〇糎位、莖は三稜にして細く莖端に數葉を出し、その間から茶褐色の花穗を繖狀に出す。

いかかる[いかかる]〔居掛かる〕(自動、ラ四)〔坐って居掛かる〕

いかがわし[いかがわしい]〔如何はし〕(形、シク)❶おぼつかない。不安だ。疑はしい。❷忌もべきである。よろしくない。**—い**[いかがわしい]〔如何はしい〕(形)(いかがわしい)の口語。

いかき[いかき]〔網結〕(名)蜘蛛の巣を結ぶこと。(古語)

いかき[いかき]〔笊籬〕(名)竹で編んだ籠。ざる。

いかき[いかき]〔齋垣・忌垣〕(名)いみがき。瑞籬。(古語)

いかく[いかく]〔異客〕(名)❶外國から來た客。❷他鄉に客となつてゐる人。

いかく[いかく]〔射掛く〕(他動、カ下二)敵に向かって矢を射る。

いかく[いかく]〔圍郭〕(名)周圍にめぐらした壕塁。

いかく[いかく]〔威嚇〕(名)おどすこと。

いかく[いかく]〔居懸く〕(他動、カ下二)坐る時に衣服の一部を隣席の人の上にかける。

いかく[いかく]〔異學〕(名)❶在來の主義・學説とはちがつた學問。❷正道でない學問。異端の學。❸朱子學以外の漢學。(江戸時代)。**—のきん**[いかくのきん]〔異學禁〕(名)寛政二年(一七九〇)江戸幕府が朱子學以外の漢學を禁じたこと。

いかく[いかく]〔醫學〕(名)人體・疾病・治療・豫防に関することを研究する學で、基礎醫學・治療醫學・應用醫學の三種に分たれる。**—し**[いかくし]〔醫學士〕(名)醫學本科を卒業した人の稱號。**—せんもんがっこう**[いかくせんもんがっこう]〔醫學專門學校〕(名)【教】醫學を專攻する專門學校。**—はくし**[いかくはくし]〔醫學博士〕(名)國家が醫學に通達した人に與へる學位。

いかくさ[いかくさ]〔毬草〕(名)【植】莎草科の多年生草本。高さ約六〇糎、莖は三稜形をなして密生し、莖端に二三の線狀小葉を出し、その間から茶褐色の繖屋花を密生し、栗毬狀をなす。花後堅果を結ぶ。

いかくちょう[いかくちょう]〔胃擴張〕(名)【醫】胃壁の筋肉の衰弱・過緩して收縮力の乏しくなる疾患。

いかぐり[いかぐり]〔毬栗〕(名)❶いがぐりあたま。❷毛を短く刈つた頭。**—あたま**[いがぐりあたま]〔毬栗頭〕(名)毛を短く刈つた頭。

いかくる[いかくる]〔居隱る〕(自動、ラ下二)見えぬやうに坐る。かくれる。(古語)

いかけ[いかけ]〔沃懸地〕(名)(いかけじ)〔沃懸地〕。漆塗の上に、金粉又は銀粉を流しかけたもの。いかけ。

いかけ[いかけ]〔鑄掛〕(名)鍋・釜などの漏りを止める爲に、「しろめ」を熔かし込んで孔を塞ぐこと。**—し**[いかけし]〔鑄掛師〕(名)鑄掛を業とする人。

いかこ[いかこ]〔伊賀越〕(名)【地】奈良朝時代の官道。大和から山城の笠置を經、伊賀の柘植(つげ)に出て、鈴

〔ぎかける。(古語)

いかこ[いかこ]〔沃懸く〕(他動、カ下二)注〔ぎかける。(古語)

廛闕に通じた街道の稱。**—どうちゅうすごろく**……〔伊賀越道中雙六〕(名)【文】次條の仇討を脚色した近松半二の作。近松門左衛門補作の淨瑠璃。天明三年四月、大阪竹本座上演。**—の**あだうち〔伊賀越仇討〕(名)【歴】寛永十一年十一月、岡山藩士渡邊數馬が、姉婿荒木又右衛門と共に、弟源太夫の仇、河合又五郎を、伊賀國上野城下に要撃して本懐を遂げたこと。

いかさ……〔閻笠〕(名) 蔺の莖を編んでつくった笠。

いかさま〔如何樣〕(名) いかがはしいもの。にせもの。**—し**〔如何樣師〕(名) にせものし。さまし。**—もの**〔如何樣物〕(名) いかがはしいもの。いかものの。偽物。

いかさま〔如何樣〕(副) いかにも。なるほど。**—に**〔如何樣に〕(副) どのやうにいかやうに。

いかし〔厳し〕(形シク) ❶いかめしい。おごそかである。(古語) ❷あらあらしい。たけだけしい。(古語) ❸大きい。❹盛んである。多い。甚だしい。大層な。(古語)

いかし〔厳し〕(接頭) ❶いかめしい。❷盛んだ。(古語) **—ひ**〔厳日〕(名) 吉日。いくひ(生日)。(古語) **—ほ**〔厳穂〕(名) よくみのつた稲穂。(古語) **—ほこ**〔厳矛〕(名) いかめしく造つたほこ。(古語) **—みよ**〔厳御世〕(名) 盛んな御世。盛代。(古語)

いがしゅう〔伊賀衆〕(名) 江戸幕府に仕へた伊賀國の郷士で、忍びの術に長じてゐたもの。いがもの。しのびもの。

いかじゅせい……〔異花受精〕(名)【植】同株又は異株の花が、他の花の花粉によつて受精すること。

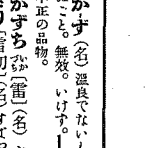
いかじゅふん……〔異花受粉〕(名)【植】一箇の花の雌蕊に、その他の花の雄蕊の花粉が運ばれて附着する現象。

いかす〔活す〕(他動、サ四) ❶生きるやうにする。蘇生させる。❷助けて生命を保たせる。❸殺さずにながらへさせる。❹きめのあるやうに使ふ。活用する。

いかず(名) 盥良でないもの。意地わる。役に立たぬこと。無效、いけず。**—もの**〔いかず物〕(名) 不正の品物。

いかずち〔雷〕(名) なるかみ。かみなり。**—ぎり**〔雷切〕(名) すばやく切りこむこと。

いかだ〔筏、桴〕(名) ❶竹木を組んで水に浮かべて運搬するもの。❷鎧の籠手の名所、手首と釐との間に並べてゐる板の金物。筏の形に似てゐるからいふ。**—がた**〔筏形〕(名) 釣花、けず長さ一米ばかりの竹の中央を長圓形に切りぬき、そこに花を插すやうにしたもの。**—ごぼう**……〔筏牛蒡〕(名) 牛蒡の根をたたいて筏の形にした料理。**—し**〔筏師〕(名) 筏に乘ることを職業にしてゐる人。**—じぎょう**〔筏地形〕(名) 長材を數層數さ並べて、その上をコンクリートで固める地形法で、濕地に應用するもの。**—なます**〔筏膾〕(名) 柳の葉を筏のやうに並べ、その上に鮎などの細作りを盛つたもの。**—のり**〔筏乘〕(名) いかだし。**—ばり**〔筏張〕(名) 建床板等の張り方。板の繼手を順次に送つて張るもの。その形が筏に似てゐるからいふ。


〔たがだかいい〕

いかた〔鑄型〕(名) ❶熔解した金屬を或形に造る爲のかた。型。多くは土で造る。❷活字を鑄造する鋼鐵製の型。

いかだいがく……〔醫科大學〕(名)【教】醫學・醫術の研究・教授を目的とする單科大學。我が國の最初の醫科大學は、明治十九年、東京帝國大學の一部たる東京醫科大學であつた。現今、新潟・岡山・千葉・金澤・長崎・熊本・名古屋・滿洲の官立醫科大學、京都の公立醫科大學その他私立の東京慈恵會醫科大學及び日本醫科大學等がある。

いかタル〔胃粘膜の炎性疾患〕(名)【醫】胃加答兒(名)【醫】胃加答兒(名)

いかつげ〔厳げ〕(名) いかめしい樣子。ぶこつ。おそろしげ。(古語)

いかつし〔厳し〕(形、一) いかめしい。

いかつはく……(自動、カ四) いかめしく寫る。いかつげにいふ。

いかで〔爭〕(副) ❶どうして。如何にして。❷どうとかして。どうぞ。**—か**〔爭か〕(副) ❶いかで。どうしてまあ。❷どうぞ。なかなか。

いかてい〔如何體〕(名) 如何なる體。どんな有樣。いかやう。

いかとうめ……〔伊賀專女〕(名) ❶狐の異名。神に祭つた狐の稱。❷人をだまして餌妖人。(古語)

いかな〔如何な〕(副) ❶どうしても。かなこと。❷どのやうな。どんな。**—いかな**〔如何な如何な〕(副) どうしてどうしてどうしてど

いからせる〔せいせいせる〕〔怒らせる〕〔他動・サ下一〕「いからすの」の口語。

いかり〔怒〕〔名〕いからること。はらだち。立腹。

—いの〔怒猪〕〔名〕怒ってゐるゐのしし。**—いの**〔怒猪の一枕〕「かへりみすの」の枕詞。**—うお**〔怒魚・杜父魚〕〔名〕【動】かじか。**—がた**〔怒肩〕〔名〕高く角張った肩。**—げ**〔怒毛〕〔名〕猛獣の怒る時に逆立つ毛。**—ごえ**〔怒聲〕〔名〕怒鳴って発する聲。**—のひ**〔怒日〕〔名〕【天】キリスト教で、神が人類の罪惡を審判するとゆ

〔碇〕

へる日。**—ふ**〔怒斑〕〔名〕怒って逆立てる虎斑の毛。**—を遷す**〔句〕〔論語雍也篇の句〕立腹した時、何の関係もないものに對して怒る。

いかり〔碇・錨〕〔名〕❶船をとどめおく錘に、綱やの。❷釣り上げる具。❸紋所。**—かたばみ**〔錨酸漿〕〔名〕紋所の名。酸漿の紋所のやうに錨を三つ組合せたもの。**—ずな**〔碇綱〕〔名・枕〕❶碇をつなぐ綱。❷「縁る」の枕詞。

—そう〔碇草・淫羊藿〕〔名〕【植】小葉(ヒ)科の多年生草本。葉は二回三出の複葉で小葉は卵形、周縁に細鋸齒がある。四月頃、淡紫色の四瓣花を開き、總狀花序に配列する。形、錨に似る。根は藥用に供せられる。**—てんま**〔碇傳馬〕〔名〕碇の あげ さげに用ひる傳馬船。**—ともり**〔碇知盛〕〔名〕〔文〕平知盛が壇浦の戰に碇を抱いて入水したことを演じた戯曲。「義經千本櫻」の渡海屋の段の俗稱。**—なわ**〔碇縄〕〔名〕(いかりすな)❸。**—ばん**〔碇番〕〔名〕昔、船舶の時、敵が碇綱を切るのを防ぐ爲に小舟に乗って守ったこと。又、その人。**—ぼうふう**〔碇防風〕〔名〕料理の一種。防風の莖を裂いて、碇の形に似せたもの。刺身のつまとして用ひる。

—もり〔碇銛〕〔名〕捕鯨に用ひる銛の一種。尖端の左右に突起があって碇のやうに見えるもの。**—を打つ**〔句〕碇を水底に沈める。

いかりがましい〔怒がましい〕〔形・二〕はらだちやすい。怒ってゐるやうだ。

いかる〔怒る〕〔自動・ラ四〕❶激して氣があらだつ。腹立てる。おこる。いきどほる。❷かどだつ。そびえる。❸勢が激しい。❹(イ)「怒」「恚」は怒を含むこと。(ロ)「瞋」は嘆きいきどほること。(ハ)「瞋」は腹立ち怨むこと。(ニ)「瞋」は目にかどだててにらむこと。**—こと烈火の如し**〔句〕怒る勢のはげしいさまにいふ。

いかる〔怒る〕〔活ら・る〕〔自動・ラ四〕生花が水に插まれて生き保つ。

いかる〔斑鳩〕〔名〕【動】いかるが。

いかるが〔斑鳩・鵤〕〔名〕【動】雀科の鳥。「こめ」に似る。嘴は黄色、頭上と翼端とは黑色、下尾筒は白色、背は淡灰褐色、脚は淡黄色。籠鳥として飼養する。また、めはしし。じゅすかけ。いかる。**—の**斑鳩の一枕〕「稱」「寄る」の枕詞。

いかるがでら〔斑鳩寺〕〔名〕【佛】法隆寺の別稱。

いかるがのみや〔斑鳩宮〕〔名〕推古天皇の九年(一二六一)に聖徳太子の遺營せられた宮殿。法隆寺の東院夢殿はその宮址であるといふ。

いかわり〔居替〕〔名〕ゐかはること。

いかわる〔居替る〕〔自動・ラ四〕かはってゐる。

いかん〔如何〕〔副〕「いかに」の音便。どうだ。**—が**〔如何が〕〔副〕「いかにか」の音便。どうしてか。**—ぞ**〔如何ぞ〕〔副〕いかにぞ。何で。いかなれば。**—せん**〔如何せん〕〔句〕いかにせん。どうしよう。**—となれば**〔如何となれば〕〔句〕何故かといへば。

いかん〔衣冠〕〔名〕❶衣と冠と。❷冠をかぶり袍に指貫と腰帶をつけること。❸衣冠を著けた人。貴人。紳士。

〔衣冠〕

いかん〔醫官〕〔名〕軍醫。

いかん〔以還〕〔名〕以來。以後。

いかん〔異觀〕〔名〕めづらしいみものやすぐれたみもの。

いかん〔遺憾〕〔名〕のこりをしいこと。殘念。

いかん〔違勅〕〔名〕勅命にたがふこと。

いかん〔偉觀〕〔名〕偉大な眺。立派なみもの。盛觀。壯觀。

いかん〔位冠〕〔名〕上古の位階をあらはした冠。

いかん〔位官〕〔名〕位階と官職。「總稱。

いかん〔尉官〕〔名〕陸海軍の大尉・中尉・少尉の

いかん〔偉岸〕〔名〕身體が大きくて風采のきはだってよく見える。

いかん〔胃癌〕〔名〕【醫】胃に發生する癌腫で、患者は胃痛と嘔吐とを催し、食慾減退し飲食し得ず、衰弱の結果死亡する。外科的手術による外、適切な療法がない。

いかんそく〔維管束〕〔名〕【植】羊齒植物と顯花植物とに存する重要な組織の一で、主として水液及び養分の通導と體の支柱とをなす篩管と導管。

いがんめんしょく〔依願免職〕〔名〕官吏待遇者が、自己の願によって職を免ぜられること。

いがんめんくわん〔依願免官〕〔名〕官吏が、自己の願によって免官となること。

いかんもん〔偉鑒門〕〔名〕平安京內裏十二門の一。北面の中央の門。あかすのみかど(不開御門)。

いき〔息・氣息〕〔名〕❶呼吸の振動を伴なはぬ呼氣。❷勢。❸生氣。(魚肉などにいふ)❹印刷物の校正で、刷りなほしたり字を元の如く殘すこと。❺生氣。(魚肉などにいふ)❻印刷物の校正で、刷りなほしたり字を元の如く殘すこと。❼生氣。❽心もち。❾いきら。❿あかぬけしてゐること。粹(ス)。通(ツ)。

いき〔意氣〕〔名〕❶きだて。心だて。氣象。❷心もち。

—相投ず〔句〕心持ての互によくあふこと。**—衝天**〔句〕心だてが天を衝かんばかりに盛んなこと。**—揚揚**〔句〕得意に威張るさま。

いき〔行〕〔名〕「ゆき」の訛。「—かへり」。「ゆげ。

いき〔依稀〕〔名〕さも似てゐること。不分明。おぼまって殆と呼吸ができない。**—を計りに**〔句〕息のつづく限り。**—を張る**〔句〕深く呼吸していきな腹にこめる。**—を引取る**〔句〕病人が死ぬ。**—を吹返す**〔句〕いきかへる。

いき〔生〕〔名〕❶世にながらへること。命のあること。❷園碁で、二目以上ある石が敵に殺されぬこと。❸生氣。(魚肉などにいふ)❹印刷物の校正で、刷りなほしたり字を元の如く殘すこと。❺生氣。❻心もち。

いき〔異・卉〕〔名〕珍しい草花。

いき〔位記〕〔名〕敍位の旨を記した辭令書。

いき〔彙記〕〔名〕部類を分けて記すこと。

いき〔遺棄〕〔名〕すてること。おきざり。

いさい〔遺棄罪〕〔名〕【法】扶養を要すべき老者・幼者・不具者・病者を保護する責任ある者が、保護なき狀態に置くこと。この場合には、三月以上五年以下の懲役に處せられる。

いき〔閾〕〔名〕【心】刺戟が始めて知られるやうになり、或は知られなくなる限界點。意識の限界。意識閾。識閾。**—ひょう**〔閾秤〕〔名〕觸發測定器の一で、壓力を與へて、壓覺の刺戟閾や辨別閾を測定する精巧な裝置のもの。

いき〔委・棄〕〔名〕自分の權利を抛棄して、他人の任意に委ねること。なげやり。

いき〔偉・器〕〔名〕すぐれて大きな器量。

いき〔意・義〕〔名〕わけ。意味。

いき〔異・義〕〔名〕ことなった意味。

いき〔異・儀〕〔名〕普通とちがったさま。

いき〔異・議〕〔名〕❶普通とちがった議論や意見。異

存。異論。㊁〔法〕或行爲が法律上効力を生じようとする時に、反對する意思の陳述をなすこと。

いぎ〔威儀〕㊀重厚して畏敬すべき擧動。いかめしいたちゐふるまひ。㊁作法にかなったたちゐふるまひ。**—し**〔威儀師〕(名)【佛】昔、授戒の時、授戒者に坐作進退の威儀を指示し、又、法會の時、衆僧に先導して威儀を整へた僧。**—そう**〔威儀僧〕(名)【佛】(いぎし)。

いきあい〔息合〕(名)(いきずかい)。**—の—くすり**〔息合薬〕(名)昔、合職などの時、息を調へる爲に用ひた藥で、米の粉と氷砂糖の粉末を梅干の肉で練ったもの。

いきあい・きょうだい……あひき……〔行合兄弟〕(名)異父同母の兄弟。ゆきあひきやうだい。

いきあかる〔息明る〕(自動、ラ下二)ゆきわかる。(古語)

いきあがる〔生上る〕(自動、ラ四)息を吹きかへす。よみがへる。(古語)

いきあたり〔行當〕(名)ゆきあたり。**—ばったり**(句)無計畫で、結果のどうならうとかまはずに進むこと。

いきあたる〔行當る〕(自動、ラ四)ゆきあたる。

いきいき〔生生〕(名・副)活氣の滿ってゐるさま。

いきいず〔息出づ〕(自動、ダ下二)いきがへる。よみがへる。(古語)

いきうし〔行憂し〕(形、二)ゆきにくい。ゆくのがいやだ。

いきうす〔行失す〕(自動、サ下二)

いきうつし〔行失し〕(自動、サ下二)寫すこと。寫生。㊁區別しにくい程、物の甚だしく似てゐること。

いきうま〔生馬〕(名)生きてゐる馬。**—の目を抜く**(句)事なきなりに敏捷なさまの譬。

いきうめ〔生埋〕(名)生きながら地に埋めて殺すこと。

いきえ……え〔生餌〕(名)動物の餌となる生きたまま。

いきおい〔勢〕(名)㊀いきほふこと。いきほふ力。競爭力。㊁人を壓する威力。㊂元氣。氣力。活動力。發動せんとする力。㊃有樣。樣子。㊄はずみ。機會。なりゆき。㊅意氣。氣焰。**—かかる**〔勢掛る〕(自動、ラ四)勇み立つ。**—ぐち**〔勢口〕(名)勢のついたまきれ。その拍子。**—こむ**〔勢込む〕(自動、マ四)勢を加へる。奮ひ立つ。「盛んになる。戰ふ。勇む。(古語)

いきおう……おう〔勢ふ〕(自動、ハ四)勢がきおう……おう〔生合ふ〕(自動、ハ四)生きながらにてその場にあふ。「つぎ。(古語)

いきおさめ……め〔息收〕(名)いきやすめ。いき

いきがい……がい〔生甲斐〕(名)生きてゐるだけの效驗。生きてゐる幸福。利益。

いきかえる……か……る〔行返・往返〕(名)ゆくことと

いきかえる……か……る〔生返る〕(自動、ラ四)息を吹きかへす。よみがへる。「死顏の習)

いきがお……がお〔生顏〕(名)いきてゐる時の顏つき。

いきかぎり〔息限〕(副)いきのつづく限り。命の續く限り。

いきかくる……かくれる〔行隱る〕(自動、ラ下二)ゆくへ知れずになる。(古語)

いきがけ〔行掛〕(名)ゆきがけ。事のついで。**—の駄賃**(句)「にすること。

いきかそう……そう〔生火葬〕(名)生きながら火葬

いきかた〔意氣方〕(名)こころがけ。こころいき。氣前。氣だて。

いきかた〔行方〕(名)やり方。仕打。

いきかた〔行肩〕(名)ゆきかた。肩の衍。衣服の背縫から袖口までの長さ。

いきかたり〔生騙〕(名)(いき)は罵る心持をあらはす接頭語)圖太いかたり。つら憎い騙者。

いきがみ〔生神〕(名)㊀人の形であらはれてゐる神。㊁靈驗のあらたかな神。

いきかよう……よう〔行通ふ〕(自動、ハ四)通ふ。ゆきかよふ。

いきがる……がる〔意氣がる〕(自動、ラ四)自意氣だと思ってほこる。自ら意氣だと自慢する。

いきかわりしにかわり……かはり……かはり〔生變死變〕(名)幾度も生まれかはること。

いきぎも〔生膽〕(名)生きてゐる動物から取った膽。**—を抜く**(句)どきもを抜くびどく驚かす。

いきぐさ〔生草〕(名)【植】(へんけいそう)〈辨慶草〉。(古語)

いきぐすり〔生藥〕(名)不死の靈藥。

いきぐち〔生口〕(名)巫女(ゐ)の神おろしによって、生存する人の靈が巫女にのりうつって語ること。

いきぐみ〔意氣込〕(名)いきこみ。

いきぐるし……しい〔息苦し〕(形、二)いきづかひが苦しい。**—い**……げ〔息苦しげ〕(名)いきぐるしいさま。**—さ**〔息苦しさ〕(名)いきぐるしいこと。又、その程度。

いきごくもん〔生獄門〕(名)生きながら獄門に「「嘲されること。

いきごころ〔意氣事〕(名)男女間の情事。ゐごと。

いきごこむ〔意氣込む〕(自動、マ四)勢をこめる。

いきごみ〔意氣込〕(名)いきほひこんだきまへ。

いきごむ〔意氣込む〕(自動、マ四)勢「がつまって苦しくなる。

いきざし〔息差〕(名)㊀いきづかひ。㊁いきこみ。氣勢。「「ず關係。事件のなりゆき。

いきざつ〔經緯〕(名)(いきざち)〔意氣地〕(名)㊀他に對する面目上、自分の思ふことを立て通さうとする心。㊁心に思ひ込んだこと。いち(意地)。

いきじびき〔生字引〕(名)㊀何事でも心得てゐる人。㊁博識だが、應用のきかぬ人。

いきす〔海髮・髮菜・小凝菜〕(名)【植】紅藻類の海藻。淺海の岩礁又は砂礫に着生して、暗褐色にして毛髮狀をなして分枝す。初夏の頃刈取り、乾燥漂白して糊の材料とし、又は刺身のつまとする。**—のり**〔海髮糊〕(名)【植】(いきす)。

いきずえ……え〔息杖〕(名)荷物をかついだ人が、肩なほ休める爲に、擔ひ棒を支へる杖。

いきすかい……づ〔息遣〕(名)息をする樣子。

いきずかし……づかし〔息づかし〕(形、二)息が切れさうである。いき苦しい。(古語)㊁なげかはしい。(古語)

いきすぎ〔行過〕(名)㊀進み過ぎること。㊁出過ぎること。**—もの**〔行過者〕(名)ですぎもの。なまいきもの。

いきすき……すき〔息衝〕(名)㊀呼吸。㊁太く息をつくこと。ためいき。**—しだい**〔息衝次第〕(名・副)息の續く限りでべりつづけるさま。

いきすわたる……ぜ……わたる〔息衝渡る〕(自動、ラ四)歎息して暮す。(古語)「じすく)。

いきすく……すく〔意氣喜〕(名)(いきはりすく)〈いめいきをつくこと。ためいき。**—し**〔息衝く〕(自動、カ四)歎息する。

いきすじ……じ〔意氣筋〕(名)男女間の情事に關する次第。

いきずたま〔生靈〕(名)生きてゐる人の怨靈のた又、その所。困りぬくこと。

いきずまり……づ〔息詰〕(名)窒息。息のふさが

いきずまる……づまる〔行詰まる〕(自動、ラ四)行き所のない所に行く。ゆきどまる。ゆきつまる。狹く苦しくなる。困りぬく。

いきずまる……づまる〔息詰まる〕(自動、ラ四)息苦しくなる。

いきずむ……づむ〔行詰む〕(自動、マ四)㊀行きづまる。狹く苦しい。㊁性急である。

いきずむ……づむ〔息詰む〕(自動、マ四)㊀いきをつめて腹を張る。いきむ。㊁こらへる。辛抱する。

いきずら……ら〔生面〕(名)生きてゐる者の顏。「を寫ってゐ語。

いきせいはる……はる〔息精張る〕(自動、ラ四)氣力のありたけを出す。意氣込んでする。

いきせき〔息急〕(名)息づかひのあらいさま。ひどく急ぐさま。**—切る**(句)甚だしく息づかひをあらくする。

いきたけ〔行丈〕(名) 分量。高。金額。かさり。程。

いきたし〔息出〕(名) ❶息をする所。いきぬき。

いきたつ〔行立つ〕(自動、タ四) 成立する。ゆきたつ。

いきたない〔寝穢い〕(形) 「いきたなし」の口語。

いきたなし〔寝穢し〕(形、一) ❶目障るものがおそい。麻坊である。❷醜姿が見苦しい。

いきだわし〔形、一〕息苦しい。

いきどほしい。

いきち〔生血〕(名) 生きてゐる動物の血。なまち。

いきちがい〔行違〕(名) ゆきちがい。

いきちがう〔行違ふ〕(自動、ハ四) (いきちがこう)の口語。

いきちこう〔行違ふ〕(自動、ハ四) (ゆきちがこう)。

いきちる〔行散る〕(自動、ラ四) わかれわかれになって解散する。ゆきちる。

いきつき〔息継〕(名) 働いた後に暫く休むこと。

いきつく〔行著く〕(自動、カ四) ❶ゆきつく。❷精力・資力などが盡きる。❸同復の見込がない。❹死ぬ。

いきどおし〔憤し〕(形、二) 息がはげしい。

いきどおらし〔憤らし〕(形、二) なげかはしい。腹だたしい。(古語)

いきどおる〔憤る〕(自動、ラ四) ❶恨み怒る。❷不平をいひたく。❸なげく。❹激昂する。❺勵む。ふるひたつ。

いきどおろし〔憤ろし〕(形、二) 腹だたしい。いきどほらし。(古語)

いきどし〔憤し〕(形、二) いきぐるしい。いきだたしい。

いきどまり〔行止〕(名) いきどまること。又、そのところ。ゆきどまり。

いきどまる〔行止る〕(自動、ラ四) ゆきどまる。

いきとまる〔生止まる〕(自動、ラ四) 生きて此の世に留る。生き殘る。(古語)

いきながらえる〔生存へる〕(自動、ハ下一) (いきながらふ)の口語。

いきながろう〔生存ふ〕(自動、ハ下二) 長く この世に生きてゐる。ながらへてゐる。

いきなしに〔息無しに〕(副) 息もつかずに。(古語)

いきなり〔行成〕(名・副) なりゆきに任せること。準備もせずに。すぐに。―さんぼう〔行成三寶〕(名) なげやりにすること。―ほうだい〔行成放題〕(名) 前後に同じ。

いきによらい〔生如來〕(名) 【佛】❶道德の高い僧。❷此の世に現存する佛。いきぼとけ。

いきにんぎょ〔生人魚〕(名) 江戸時代に於ける假生遊女の異稱。

いきにんぎょう〔生人形・活人形〕(名) ❶生きた人の姿に似せて造った張子人形。又、その見世物。❷人形のやうに美しい人。

いきぬけ〔行拔〕(名) ゆきぬけ。とほりぬけ。

いきね〔息根〕(名) ❶息。呼吸。❷聲。

いきのお〔息緒〕(名) ❶いのち。生命。

いきのこる〔生殘る〕(自動、ラ四) 死なずしてこの世に殘る。

いきのした〔息下〕(名) 息の絶えようとするさま。臨終の際。聲のかすかなこと。

いきのたばね〔息束〕(名) 呼吸の根源。生命。

いきのね〔息根〕(名) のどもと。

いきのの止める〔句〕殺す。「ながいきする。長命する。

いきのぶ〔生延ぶ〕(自動、バ上二)

いきのべばら〔生松原〕(名) 【地】福岡縣早良郡姪濱町にある松原。十里松といふ。福岡から唐津に至る街道にある。松原の中に壹岐の社がある。

いきは〔行方〕(名) 金錢・物品などのゆくへ。ゆき。

いきはぎ〔生剝〕(名) 天つ罪の一。生馬の皮を剝いで齋殿をけがすこと。(古語)

いきはじ〔生恥〕(名) 此の世での恥。(死恥)(死恥)

いきはだかる〔生膚斷〕(名) 國つ罪の一。生きた人の肌に傷をつける罪。(古語)

いきはり〔意氣張〕(名) 意氣地のはりあひ。―ずく〔意氣張尽〕(名・副) 意地を張って負けまいとするさま。「地をとほす。

いきはる〔意氣張る〕(自動、ラ四) 意地を張る。

いきばる〔息張る〕(自動、ラ四) いきをつめて腹に力を入れる。いきばる。

いきぶくろ〔息袋〕(名) きんたま(睾丸)。

いきぶどう〔生不動〕(名) ❶【佛】靈殿のあらたかな不動明王。❷不動明王に似た顔つきの人。❸火災の時などに、生きながら火焰に包まれてゐる人の形容。

いきぶれ〔行觸〕(名) 汚れたものに行きあって觸れてゐること。

いきへんじ〔位記返上〕(名) 【法】罪あって位を剝奪せられた結果、位記を返上すること。

いきぼさつ〔生菩薩〕(名) ❶【佛】高德の僧。❷美人。

いきぼとけ〔生佛〕(名) 【佛】いきぼとけ。

いきまく〔息卷く〕(自動、カ四) ❶怒って息が烈しくなる。❷勢力をふるふ。

いきほね〔息骨〕(名) 聲。息の音。

いきみ〔息〕(名) いきむこと。息を込めて腹を張ること。

いきみ〔生身〕(名) 生きてゐるからだ。なまみ。(死)身の對)

―ぐ〔生身供〕(名) いけにへとして神に捧げること。ひとみごくう(人身御供)。(古語)

―に餌食〔句〕此の世に生きてゐるものには、生活する手段が備ってゐること。**―は死**(死)**身**〔句〕此の世に生きてゐるものは、必ず一度は死ぬものであること。

いきみたま〔生御魂〕(名) 昔、陰曆七月八日から十三日までの間に、見女が生存してゐる父母・長者に祝物を贈り又は饗應した儀式。

いきむ〔息む〕(自動、マ四) 息を込めて腹に力を入れる。いきばる。

いきめ〔生目〕(名) 活きるあひて。活きるてだて。

いきめぐる〔生廻る〕(自動、ラ四) ❶生きながらへる。❷生きながらへて故郷にめぐりあふ。(以上古語)

いきもう〔息ふ〕(自動、ハ下二) いきむ。息を張る。(古語)

いきもどり〔行戻〕(名) ゆきもどり。

いきもの〔生物〕(名) 生きてゐるもの。動物。

いきやく〔逢逆〕(名) 道理に從はずにさからふこと。

いきやくし〔生藥師〕(名) ❶生きて此の世にゐる藥師如來。❷名醫。

いきやすめ〔息休〕(名) 仕事の間に休むこと。いきつぎ。

いきよ〔生世〕(名) この世。生きてゐる時。(古語)

いきよ〔夷蹈〕(名) ひざなくむこと。あぐら。

いきよ〔依據〕(名) よりどころ。根據。

いきょう〔異香〕(名) 珍しいかほり。

いきょう〔異境〕(名) 他國。他鄉。外國。

いきょう〔異鄉〕(名) 他國。他鄉。

―のは**な**〔異鄉花〕(名) ❶外國で見る美人。❷海外出稼の日本の醜業婦。

いきょう〔異教〕(名) ❶自分が信ずる宗教とはちがった宗教。❷【宗】キリスト教で、キリスト教以外の民間偶像教の稱。「しい風。

いきょう〔異形〕(名) 普通とはちがった形。怪

いきょう〔醫業〕(名) 醫者の職業。醫術の業。

いきょう〔偉業〕(名) 偉大な事業。

いきょう〔遺業〕(名) 故人の殘した事業。

いぎょう〔易行〕(名) 【佛】他力の修行。念佛の修行。**―どう**〔易行道〕(名) 【佛】阿彌陀如來の願力にすがって極樂に往生する道。

いきょく〔委曲〕(名) ❶くはしいわけ。❷こまやか。つぶさ。

いきり〔盛〕(名) ほてること。

イギリス〔England〕(名) 【地】ヨーロッパ列國の一。大陸の西方、大西洋上にある帝國。大

プリテン・アイルランド自由國の二大主島と附近の九百餘の島嶼とからなり、イギリス海峡を挾んで佛・白・蘭の三國と對してゐる。面積約十四萬五千方粁。國民はアングロサクソン人・ケルト人（ケルト人は奢侈から成り、動勉著實、不屈不撓の精神に富み、信義を重んじ秩序を守り、主として新教を信じてゐる。造船業は世界無比、海上王と稱せられ、領土は世界の四分の一を占める。）**—きょうかい**（英吉利教會）（名）【宗】アングリカン教會。**—びょう**（英吉利病）（名）【醫】（くるびょう）佝僂病。**—まき**（英吉利卷）（名）女の髪の結び方。束髪の。後方から巻きあげて、左右に輪をつくつたもの。

『雙』いきすだま。

いきりょう（生靈）（名）生きてゐる人の怨霊。

いきる（射切る）（他動、ラ四）思ひきって勢よく矢を射る。

「しあつくなる。ほてる。

いきる（熘る・熱蒸る）（自動、ラ四）むし

いきる（熘る・熱蒸る）（自動、ラ下二）前條に同じ。

いきる（息る）（自動、ラ四）息づかひを荒くして怒るといきまくりきも。

「いく」の口語。

いきる（生きる）（自上一）（形、二）蒸されるやうなにほひがする。

いきれ（熘・熱蒸）（名）ほてること。むしあつい

いきれる（熘れる）（自動、ラ下一）

いきわかる（行渡る）（自動、ラ四）ゆきわたる。殘るくまなく及ぶ。あまねくとどく。

いきん（衣金）（名）着物と夜具。

「しだ金。

いきん（遺金）（名）忘れ殘した金。

いく（畏懼）（名）おそれること。恐懼。

いく（行く）（自動、カ四）❶ゆく。❷出來る。成る。うまくはかどる。❸よい。

「條に同じ。

いく（生く・活く）（自動、カ四）❶命を保つてゐる。死なずにゐる。❷生きかへる。よみがへる。（古語）

いく（生く・活く）（自上一）前

いく（生く・活く）（他動、カ下二）❶いかす。生存させる。❷花を花器に插す。❸地中に埋める。炭火を灰に埋める。

いく（自動、カ四）❶生ずる。出てくる。「損が—」納得する。

【古語】

いく（生）（接頭）長命にさせようと願ふ意。「—井。

いく（幾）（接頭）❶或語に冠して「どれほど」「いくら」の意をあらはす語。❷或語に冠して數へきれぬほど多い意をあらはす語。❸たびたびの秋。❹幾年。

—あき（幾秋）（名）幾つかの重なり。多くの重なり。

—え（幾重）（名）

—えにも（幾重にも）（副）かへすがへすも。ひたすらに。

—か（幾日）（名）❶いくらかの日數。❷多くの日。

—かえり（幾返）（名・副）いくたび。

—かすみ（幾霞）（名）幾重の霞。

—くすり（幾藥）（名）幾多の薬。

—しも（幾霜）（名）幾年かの霜。

—せ（幾瀬）（名・副）いくつ。どれほど。どんなに。

—そ（幾十）（名・副）どのくらゐ。

—そたび（幾十度）（名・副）何べん。

—そばく（幾十計）（名・副）なにほど。いくらほど。

—た（幾多）（名・副）なにほど。いくらほど。

—たり（幾人）（名）どれほどの人。多くの人。

—つ（幾箇）（名）どのくらゐの數。

—とせ（幾年）（名）いくれん。どれほどの年。

—ぼく（幾何幾許）（名・副）どれくらゐ。何程。

—ぼくもなく（幾許も無く）（副）間もなく。程なく。やがて。

—はな（幾はなな）（副）幾縝。

—はるかぜ（幾春風）（名）毎年の春風。

—ひさし（幾久し）（形、二）いつまでもかはらない。行末ながく。

—ほど（幾程）（名・副）何程。

—まむかし（幾昔）（名）多くの年月を經た昔。

—め（幾目）（名）いくつかの重さ。

—よ（幾夜）（名）❶どれほどかの夜。❷多くの夜。

—よ（幾世・幾代）（名）❶どれほどの時代。❷多くの時代。

—よもち（幾代餅）（名）❶どれほどの餅。火におあぶって小豆餡をつけた餅で、江戸開國の松屋喜兵衛の妻幾世の賣出した餅。

—ら（幾等）（名・副）どれほど。

—許もない（句）何程もない。

—らかくら（句）物の値段を彼此といひたてること。

「坐食。

いぐい（居食）（名）働かずに食って暮すこと。

いぐい（齋杭・齋杙）（名）神を祭るに用ひる

「ひ。

いぐいな（堰杙）（名）ぬさを井堰に打つたく

いくいく（郁郁）（名・副）文物の盛んなさま。

いくいく（昱昱）（名・副）明らかなさま。

いくいく（煜煜）（名・副）光りかがやくさま。

いくいの—かみ（生井神）（名）【神】大社の月次・新嘗にあつかる神で、水を守り給ふ神。

いくう（射込ふ）（他動、ハ四）いこむ。（古語）

「教育すること。又、教育。

いくえい（育英）（名）孟子盡心篇上の語。英才を

いくくむ（育む）（他動、マ四）心に恐を含む。慣る。（古語）

いくさ（軍）（名）❶つはもの。兵士。❷兵隊。軍勢。軍隊。❸戰。戰爭。合戰。❹兵法。

—おきて（軍掟）（名）❶陣中の命令。軍令。

—だち（軍出）（名）いくさだち。

—がみ（軍神）（名）【神】いくさの守護神。武運を守る神。經津主・武甕槌の二神又は八幡神など。又、兵家では、北斗七星などを祭る。

—ぐるま（軍車）（名）軍陣に用ひる車。軍用車。兵車。

—ごっこ（軍事）（名）戰のまねをして遊ぶ子供の遊戯。

—しょうぎ（軍將基）（名）將棋の駒を新しい軍制に則って製作した明治時代の遊戯。

—だいしょう（軍大將）（名）主將から委任せられて其の日の軍の進退を指揮する人。

—だち（軍立）（名）❶戰場に出立すること。軍陣に出發すること。出陣。❷いくさ。

—だて（軍立）（名）軍勢の配置。陣立。

—ど（軍道具）（名）武器。軍器。

—なし（軍剛）（名）兵士をねりならすこと。調練。

いくうかがい（軍窺）（名）敵の者。軍事探偵。間諜。

—のかどで（軍門出）（名）いくさだち。

—のきみ（軍君）（名）將軍。一軍を率ゐる人。

—のさんぶぎょう（軍三奉行）（名）大目付・旅奉行・植奉行（江戸幕府）。

—の（軍園）（名）いくさば。

—のにわ（軍場）（名）いくさば。

—のり（軍法）（名）兵法。

—ば（軍場）（名）戰場。

—はじめ（軍始）（名）❶戰を始めること。開戰。❷始めてのいくさ。うひちゐ。

—ばた（軍幡・軍旗）（名）ぐんき。

—びと（軍人）（名）將士。兵卒。武士。軍人。

—ひょうじょう（軍評定）（名）臨時に、軍中諸般の事を統轄する人。

—ぶぎょう（軍奉行）（名）臨時に、軍中諸般の事を統轄する人。

—ぶね（軍船）（名）軍艦。

—ほし（軍星）（名）北斗七星。

—まつり（軍祭）（名）軍神を祭ること。

—もの（軍物）（名）軍談。軍記。戰爭の記錄。

—もよい（軍催）（名）開戰に當って軍陣をととのへること。戰闘準備。

—よばい（軍呼）（名）ときのこゑ。（古語）

—よほろ（軍丁）（名）兵役に從事する壯丁。

—を見て矢を矧ぐ（句）事が始まってから急いで準備をする。

いくじ（育兒）（名）幼兒を育てること。

いんくじ（育兒院）（名）貧兒・孤兒・棄兒を收容して養育する所。

いくじ（意氣地）（名）いきだ。心の張り。氣力。

—なし（意氣地なし）（名）氣力がなく役に立たぬこと。ふがひがないこと。又、その人。

いくし（齋串）（名）昔、神事に玉や鈴などをかけた榊や竹。

いくす（他動、サ四）「よこす」の訛。

いくぜん（煐然）（名・副）あたたかなさま。

いくたしゅんげつ（生田春月）（名）【人】抒情詩人。名は清平。鳥取縣の人。「春月小曲集」「相寄る魂」「山家文學論集」等の著がある。昭和五年（二

五九〇）瀬戸内海に投身して自殺した。年三十九。

いくたち〔生太刀〕(名)たち。持つ人を長生させるといふ。(古語)

いくたつふ〔郁達夫〕(名)【人】現代支那の社會主義文學家。藝術至上主義派。「南遷」「過去集」「葛蘿集」等の著には、封制度が破壊され、新制度が未だ確立せぬ混亂期の支那の社會的苦悶が描寫されてゐる。生年未詳。

いくたのもり〔生田森〕(名)【地】神戸市三ノ宮の北、生田神社の境内の森。平家や輔・新田・足利氏などの古戦場。

いくたま〔生玉〕(名)玉。持つ人を長生させるといふ。(古語)

いくたまじんじゃ〔生玉神社〕(名)【神】大阪市天王寺區所在玉町にある官幣大社。祭神は生國魂神、咲國魂神。境内は大阪市中有名な盛り場。又、その東門外には八幡宮があり、その馬場先で、昔、毎年五月五日に流鏑馬が行はれた。生國魂ノ神社。

いくたりゅう〔生田流〕(名)【音】箏曲の一派。寶永の頃京都の生田撿控の始めた流派。

いくだん〔煩悶〕(名)あたたかいこと。

いくだん〔猪口〕(名)あたたかいこと。

いくぢ〔缺脣・兎唇〕(名)上唇の裂けた口。又、そ

いくどうおん〔異口同音〕(名)❶多くの人が均しく同じ語を發すること。❷多くの人の說の一致すること。

いくの〔生野〕(名)【地】❶兵庫縣朝來(あさ)郡にある町。播但線の一驛。❷三菱鑛業株式會社經營の銀・銅鑛山がある。文久年中、平野國臣が澤宣嘉を奉じて兵を擧げた處。❸京都府天田郡上六人部村の大字

イグノランス〔Ignorance〕(名)無學。愚鈍。

いくは〔的〕(名)まと。的。(古語)

いくはし〔的所〕(名)的をかける所。あづち。(古語)

いくひ〔生日〕(名)吉日。いきいきと榮える日。神事・儀式の日を祝っていふ。(古語)

いくひ〔生日足日〕(名)いくひ。(古語)

いくび〔猪首〕(名)❶人の頸部が短くて猪のやうに見えるもの。❷兜をあふむけにかぶること。

いくぶん〔郁文〕(名)(論語八佾篇の語)文物の盛んなこと。

いくほうもん〔郁芳門〕(名)平安大内裏十二門の一。東面の南端にある。おほゐのみかど。

いくほうもんいん〔郁芳門院〕(名)【人】御名媞子。白河天皇の皇女。永長元年(一七五六)薨御。御年二十八。

いくみたけ〔茂竹〕(名)枝葉の茂った竹。(古語)

いくむ〔射組む・憤む〕(他動・マ四)いかる。腹立つ。(古語)

いくゆみ〔射組む〕(他動・マ四)互に射あ

いくゆみや〔生弓矢〕(名)弓矢の美稱。持つ人を長生させるといふ。(古語)

いくらす〔居暮す〕(他動・サ四)日の暮れるまで坐つてゐる。(古語)

いくり〔礁〕(名)海底の岩。かくれいは。(古語)

いくり〔郁李〕(名)【植】庭梅。

いくるみ〔鑄括・鑄包〕(名)鑄金物の足や耳などを鑄ておいて取附けし、鑄金で密著させて、丸吹にしたやうに見せかける法。

いぐるみ〔弋・矰繳〕(名)矢に絲をつけて鳥を射て取ること。いとゆみ。

いくん〔偉勳〕(名)大きなてがら。すぐれたこと。

いくん〔遺訓〕(名)故人のいひ殘したことば。遺言の教訓。

いけ〔遺薫〕(名)物に殘つてゐるかをり。

いけ〔池〕(名)❶地を掘って水を溜めた所。❷自然に地がくぼんで水のたまった所。湖の小さいもの。

―のおも〔池面〕(名)池の水面。

―のかがみ〔池鏡〕(名)清く靜かでよく物の影をうつす池の水。

―のこころ〔池心〕(名)池の中心。池を擬人化していふ語。

いけ〔生〕〔接頭〕(名)くみのみのしら意?―すかない。

いけ〔縊刑〕(名)くびり殺す刑罰。絞罪。

いけいぃ……〔畏敬〕(名)畏れうやまふこと。

いけいさいぃ……〔遺計〕(名)手ぬかりの謀。

いけいしょう〔生警罪〕(名)【法】舊刑法で、司法警察官が處分し得る拘留又は科料に相當する輕罪。現行の警察犯處罰令の罪に當る。

いけいれんぃ……〔胃痙攣〕(名)【醫】胃の劇痛を發する病。さしこみ。

いけうお〔活魚〕(名)活きたまつた中にいかしておく魚。いけすの魚。

いけがき〔生垣・生籬〕(名)樹木を植ゑならべて、日蓮上人寂滅の靈蹟たる日蓮宗の本山本門寺の所在地。「の根を埋め込んで並べて立てた柱。

いけかつ〔生簀〕(名)魚をいかしておく所で、水の一部に竹籬をとりまはしたものや箱形のもの等その種類が多い。**―ぶね**〔生簀船〕(名)箱を水中に沈めて魚をいかしおく爲のもの。いけぶね。

いけすかない〔生透・生好かない〕(形)他人の性質が氣にあはないでいやである。何とはなしにいやである。

いけすき〔生嗟〕(名)源頼朝の愛馬で、佐佐木

いけずき〔生月〕(名)(いけすき×生嗟)。

いけずき〔活作〕(名)料理の名。生きてゐる鯉を中骨に沿ふる神經にさはらぬやうに片身をおろして刺身にして、再び原形の如く肉を排列してなまめ、賓客の前に出す。箸が大骨にさはる時は潑剌として動く。

いけずみ〔活炭〕(名)水くく火力を保つ樣に灰に埋めて炭化した炭。

いけぞんさい(名)ひどく親孝行なこと。

いけだ〔池田〕(名)【地】❶大阪府豐能郡の町。古來、清酒の醸造地で名高かつた。今は池田炭の名を以て名高い。❷靜岡縣磐田郡にある村。平家物語源平盛衰記にある池田宿。**―すみ**〔池田炭〕(名)兵庫縣川邊郡東谷村一庫(ひとぐら)の山中で焼き、池田町に出す樵(ぐ)の黒炭。**―タバコ**〔池田煙草〕(名)德島縣三好郡池田村から產する煙草。

いけたぇ……〔井桁〕(名)❶井戸の上部の綠を木で四角に組んだもの。❷井の字の形。

いけたいが〔池大雅〕(名)【人】江戸時代の畫家。幼名又次郎。名は無名(むめい)。後貸成と稱し、大雅堂と號す。京都の人。南宗畫を學ぶ。性天眞爛漫、逸事奇聞多く、その作品も特殊の風格を帶びてゐた。安永五年(一七三六)歿。年五十四。その妻玉瀾もすぐれた畫家であつた。

いけだみつまさ〔池田光政〕(名)【人】武將。名は新太郎。備前岡山の城主。寛性頑敏、謹謹身な慎み、節儉を重んじ、學問を奬勵し治績を擧げ、中江藤樹を尊び、熊澤蕃山を召して國政を委ね、國利民福を進めた。天和二年(一六八二)卒。年七十四。

いけぢなしぇ……〔形・一〕いけつなし。

いけぢなしぇ……〔形・一〕いけつなし。

いけつぇ……〔遺蹟〕(名)❶父の死後生まれた妾腹の子。❷後に殘た賤しい血統のもの。

いけつない〔生胴・生胴・生胴〕(形)〔いけつなし〕の口語。

いけつなし〔形・一〕〔いけつなし〕(形)〔いけぢなし〕(形・一)の口語。情である。

いけどりすり〔生胴・掏摸〕(名)「すり」(掏摸)の爲の語。「いけ」に「どうな」を添へて罵る意をあらはしたもの。

いけどの〔池殿〕(名)❶京都市六波羅密寺の西、池殿町にあつた平賴盛の邸宅。❷〔人〕平賴盛の異稱。❸池殿尼の異稱。

いけどり〔生捕・生擒〕(名)いけどること。生きながら捕へた敵。とりこ。捕虜。「ながら捕へる。

いけどる〔生捕る〕(名)❶死刑に處せずに生きたまま神に供へたことを爲ること。又、その獄。❷或事件の爲に生命又は名利をなげ打てること。

いけにしどぶすい……〔池西言水〕(名)

【人】俳人。松江重頼の門人。紫藤軒と號した。京都の人。享保四年(一三七九)没。年七十二。

いけのあま[池尼](名)【人】いけのぜんに。

いけのぜんに[池禪尼](名)【人】藤原宗兼の女、平忠盛の後妻。平清盛の継母。平頼盛の實母。

いけのたいが[池大雅](名)【人】いけたいが(池大雅)。

いけのたいなごん[池大納言](名)【人】平頼盛の異名。

いけのぼう[池坊](名)生花の流派。聖徳太子を始祖とし、小野妹子を第一世とし、京都の六角堂に發達した花道家元の流派。

いけのものがたり[池藻屑](名)【歴】後醍醐天皇の元弘年間から後陽成天皇の慶長八年に至る歴史の記録で、「増鏡」の後をついだもの。一四卷。荒木田麗女の著。明和八年(一四三一)に成る。

いけはぎ[生剝](名)生きてゐる牛馬などの皮を剝ぐこと。いきはぎ。(古語)

いけばな[生花](名)草木の枝・葉・花を矯めなほして水を入れた花器に插すこと。又、その技術。插花。

いけび[生火](名)いけた火。うづみ火。

いけぶくろ[生袋](名)㊀獣の生餌を入れる袋。㊁鉄砲の時、獲物を入れる袋。

いけぶくろ[池袋](名)【地】東京市豊島區の町名。省線山手線の一驛あり、赤羽線の分岐點。又、武蔵野鐵道・東武鐵道東上線の起點をなす。

いけべふね[活船](名)生魚を生けて蓄く水槽。

いけべよしかた[池邊義象](名)【人】明治・大正時代の國文學者。歌人。御歌所寄人。大正二年(一五七三)没。年事記述釋」「日本法制史」等の著がある。日解題」「古事記述釋」「日本文學史」等の著がある。又、落合直文・萩野由之との合著「校註日本文學全書」は明治時代古典文學研究の魁となった。

いけま[活間](名)和船の中央部を區劃し、漁獲した魚又は釣餌にする魚を活けおく所。

いけま[生馬・牛皮消・白兎藿](名)【植】羅摩科の多年生蔓草。蔓は帶紫色、葉は心臓形で先端尖り、對生。葉・葉脈から花梗を出し白色五瓣の花を繖形に著く。果實は紡錘狀の蒴果で、秋、蒴が裂けて白毛ある種子を飛散する。根塊を馬の諸病の特效藥とする俗信があるが謬見である。

いけみぐさ[池見草](名)【植】蓮の異稱。(古語)

いけみずのさ[池水の](枕)「いひ」の枕詞。

いける[行ける](自動、カ下一)㊀ゆくことができる。㊁することができる。

いける[活ける](自動、カ下一)「いく」の口語。

いけん[異見](名)他人とはちがった考。異存。

いけん[意見](名)㊀心に思ふ所。見込。㊁自分の思ふ所を述べて諫め又は戒めること。**—だて**[意見立](名)意見を出さずともよいのに意見を主張すること。**—ぼうじ**[意見封事](名)中古、直言を求められた勅旨に對して、諸臣の上った意見の封書。

いけん[違憲](名)【法】㊀憲法や憲法の精神に違反する行爲又は手續。㊁憲法の精神に違反して他人の意思を強制して服従せしめる力。權威。

いけん[威權](名)權力によって他人の意思に殘ってゐる學者。「野に—なし」(書經大禹謨篇)。

いけん[遺賢](名)朝廷に仕へないで、民間に殘ってゐる學者。「野に—なし」(書經大禹謨篇)。

いけん[威嚴](名)威あっておごそかなこと。「ちふ言」。いかめしいこと。

いげん[違言](名)筋道にそむいた言。さかゆ。

いげん[遺言](名)㊀死にぎはにのこす言。ゆゐごん。ゐごん。㊁法前に、自己の死後法律上の效力を生ぜしめる目的でした意思表示。

いげん[威言](名)法令を吹くこと。誇言。

いご[遺孤](名)兩親の死後にのこった兒。わ

いご[園基](名)碁をうつこと。「すれがたみ。

いご[以後](名)その後。これより後。

いご[呻吾](名)讀書の聲。

いこう[威光](名)死後まで遺ってゐてがら。

いこう[遺功](名)死後まで遺ってがら。

いこう[偉功](名)偉大なてがら。偉勲。

いこう[已講](名)【佛】奈良又は天台の三會(御斎會・法華會・最勝會)の講師を勤めた僧。

いこう[異寇](名)異國から來てあだすること。又、そのあだ。

いこう[以降](名)これより後。以來。「架。

いこう[衣桁](名)着物をかけて置く具。衣

いこう[意向](名)心の向かふ所。考。

いこう[異香](名)普通とはちがったよい香。

いこう[移項](名)【數】代數で、方程式の一方にある項を符號をかへて他に移すこと。

いこう[意巧](名)くふう。もくろみ。

いこう[衣香](名)衣服にたきしめた香。衣服にかけた香水の香。

いこう[遺香](名)殘ってゐるかをり。

いこう[維綱](名)おほづな。おほもと。

いこう[遺稿](名)【文】死者の遺した詩・文・和歌の草稿。

いこう[威光](名)人に畏敬せられる勢。威息をつく。やすむ。

いこう[息ふ・憩ふ](自動、ハ四)

いこう[息ふ・憩ふ](他動、ハ下二)㊀いこはせる。㊁やすませる。(古語)

いごう[意業](名)【佛】三業の一。意識を以て善惡を思慮・分別すること。

イコール[Equal](名)等しいこと。㊁數等號。

いごき[動](名)「うごき」の誤。

いこく[異國](名)外國。**—じょうちょう**[異國情調](名)㊀外國の風物や氣分。㊁【文】外國の一種獨特の情調を作品中に入れること。**—じん**[異國人](名)外國人。**—ばり**[異國張](名)古者を洒張して新しいものやうにすること。

いごく[依怙地](名)えこ。かたいち。

いごこち[居心地](名)ゐごこちもち。す

いこじ[意固地](名)「ごこじ」の誤。

いこず[い掘す](他動、サ上二)根みごこちの。(古語)

いこつ[醫骨](名)醫者としての精神や心得。

いこつ[遺骨](名)死者の骨。

いこの[慰ふ](他動、ハ四)なぐさめる。(古語)

いこのう[慰ふ](他動、ハ四)なぐさめる。(古語)

いこのうら[居溢る](自動、ラ下一)席からこぼれ出る程人が多く坐る。ゐあまる。

いこまやま[生駒山](名)【地】奈良縣と大阪府との境にある山。奈良縣生駒郡生駒町の西。高さ六四二米。昔の孔雀街坂(くすぢざか)。

いこむ[射込む](他動、マ四)矢を射て

いこむ[鑄込む](他動、マ四)金屬を熔かして鑄型に流し込む。

いこむ[居籠む・居込む](自動、マ四)㊀すわりこむ。㊁多くの人の中に坐る。

いこむ[居籠む・居込む](他動、マ下二)大勢の中に坐らせる。

いこめる[居籠める](他動、マ下一)(いこむ)の口語。

いこもり[居籠](名)註寺にこもること。

いこもる[忌籠る](自動、ラ四)けがれに觸れぬやうに身體を清めて家に籠る。(古語)

いことよか(名・副)丈高くいかめしいさま。(古語)

いころす[射殺す](他動、サ四)矢を射中てて殺す。

いこん[遺恨](名)㊀いつまでものこる恨。

いごん[遺言](名)(いげん)。

いこんとう[已今當](名)【佛】過去・現在・未來の三世。

いさ(副)いや知らない。どうだか。どうであらうか。(古語)**—や**(副)いやさあ、どうであらうか。

—知らず(句)どうであらうかわからぬ。

いざ(感)人を誘ひ、又は事をし始めようとする時に發する聲。さあ。どれ。いで。**—いざ**(感)さあさあ。いでいで。**—鎌倉**(句)(さあ、鎌倉に大事があるならばの意。謡曲「鉢木」に出てゐる句)大事の起った場合。**—させ給へ**(句)㊀いざしたまへ。㊁さあいっしょにお出でなさい。**—さら**

ば（句）さあ、それなら。**—せ**（句）さあ、私とともになさい。（古語）**—たまへ**（句）さあ、私と共にお出でなさい。いざさせ給へ。（古語）〔熊〕

いさ〔辰座〕（名）支部で、天子の御座。（扇の條參照）

いさ〔易碎〕（名）【藝】脆力にあつて纖物の容易に碎ける性質。

いさ〔異彩〕（名）㊀異なる色どり。㊁きはだつた色。**—を放つ**（句）きはだつて見える。

いさ〔委細〕（名）くはしいこと。つまびらか。

いさ〔偉才〕（名）すぐれた才智。又、その人。

いさ〔遺財〕（名）死者の遺した財産。

いさいそく……〔居催促〕（名）その場に坐り込んで催促すること。

いさお〔勇功〕（名）國家の爲に奬くした骨柄。手柄。勳功。いさをし。

いさお〔勇夫〕（名）勇氣ある男。勇士。ますらを。

いさおし〔勳功〕（名）いさお。「口論。爭論。

いさかい〔諍〕（名）いさかふこと。いひあひ。

いさかふ〔諍ふ〕（自動、ハ四）（いさかう）の口語。

いざかし（感）「いざ」を強めていふ語。（古語）

いざかや……〔居酒屋〕（名）㊀店ざきで酒を飲ませる酒屋。㊁安酒を飲ませる店。

いさき（名）【植】青桐の一種。葉は多く五つに裂け基に光澤がある。實は食用となる。

いさき〔雜魚〕（名）【動】雜魚科の海產硬骨魚。體長約四〇糎に達し、體形は長紡錘形、口は小さく、脊鰭は一基で長い。脊部は黃綠色。腹部は淡色。體側に三條の褐色の縱線がある。六月頃產卵する。夏季の肉は殊に美味である。

いさき〔鷸〕（名）【動】「の口語。

いさぎよ・い〔潔い〕（形・一）㊀大層清い。汚れない。㊁潔白である。汚れた行がない。㊂未練がない。わるびれない。㊃いきましい。立派である。

いさく……〔遺策〕（名）手ぬかりの計。

いさく〔自動、カ四〕波が高く立つ。（古語）

いさ・く〔葛藤〕（名）もめ。もつれ。いざこざ。こたくさ。かつとう。

いさ・ご〔砂・沙〕（名）小さい石。すな。（古語）**—じ**〔砂地〕（名）すなの多い土地。すなち。（古語）**—ずち**……〔砂土〕（名）砂の交つた土。**—の・なみ**〔砂波〕（名）此の世。現世。**—むし**〔砂蟲・石蠶〕（名）【動】毛翅類の幼蟲。體は圓筒形、體長約二糎。胸部は三節より成り、歩行に適する胸肢を具ふ。池沼・河川の水底に棲息し、草片・小砂などで圓筒形移動性の巢をつくる。**—長じて巖となる**（句）水く桑えを成つていふ。

いさこ〔雜魚〕（名）【動】さこ。

いさこ・う〔諍ふ〕（自動、ハ四）（いさかう）の口語。

いさ・こと〔叱ふ〕（他動、ハ四）叱る。「あらをそびかをする。口論する。いひあふ。（古語）

いさ・さ〔細・小〕（接頭）或語に冠して、「いささか」「小さい」意をあらはす語。**—川**（名）「細川」意をあらはす語。**—おがわ**……〔細小川〕（名）小さがわ。（古語）**—おだけ**……〔細小竹〕（名）小竹。**—かけぶね**〔小掛船〕（名）帆かけ船。（古語）**—がわ**〔小川〕（名）小さい川。細い川。**—むらたけ**〔小群竹〕（名）しげつた小竹。

いさ〔鯲・鱊〕（名）【動】硬鱗類の淡水產硬骨魚。體形細長。體色帶黃白色、死ぬと乳白色となる。體長約六糎、冬生まれで春夏の間に捕へられ、食用に供せられる。ちりめんざこ。**—すし**〔鯲鮨〕（名）煮た鯲を飯にまぜた鮨。**—ぶね**〔鯲船〕（名）いさざを漁る船。

いささか〔聊〕（副）すこし。わづか。ちょつと。かりそめ。**—ごと**〔聊事〕（名）小事。些細な事柄。**—に**〔聊に〕（副）いささか。（古語）

いささぐさ〔大角草〕（名）【植】そらまめ。（古語）

いささけ・し〔聊け し〕（形、一）少しばかりである。わづかである。（古語）

いささけ・わざ〔聊業〕（名）ちょつとしたわざ。つまらぬわざ。（古語）

いさ・さ・す〔他動、サ四〕さあさあと勵ふ。

いささめ（名）㊀かりそめ。㊁小唄の一。**—に**（副）僅かばかり。かりそめに。（古語）

いさつ〔絵殺〕（名）首をしめて殺すこと。

いさつ〔自動、タ上二〕甚だしく泣く。哭泣す。（古語）

イサツェン〔獨 Isacen〕（名）【藥】無味無臭の白色（形、一）めさとい。目がさめやすい。（古語）

いさと〔寢聽〕（名）いさとい。目がさめすいことの早いさま。（古語）**—し**〔寢聽し〕（形、一）めさとい。目がさめやすい。（古語）

いさと・よ（感）いやいやさうでない。（古語）

いさ・とり〔勇魚とり〕（枕）「海」「濱」「難」の枕詞。

いさな〔鯨〕（名）いさなふこと。さそふこと。（のうの）の口語。

いさなう〔誘ふ〕（他動、ハ四）（いさな）の口語。

いさなぎのみこと〔伊弉諾尊〕（名）【神】天神の命を受けて始めて日本を經營せられた男神。

いさなぎ・のみこと〔伊弉冊尊〕（名）【神】「いさなぎのみこと」の配偶の女神。

いさな・ひ（感）どうだらうか。どうだがわかりぬ。（古語）

いざのう〔誘ふ〕（他動、ハ四）（いさな）の口語。

いさに（副）どうだらうか。どうだがわかりぬ。（古語）

いさは〔斑葉〕（名）【植】草木の葉に黃・白・赤などの斑點條理あるもの。ふいり。

いさば〔五十集〕（名）㊀乾魚・醃魚などなどを賣る店。㊁じて魚市場。**—や**〔五十集屋〕（名）乾魚・醃魚の商人、又はその商店。

いさぶる〔搖る〕（他動、ラ四）ゆさぶる。「ゆする。

イサベラ〔Isabella〕（名）【人】㊀一世。スペインの女王。カスチリヤの女王。アラゴンのフェルディナンド二世に嫁した。女王がコロンブスのアメリカ發見を助けたのは有名な話である。（一四五〇年）㊁二世。マリヤイサベラルイザ。スペインの女王。フランツダッシシーマリヤフェルディナンドと結婚した。アルフォンソ十二世の母。（一八三〇年）

いさま……〔居樣〕（名）坐つた樣。ねすまひ。

いさましし〔勇ましし〕（形、二）たけしい。なさしい。勢が強い。**—い**〔勇ましい〕（形）「いさましし」の日語。

いさみ〔勇〕（名）㊀いさむこと。勇氣。㊁奮ひたつ勇ましく感じること。なさこだて。**—は**〔勇肌〕（名）なさこだての氣質。俠客の風。**—ぶし**〔勇節〕（名）江戸時代俗謠の一。文政の頃、舶資男舶長牛三郎が、豐年餘を賣る時、江戸市中を唄ひ歩いたのに始まる。

いさむ〔勇む〕（自動、マ四）勢ひこむ。「心が奮ひたつ。心が進む。

いさむ〔勇む〕（自動、マ下二）非を告げて改めさせる。とどめる。忠告する。多くは長上に對してする言ふ。

いさめ〔諫〕（名）いさめること。諫言。忠見。**—の・つ・ぶ**〔諫鼓〕（名）昔、支部で諫言する者の爲に、それを知らしめる鼓を設けたこと。かん。

いさめ〔寢覺〕（名）れさめ。（古語）

いさめる〔諫める〕（他動、マ下一）「いさむ」の口語。

いさよ〔猶豫〕（名）いさよふこと。ためらふこと。

いさよ〔十六夜〕（名）陰曆十六日の夜の月又はその夜。**—しさ**〔十六夜櫻〕（名）【植】陰曆正月十六日頃に咲く櫻。伊豫國道後にある。

いさよ・い〔十六夜清心〕（名）【文】假清心と遊女十六夜の悲戀をしくんだ演劇で、河竹默阿彌の作。安政六年、江戸中村座初演。**—の・つき**〔十六夜月〕（名）陰曆十六夜の月。いさようて出るからいふ。**—ばら**〔十六夜薔薇〕（名）【植】薔薇の一種。葉は山椒に似て小さく、花は淡紅色。

いさよ・い〔十六夜日記〕（名）【文】阿佛尼が訴訟用で、建治三年十月十六日、京都を出て鎌倉に旅行した日記。一卷。**—さんげつしょう**……〔十六夜日記殘月抄〕（名）【文】十六夜日記の註釋書で、小山田與清・北條時鄰の著。三卷。寛治二年刊。

いさよ・う〔自動、ハ四〕ためらふ。進まうとして進み得ぬ。たちやすらふ。（古語）

いさら〔些〕〔接頭〕或語に冠して「いささか」の意をあらはす。語。(古語)—**いさ**|〔些井〕(名)水の少い井戸。(古語)—**いさら**(副)少しづつ。(古語)—**なみ**〔些川〕(名)水の細く少い川。—**わ**〔些波〕(名)窮。(古語)

いさらい〔尻・臀〕(名)しり(尻)。(古語)

いさらえ〔鱗・波〕(名)蛭物の肌をたがねで削りさらへて滑かにすること。又、そのもの。

いさり〔漁〕(名)魚を捕ること。すなどり。(古語)—**び**〔漁火〕(名)魚を漁船の方へ寄せる爲に焚く火。(古語)—**びの**〔漁火の〕〔枕〕「ほのかの枕詞。—**ぶね**〔漁船〕(名)魚を捕る船。れふせん。すなどりぶね。(古語)

いざり〔膝行・躄〕(名)ゐざること。足腰が立たないで、いざって進む者。—**かつごろう**〔躄勝五郎〕(名)【人】箱根雲隠躄仇討を見よ。—**ばい**〔躄道〕(名)幼兒の坐つたままで進みゆくこと。—**まつ**〔躄松〕(名)【植】(はいまつ×這松)。

いざる〔笹〕(名)竹を編んでつくつた器。ざる。(古語)

いざる〔居行る・膝行る・居去る〕(自動、ラ四)①坐りながら進む。②尻を地につけながら進みゆく。③水の少い爲に舟の進みが遲くなる。④物が置場所から自然にずれ動く。

いさわしゅうじ〔伊澤修二〕(名)【人】教育家。長野縣の人。東京高等師範學校長・東京盲啞學校長・東京高等師範學校長を歴任。又、樂石社を創立して吃音矯正に力を盡くした。大正六年(一九一七)歿。年六十七。

いさん〔遺産〕(名)①勘定がひ。②計畫の。

いさん〔遺産〕(名)①死後に遺した財産。②死者の遺した財産で、まだ相續者のものにならない財産。—**そうぞく**〔遺産相續〕(名)【法】死亡者の遺産をうけついで自己の所有となすこと。家督相續と異り、戸主に非ざる者の死亡によつて其の死亡者の財産上の權利義務が包括的に承繼される。(家督相續の聲)—**そうぞくにん**〔遺産相續人〕(名)【法】遺産を相續する人。法定の順位は第一は直系卑屬、第二は直系尊屬、第四は兄弟姉で、長子主義ではなく平分主義であるから二人以上の相續人がある場合には法定の相續分に應じて分配される。

いさんえん〔居樣居三昧〕(名)ゐざまゐさまひ。すわりやう。

いし〔石〕(名)①岩より小さく砂より大きなものの稱。②石材。③碁石。④硯。⑤いしけん(石拳)の略。—**が流れて木の葉が沈む**(句)(陸賈新語に「浮石沈木」とあるに基づく)物事の顚倒せる譬。—**に灸**(句)きざきのないこと。—**に漱ぎ流に枕す**(句)晉の孫楚が、「石に漱ぎ流に枕す」といつたから、友の王濟が笞めたのに、「石にくちすすぐ」とは齒を洗ふことと強辯したことから、まけをしみの強いことにいふ。—**に立つ矢**(句)〔韓詩外傳〕に、楚の熊渠子が、夜、石を見て虎と思つて射たが、鏃は勿論矢の羽まで石に入つたとある故事から、一念を打込んで事に當れば、どんな事でもできるとの譬。—**に謎**(句)うけ答のない譬。—**に針**(句)石に灸と同意。—**に枕し流に漱ぐ**(句)山野の勝地に隠遁して自由な生活をする。—**の上にも三年**(句)石の上に三年もつづけて坐れば暖まるとの義から、辛抱すれば必ず成功するの意。—**を抱きて淵に入る**(句)〔韓詩外傳・說苑の句〕危いことの甚だしいことにいふ。浮きあがられぬ。必ず滅びる。

いし〔椅子・倚子〕(名)腰をかけてすわりがかり、背部に鳥居形のよりかかりがあつて、上に褥を敷く。昔、貴人の用ひた腰掛。(古語)

〔子倚〕

いし〔醫師〕(名)一定の資格を有し、傷病者の診察・治療を業とする者。—**かい**〔醫師會〕(名)醫師の公共團體で、醫事衛生に關する官廳の諮問に應じ、又は、建議なる機關。府縣郡市區に設立する。

いし〔意志〕(名)①成し遂げようとする心。②〔心〕①心の能動的方面で、快な欲し不快な避ける心的作用。②思慮・選擇し決行しようとする意志で、衝動や慾望を抑制して生ずる意志。—**薄弱**(句)意志の力が微弱で、忍耐・決行なしと得ぬこと。

いし〔意思〕(句)かんがへ。おもひ。—**きかん**〔意思機關〕(名)【法】法人の意思を構成する機關で、株式會社の株主總會、市町村の市町村會の類。—**のうりょく**〔意思能力〕(名)【法】獨立して事物を判斷し得る能力。自己の行爲の結果を正當に認識し得る能力。—**ひょうじ**〔意思表示〕(名)【法】私法上の權利義務に關する法律上の效果を生ぜしめんが爲に、その意思を外部に發表すること。申込又は承諾の如きもの。

いし〔異志〕(名)二心。謀叛せんとする心。異心。

いし〔懿旨〕(名)皇后・皇太子の思召。

いし〔醫使〕(名)あこで人を使ふこと。人を輕んじて勝手氣儘につかふこと。

いし〔縊死〕(名)首をしめて死ぬこと。

いし〔遺子〕(名)親の死後に遺した子。わすれがたみ。遺兒。

いし〔遺志〕(名)死者の生前の志。

いし〔遺矢〕(名)(矢は屎くの義)大小便をもらすこと。いびたり。

いし〔遺址〕(名)昔、建物などのあつたあと。

いし〔遺旨〕(名)旨にたがはぬこと。仰にそむくこと。心にたがふこと。

いし〔いしし〕〔美し〕(形、二)①よろしい。うつくしい。見事だ。たくみだ。②殊勝だ。神妙である。③旨い。味がよい。

いし〔いしし〕〔稚し〕(形、二)いとけなしわかい。(古語)

いし〔異事〕(名)他の時。往時。

いし〔異時〕(名)常と異なつた事柄。非常の事。

いし〔意字〕(名)一字毎に意義を含んだ文字。漢字の類。

いし〔意地〕(名)①こころ。こんじやう。②心に深く思ひこんだこと。③自分の思ふことを通さうとする心。④人のいやがることをしようとする心。⑤人に逆らはうとする心。—**いわ**〔意地鷹〕(名)(いくじなしの)。—**ざけ**〔意地酒〕(名)無理に意地になつて飲む酒。—**ずく**〔意地盡〕(名)意地を張りとほすこと。—**ばり**〔意地張〕(名)いぢばると。強情。又、その性質の人。—**ばる**〔意地張る〕(自動、ラ四)思ひ込んだことを通さうとする。—**むじ**〔意地無地〕(名)とやかくいふこと。ぐずぐずつぶやくこと。—**わる**〔意地惡〕(名)意地のわるいこと。—**わるし**〔意地惡し〕(形、一)心にひがみがあつて、人を苦しめようとするにいふ。—**にも我**(句)意地を張つても我慢をしても。

いじ〔遺事〕(名)①死者の遺した事柄。②昔から傳はる事跡。③もれた事柄。

いじ〔慰辭〕(名)慰問のことば。

いじ〔遺兒〕(名)①いし×遺子。わすれがたみ。②すてご。

いじ〔位次〕(名)①位階の高下による座席の順序。②順序。

いじ〔維持〕(名)つなぎもつこと。もちこたへ。

いしあけび〔石・植〕みつばあけび。

いしあやめ〔石菖蒲〕(名)【植】(せきしょう)(石菖)。

いしあわせ〔石合〕(名)奇石を左右あはせて、「石井」(名)①岩石を穿つてつくつた井戸。②石側の井戸。

いしいし〔美美〕(名)だんご。

いしいし(副)いたけさま。

いしいうげつ……ふ[石井露月](名)【人】明治時代の俳人。秋田縣の人。その句は、漢語を驅使して堂堂たる格調の中に飄逸の味があり、俳句と人生の交渉を明らかにした。昭和三年(一九二八)歿。年五十六。「露月句集」の著がある。

いしうす[石臼](名)石でつくった臼。—**げい**[石臼藝](名)藝は多いが、秀でたもののないこと。

いしうち[石打](名)❶小石を互に投合ふ遊戯。❷婚禮の夜、近所のものなどがその家の中に小石を投込む習俗。—**のえや**[石打征矢](名)石打の羽で矧いだ矢。大將軍の用びたもの。—**のはね**[石打羽](名)鷲の尾の羽の兩端の羽。極めて強いから、矢の羽として珍重する。—**のやなぐ**[石打胡籙](名)石打の征矢を入れるやなぐひ。

いしうら[石占](名)占の法。石の大小・輕重等によって吉凶を占ふ法。(古語)

いしうるし[石漆](名)(しっくい×漆喰)。

いしがき[石垣](名)石を積みあげて造った工作物。—**くずれ**[石垣崩](名)おちぶれた人の稱。又、京都の遊女町石垣町の遊女のおちぶれたもの。—**じま**[石垣島](名)【地】沖繩縣八重山列島中の東部の一島。延長百粁。甘藷・甘蔗を産する。奈良時代の初、我が國に來朝した信覺もと國はこの島である。—**やま**[石垣山](名)【地】神奈川縣足柄下郡早川村にある山。高さ二五八米。小田原町を一望に瞰下し得る。天正十八年、小田原の役の豐臣秀吉の陣。

いしがけ[石崖](名)石を積んで造ったがけ。—**こもん**[石崖小紋](名)石崖のさまに染めた染模樣。—**しぼり**[石崖絞](名)六角形を並べた絞染模樣で、石切の石崖の合せ目に象どったもの。

いしがっせん[石合戰](名)石を投げあって戰ふ職爭。いんちっち(地拍子)。

いしかに[石蟹](名)【動】蟹の一種。谷川の清流に棲み、其の形は方形で扁平、色は帶黝褐色。第一脚に鋏(はさみ)を有す。

いしかべ[石壁](名)【建】石材みセメント・モルター等の接合材・接合して積み重れて造った壁。

いしがみ[石神](名)奇石・靈石・石柊・石劍の類を神體として祭った民間信仰の神。

いしがめ[石龜・水龜](名)【動】石龜科の龜類。背甲平たく中央に一本の鋭い縱走隆起がある。口大きく鉤なく、四肢共に五本づつの趾を有し、蹼(みずかき)を有す。背甲は暗褐色、腹甲は黑色。本邦の特産で淡水に棲む。—**のおだんだ**(句)自分の力を顯みないで、人のする事をまねようとしてもできないことの譬。

いしかりがわ……はか[石狩川](名)【地】北海道五大川の一。源を石狩岳に發し、石狩平野を貫流して石狩灣に注ぐ。信濃川に次いで我が國第二の長流とせられる。長さ三七〇粁。

いしかれい……れい[石鰈](名)【動】軟鰭類の魚。形は普通の鰈に似、兩脇共其の右側面にある。全體暗灰色又は淡褐色。體長約六〇糎。【地】東茨城郡の別稱。

いしかわ……はか[石川](名)❶底に石の多い川。❷

いしかわがぼう……はかぼう[石川雅望](名)【人】(いしかわまさもち)。

いしかわごえもん……ゑ[石川五右衛門](名)【人】大盜賊。三好氏の家臣石川明石の子といふ。文祿三年豐臣秀吉に捕へられ、油を以て煮殺された。

いしかわじま……はか[石川島](名)【地】東京市京橋區、隅田川の西岸にある島。もと、石川氏の領地で、江戸幕府の懲役場のあった處。現今、石川島造船所の所在地。舊稱御島。

いしかわじょうざん……かはぢ[石川丈山](名)【人】詩人。通稱嘉右衛門、名は重之。三河の人。驍勇にして徳川家康に仕へたが、後、今の京都市左京區修學院町に詩仙堂を築いて閑居した。寛文十二年(一六三二)歿。年九十。その著に「詩仙詩」等がある。

いしかわたくぼく……はか[石川啄木](名)【人】明治時代の歌人。名は一ハ(はじめ)。岩手縣の人。獨特の口語の發想に依る新しい生活に即した短歌を作って、若い歌人の共鳴を得た。明治四十五年(一五七二)歿。年二十七。著に歌集「一握の砂」「悲しき玩具」等がある。

いしかわまさもち……はか[石川雅望](名)【人】國學者・狂歌師。江戸日本橋小傳馬町の宿屋の主人。通稱は五郎兵衛。六樹園と號し、又、蜀山人に狂歌を學び、宿屋飯盛と號した。天保元年(一四九〇)歿。年七十八。其の著に「雅言集覽」「源注餘論」「近江縣物語」等がある。

いしき[意識](名)❶(心)(イ)覺醒してゐる時の心の狀態。(ロ)知・情・意一切の精神作用。❷(佛)八識の一。思案・分別の心。—**する**(サ変)[意識す]他動、サ變)知る。知覺する。—**ようそ**[意識素](名)【心】意識の不可分的單位の要素。—**りゅう**[意識流](名)【心】意識の流れ。

いしき[石城・石櫃](名)棺を納める爲に石で疊んだ所。(古語)

いしき[居敷](名)❶座席。❷尻。(古語)

いしき[遑式](名)❶中古の法制で、式にちがった行爲。

いしきおる……ゐる[石菊](名)【動】珊瑚蟲類の腔腸動物。石灰質の骨骼は、菊花の滿開に似てゐる。海中に產し、六の倍數の多くの觸手を具へる。

いしきり[石切](名)石を山から切出し又は種種の細工をすること。又、その人。—**のみ**[石切鑿](名)石を切り又は彫るに用ひる本圓く先の尖った鑿。—**は**[石切場](名)石材を切出す場所。

いしぎり[意趣斬](名)石を切って細工する職人。

いしく[石工](名)石を切って細工する職人。

いしくばり[石配](名)園基の始めに、各要所に石を配置して大體の陣形を立てること。いしだて。

いしくみ[石組](名)庭に石を配置すること。

いしぐら[石藏](名)石を積み重れて造ったくら。

いじくる[弄くる](他動、ラ四)もてあそぶ。なぶる。いぢる。

いしぐるま[石車](名)石を運ぶ車で、重量に堪へさせる爲車體を低し、四輪としたもの。—**に乗る**(句)坂路なだで、踏んだ小石が轉落して足を奪はれるにいふ。

いしくれ[石塊](名)小さい石。石のかけ。いしころ。

いしげ(名)【植】海藻の一種。黃褐色又は黑褐色で、高さ約一尺。末梢は扁平である。沿海の暗礁に生ずる。多く肥料とする。

いしげた[石下駄](名)石で下駄の形に造ったもので、上古、墳墓の中に埋めたもの。

いしげた[石蹴](名)地上に幾多の區劃を設け、一箇の小石を片足で蹴ながら、次へ次へと區劃を逐うて送る遊戯。

いじける……ける(自動、カ下一)❶怖じさにちぢまりすくむ。❷痩さの爲にかじける。

いしけん[石拳](名)拳の一種。手を開いたのを紙、手を握ったのを石、指二本を出したのを鋏とし、鋏は紙に勝ち、紙は石に、石は鋏に勝つものとして勝負を爭ふ遊戯。じゃんけん。

いしこ[石粉](名)長石(ながいし)の粉末で、硝子の原料。

いしこ[石子](名)石。小石。—**ずみ**……ず[石子積](名)❶大小の石を積み重れること。❷いしこすめ。—**ずめ**……ず[石子詰](名)罪人を生きながら穴の中に入れ、更に小石を入れて埋め殺す酷刑。中古、奈良春日神社の鹿を殺したものは此の刑に處せられた。

いしこい……こい[石鯉](名)【動】せんざんこう(蜈蚣)。

いしごき[石御器](名)茶碗。

いしごけ[石後家](名)貞操堅固な後家。

いしこっぱ[石木端](名)石の刻み屑。

いしこりどめのみこと[石凝姥命](名)【神】天磐戸(あまのいはと)の神の御子。鏡作遠祖(いしこりのかがみ)の一。

いしころ[石塊](名)小石。いしくれ。

いしどろも[石衣](名)干菓子の一種。餡に水飴を加へて煉り固め、蜜をつけて後、砂糖の衣で包んだもの。

いしざいく[石細工](名)石材を細工すること。

いしざか[石坂](名)㊀石の多い坂。㊁石段。

いしさじ[石匙](名)石器時代の遺物。燧石の類で造った匙の形をしたもの。獸皮を剝ぐに用ひたものらしい。

いしざら[石皿](名)石器時代の遺物。歪三十糎位の皿狀の石器で、物を磨りつぶすに用ひたらしい。

いしじ……ち[石地](名)㊀石の多い土地。㊁(いしじぬり)。**―ぬり**[石地塗](名)灰色をした光澤のない漆塗。

いしし おう……[石雌黄](名)【鑛】鑛石の雌黄。

いしじき[石敷](名)石を敷きつめた處。いしだたみ。

いしじり……り[石尻](名)石垣などの石の根ざしの下の土臺石。柱石。柱礎。㊁物事の基礎。物事の首腦。又、その人。

いしずえ[石投](名)石を投げること。(古語)

いしずき[石築](名)石で土臺などをつきかためること。

いしずき[石突・鐏・鐓](名)㊀槍・薙刀・蝙蝠傘・杖等の地につく方のききの金具。㊁刀のこしり。

いしずくり[石造](名)㊀石材を細工すること。又、その細工物。又、その細工する人。㊁石で造ること。

いしずたい……ず[石傳](名)石を傳はって行くこと。

いしずまる[石傳・居静まる](自動・ラ四)坐つてゐる者が落ちつく。

いしずみ[石炭](名)せきたん。

いしずり[石摺・石榻・石本](名)㊀石碑などの文字を、油墨などで、紙に地を黑く字を白く摺ったもの。㊁木に刻んだ書を石摺のやうに摺ったもの。**―ぶすま**[石摺襖](名)石摺の書を張った襖。**―ぞこ**[石底](名)足袋の底に用ひる堅く丈夫な綿布。

いしだい……だい[石鯛](名)【動】石鯛科の海産硬骨魚。大いさ約四五糎。黑鯛に似て口大きく、鱗は黑く青み、七箇の黑筋がある。體色青灰色。

いしだかみち[石高道](名)石が多くて高低凹凸のある道。

いしだき[石抱](名)江戸時代の刑。三角稜の木を並べた上に罪人を坐らせて、その膝の上に重い石材を積んで拷問したこと。

いしたたき[石敲](名)【動】せきれい(鶺鴒)。

いしだたき[石叩](名)槌で鑿石を打碎くこと。又、其の槌。

いしだたみ[石疊](名)㊀板石を敷きつめた處。㊁石段。(古語)㊂箱物の隅材の木口を喰違にはめつゝ組方。㊃地紋の名。方形が縦横に並べ、一つおきに白黑の色を入れた模様。いちまつ。㊄紋所の名。模様の石疊を應用したもの。いしだたみくるま。

いしだて[石立](名)いしくばり。

いしだはいがん[石田梅巖](名)【人】心學の祖。名は興長、通稱は勘平。梅巖は其の號。丹波國南桑田郡の人。先天良心說に基づき、平易懇切、庶民を感化すること偉大である。延享元年(一七四四)歿。年六十。「都鄙問答」「石田梅巖語錄」等の著がある。

いしたぶや[石飛ぶや](枕)「あまはせづかひ」の名は佐吉。治部少輔と稱した。豐臣秀吉の寵を得て機務に參し、五奉行の一となり、佐和山十八萬石の城主となる。後、德川家康を除かうとして、慶長五年(一六〇〇)關ヶ原役を起したが、敗れて三條河原に梟首せられた。年四十一。

いしたん[石段](名)石で造った階段。

いしつ……[異質](名)【質】又、その性質。

いしつ……[委悉](名)つまびらかにつくすこと。

いしつ……[遺失](名)㊀おとすこと。忘れのこすこと。㊁【法】動産の所有者が、その意にあらずして、占有を失ひ、その所在の知れぬこと。**―ぶつ**[遺失者](名)【法】物品を遺失した者。人。**―ぶつ**[遺失物](名)【法】物品を遺失した物品。

いしつ……[異日](名)[遂失](名)しくじり。あやまち。

いしつ……[異日](名)[長日](名)左傳、文公七年の註に「夏日可畏」とあるに基づく)夏の炎天の日。

いしつぼ[石壺](名)伊勢皇大神宮の祭典の時、勅使・祭主・宮司などの著座する位置を示す爲に、石を敷いた處。いしのつぼ。

いしつみ[石積](名)子供の遊戯。積み重れた小石の山を崩さぬやうに一つづつ取って、多く取ったのを勝とする遊戯。

いしづん[一身田](名)いっしんでん。(古語)

いしどうらまる[石童丸](名)【傳】(かるかやどうしんつくしのいえずとを見よ。

いしどうろう[石燈籠](名)石造の燈籠。

いしとご[石床](名)石を敷きつめた川の底。

いしとさか[石雞冠](名)石のやうにかたい雞のとさか。(古語)

いしなぎ[石投](名)【動】鱆は科の海産硬骨魚。體色黑色。鱆に似る。長さ約一米。深海の礁間に産する。

いしなげ[石投](名)石を投げあふこと。又、そ

いしなご[石子・石投子](名)女兒の遊戯。石を撒いて、其の中の一つを空中に投げあげ、落ちて來ぬ前に、地上の石を拾って、共につかみとり、早く拾ひ盡くすことを競ふもの。いしなどり。

いしなどり[石投取](名)いしなご。(古語)

いしのあぶら[石油](名)【鑛】(せきのうゆ)【人】(石棺)。(古語)

いしのおおどこ……ほど[石大床](名)(せっかい)。

いしのおび[石帶](名)【鑛】しょうにゅうせきの(鍾乳石)。(古語)

いしのつかい……つかい[石使](名)すすり(硯)の異名。

いしのつらら[石氷柱](名)【鑛】しょうにゅうせき(鍾乳石)。(古語)

いしのつま[石間](名)[石火](名)㊀燧石できり出す火。きりび。㊁またたく間。電光石火。

いしのつま[石間](名)桃現造の神社の本殿と拜殿との間に石を敷いた所。

いしのまきし[石卷市](名)【地】宮城縣の市。北上川河口の兩岸に跨る。仙臺を去ること五二粁。昔、伊寺水門(いしのまきと)と稱し、仙臺領唯一の港であった。

いしのみ[石鑿](名)いしきりのみ(石切鑿)。

いしのみみなと[石湊](名)すすり(硯)の異稱。

いしばい……ばい[石灰](名)【化】酸化カルシウムの粉末で、石灰石・白堊・介殼などを石灰窯中で燒いて製する。漆喰・セメント・肥料・消毒用とする。せきかいせき。カルク。**―がま**[石灰窯](名)石灰石などを燒いて生石灰を製する かま。粘土・煉瓦等で築造する。**―のたん**[石灰壇](名)清涼殿東廂の南隅にある石灰を固めて築いた壇で、主上が毎朝、皇大神宮を拜せられた所。**―ひりょう**……りょう[石灰肥料](名)【農】生石灰又は生石灰に水をまぜた肥料。**―も**[石灰藻](名)【植】いしも。**―やき**[石灰燒](名)石灰石などを燒いて石灰を製造する業とする人。

いしばし[石階](名)いしだん。石の階段。(古語)

いしばし[石橋](名)石で造った橋。

―を叩いて渡る(句)用心の上にも用心する譬。

いしはじき[石彈](名)㊀いしゆみ。㊁遊戯の名。雙方互に豆大の石を並べ、指先で敵の石を彈いて中つた石を取り、勝負を爭ふこと。おはじき。

いしばしあん[石橋思案](名)【人】小說家。名は助三郎。神奈川縣の人。明治十八年、尾崎紅葉等と硯友社を起し、我樂多文庫」を發行した。昭和二年(一五九七)歿。年六十一。

いしばしやま[石橋山](名)【地】神奈川縣足柄下郡早川村石橋(小田原町の西南)にある山。源頼朝が、治承四年に大蹉景親に破られた處。

いしばち[石鉢](名)石造の鉢。

いしばち[石柱](名)石造の柱。

いしはなび[石花火](名)【植】いそまつ(磯松)。

いしばり[石針砭](名)石で造った針。療治に用ひる。

いしばり[石張](名)地盤を堅固にする爲に、石を敷き詰めること。

いしばりだい……だい[石刺鯛](名)【動】あかめだいの。

いしひきうた[石挽歌](名)大石を挽く時に唄ふ歌。

いしひじり[石聖](名)❶佛】道德堅固な僧侶。高僧。❷感情に心を動かさぬ人。

いしびや[石火矢](名)昔の大砲。石片を彈丸として攻城戰に用ひた。

いしふぐ[石河豚](名)【動】「うみすずめ」の異名。

いしぶし[石伏石斑魚杜父魚](名)【動】ぶし(鰤)。

いしぶね[石船](名)❶石材を運ぶ船。❷石で造った浴槽。

いしぶみ[石文碑](名)文字を刻んで、後世の記念の爲に建てておく石。石碑。

いしぶろ[石風呂](名)石造の湯槽。石造の据風呂。

いしべい[石塀](名)石造の塀。

いしべきんきち[石部金吉](名)極めて物堅く、女色に迷はぬ人。—**金**…**兜**(句)物堅い石部金吉に堅い金兜をきせたことで、大層物がたい意。

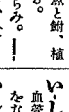
いしへん[石偏](名)漢字の偏の名。「視」「砲」などの知き字の左方にある石の字。

いしぼたん[石牡丹](名)【動】いそぎんちゃくを動かさぬ人。❷沈默の人。

いしぼとけ[石佛](名)❶石で作った佛。❷感情を動かさぬ人。

いしまく[竈](名)鈴物などにゆがみ、ひびはいること。

いしまくら[石枕](名)古墳から發掘せられる石器で、中央に凹みがあり、屍體の頭を載せたもの。


〔らくましい〕

いしみ[喬](名)ふこ。たけかこ。(古語)

いしみかわ[杠板歸](名)【植】蓼科の多年生草本。莖は蔓狀をして、葉は殆ど三角形で楯狀に附著し、蔓・葉柄共に刺を生ずる。夏、小形帶白色の花を穗狀に配列して、花後は、球形の瘦果を結ぶ。

いしみち[石道・石徑](名)石多くけはしい道。

いしむ[蹙む](自動、マ四)鈴物などの形がゆがむ。くれる。(古語)

いしむら[石群](名)石のむれ。多くの石。いはや(岩屋)。

いしむろ[石室](名)岩石を畳んで造った室。いはや(岩屋)。

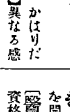
いしめ[石目](名)❶岩石にあるきすめ。❷金屬などの彫刻物の表面にすき間なく打出した細かい凹んだ點。—**がみ**[石目紙](名)石目の模樣ある日本紙。摺鑢から產する。—**こもん**[石目小紋](名)石目形に染めた小紋。

いじめる[鑿](名)金屬面に石目を打つに用ひるたがね。

いしも[石蓴](名)弱い者が弱いものを苦しめる。

いしも[石蓴](名)紅藻類の化石植物。石灰の沈澱物を多く含有し、形は葡萄狀・鎧狀・樹狀等種種あって、石の知く堅い。

いしもち[石首魚・鰦](名)【動】石首魚科の海產硬骨魚。體長約四〇糎、形鯖に似、頭短く、上顎長く、口闊く、小さい櫛形の鱗がある。銀白色で背面淡褐色。近海の泥中に棲み、頭の上に石のやうな堅いものがある。本邦近海・支那近海等に棲息する。ぐち。


〔魚首石〕

いしもち[石持](名)石を積みあげたやうな染模樣。—**そう**[石持草・茅膏菜](名)【植】茅膏菜科の多年生草本。塊根から莖を出し、葉は互生で半月形、腺毛簇生し、粘液を分泌して昆蟲を捕獲し、その養分を吸收する。冥、白色の五瓣花を開く。

いしもち[石持小紋](名)いしもちこもん。—**こもん**[石持小紋](名)

いしゃ[醫者](名)病を診察・治療する人。醫師。—**ぼうず**[醫者坊主](名)【植】んぶり。—**だおし**[醫者倒](名)(醫は多く剃髮したかからいさん)江戸時代の醫者。—**の玄關構**(句)外觀を飾る譬。—**の不養生**(句)立派なこと。—**の玄關構え**(句)外觀を飾る譬。

いしゃ[慰藉](名)慰めたりけうること。なぐさめ。

いしゃき[石燒](名)鐵鍋に油を塗ってその上で燒いた豆腐。又、石の上で燒いた豆腐。

いしゃく[胃弱](名)❶醫】消化力の弱い胃。❷胃の弱い人。

いしやま[石山](名)❶石の多い山。❷石材を切り出す山。❸地】滋賀縣大津市にある地。石山寺がある。觀月の勝地。❹大阪城址・舊本丸の地の古稱。

いしゃ[醫者](名)病を診察・治療する人。醫師。

いしゅ[意趣](名)❶心を使せ、考。❷うらみ。—**がえし**[意趣返](名)うらみをかへす。

いしゅ[意趣返](名)

いしゅ[意趣返](名)

いしゅ[意趣返](名)

いじゅん〔依遵〕(名)よりしたがふこと。

いじゅん〔遵順〕(名)我が心に違ふことと従ふこと。

いしょ〔異書〕(名)世にありふれてゐない本。秘書。

いしょ〔移書〕(名)一般の人に告知する文。公開文書。ふれぶみ。

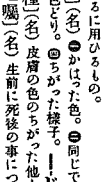
いしょ〔醫書〕(名)【醫】醫學・醫術の事を記した書。

いしょ〔遺緒〕(名)前人の遺した事業。

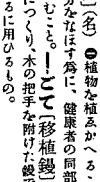
いしょ〔遺書〕(名)㊀死後の爲に遺した文書。㊁後世に遺した著書。㊂諸處に散逸した書物。

いしょ〔位署〕(名)昔、公文に官位を連れて書いた式。官と位と相當の時は、官を上に位を下に、相當しない時は、位を上に官を下に、位高く官の卑い時は、間に「守」の字を加へる等の知きこと。**—がき**〔位署書〕(名)(いしょ)。

いしょう〔意匠〕(名)㊀工夫をめぐらすこと。趣向。工夫。㊁工業上の物品の形狀・模樣・色彩又はその結合に就いて、工夫・發明した新規な裝飾的考案。デザイン。**—が**〔意匠畫〕(名)新たに意匠をめぐらして描いた畫。工夫畫。**—し**〔意匠紙〕(名)織物組織を理解しふくする爲に用ひる方眼紙で、縱横の線をないてつくった意匠圖の用紙。**—ず**〔意匠圖〕(名)意匠紙の上に織物の經絲と緯絲との組合せを示した圖。(圖の(イ)は意匠圖。(ロ)は右によって織った組織)。**—せん用櫶**(名)〔法〕意匠の案出者又は櫶承人が、十年間その意匠を專用する特權。案出者又はその櫶承人の請求によって政府がこれを與へる。**—ところく**〔意匠登錄〕(名)〔法〕意匠考案者又はその櫶承者の請求によって、特許局長が意匠原簿に記入すること。**—りょう**〔意匠料〕(名)㊀意匠を案出した手數料。㊁意匠登錄の手數料。



(ロ)



(イ)

〔圖匠意〕

いしょう〔衣裳〕(名)㊀衣と裳とのこと。㊁きもの。衣服。㊂能師・狂言師・俳優などの演技に用ひる衣服。**—がさね**〔衣裳重〕(名)遊郭で、臨幸や節句に遊女に晴着を着せ誇みること。**—かた**〔衣裳方〕(名)芝居で、俳優の扮裝に要する衣裳を著ける世話をする人。**—ごのみ**〔衣裳好〕(名)美服を好み、著物をえりごのみすること。又、その人。**—ずくし**〔衣裳盡〕(名)㊀衣裳の美を盡くすこと。㊁いろいろの裝飾を凝すこと。**—ずけ**〔衣裳附〕(名)㊀彼者の衣裳のきこなし。㊁いしょうかた。**—だな**〔衣裳棚〕(名)衣服を入れて置く戸棚。**—だんす**〔衣裳簞笥〕(名)衣服をしまっておくたんす。**—どころ**〔衣裳所〕(名)武家時代に諸大名の邸内で衣裳を藏した所。**—にんぎょう**〔衣裳人形〕(名)衣裳をつけた人形で、押神と木彫とがあり、多く、俳優・遊女・婦女に模した人形。**—ぴつ**〔衣裳櫃〕(名)衣服を入れる櫃。**—まく**〔衣裳幕〕(名)昔、花見などの時、羽織や著物を綱にかけ連れて幕の代りにしたもの。こそでまく。

いしょう〔異性〕(名)ばけもの。

いしょう〔異稱〕(名)㊀普通とは異なる名。㊁別名。

いしょう〔園障〕(名)〔法〕所有者の異なる二棟の建物の間の空地に、兩者が共同の費用で、その界に園障を設置する權利。

いしょう〔稱唯〕(名)(文字を顚倒して讀むのは、讓位と音が近いのを避ける爲といひ、又、諺語の「唯稱」を稱ッ唯ラ、卽ち、「おおと申す」といふかち、そのまま「ゐしょう」といったのだともいふ)貴人から呼ばれた時に答へる聲で、「おお」といふこと。

いしょう〔遺詔〕(名)帝王の御遺言。

いしょう〔帷牆〕(名)ひさまくしかきと。宮廷內の上下のへだて。**—の制**(句)君主が臣妾の爲に窓にあつかはれること。

いじょう〔以上已上〕(名)㊀これから上。これから前。㊁これから後。㊂手紙又は目錄若しくは條條書などの末に記して、「終る」といふ意をあらはす語。㊃江戸時代に將軍に謁見する資格ある者。御目見以上。㊄然る上は。「でない」。

いじょう〔異常〕(名)通常と異なること。普通とは異なること。

いじょう〔異狀〕(名)平常とは異なつたさま。

いじょう〔移乘〕(名)のりかへること。

いじょう〔移仗〕(名)行幸。

いじょうぐん〔圍繞〕(名)かこひめぐらすこと。「かこひ。

いじょうふ〔偉丈夫〕(名)すぐれた男。偉大な人物。

いしょく〔衣食〕(名)㊀衣服と食物。㊁着ることと食ふこと。生活。**—じゅう**〔衣食住〕(名)㊀衣服と食物と居住と。㊁生活を立てて行くこと。くらしむき。**—足りて榮辱を知る**(句)(管子牧民篇、淡書食貨志の句)生活が豐かであれば、道德心が高まって名譽と恥辱とを知るやうになる。**—足りて禮節を知る**(句)生活の道が豐かであれば、人は禮儀を知るものである。**—に奔走す**(句)生活の爲にかけまはつて働く。

いしょく〔移植〕(名)㊀植物を植ゑかへること。㊁【醫】病的の部分をなほす爲に、健康者の同部分を切りとって植ゑこむこと。**—ごて**〔移植鏝〕(名)鏝で中凹又は平につくり、木の把手を附けた鏝で、花卉・蔬菜を移植するに用ひるもの。

いしょく〔異色〕(名)㊀かはった色。㊁同じでない色。㊂ちがった色どり。**—じんしゅ**〔異色人種〕(名)皮膚の色のちがった他人種。

いしょく〔遺囑〕(名)生前に死後の事について「こと。するたのみ。

いしらく〔委囑〕(名)ゆだれ賴むこと。任ぜるの官職。實歷者・碩學・舊藩藩家の代表者が、顧問・委員となり、文部大臣の管理の下に設かれる。明治四十四年設置。

いしらます〔射白ます〕(他動、サ四)矢を射て敵を散らしくじく。(古語)

いじりやき〔弄燒〕(名)餅等幾度も裏がへしは焼くこと。「びれる。

いじる〔弄る〕(他動、ラ四)弄ぶ。

いしろます〔射白ます〕(他動、サ四)

いしわた〔石綿〕(名)㊀【鑛】蛇紋石又は角閃石の纖維狀に變化したもの。㊁絹絲の如く光り、綿の如くやはらかで、しかも强靭。消防夫・火夫の衣服に製し、防熱・防毒用とする。アスベスト。

いしわら〔石原〕(名)小石の多くある平地。

いしわらまさあきら〔石原正明〕(名)【人】江戸時代の歌人。通稱甚左衛門。尾張の人。本居宣長・塙保己一の門に學び、有職故實にも通じた。文政四年(一四八一)歿。年六十二。「冠位通考」「尾張の家苞」等の著がある。

いしわり〔石割〕(名)㊀【動】(イ)(ひくいどり)火食鳥。(ロ)(いしわりがい)。㊁いしわりせった。

いしわりがい〔石割貝〕(名)【動】茶斧足類の貝。介殼は長楕圓形で茶褐。長さ三四糎位。砂岩に穴をあけて棲む。**—じごく**〔石割地獄〕(名)【佛】鐵山が兩方からくづれて罪人を壓殺し、流血地に滿ちるといふ地獄。しゅがふじごく(衆合地獄)。**せった**〔石割雪駄〕(名)踵に鐵板をうった裏皮の厚い雪駄。

いしん〔懿親〕(名)親族の間の親しみ。親しい血たより。

いしん〔倚信〕(名)ふた心。むほんする心。

いしん〔異心〕(名)ふた心。たのみ。信任。信賴。

いしん〔維新〕(名)㊀すべてが改まって新しくなること。㊁(詩經大雅文王篇「周雖一舊邦、其命維新」書經胤征篇「成興維新」)明治初年の改革。

—しりょうへんさんかい〔維新史料編纂會〕(名)維新史料の編纂を爲る合議制

—しんぐん〔維新軍〕(名)維新の時の代表者が、顧問・委員となり、文部大臣の管理の下に設かれる。明治四十四年設置。

いしん[遺臣]（名）前朝又は前代から殘つてゐる臣民。

いしん[彙進]（名）同類のものが、類をなして朝廷に進み仕へること。

いしん[威信]（名）威光と信任。

いしん[畏慎]（名）かしこみつつしむこと。

いじん[異人]（名）㊀普通とは異なる人。㊁不思議な術を行ふ人。仙人。㊂すぐれた人。㊃異國の人。外國人。外人。西洋人。㊄別人。

いじん[夷人]（名）えびす。外國人。

いじん[遺塵]（名）前人の事業のあと。

いじん[偉人]（名）すぐれた人。

いしんじょ[石千代、石丈]（名）堅い人。頑固一徹。片意地。

いしんしんでん[以心傳心]（名）【佛】心から心に傳へること。言語や文字ではあらはされぬことを我より彼の心に傳へること。一字不說。

いす[柞、蚊母樹]（名）【植】金縷梅科の常綠喬木。高さ六米位。樹皮は灰白色、葉は長橢圓形で平滑・金綠。初夏の頃、深紅色の細花を穗狀に綴る。葉に「ゐりまき」の巢を生ずる。觀賞用として栽培せられ、材は桂などとする。いすのき。

〔柞〕

いす[椅子・倚子]（名）（「す」は「子」の唐音）㊀腰を掛ける具。うしろによりかかりがあり、その形、方形・圓形・長方形等で、腰掛ける所は、籐・織物又は革を張る。㊁官職等の地位。**—ぶとん**[椅子蒲團]（名）後部に鐵鎖のよりかかりを取附けた一種の座蒲團。

いす[（せいすする）]（他動、サ變）病氣をなほす。

いす[（ますせいせよ）]（他動、サ變）㊀ゆだねる。まかせる。㊁すておく。なげやりにする。

いず[何]（接頭）どの。どれの。「—地」。

いず[（ずれいでよ）]（自動、ダ下二）㊀內から外へ行く。出發する。でる。㊁あらはれる。人目に立つ。すぐれる。㊂發生する。おこる。㊃まぬがれる。のがれる。「す。だす。

いず[（ずれいでよ）]（他動、ダ下二）いだかじげること。

いずい[（ずれいでよ）]（他動、ダ下二）㊀內から外へ行く。出發する。でる。㊁あらはれる。㊂發生する。おこる。㊃まぬがれる。のがれる。「す。だす。

いずい[渭水]（名）【地】支那甘肅省蘭州府渭源縣の西北の山間から陝西省の中央を流れ、黃河に入る川。流域に周・秦・漢・唐の舊都の址がある。

いずいし[伊豆石]（名）【鑑】伊豆國から產出する石。建築用とする。

いずう[異數]（名）例のない待遇。常ならぬために特に賞が立つことのできないやうにする。

いずか[鵤・交喙]（名）㊀【動】燕雀類雀科の鳥。雄は暗紅色、雌は帶綠黃色。翼と尾羽は黑褐色、嘴は褐色で交叉してゐる。㊁くひちがひ。**—の嘴**[（ぢ）]（句）物事の前後くひちがつて思ふやうにならぬこと。

〔㊀かすい〕

いずかた[（ずれいでよ）]（代）どちら。どこ。**—さまにも**[何方樣にも]（副）どつちにしても。どのみち。

いずぐ[（ずれいでよ）]（他動、ガ四）「ゆすぐ」の「說」。

いずく[（ずれいでよ）]（代）いづこ（何處）。どこ。**—ともなく**（句）どこともわからずに。

いずくまる[（ずれいでよ）]（自動、ラ四）いすくむ（居竦む）。

いずくむ[（ずれいでよ）]（自動、マ四）矢を射て敵を恐れちぢまつてゐる。「射竦む」（他動、マ下二）「わつたままですくむ。

いずくむ[（ずれいでよ）]（居竦む）（自動、マ四）すくむ。「すておくこと。

いずくむし[（ずれいでよ）]（勇細し）（枕）「鮠」の枕詞。いすは勇ましくはしは物をほめる語。鮠は殊に勇ましく見えるものなれば、いすくはしは鮠とつづけていふ。

いずくんか[安くんか・焉んか]（副）いづくにか。どこかしてか。

いずくんぞ[焉ぞ・安んぞ]（副）どうして。何として。「—知らん」。

いずこ[何處]（代）どこ。どつち。**—はあれど**（句）わけて。（古語）**—はかりに**（句）どこあてにして。（古語）**—をおもてに**（句）何こあてにして。（古語）**—をはかりと**（句）何處をあてにして。（古語）

いずこえゆく[（ずれいでよ）]（自動、カ四）（Quo vadis）ポーランドの文豪シエンキエヴィッチの代表作で、ネロ帝常時のローマ市を背景とし、貴族信者リディヤとの戀を描いた歷史小說。一八九五年刊行。

いずごんげん[伊豆權現]（名）【神】靜岡縣田方郡熱海町伊豆山にある國幣小社伊豆山神社。祭神は伊豆山神。式內の古社。鎌倉幕府の尊信厚く關東の總鎭守で、箱根權現と合はせて二所權現と稱せられた。

いずし[貽鮨]（名）いがひ（貽貝）の肉を酢に漬けたもの。「だもの。

いずしちとう[伊豆七島]（名）【地】伊豆の東南方にある大島・利島・新島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島の七島。東京府に屬する。各島、山茱萸の種子から搾取した椿油を產する。

いずしやき[田石燒]（名）兵庫縣出石町から產出する陶磁器。純白で纖細な花卉を描き、又、彫刻を施したものがある。

いずすがわ[五十鈴川]（名）【地】三重縣度會郡にある川で、皇大神宮の神域を過ぎ、二見が浦に注ぎ、又、勢多川を合はせて海に入る。流程一六粁。御裳濱川。

いずすぐ[（ずれいでよ）]（自動、ガ四）驚き騷ぐ。あわてる。

いずすぐれ・すき[（ずれいでよ）]（名）陰曆六月の異稱。（古語）

いずすのみや[五十鈴宮]（名）【神】伊勢大神宮の別稱。

いずせんりょう[伊豆千兩]（名）【植】「ばす語。いづれの方。どつち。

いずち[何方・何地]（代）不定の方向をあらはす語。

いずつ[井筒]（名）井戸の地上の部分を木・石・土管で圍んだもの。本來は圓形なものをいふが、方形なものをも含めていふ。化粧側。

いずな[飯綱]（名）（いすなつかい）の略。

—さん[飯綱山・飯縄山]（名）【地】長野縣上水內郡にある山。長野市の西北の休火山。附近は植物學者の好採集地。山頂に飯綱神社がある。

—つかい[飯綱使]（名）狐をつかつて魔術を行ふこと。又、その人。信濃國の人伊藤忠縄が、天福元年（一八九三）同國飯綱山の飯綱神社（祭神三狐神）で、行を行つて神通力を得たのが始めだと云ふ。

—ほう[飯綱法]（名）（いすなつかい）。

いずのり[伊豆海苔]（名）【植】甘海苔の一種で、伊豆近海から產出するもの。帶黃綠色で香味がよい。

イスパニヤ[Hispania][西班牙]（名）【地】ヨーロッパの西南部に突出したイベリヤ半島の大部分を占め、フランスの南西に接る。面積約五〇萬方粁。ヒレネー山脈によつてフランスと境ぜられる。共和國で、人種はケルト人・アラビヤ人・ラテン人等の混血雜種で、頭髮黑く日本人に似てゐる。首府はマドリード。スペインといふ。

いすぶる[（ぶれいでよ）]（他動、ラ四）ゆすぶる。

いずべす[（ずれいでよ）]（代）どのへん。どちら。（古語）

いずまい[居住]（名）すわつたさま。ねざまい。（居樣）。

いずみ[泉]（名）地中から湧き出る水。**—がわ**[泉川]（名）㊀湧いて流れる泉。㊁【地】京都府相樂郡を流れる木津川の別稱。**—じょう**[泉城]（名）岩手縣磐井郡戸河內村（中尊寺の

（西にあった泉宮衛の居域。**—どの**〔泉殿〕（名）嬢殿造の一部。釣殿と相對して、南庭の泉水の上に突ぎだして設けた家で、寝殿との間に渡廊があった。

いずみいし〔和泉石〕（名）【鑛】大阪府泉南郡下莊村附近から産出する石材。青綠色を帶び、石理緻密で石碑などに用ひる。

いずみしきぶ〔和泉式部〕（名）【人】歌人。梨壺五歌仙の一人。大江雅致の女。和泉守橘道貞の妻。道貞の役後、上東門院に仕へ、冷泉天皇皇子爲尊親王・敦道親王の寵を受け、再び藤原保昌に嫁して丹後に下った。**—につき**〔和泉式部日記〕（名）【文】一條天皇の長保五年四月から翌寛弘元年正月までの和泉式部の日記。

イズム〔ism〕（名）主義。說。理論。

いずもう〔居相撲〕（名）（すわりずもう）。

いずもうし〔出雲牛〕（名）【動】出雲地方に産出する牛。毛色は普通黑色で體軀小、我が國固有の一牛種で、役牛とする。

いずもがな〔出雲假名〕（名）ひらがな・平假名。

いずもぐすり〔出雲藥〕（名）【藥】江戸時代に、出雲大社から製出せられた丸藥で、小兒の疳の藥。

〔宗介の作り始めた十文字藥。

いずもぐつわ〔出雲轡〕（名）明珍出雲守紀

いずもさき〔出雲崎〕（名）【地】新潟縣三島郡の港名。昔、佐渡往來の官船の著いた處。又、大愚良寛の生誕地として知られてゐる。

いずもぞく〔出雲族〕（名）先史時代に、出雲地方を中心とした勢のあった一族。（天孫族の對）

いずものおおやしろ〔出雲大社〕（名）【神】出雲國鎭座の大國主神で、五柱の神を配祀の社殿。已貴命（おなむちのみこと）（大國主神）で、天孫の宮殿に擬して造られたいはゆる大社造である。例祭五月十四日。いづもたいしゃ。

いずものおくに〔出雲阿國〕（名）【人】阿國歌舞伎の創始者。歌舞伎芝居の祖。出雲大社所屬の鍛冶職中村三右衛門の女で、もとは出雲大社の巫女であった。慶長十八年（一六一三）八十七歳で歿したといふ。

いずものかみ〔出雲神〕（名）【神】えんむすびのかみ。（出雲大社の神は、人の結婚を支配せられるといふ俗信による）。

いずものくにのみやつこ〔出雲國造〕（名）出雲國を統治した職。天穗日命の後裔。後、千家・北島の二家に分れた。**—の**〔出雲國造神賀詞〕（名）【文】出雲國造が新任した時、朝廷に奏聞する大御代を祝する詞。【節】。

いずもぶし〔出雲節〕（名）やすきぶし（安來節）。

いずもぶどき〔出雲風土記〕（名）【文】元明天皇の和銅六年（一三七三）諸國に勅して作らせられた風土記の一で、出雲國九郡の物産・地勢・名稱等の由來・傳說等を述べた書。一卷。天平五年成る。

いずもやき〔出雲燒〕（名）出雲國から産出する陶器。樂山（らくざん）燒と布志名（ふしな）燒との總稱。今から二百餘年前に松江に起った。

いずら〔何ら〕（代）どこ。いづれ。（古語）

イスラム〔アラビヤ語 Islam〕（名）①宗教の同敎で天國の義。②フィフィ教の同敎。③奉仕・服從。

イスランドごけ〔乙斯蘭苔〕（名）【植】地衣類の一。體は樹枝狀で褐色、枝の緣邊に突起多く、高山に産す。

いすり〔强請〕（名）（ゆすりの誤。

いする〔讒〕（名）（ゆすりの誤。

いする〔揺る〕（他動、ラ四）ゆする。

いする〔强請る〕（他動、ラ四）ゆする。

いする〔讒る〕（ゆする）の誤。

いずれ〔何れ・孰れ〕（代・副）①確かにそれと定まらぬ物事を指していふ語。どれ。どこ。どちらか。どっちか。**—も**〔何れも〕（代・副）①各位。②どちらも。あれもこれも。**—もさま**〔何れも樣〕（代）皆皆樣。

〔どのみち。②近ごに。遠からぬうちに。

いずれ〔何れ・孰れ〕（副）①なににしても。

いずろう〔出づらふ〕（自動、ハ四）（いするの誤）。（古語）

いずろこぶ〔出づらこぶ〕（自動、バ四）心勇むる。氣が進む。

いすわり〔居坐〕（名）①ゐすわること。②相場や人の地位がもとのまま變動せぬこと。

いすわる〔居坐る〕（自動、ラ四）①坐して動かぬ。②もとのままで動かぬ。相場や人の地位がもとのままで變動しない。

いせ（名）ぬひちぢめること。ぬひしめ。

いせ〔五十瀨〕（名）多くの瀨。（古語）

いせ〔伊勢〕（名）①國名。②伊勢大神宮の略。**—の御師**（おし）（句）伊勢大神宮の神職の身分低き者。**—の御田植**（句）伊勢大神宮の神田に苗を植ゑる五月廿八日の式。**—の神垣**（句）①伊勢神宮。②皇后御産の時、守護する人。③分娩の時、産婦のよりかかる蒲團。**—の御綠日**（句）伊勢大神宮の御綠日十二月十六日。**—の二柱**（句）內宮と外宮。**—の物語**（句）同逸たことを話すこと。（古語）

いせ〔伊勢〕（名）【人】歌人。伊勢守藤原繼蔭の女。宇多天皇に寵せられて行明親王を生み、伊勢の御と稱せられた。後、敦慶親王に嫁して中務（なかつかさ）を生む。三十六歌仙の一人。天慶二年（一五九九）歿。家集に「伊勢集」がある。

いせあみがさ〔伊勢編笠〕（名）伊勢國から産する編笠。

いせいせい〔異性〕（名）①性質の異なること。又、そのもの。②男性か女性、女性か男性をさしていふ語。③【化】同一の分子式を有し、しかも其の性質の異なること。**—たい**〔異性體〕（名）【化】同一の分子式を有しながら、異なった性質を有する物體。

いせいせい〔異姓〕（名）姓氏の異なること。他姓。

いせいせい〔以西〕（名）これより西方。

いせいせい〔遺精〕（名）睡眠中、不隨意に精液を漏らすこと。

いせいせい〔遺制〕（名）昔の制度の今日殘ってゐるもの。

いせいせい〔威勢〕（名）①人を恐れ服せしめる力。②たけだけしきほど。**—ごとき**〔威勢爭〕（名）威勢を爭ふこと。

いせいせいどうちょう〔異世同調〕（名）時の古今はあるが、或事柄には調子の同じものがあること。

いせえび〔伊勢蝦・伊勢海老・龍蝦〕（名）【動】蝦の一種。形大きく、大なるものは長さ三〇糎位に達する。全身紫色又は帶紫褐色の堅牢な甲殼を有し、大なる角具へ、眼は有柄複眼で突出し、二對の觸角と五對の脚がある。肉味佳良。かまくらえび。しまえび。

〔びえせい〕

いせおどり〔伊勢踊〕（名）伊勢音頭にあはせてなどる踊。いせおんど。

いせおんど〔伊勢音頭〕（名）①俗謠。伊勢國度會郡古市で歌ったもの。間山節から出たもの。古市の近傍川崎の地名から川崎音頭ともいふ。②（いせおどり）。〔「勢音頭」。

いせかわり〔伊勢替〕（名）いせおんど（伊勢音頭）。

いせき〔射席〕（名）射場に設けた射手の席。獸皮の敷物を用ひる。

いせき〔醫籍〕（名）醫術開業免許狀を得た者の本籍・氏名を登錄する內務省の帳簿。

いせき〔井堰〕（名）水を他に引く爲、川水を横にせきとめる堰。あらひぜき。

いせき〔偉績〕（名）すぐれた功績。

いせき〔偉蹟〕（名）偉大なことがらのあと。所蹟跡。古跡。

いせき〔遺跡〕（名）①建築物や事蹟のあった跡地。②死者の跡目。**—ちょう**〔遺跡帳〕（名）江戸時代に相續者を記入した町年寄備附の帳面。**—とう**〔遺跡島〕（名）【地】古代の大陸が陷沒し、其の爲に一部分が島となって現存するもの。

いせごい〔伊勢鯉〕（名）【動】ぼら（鯔）。

いせごう〔伊勢講〕（名）大神宮に參拜する爲に結んだ講。

いせこじき〔伊勢乞食〕（名）①伊勢參宮の人人に憐みをなふこじき。

いせこ〔伊勢國の人を罵っていふ語。

いせごよみ〔伊勢暦〕(名)伊勢神宮から奏して得た土御門家の暦の稿本によって、伊勢國から刊行する暦で、神職が大麻と共に全國に頒布するもの。

いせ-ごり〔伊勢行李〕(名)伊勢國から産する柳行李。

いせ-さき〔伊勢崎〕(名)㊀〔地〕群馬縣佐波郡にある町。機業地として有名。㊁伊勢崎織の略。—**おり**〔伊勢崎織〕(名)伊勢崎地方から産する絹織物。—**めいせん**〔伊勢崎銘仙〕(名)伊勢崎地方から出す銘仙。

いせ-さんぐう〔伊勢參宮〕(名)(いせまいり)。

いせ-じま〔伊勢縞〕(名)いせもめん(伊勢木綿)。

いせじま-ぶし〔伊勢島節〕(名)俗曲。承應の頃、伊勢島宮内の創めた淨瑠璃節。節賽節。

いせ-たいさん〔伊勢代參〕(名)正月七日、將軍年始參拜の代りに伊勢大神宮に遣はされた使。

いせ-たいじんぐう〔伊勢大神宮〕(名)【神】三重縣宇治山田市に鎮座せる大社。皇大神宮(内宮)と豐受(ゆけ)大神宮(外宮)とにわかれる。皇大神宮は、祭神天照大神御鏡代は八咫鏡。宇治にある。豐受大神宮は、祭神は豐受大神で、山田にある。伊勢大廟。伊勢神宮。宗廟。大廟。

いせ-だいだいこう……(こう)〔伊勢太太講〕(名)多人數で醵金し、參宮して、太太神樂をあげる費用をこしらへる組合。「大神宮。いせだいじんぐう。

いせ-たいひょう……(ひょう)〔伊勢大廟〕(名)【神】伊勢大神宮。

いせちゃ〔伊勢茶〕(名)伊勢國から産する茶。

いせ-つ〔異說〕(名)㊀普通とはちがった說。㊁珍しい說。

いせ-でいじょう……(じょう)〔伊勢貞丈〕(名)【人】有職家。名は平蔵。安齋と號す。江戸の人。武家故實の研究に一時期を劃した。天明四年(一七八四)歿。年七十。「貞丈雜記」「安齋隨筆」等著書が多い。

いせ-どうふ〔伊勢豆腐〕(名)山芋をすりおろし、鯛のすり身と豆腐・雞卵の白身とを加へ、湯煮にしてくずだまり又は味噌をかけた食品。

いせ-の-たゆう……(たゆう)〔伊勢大輔〕(名)【人】歌人。伊勢祭主大中臣輔親の女。上東門院に仕へ、後、高階成順に嫁した。三十六歌仙の一人。歌集に「伊勢大輔集」がある。「濱邊に生えてゐる荻。㊁葦。

いせ-ばま〔伊勢濱荻〕(名)㊀【植】

いせ-の-はまおぎ……(なぎ)〔伊勢濱荻〕(名)㊀【植】

いせ-は〔伊勢派〕(名)いせふう(伊勢風)。

いせ-ばち〔伊勢鉢〕(名)すりばち。

いせ-はなび(名)【植】蹄脂(きつこう)科の灌木樣多年生草本。莖の高さ約八〇糎。葉は長楕圓形穀頭。夏、淡紅紫色の唇形花を開く。我が國の暖地に自生す。

いせ-びくに〔伊勢比丘尼〕(名)伊勢に住んでゐた尼の姿をした遊女。

いせ-ふう〔伊勢風〕(名)〔文〕荒木田守武を始祖とし、芭蕉の門人岩田涼兎及び乙由が之を繼承し、江戸座・雪門・美濃派に對して、伊勢山田に興した俳風。

いせ-へいし〔伊勢平氏〕(名)桓武平氏中、平正度が伊勢守を拜してから其の一族の伊勢・伊賀地方にゐたもの。

いせ-ほうふう……(ほう)〔伊勢防風〕(名)【植】(はまばうふう)。

いせ-ま〔伊勢間〕(名)五尺八寸を一間とする伊勢國で行はれた尺度。

いせまいり……(まいり)〔伊勢參〕(名)伊勢大神宮に參拜すること。「伊勢國は、昔、五十町を一里としたから、道の遠いことにいふ。

いせ-ものがたり〔伊勢物語〕(名)【文】在原業平の事蹟を骨子として綴った歌物語。全篇一二六節から成る。作者未詳。

いせ-もめん〔伊勢木綿〕(名)伊勢國から産出する太い木綿織。

いせ-りゅう……(りゅう)〔伊勢流〕(名)禮式の一。故實家伊勢氏に傳はった室町幕府の禮法。

い-せる〔他動・サ下一〕㊀縫ひちぢめる。㊁波が烈しく立つ。

いせれい-へいし〔伊勢例幣使〕(名)昔、神嘗祭に、恒例として朝廷から伊勢大神宮に幣帛を奉らしめられる爲に派遣せられた使。

い-せん(ゑん)〔綽線〕(名)【地】地球上に於ける位置を明らかにする爲に、赤道に平行して地球の表面に描かれた假想の線。(經線の對)

いせ-ぶり〔伊勢行李〕(名)伊勢國から産する柳行李。

いせ-ぶり〔伊勢鯖織〕(名)伊勢鯖地方から産する絹織物。—**めいせん**〔伊勢鯖銘仙〕(名)伊勢鯖地方から出す銘仙。

いせ-ぶり〔伊勢鳥節〕(名)俗曲。承應の頃、伊勢島宮内の創めた淨瑠璃節。節賽節。

いせ-ぶん〔伊勢文〕(名)【文】荒木田守武を始祖とし、芭蕉の門人岩田涼兎及び乙由が之を繼承し、江戸座・雪門・美濃派に對して、伊勢山田に興した俳風。

いせ-へいし〔伊勢平氏〕(名)桓武平氏中、平正度が伊勢守を拜してから其の一族の伊勢・伊賀地方にゐたもの。

いせ-ほうふう……(ほう)〔伊勢防風〕(名)【植】(はまばうふう)。

いせ-ま〔伊勢間〕(名)五尺八寸を一間とする伊勢國で行はれた尺度。

いせまいり……(まいり)〔伊勢參〕(名)伊勢大神宮に參拜すること。「伊勢國は、昔、五十町を一里としたから、道の遠いことにいふ。

いせ-ものがたり〔伊勢物語〕(名)【文】在原業平の事蹟を骨子として綴った歌物語。全篇一二六節から成る。作者未詳。

いせ-もめん〔伊勢木綿〕(名)伊勢國から産出する太い木綿織。

いせ-りゅう……(りゅう)〔伊勢流〕(名)禮式の一。故實家伊勢氏に傳はった室町幕府の禮法。

い-せる〔他動・サ下一〕㊀縫ひちぢめる。㊁波が烈しく立つ。

いせれい-へいし〔伊勢例幣使〕(名)昔、神嘗祭に、恒例として朝廷から伊勢大神宮に幣帛を奉らしめられる爲に派遣せられた使。

い-せん(ゑん)〔綽線〕(名)【地】地球上に於ける位置を明らかにする爲に、赤道に平行して地球の表面に描かれた假想の線。(經線の對)

いせ-ぶり〔伊勢行李〕(名)伊勢國から産する柳行李。

いせ-ぶり〔伊勢鯖織〕(名)伊勢鯖地方から産する絹織物。—**めいせん**〔伊勢鯖銘仙〕(名)伊勢鯖地方から出す銘仙。

いせ-ぶり〔伊勢鳥節〕(名)俗曲。承應の頃、伊勢島宮内の創めた淨瑠璃節。節賽節。

いせ-ぶん〔伊勢文〕(名)【文】荒木田守武を始祖とし、芭蕉の門人岩田涼兎及び乙由が之を繼承し、江戸座・雪門・美濃派に對して、伊勢山田に興した俳風。

いせ-びくに〔伊勢比丘尼〕(名)伊勢に住んでゐた尼の姿をした遊女。

いせ-ふう〔伊勢風〕(名)〔文〕

又、その度合。

いそがし-たつ〔急がし立つ〕(他動、タ下二)せきたてる。「せる。せきたてる。

いそがす-すす〔急がす〕(他動、サ四)いそがせる。

いそがせる〔急がせる〕(他動、サ下一)「いそがす」の口語。

いそがわし〔忙し〕(形、二)いそがし。いそがしい。

いそぎ〔急ぎ〕(名)❶いそぐこと。せぐこと。❷用意。支度。(古語)**—あし**〔急足〕(名)はやあし。いそいであること。**—たつ**〔急ぎ立つ〕(他動、タ四)せき立てる。幾度もせきたてる。**—たてる**〔急ぎ立てる〕(他動、タ下一)「いそぎたつ」の口語。**—はぶ**〔急ぎ省く〕(他動、カ四)「いそぎたつ」の口語。**—はぶ**〔急ぎ省く〕(他動、カ四)❶事を早くする。早足であるく。せぐこと。❷準備する。支度する。

いそ-ぐ〔急ぐ〕(他動、ガ四)❶事を早くする。早足であるく。せぐこと。❷準備する。支度する。

いそ-ぐ〔急ぐ〕(他動、カ四)いそがせる。催促する。(古語)**急がば廻れ**(句)急ぐ時には、危険な近道よりも、安全な本道を廻れ。

いぞ-ぐ〔異俗〕(名)かはった風俗。

いぞ-ぐ〔異族〕(名)❶異なる種族。❷異なる血族。❸外国の国民。**—けっこん**〔異族結婚〕(名)異なる種族と結婚すること。**—はいごう**〔異族配合〕(名)(いしゅっこうはいゴ)異種交配)。〔俗〕

いぞ-ぐ〔夷俗〕(名)えびすの風俗。

いぞ-ぐ〔遺俗〕(名)今にのこってゐる昔の風俗。

いぞ-ぐ〔遺族〕(名)死者の後にのこった家族。**—ふじょりょう**〔遺族扶助料〕(名)【法】一定年限以上在職した公務員が在職中死亡又は受傷給付が死亡した時及び勞働者が業務災害に原因して死亡した際、遺族を扶養する爲に支給する金。

いそ-くさい〔磯臭い〕(形、二)「いそくさし」の口語。

いそ-くさし〔磯臭し〕(形、一)魚介・海藻の臭が高い。

いそくさぬり〔磯草塗〕(名)新潟市に産する塗物。海草を散らしたやうな模様を研ぎ出したもの。

いそ-くるい〔異足類〕(名)【動】腹足類中の櫛鰓目に屬する浮游性の軟體動物。體は透明、頭部は長く前方に伸び、内に七列の紐舌を收める大な口球がある。足の前部は餌足といひ、扁く魚類の背鰭の如く、後部は後方に伸び、鰭足と共に游泳の用をなす。足底は鰭足の一部に儲かに吸盤狀として殘る。背隆起し螺旋狀又は小囊狀となり、薄弱な殼を有し、又は全くなしたり、平常、背面を下にして游泳する。プテロトラケヤ・カナリャ・プトランタの類。

いそ-さんしょう〔磯山椒〕(名)【植】薔薇科の常綠灌木。暖國の海邊に産する。幹は直立せず、細枝地を這ひ、葉には羽狀複葉。夏、五瓣の白花を開き、花後、球果を結ぶ。「忠實に働く。(古語)

いそ-し〔勤し〕(形、二)よくつとめる。

いそ-じ……ぢ〔磯路〕(名)磯邊のみち。

いそ-じ……ぢ〔五十路〕(名)五十歳の年齢。

いそしば〔磯芝〕(名)【植】揚溪類褐藻布海苔科の海藻。太平洋沿岸の岩石に寄生し、一〇糎位の紐狀をなし、往往絡れて螺旋狀をなす。色は暗褐色。

いそし-む〔勤しむ〕(自動、マ四)❶つとめる。ほれなる。❷切があるとする。「くこと。

いそ-ずたい〔磯傳ひ〕(名)磯路にそってあること。

いそ-ずり〔磯釣〕(名)❶磯邊に釣すること。「り。❷磯魚を釣ること。

いそ-ちどり〔磯千鳥〕(名)【動】磯邊にゐるちどり。

いそ-つぐみ〔磯鶫〕(名)【動】鶇の一種。ひよどり」に似て大きく、青黑き羽色を有するもの。

イソップ〔Æsop〕〔Aisopos〕(名)〔人〕西暦紀元前六世紀のギリシヤの寓話作家。**—ものがたり**〔一物語〕(名)〔文〕賢人イソップの名でギリシヤに傳へられた動物を主とした寓話集。說話が短くわかり易く、譬喩は適切で簡明直截、各動物の習性が活躍してゐる。

いそ-なぎ〔磯菜〕(名)磯邊にあって食用となる草。

いそ-ぞなえ〔居備〕(名)大將のゐる所の備。本陣。本營。

いそ-なぎ〔磯風〕(名)磯邊の風のなぎたこと。

いそ-なぢ〔磯菜鳥〕(名)【動】ちどり(千鳥)の異稱。(古語)

いそ-なみ〔磯浪〕(名)磯にうちよせる浪。

いそ-ね〔磯根〕(名)いそ。いそべ。(古語)**—まつ**〔磯根松〕(名)磯邊の松。そねれ松。

いそ-ね〔磯寢〕(名)磯邊に宿って寢ること。

いそ-の-かみ〔石上〕(名)枕。❶地)奈良縣山邊郡丹波市町の古名。❷石上に布留(ふる)といふ處があるから、ふるいことの意となる。「ふる」(舊・降る・振る)の枕詞。

いそ-の-かみ-やかつぐ〔石上宅嗣〕(名)〔人〕學者。藏書家。書家。經史にくはしく、草隸をよくした。大納言に進む。孝謙・稱德・光仁・桓武の數朝に歷仕し、天應元年(一四四一)薨。年五十三。

いそ-の-き〔三苞〕(名)〔植〕風見科。

いそ-ぶ〔磯鶇・磯振〕(名)磯邊に打寄せる浪。(古語)

いそ-べ〔磯邊〕(名)磯のほとり。

いそ-ぼう〔磯鶇〕(名)【動】海産硬骨魚。全體茶褐色、側部中央に黃金色の薄い斑點を有し、體は長く側扁する。房相地方の近海に産する。

いそ-ぶり〔磯邊〕(名)磯のほとり。

いそ-ぶる〔自動、ハ四〕あそぶ。うかれてあそぶ。

いそほものがたり〔伊曾保物語〕(名)〔文〕假名草紙。三册。イソップ物語の飜譯であるが、譯者未詳。元和活字本、寛永十六年出版の活字本・萬治二年出版の繪入本などがある。その他、文祿一年にローマ字の譯本で開版された「伊曾保物語」がある。

いそ-ま〔磯回〕(名)磯のほとり。いそべ。そわ。(古語)「槌の卵を卷いたもの。

いそ-まき〔磯卷〕(名)〔植〕海草海苔で、薄

いそ-まきたまご〔磯卷卵〕(名)

いそ-まくら〔磯枕〕(名)海邊に宿って寢ること。石を枕とすること。いそね。(古語)

いそ-まつ〔磯松〕(名)❶磯邊に生えてゐる松。❷〔植〕磯松科の多年生草本。高さ一五糎位。海邊砂石の灌木。高さ二米位。葉は互生、長橢圓形で尖り、細鋸齒がある。夏、黃綠色の小花を開く。果實は球形、熟すれば紫黑色となる。

いそ-の-みや〔磯宮〕(名)〔神〕伊勢大神宮の內宮。「の古稱。

いそはく〔磯鶴〕(名)〔動〕カワウ(鵜)の古稱。(古語)

いそ-ばな〔磯花〕(名)【動】珊瑚類の腔腸動物。八節の隔壁と觸手とがあって、群體は樹枝狀をなし、春・黃の二種がある。くさまさん。

いそ-ひょどり〔磯鵯〕(名)【動】いそつくみ。

いそ-ぶぐ〔磯河豚〕(名)【動】しおさいふぐ。

いそ-ぶし〔磯節〕(名)茨城縣東茨城郡磯濱町から起った俗謠。

いそ-ぶな〔磯鮒〕(名)【動】海産硬骨魚。

いそ-ぶり〔磯振〕(名)磯邊に打寄せる浪。(古語)

いそ-ぼう〔磯鶇〕(名)【動】海産硬骨魚。全體茶褐色、側部中央に黃金色の薄い斑點を有し、體は長く側扁する。房相地方の近海に産する。

いそ-ぼ〔自動、ハ四〕あそぶ。うかれてあそぶ。

いそほものがたり〔伊曾保物語〕(名)〔文〕假名草紙。三册。イソップ物語の飜譯であるが、譯者未詳。元和活字本、寛永十六年出版の活字本・萬治二年出版の繪入本などがある。その他、文祿一年にローマ字の譯本で開版された「伊曾保物語」がある。

いそ-まき〔磯卷〕(名)〔植〕海草海苔で、薄

いそ-まきたまご〔磯卷卵〕(名)

いそ-まくら〔磯枕〕(名)海邊に宿って寢ること。石を枕とすること。いそね。(古語)

いそ-まつ〔磯松〕(名)❶磯邊に生えてゐる松。❷〔植〕磯松科の多年生草本。高さ一五糎位。海邊砂石の

〔つまそい〕

間に自生し、地下茎から線形・全緑の葉を叢生する。春夏の候、茎間から低い花茎を出し、その頂に頭花を単生する。花は白色又は紅色で、蕚は乾質、漏斗形、五裂で、外面は多毛、宿存性。

いそまつかぜ〔磯松風〕(名)メリケン粉に砂糖を混ぜ、ふくらし粉を加へて蒸し、適宜に切り、紫蘇の粉末をふりかけた菓子。

いそめ〔磯甲朝〕(名)【動】環蟲類の小動物。體長約三〇糎、全體黄赤色で、光澤を有し、數多の環節より成る。海岸の砂泥中に棲息す。釣餌とする。

いそめく〔ぐ〕(自動、カ四)いそがしいやうである。いそいそとする。(古語)

いそめばる〔ば〕(名)【動】もいおの(蕩魚)。

いそもく〔ク〕(名)【植】褐藻類の海藻の體は黑褐色、長さ一〇糎乃至六〇糎、葉片は長刀形、枝の軸は圓く、ほんだはらに似、軸の根部に倒卵形の氣胞を有する。

いそもじ〔急文字〕(名)いそがしいこと。(婦人語)

いそもと〔磯許〕(名)磯の波うちぎは。

いそもと〔磯本〕(名)磯の波うちぎは。(古語)

いそもなか〔磯最中〕(名)外皮を貝形に焼いて、中に羊羹又は餡を入れたもなか。

いそもの〔磯物〕(名)海草。海藻。

いそや〔磯屋〕(名)海岸にある家。いそやかた。

いそやき〔磯燒〕(名)メリケン粉に砂糖・醤油を加へて練った後、胡麻油をひいた鍋の上で焼いて餡を包んで四つに畳んだもの。

いそら〔磯ら〕(名)磯。(古語)

いそわ〔磯囘〕(名)磯のほとり。いそべ。(古語)

いそわし〔磯鷲〕(名)【動】海邊に棲む鷲で、形は普通のより小さい。

いそん〔異損〕(名)蟲害などの爲に例年より收穫の少いこと。(例損の對)

いそん〔遺存〕(名)あとにのこってあること。

いぞん〔異存〕(名)他人と異なる考・反對の意見。異議。

いそんず〔ずる〕〔射損ず〕(他動、サ變)射【はじ】そこなふ。射そこなふ。

いたく〔依託〕(名)❶たのむこと。たよること。❷委任すること。預けること。❸もたせかけること。❹委有ること。預けること。❺たのむこと。たよること。

いたく〔板〕(名)❶材木を薄く平たく挽きわけたもの。❷金屬又は石などを薄く平たくしたもの。❸板敷の略。❹板物の略。まないた(俎)の略。❺かまぼこ【蒲鉾】の異稱。

いたく〔甚〕(副)甚だしく。(古語)

いたく〔痛〕(感)痛む時發する聲。

いただ〔猪鹿〕(名・副)たなやか。しなやか。

いたい……ゐ〔板井〕(名)板で圍んだ井戸。

いたい〔衣帶〕(名)❶衣と帶と。❷裝束。束帶。

いたい〔異體〕(名)❶普通とはかはった風體。異風。❷常とはかはった姿ちがったありさま。❸證が同一でないこと。—**どうしん**〔異體同心〕(名)體は同一でないが、心の同一なこと。極めて親しきにいふ。「い(異)體」でないが、心の同一なこと。

いたい……ゐ〔遺體〕(名)死骸。なきがら。ゐがい。

いたい……ゐ〔位袋〕(名)大寶令の制度で、朝官の服に著けた袋。色は服色と同じく、紐は位階によって其の色と結び方を異にした。

いたい〔甚い〕(形)「いたし」の日語。

いたい〔痛い〕(形)「いたし」の日語。

いだい……ゐ〔偉大〕(名)すぐれて大きいことりっぱなこと。

いたいけ〔ケ〕(名)❶子供などのいたいたしくあはれむべきさま。❷小さくて愛すべきさま。—**さ**〔さ〕(名)いたいけなさま。又、その度合。—**す**〔すれば〕(自動、サ變)いたいけな樣子をする。

いたいし〔板石〕(名)薄くひらたい石材。「麻」。

いたいたいぐさ〔痛痛草〕(名)【植】いちくさ(尋草)。

いたいたし〔傷傷しい〕(形、一)大層かはいさうだ。ひどくいたましい。—**い**〔しく〕〔傷傷しい〕(形)「いたいたし」の日語。—**げ**〔傷傷しげ〕(名)いたいたしいこと。又、その度合。

いたえん〔板縁〕(名)【建】板を張った縁。

いたおい〔板笠〕(名)笠の一種。修驗者の用だ。薄板に旅行の道具などをゆはひつけるやうにしたもの。

いたおうぎ……ゐ〔板扇〕(名)薄い板を重ねて絲で綴った扇。暑さを防ぎ、又、婦人が顔を隠す爲に用ひた。檜扇の類。

いたか(名)供養の爲に、木の卒塔婆に字を書いて河に流し又は經文を讀んで餞をふを食坊主。

いたがい〔板飼〕(名)馬を板敷の厩の中に放飼にすること。又、その馬。

いたがえし〔返〕(名)屋根板を葺きかへること。

いたがき〔板蝕〕(名)いたじくり(板決)。

いたがき〔板垣〕(名)板で造った垣。いたべい。りがけ。

いたがきたいすけ〔板垣退助〕(名)【人】政治家。伯爵。維新の功臣。高知縣の人。自由民權論を主張し、自由黨を創設し、のち內務大臣に任ぜられた。大正八年(一九一九)歸。年八十三。

いたがけ〔板掛〕(名)いたすり(板摺)。

いたがこい……ゐ〔板圍〕(名)碁・將棋などの外がこひにする板塀。假に造った板塀。

いたがしら〔板頭〕(名)宿場女郎の頭。

いたがすす〔板糟〕(名)板の形をした酒の糟。

いたがね〔板金鈑〕(名)❶薄くのばした金屬の板。❷大判金。小判金。

いたかぶ〔板株〕(名)江戸時代の版權の稱。

いたがみ〔板壁〕(名)板張の壁。「ボール紙の類。

いたがみ〔板紙〕(名)板のやうに厚くかたい紙。

いたガラス〔板硝子〕(名)板のやうに、表面の平らなガラス。鏡用のガラス・窓ガラスの類。

いたからど〔板唐戸〕(名)板を二枚並べて、上下に横木をはめた戸。

いたがる〔る〕(自動、ラ四)痛がる。「と思ふ。

いただきこむ〔ぐ〕〔抱き籠む〕(他動、マ下二)かかへこむ。だきこむ。仲間に入れる。

いだきしめ〔ぐ〕〔抱き締め〕(他動、マ下二)かたくだく。だきしめる。

いだきつく〔ぐ〕〔抱き著く〕(自動、カ四)ひしと抱きつく。すがる。かじりつく。

いたきれ〔板切〕(名)板の断片。

いたくせい〔依託學生〕(名)學費を支給して、或學校に教養を依託する學生。—**しゃげき**〔依託射擊〕(句)【軍】照準を正確にする爲に、銃を樹木や墻壁等にもたせかけて行ふ射撃。—**でんぽう**〔依託電報〕(名)電報の配達を受けた時、その配達夫に託して、返電を差出し得る電報。

いたくぁ……〔委託〕(名)ゆだねまかすこと。あづけたのむこと。

いたくぁ……〔遺澤〕(名)❶後まで殘る恩澤。❷殘託販賣〕(名)【經】商品を他人に頼んで、販賣して其ふこと。「てゐるつや。

いたく〔甚く〕(副)甚だしく。大層。(古語)

いたく〔甚く〕(副)抱く懷く〕(他動、カ四)❶腕の中にかかへこむ。だく。❷中にかこむ。❸心中に戴する。「ことを承諾すること。承諾の返事。挨拶。

いたくぁ……〔唯諾〕(名)他人からいひかけられた事を承諾すること。

いたくぶつ……〔委託物〕(名)委託した品物。

いたしょう……〔委託物費消〕(名)委託を受けた物を委託者の承諾を得ずして費消すること。

いたぐら〔板倉〕(名)板で圍った倉。

いたくらしげむね〔板倉重宗〕(名)【人】勝重の長子。初の名重統。周防守と稱する。德川秀忠に仕へて、京都所司代となり、裁決の明斷を稱せられた。明暦二年(一六五六)歸。年七十。

いたぐるま〔板車〕(名)三方に板を張り、一方に簾をかけた牛車。貴賤ともに乘用したが、後、武士・下賤の乘用となった。

いたげ〔痛げ〕(名)いたいさま。「いたい。(古語)

いたけし〔ケ〕〔痛けし〕(形、一)いたし。

いたこ〔潮來〕(名)【地】茨城縣行方郡の南端、霞ヶ浦に臨むいはゆる水郷の町で、前に出島と名づける十六島があり、潮來節の俗謠で名高い。—**ぶし**〔潮來節〕(名)俗曲の一。江戸時代に潮來から始めたもので、七・七・五の四句より成り、後に、よしこの節・都都逸(ごと)となった。

いたご[板子](名)和船の下にあるあげいた。**—一枚下は地獄**(句)船乗稼業の危險なこと。

いたこう[抱かか](他動、ハ下二)だきかかへる。(古語)

いたごし[板輿](名)屋形の三面を板で張り、前に簾をかけた輕便な輿。

いたごと[痛事](名)いたいわざ。苦痛。甚だしく困った事。打擊。

いたゴム[板護謨](名)板狀に製したゴム。

いたこんごう……[板金剛](名)裏に板をつけた革履。いたつけざうり。

いたし[甚し](形、ク)㊀甚だしい。ひどい。きつい。㊁すぐれてよい。(古語)

いたし[痛し](形、ク)㊀身體に痛みを感ずる。㊁いたはしい。いたましい。なやましい。㊂いたはしい。不憫である。(古語)**—痒し**(句)掻けば痛いし、掻かねばかゆいの義で、どうしようかと迷ふにいふ。**痛くも痒くもない**(句)少しも利害を感ぜぬにいふ。**痛くもない腹を探られる**(句)自分のしたことではないのに疑をかけられる。

いたし[鑄出](名)鑄型に入れて作り出すこと。

いたしあこめ[出袒](名)いたしざぬ(出衣)。(古語)

いたしいだす……[致出す](他動、サ四)「しいだす」の謙稱。

いたしうた[出歌](名)五節の舞の時の歌。(古語)

いたしうちぎ[出袿](名)いたしざぬ(出衣)。

いたしかた[致方](名)しやう。しかた。

いたしき[板敷](名)板を敷いた處。

いたしぎぬ[出衣](名)㊀中古、直衣・狩衣などの裾の下から見えるやうにしたこと。又、その下着。(古語)㊁中古、牛車の簾の下から乘った人の袖・裾・裳及び袴などを出したこと。又、その衣服。(古語)

いたしぐるま[出車](名)㊀昔、儀式の時、飾る爲に立て並べた牛車。(古語)㊁女房などの車の簾の下から袖口などを出して乘る車。(古語)

いたしずま……[出褄](名)いたしざぬ㊀。(古語)

いたしとみ……[板蔀](名)格子をつけず、板のみでつくった蔀。家の中の見え透かないやうにする障壁。「たていとみ」ともいふ。

いたしぬく[出し抜く](他動、カ四)人に油斷させて先を越す。だしぬく。

いたしふずくえ[出文机](名)(つけしょいん〈附書院〉。

いたしまなぶ[致し學ぶ](他動、バ四)まれる。

いたじめ[板締](名)㊀板で締めつけること。㊁染物の名。絲やきれを板でしめて、横絲を白く染める。(古語)

いたじゃくり[板決](名)【建】板の端を受けさせる爲に、鋸などの緣を切りかくこと。

いたしよう……[致樣](名)致す方法。いたし方。

いたす[致す](他動、サ四)㊀到らせる。とどくやうにする。おくる。及ぶやうにする。はこぶ。㊁來させる。招く。㊂さし出す。まかす。㊃する。行ふ。㊄まかせる。ゆだねる。㊅極む審にする。**心を—**(句)心を盡す。誠意を以て事に當る。

いたず[出す](他動、サ四)㊀內から外へやる。こちらからあちらにやる。だす。㊁あらはす。㊂なす。行ふ。「病氣。所勞。

いたずき[勞](名)㊀骨折。勤勞。㊁功勞。㊂心を勞する。骨折する。(古語)㊃疲れる。病む。

いたずく[勞く](他動、カ四)いたはる。あはれむ。慰める。

いたずすり[板硯](名)紙挾の板の上に、料紙及び硯を載せ、紐で結んだもの。床棚の飾とする。

いたずら[徒](名)㊀無益にわるい戲。惡戲。わるさ。㊁無益のこと。無用のこと。むだ。役に立たぬこと。㊂ひまなこと。用事のないこと。㊃みだら。淫奔。私通。密通。**—いね**[徒稻](名)實らぬ稻。(古語)**—いね**[徒寢](名)ひとりね。あだね。あだぶし。(古語)**—うた**[徒歌](名)管絃なしにひとりで歌ふ歌。(古語)**—こ**[徒兒](名)惡戲する子供。**—こぞう**[徒小僧](名)いたづらをして他人を困らす少年。**—ごと**[徒言](名)無益なことば。むだぐち。**—じに**[徒死](名)死んで役に立たぬしぬこと。いぬじに。むだじに。**—に**[徒に](副)無益に。むだに。**—ね**[徒寢](名)ただひとり寢ること。いたづらいね。あだぶしで(古語)**—はな**[徒花](名)あだばな。實らぬ花。むだばな。**—ひと**[徒人](名)㊀役に立たぬ人。㊁放蕩もの。おちぶれもの。(古語)**—ぶし**[徒臥](名)(いたずらね)。あだぶし。(古語)**—ぼうこう**[徒奉公](名)浮氣な奉公。堅氣でない動。**—ぼうず**……[徒坊主](名)㊀役に立たぬ坊主。㊁淫奔な坊主。**—むすめ**[徒娘](名)淫奔な娘。**—もの**[徒者](名)㊀役に立たぬもの。㊁惡戲をするもの。㊂淫奔なもの。㊃【動】鼠の異稱。

いたずり[板摺](名)【建】建築で、足固めなどの上面をしゃくって、板の端を受けさせる部分。

いただき[頂](名)㊀あたま。頭上。㊁山の頂上。山嶺。㊂物の一番上の處。極點。

いただきふくろ[戴袋](名)中古、外出の時、鏡物を入れて頭に載いた袋。

いただきもち[戴餅](名)しんこを固く平たくして四つ、中に小豆の餡を載せたもので、四月八日の灌佛會に用ひる。

いただきもちい……[戴餅](名)中古、小兒の五歲になるまでの間、毎年正月三箇日は、その頭上に餅を載かせ、前途を祝ふ言葉を述べて、頭を撫でた儀式。(古語)

いただく[戴く](他動、カ四)㊀頭に載せる。㊁高くさしあげる。㊂主君として戴び仕へる。㊃受ける。㊄頂戴する。

いただたみ[畳ふ](名)㊀敬語。頂戴する。㊁畳を敷き詰めた處。板敷。

いたつ[板疊](名)㊀板を芯にした疊。㊁板を敷き詰めた處。板敷。

いたち[鼬・鼬鼠・鼬](名)【動】食肉類の獸。口吻から尾端まで、約五〇糎。體、細長く、體色は赤褐色。體臭甚し、尾は長く太い。窮すれば惡臭を放つ。夜間出でて鼠・雞などを捕って其の血を吸ふ。**—うお**[鼬魚・油身魚](名)【動】軟鰭類の魚。體長く、頭大きく、尾部に至るに從って狹長、體色は赤褐色で細鱗を有する。體長約五〇糎。**—ごっこ**[鼬事](名)二人互に手の甲をつねりあひ、交互にどりかへす子供の遊戲。㊀一つ事をくりかへして涉取らないこと。**—ささげ**[鼬大角豆・注芒・決明](名)【植】豆科の多年生草。高さ六〇糎位。小葉は卷鬚となって支柱に倦きついて莖を支へ、葉は羽狀複葉で二枚の托葉を有する。夏日、葉腋に黃色の花を總狀花序に配列し、花後、細長い莢を結ぶ。ゑんどうさう。**—の最後屁**(句)鼬が窮した時、肛門の附近の腺から惡臭を放つこと。窮して醜態をあらはすのないので、威張ることの譬。**—の無き間の貂誇り**(句)恐れるものがないので、威張ることの譬。**—の目隠**(ぎ)(句)手を眼の上にかざして遠方を見ること。**—の問**(句)憚る人の無い間をいふ。**—の道切**(句)全く交際の絕えること。

いたちがい……[板蓮](名)板を張る場合に、隣

接した板の木理や種類を交互に異ならしめること。

いたちぼり〔立賈堀〕(名)【地】大阪市西區新町の遊郭の北方の川を立賈堀といひ、その川岸の通りを立賈堀といふ。

いたつ〔射立つ〕(他動、タ下二)矢を継げて射る。

いたつる……〔遺脱〕(名)ぬけること。おちること。

いたつかわし〔形シク〕(形、一)㊀いたく骨折る。心を苦しめる。㊁わづらはしい。(古語)

いたつき〔板附〕(名)俳優が舞臺に出ること。その舞臺。又、その俳優。

いたつけ〔板附〕(名)㊀長さ五分の釘。㊁いたつけぞうり。—**ぞうり**……〔板附草履〕(名)裏に厚い板をつけた草履。

いたって〔至って〕(副)至りて。甚だ。極めて。最も。

いたで〔痛手〕(名)重い手きず。ふかで。おもで。

いたてに〔副〕速に。早く。いっさんに。(古語)

いたてる……〔射立てる〕(他動、タ下一)「いたつ」の古語。

いだてん……〔韋駄天〕(名)【佛】佛法守護の神。増長天八將軍の一。捷疾鬼が佛舎利を奪って逃げ去った時、之を追って取戻したといふ俗傳から、よく走る神として知られてゐる。其の像は、甲冑を著し、兩腕に寶杵を持つ。—**ばしり**〔韋駄天走〕(名)速かに走ること。

いたど〔板戸〕(名)板張の戸。

いたどこ〔板床〕(名)㊀板張の床の間。㊁板壁の一部。

いたどり〔虎杖〕(名)【植】蓼科の多年生草本。雌雄異株。春、宿根から芽を出す。嫩芽は「うど」に似、紅色微紅の斑點がある。生のは酸い。莖は中空で節があり、高さ二米位。葉は長卵圓形。夏、淡紅色又仮白色の花を穗狀に開く。すかんぽ。

いたのま〔板間〕(名)疊を敷かないで、板を敷いた所。—**かせぎ**〔板間稼〕(名)湯屋で、人の所有品を盗み取ること。又、その人。

いたのもの〔板物〕(名)板を芯にして、疊んだ織物。いた。いたもの。

いたば〔板場〕(名)料理屋では俎を置く處、菓子屋ではのし板を置く處。又、料理人・菓子製造の職人。

いたばさみ〔板挟〕(名)㊀板と板との間にはさまること。㊁甲乙兩人の間にはさまってどちらの方に味方しようかと迷ふこと。

いたばし〔板橋〕(名)㊀板の橋。㊁【地】東京市北部の一區。省線赤羽線電車が通過する。昔の中仙道の第一驛にあたり、現に陸軍火藥製造所がある。

いたはじかみ〔羽目〕(名)【植】(さんしょう)。

いたはめ〔板羽目〕(名)土塀で壁などにはった板。したみ。

いたばり〔板張〕(名)㊀板を張りつけた處。㊁厚紙の名。

いたび〔板碑〕(名)石塔婆の一種。鎌倉・室町時代に、死者の追善の爲に、表面に佛像等を刻し、その下に建設の趣旨・年齢・氏名等を刻した、平板石造のもの。

〔碑板〕

いたび〔木蓮子〕(名)【植】桑科の落性常綠灌木。木・石に攀緣す。葉は全緣で革質、長楕圓狀披針形で先尖、夏、雌雄同株に單性花を開き、果實は球形で徑一糎許、熟しても綠色。いたびかづら。—**かずら**……〔木蓮子葛〕(名)【植】いたび。

いたびき〔板挽〕(名)材木を板に挽きわること。又、それを職業とする人。

いたひき〔板引〕(名)糊づけにした絹を漆塗の板に張ってよく乾かして、ひきはなして光澤を出すこと。又、そのもの。

いたびさし〔板庇〕(名)板葺のひさし。—**いんきょ**〔板庇院〕(名)別邸。別郎。

いたびょうし……〔板表紙〕(名)板でつくった表紙。法帖・手本などに用ひる。

いたぶ〔傷ぶ〕(自動、バ四)いたましく思ふ。深く悲しむ。いたむ。(古語)

いたぶ〔はげしがる〕(自動、バ上二)甚だしくなる。はげしくなる。(古語)

いたぶき〔板葺〕(名)板で屋根を葺くこと。又、その屋根。—**やね**〔板葺屋根〕(名)板で葺いた屋根。

いたぶとん〔板蒲團〕(名)綿のかたくなった蒲團。

いたぶね〔板船〕(名)深田などで、早苗や刈稻など載せる淺い板で造った船。

いたぶる〔られ・れ・る〕〔揺る〕(自動、ラ四)ひどくゆれる。ゆ(ゆ)する。

いたぶる〔られ・れ・る〕〔揺る〕(他動、ラ四)脅迫してせめる。ゆ(ゆ)する。

いたぶろ〔板風呂〕(名)板で圍った風呂。

いたぶんこ〔板文庫〕(名)板二枚の間に書物を挾み、板の左右の側に通した紐で束ねおく具。

いたべい〔板塀〕(名)板で造った塀。いたがき。

いたぼがき〔板帆牡蠣〕(名)【動】牡蠣の一種。殼の形扁平にして稍圓く、外面淡青色、内面白色、多く砂泥中に埋没する。肉は美味。

いたぼとけ〔板佛〕(名)銅版面に佛の姿を打出したもの。

いたま〔板間〕(名)㊀板屋根の板と板とのすきま。㊁いたのま。

いたまえ……〔板前〕(名)㊀いたば(板場)。㊁料理の板。

いたまさ〔板柾〕(名)もくめの通った板。柾目(まさめ)の板。

いたましい〔痛ましい・傷ましい〕(形、一)雖儀である。(古語)「いたましい」の口語。—**げ**〔痛ましげ〕(名)いたましいさま。—**さ**〔痛ましさ〕(名)いたましいこと。又、その程度。—**ます**〔傷ます〕(他動、サ四)いたどの苦しみ。㊁なやみ。—**る**〔傷る〕(名)いたむこと。㊁病又は傷などの苦しみ。—**い・る**〔痛み入る〕(自動、ラ四)心に深く傷み思ふ。感れ入る。恐縮す

いたむ〔痛む・傷む〕(他動、マ四)悲しみなげく。㊁悔むは殘念に思って心をいためる。㊂惜むは悲しんで心をいためる。㊃悼むは哀れむ。㊄悼むは死んだ人を悲しむ。㊅哀む・憐むは悲しんで心をいためる。

いたむ〔傷む・悼む〕(他動、マ下二)心を痛める。㊁悔むは殘念に思って心をいためる。㊂悼むは哀れむ。㊄悼むは死んだ人を悲しむ。㊅哀む・憐むは悲しんで心をいためる。

いたむ〔悼む〕(他動、マ四)悲しむ。㊁悔むは殘念に思って心をいためる。㊂悼むは哀れむ。㊄悼むは死んだ人を悲しむ。㊅哀む・憐むは悲しんで心をいためる。

いたむ〔傷む・悼む〕(他動、マ下二)㊀苦しめる。悩ます。㊁悲しませる。㊂こはす。㊃腐らせる。㊄痛むは身に痛きを感じる。㊅哀むは永續してうづく。

いたむ〔痛む〕(他動、マ下二)㊀苦しめる。悩ます。㊁悲しませる。㊂こはす。㊃腐らせる。㊄痛むは身に痛きを感じる。㊅哀むは永續してうづく。

いたむ〔傷む・悼む〕(他動、マ下二)㊀苦しめる。悩ます。㊁悲しませる。㊂こはす。㊃腐らせる。㊄痛むは身に痛きを感じる。㊅哀むは永續してうづく。

いたむ〔痛む〕(自動、マ下二)㊀苦しむ。うづく。㊁もだえる。うれへる。㊂こはれる。㊃腐る。

いたむ〔傷む・悼む〕(自動、マ下二)㊀苦しめる。悩ます。㊁悲しませる。㊂こはす。㊃腐らせる。㊄痛むは身に痛きを感じる。㊅哀むは永續してうづく。

いたむ〔悼む〕(自動、マ四)悲しむ。㊁悔むは殘念に思って心をいためる。㊂悼むは哀れむ。㊄悼むは死んだ人を悲しむ。㊅哀む・憐むは悲しんで心をいためる。

いたむ〔傷む・悼む〕(自動、マ下二)㊀苦しむ。うづく。㊁もだえる。うれへる。㊂こはれる。㊃腐る。

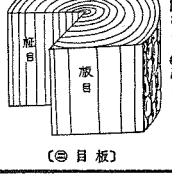
いたむ〔はびこる〕(自動、マ下二)㊀蔓延する。㊁痛むは身に痛きを感じる。㊅哀むは永續してうづく。

いたむ〔はびこる〕(他動、マ下二)㊀蔓延する。㊁痛むは身に痛きを感じる。㊅哀むは永續してうづく。

いたむ〔はびこる〕(他動、マ下二)㊀食品を油で煎って柔かくする。㊁油でこれて固くする。

いたむ〔はびこる〕(他動、マ下二)㊀膠水に漬けた革を鐵槌でうち固める。㊁れる。

いため〔板目〕(名)㊀板と板とのあはせめ。㊁板のもくめの並列せぬもので、材木を接線の方向に挽いた時の木理。(柾目の對)



〔㊁目板〕

—**がみ**〔板目紙〕(名)厚くはりあはせた紙。表紙などに使ふ。—**はだ**〔板目肌〕(名)刀の地金の銀へ方。銀へた目の

る。—**しょ**〔痛所〕(名)痛む所。痛い場所。—**わけ**〔痛分〕(名)相撲で取組中、一方が負傷した爲に「分け」となること。

いたみ〔悼〕(名)他人の死亡を悲しむこと。

いたみ〔伊丹〕(名)㊀【地】兵庫縣川邊郡の町。大阪より約一六粁。清酒の産地。㊁伊丹酒の略。—**ざけ**〔伊丹酒〕(名)兵庫縣伊丹から産出する酒。—**ふう**〔伊丹風〕(名)俳諧の一派。西山宗因の門人松井宗旦が、攝津國川邊郡伊丹に住んで談林風を稱へたのに起こり、其の門人上島鬼貫鬼貫に至って、幽玄・自然の風となった。

いたむ〔はびこる〕(自動、マ四)㊀苦しむ。憂慮する。㊁腐る。

いたむ〔はびこる〕(自動、マ下二)㊀蔓延する。㊁痛むは身に痛きを感じる。㊅哀むは永續してうづく。

いたむ〔はびこる〕(自動、マ下二)㊀食品を油で煎って柔かくする。㊁油でこれて固くする。

いたむ〔はびこる〕(自動、マ下二)㊀膠水に漬けた革を鐵槌でうち固める。㊁れる。

木理のやうに見えるもの。**—ぼり**[板目彫](名)板目の板に彫刻すること。

いためがわ[いがは]……[撓革](名)いためし(撓)た革。鎧の札(ねだ)や鞦などにつかふ。〔古語〕

いためじおぶ……[板目鹽](名)やきしほ(燒鹽)。

いためつく[いけけくくる]……[痛め附く](他動カ下二)まのあたりさげすび、責める。責めつける。

いためつける[いけけるけるる]……[痛め附ける](他動カ下一)「いためつく」の口語。

いためる[めめるめるる]……[痛める](他動マ下一)「いたむ」の口語。

いためる[めめるめるる]……[楪める](他動マ下一)「いたむ」の口語。

いためる[めめるめるる]……[撓める](他動マ下一)「いたむ」の口語。

いたも[甚も](副)いと。甚だ。最も。(古語)

いたもち[板持](名)棚板の端を支へもたす桟(さん)。

いたもと[板元](名)(いたまえ)板前。

いたもの[板物](名)板を芯に入れて、叠んだ織物。(卷物の對)

いたや[板屋](名)板で葺いた屋根。**—がい**[板屋貝・花蛤・牛邊蛤](名)(動)帆立貝科の海産二枚貝。扇を擴げた形で、外面は紅褐色、內面は白色。二枚の中、一枚は平たく一枚は膨れて十三條の隆起がある。肉は食用とし、介殼は杓子に用ひる。

いたやかた[板屋形](名)車の屋根を板で造つた「もの。

いたやき[板燒](名)雁・鴨など鳥の肉を平たく切り、味醂・醬油・煮出汁に漬け、杉板に載せて燒いた料理。**—どうふ**[板燒豆腐](名)豆腐を平たく切って味噌をつけ、薄い板に載せて燒いた料理。

いたやぐし[矯矢串](名)身に當った時に、重傷をおはせず、痛みを感じさせる矢。(古語)

いたやすり[板鑢](名)鰹造した活字の鋸の歪れを削りおとす鑢。

いたやね[板屋根](名)板で葺いた屋根。

いたらがい[伊多良貝](名)(動)鮑類の貝。形は帆立貝・板屋貝に似て、殼の外面は紅色、內面は桃色又は白色で、肉は食用とし、介殼は貝細工の料とする。(二)紋所の名。

いたり[至](名)(一)いたること。物事のきはまり。極度。極上等。(二)氣のきいてゐること。思慮あって行屆いてゐること。(古語)

こし[くくしし]……[至賢し](形ク一)思慮に富んで賢い。(古語)**—しもやしき**[至下屋敷](名)贅澤な別莊。**—じゃや**[至茶屋](名)贅澤極等の茶屋。**—せんさく**[至穿鑿](名)贅澤極まる物好み。**—ぞめ**[至染](名)いきな染方。**—だいじん**[至大盡](名)萬事に行屆いた富豪の客。**—ばなし**[至話](名)氣のきいた風なして自慢する話。**—ふう**[至風](名)行屆いた風。物馴れた風。**—まっしゃ**[至末社](名)ぬけめのない大鼓持。**—ものがたり**[至物語](名)いたりばなし。**—よう**[至樣](名)物知顔。きいたふう。**—りょうり**[至料理](名)上等な料理。**—盡くせり**(句)よく行屆いてゐる。

イタリー[Italy]伊太利(名)(地)ヨーロッパの南部、地中海に突出した長靴形の半島國。シシリー・サルディニヤの二大島とチレニヤ海に散在する多數の島を併せて、面積三一萬方粁。首府はローマ。

イタリック[Italic](名)歐文活字の一で、少しく右方に傾斜せるもの。注意語句又は他國語を示すに用ひる。

いたりて[至りて](副)いたって。きはめて。甚だ。最も。

いたる[りりる]……[至る・到る](自動ラ四)(一)及ぶ。とどく。達する。きはめる。(二)到著する。(三)ゆきとどく。物馴れる。この上ない。(四)來る。(五)行き渡る。ぬかりがない。(六)「至る」「到る」は行きつく。(七)「遊る」はだんだん深くなる。(八)「詣る」は進み達する。(九)「堀る」は「ゆきあたる。**—ところ**[到所](名・副)行く先先。隨處。どこもかしこも。

いたわしい[しくしくしい]……[勞し](形シク一)(一)いたましい。不憫である。(二)なやましい。(三)大切に思ふ。(四)いそし。ほれなるさまである。**—い**[しくしい][勞しい](形シク)(いたわしの口語。**—げ**[勞しげ](名)いたはしいこと。又、その程度。**—さ**[勞しさ](名)いたはしいさま。

いたわり[板割](名)(一)板を割ること。又、それを職業とする人。(二)厚さ一寸の杉板。

いたわり[はりり]……[勞り](名)(一)あはれみ。思ひやり。れぎらひ。(二)ほれなり。病。わづらひ。(三)心を用ひて大事にすること。(古語)

いたわる[はりる]……[勞る](自動ラ四)(一)病む。わづらふ。(二)いそしむ。つとめる。(古語)

いたわる[はりる]……[勞る](他動ラ四)(一)あはれむ。れぎらふ。慰める。(二)大切にする。れんごろに扱ふ。(古語)

いたん[異端](名)(一)自分の信ずる以外の道。(二)よこしまな道。「こと。

いたん[夷坦](名)(一)平かなこと。(二)やすらかなこと。

いたん[一・壹](名)(一)畏憚(名)おそれはばかること。

いたん[一・壹](名)(一)最初。(二)三味線の絲の最も上にあって太いもの。(三)「盤の元結」より後方の部分。**—か八**(注)(句)のるか、そるか、運に任せて冒險をなすこと。**—工面二働**(句)世に處するには、工夫が第一で、その次が才を働かせて活動することである。**—富士二應三茄子**(句)夢に見るものの中で、よいものを順に並べた語。**—の裏は六**(句)賽の目の一の裏は六であるので、惡い後には善いことがあるの意。「ろく」は物事の正しく完全なこと。

いち[一・壹](數)數の始め。ひとつ。**—も二も無く**(句)とやかくいふまでもなく。いやおうなしに。**—を以て萬を察す**(句)一部を見て全體を察し得るにいふ。

いち[一・壹](接頭)(一)或語に冠して確定しない或事・或物を指す意。「日」。(二)或語に冠して「すべて」「全體」の意を示す語。「一座」。(三)或語に冠して、全く同じ意をあらはす語。「一樣」。

いち[市](名)(一)多くの人が集まって、賣買すること。又、その場所。(二)まち。市街。**—に歸する**(句)市に人の集まるやうに、仁人に人の歸附するにいふ。**—に虎あり**(句)(戰國策の鄒忌にある句)無根の風說もいふ人多ければ、終に信ずるに至ることの譬。**—を爲す**(句)人が多く集まる。

いち[一・位置](名)場所。ねどころ(居所)。**—のエネルギー**(名)(理)(Potential energy)物體が或位置に置かれた爲に有するエネルギー。例へば高處にある石が、その落下するや、人畜を破碎し、時計の「ぜんまい」を卷けば、時計が運轉を起す類。

いち[一・位](名)くらゐ。地位。

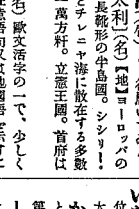
いち[一・逸](接頭)或語に冠して、「すぐれた」ことの意をあらはす語。「—はやく。

いちあくのすな[一握の砂](名)(文)石川啄木の歌集。明治四十三年の出版。作者の失意の中に動いて行く生活苦の心理の經過を直寫してゐる。

いちあし[逸足](名)すばやく走ること。速かに歩行すること。いそぎあし。

いちい[一・意](名・副)心を專らにすること。熱心。

いちい……[一・位樂杉・水松樹](名)(植)一位科の常綠喬木。幹は直立して一五米位に達する。樹皮は黑褐色、葉は線狀で尖り、互生する。上面濃綠色、下面淡綠色。三四月頃、葉腋に花を開く。雌雄異株。材は緻密で暗紅色を呈し、器具・鉛筆用とする。昔、飛騨國位山に產するものは彫の材料としたので名高い。あちらぎ。おんこ。


〔貝殼〕

〔位一〕

いちい[いちい][石櫧](名)(植)殼斗(かくと)科の常綠喬木。高さ三〇米に近く、葉はほぼ倒卵形で互生する。

花及び果實は「かしこ」に似てゐる。材は船の櫓・槍柄・鞦・鍬の柄などに用ひる。いちひがし。

いちいいる【一位】(名) ㊀官位。㊁第一の位階。

いちいいる【一葦】(名) こぶれ。小さい舟。**—の水**(句)狭い水。「帶の幅のやうな狭い川や海。

いちいたいすい……【一衣帶水】(名)一條の皇がいらっしゃる時に、一番上の上皇をいふ。いちのゐん。㊁一つの寺院。又は院と稱せられる所。**—せい**【一院制】(名)【法】諸會が國長の選擧にかかる代議士を以て組織する一院だけからなる制度。(二院制の對)

いちいん……【一員】(名) ㊀近衛府の將監・將曹・府生及び諸衛府の尉・志・府生等。㊁團體中の一人。

いちいんとうてい……【一韻到底】(名)支那の古詩用韻の法で、初から終まで同一の韻を用ひること。

いちう【一宇】(名)(「宇」は「家」の義)一つの家。

いちうち【一打】(名)箇條書に、毎條の始めに「一」の字を記すこと。ひとつがき。

いちえい・いちらく【一榮一落】(名)草木が春には一度花咲き、秋には一度落葉することから、人のたび榮え、たび衰へることをいふ。

いちえん【一烟】(名)一軒。一世帶。

いちえん【一圓】(名) ㊀みんな。殘らず。全體。㊁我が國貨幣の單位。一錢の百倍。

いちえん【一圓】(副) ㊀少しも。さらさら。一向。㊁ことごとく。みな。

いちおう【一應】(副)ひととほり(一通)。

いちおん・いちぎせつ【一音一義說】(名)五十音圖の各音は何れも一定の意義を有するとの說。橘守部などの主張。

いちがいに【一概に・一概に】(副) ㊀ひっくるめて。おしなべて。㊁一度に。同時に。

いちかねにおとこ……【一金二男】(句)遊興に切なるのは第一に金、第二に男ぶりなること。

いちかわがみ……【市川紙】(名)山梨縣西八代郡市川大門村から産出する縞入日本紙。

いちかわさだんじ……【市川左團次】(名)【人】俳優。四世左團次。本名は高橋榮三。荒事をよくし、九代目市川團十郎・五代目尾上菊五郎と共に明治の三名優と稱せられた。屋號高島屋。明治三十七年(二五六四)歿。年六十三。

いちかわだんじゅうろう……【市川團十郎】(名)【人】江戸の俳優。㊀(初代)荒事師の開山。幼名は猿越海老藏。屋號成田屋。寶永元年(二三六四)狂言中、生島半六に殺された。年四十五。㊁(二代)初代の子。名は九藏。屋號成田屋。後、海老藏と改め、寶暦八年(二四一八)歿。年七十一。㊂(七代)始め市川新之助と稱する。安政六年(二五一九)歿。年六十九。㊃(八代)七代目の子。幼名新之助。嘉永七年(二五一四)自殺。年三十二。㊄(九代)七代目の子で、八代目の弟。本名、堀越秀。技倆絶妙。明治三十六年(二五六二)歿。年六十六。

いちかわべいあん……【市河米菴】(名)【人】江戸の書家。名は三亥、小字は藤八、小山林堂・金羽山人・樂齋・百筆齋等の號がある。米芾(べいふつ)に學んで一家をなす。安政四年(二五一七)歿。年八十。

いちがん【一眼】(名)一つの眼。めっかち。

いちぎ【一義】(名) ㊀一つの道理。一理。㊁一通りの意義。

いちぎ【一儀】(名) ㊀一つの事柄。一件。㊁一言。

いちぎ【一議】(名) ㊀一度の評議。㊁一言。

いちぎゅうめいち……【一牛鳴地】(名)牛の鳴聲が聞える程の近い距離。いちごみやうち(一牛鳴地)。

いちぎょう……【一行】(名) ㊀ひとくだり。㊁ひとならび。㊂ひとむき。㊃推擧狀。すがつき。**—せつ**【一行一義說】(名)五十音圖の各行には、それぞれ一定の意義ありとする說。平田篤胤等の主張。**—さんまい**【一行三昧】(名)【佛】專心一佛を念ずること。**—しゅいん**【一行朱印】(名)朱印のある推擧狀。

いちきり【一限】(名)【經】一月限。一月渡。

いちぐ【一具】(名)一揃。一組。**—さしかけ**【一具指懸】(名)射藝の具。左右の手につけるゆがけ。いちぐさしかけ。**—ゆがけ**【一具韉】(名)射藝の具。左右の手につけるゆがけ。いちぐさしかけ。

いちぐら【市座・肆】(名)市の店。

いちぐらすみ【一庫炭】(名)いけだすみ(池田炭)。

いちぐん【一群】(名)ひとむれ。

いちぐん【一軍】(名) ㊀一つの軍隊。㊁全軍。總軍。

いちげ【一華】(名)【佛】輪の花。

いちげ【一夏】(名)【佛】陰曆四月十五日から七月十五日までの九十日間、僧侶が行脚をしないで、坐禪修行を勵むこと。**—そう**……【一夏草】(名)【植】毛莨(けがのり)科の多年生草本。高さ約二〇糎。根葉は二回三出複葉をなし、總苞は三箇で、各深く分裂し、淡紅紫暈を帶びる一花を開く。いちりんさう。

いちげつ【一月】(名) ㊀一箇月。㊁一年の初めの月。正月。㊂(佛)停止する舟。南行の船・北行の船が、各、月を見れば止まるが如く、南行するが如く、北行するが如くに見える。轉の月。

いちご【一期】(名) ㊀一生。一生涯。㊁生まれてこの方。これまでの生涯。**—けいせい**【一期傾城】(名)一生を遊郭で暮す遊女。**—まつだい**【一期末代】(名)この世に生きてゐる限り。永遠。**—やまい**……【一期病】(名)なほらぬ病氣。死病。**—の男**(句)一生離れまいと思ふ男。**—の始**(句)生まれて始めて。

いちごう……【一毫】(名) ㊀一本の毛筋。㊁少しも。

いちごうしかん……【一業所感】(名)【佛】多くの人が、同一の業で同一の果を感すること。

いちごうます……【一合枡】(名)我國在來の計量等の主張。**—さんぜん**【一言居士】(名)何事にも一言はぬと氣のすまぬ人。

いちげんこじ……【一元的】(名)總べての事物の變化の本元を唯一のものと見ること。

いちげんてき……【一元的】(名)總べての事物の變化の本元を唯一のものと見ること。

いちげんにじほうていしき……【一元二次方程式】(名)【數】一つの未知數を含み、何れの項にも、未知數に三乘以上の冪(べき)を含まぬ方程式。

いちげんびょうしゃ……【一元描寫】(名)【文】小說中の事件や人物の心理を一人の主人公を通じて見たものとして書く描寫法。

いちげんろん【一元論】(名)【哲】(Monism)宇宙萬有の本體を唯一のものとする說。スピノーザ(Spinoza)はその祖で、後、唯物論と唯心論とにわかれた。

いちこ【市子】(名)神・生靈・死靈の意中を通べることを業とする女。くちよせ。巫女。あづさみこ。梓巫。

いちこ【市兒】(名)町家の子供。

いちご【苺・莓・覆盆子】(名)【植】薔薇科の灌木又は草本。オランダいちごときいちごとに分る。

—かん【苺羹】(名)オランダいちごの汁を搾で、こしらへた羊羹。**—しゅ**【苺酒】(名)オランダいちごの汁に燒酎・砂糖をまぜて製した酒。

もどき【苺擬】(名)大根おろしに蜜柑の實を入れ、醋をまぜてあへたもの。

いちご【一期】(名) ㊀一生。一生涯。㊁生まれてこの方。これまでの生涯。**—けいせい**【一期傾城】(名)一生を遊郭で暮す遊女。**—まつだい**【一期末代】(名)この世に生きてゐる限り。永遠。**—やまい**……【一期病】(名)なほらぬ病氣。死病。**—の男**(句)一生離れまいと思ふ男。**—の始**(句)生まれて始めて。

いちごう……【一毫】(名) ㊀一本の毛筋。㊁少しも。

いちごうしかん……【一業所感】(名)【佛】多くの人が、同一の業で同一の果を感すること。

いちごうます……【一合枡】(名)我國在來の計

量器で、一合即ち約〇・一八〇四リットルを容れる桝。

いちごーせつ〔一語説〕(名)(Single word theory) 吾等の思ふ所を完全に言ひあらはす語は唯一語のみといふフローベルの主張。

いちごとち〔壹越〕(名)【音】いち・ごちちょう)。**—ちょう**……〔壹越調〕(名)【音】古樂の調子。宮の聲で、今の「二」調。いちごってう(一越調)。

いちごっちょう……〔壹越調〕(名)【音】いちごちちょう)。

いちごみょうちょう……〔一牛鳴地〕(名)(いちうめいちょう)。

いちごん〔一言〕(名)ひとこと。いちげん。少しの言。**—いっく**〔一言一句〕(名)いちごんはんく。**—はんく**〔一言半句〕(名)僅かの言葉。

—ほうおん……〔一言芳恩〕(名)一言を賜はつた恩に感じて主と頼むこと。又、その人。**—も無し**(句)●だまってゐて一言も發しない。●言譯のできないこと。恐れ入ること。

いちざ〔一座〕(名)●第一の上席。上座。●同じ座に坐ること。同座。同席。●一つの座位。●座席全體の人。滿座。●一回。一席。●興行をする能役者・俳優・藝人等の一團體。**—あそび**〔一座遊〕(名)多くの遊客が、各自の相方と共に一座になって遊ぶこと。**—ながれ**〔一座流〕(名)一座になって後は關係しないこと。一度同座したばかりの仲。

いちじ〔一時〕(名・副)●以前の或時。まへかた。或時。●しばらく。さんじ。●同時に。一度に。●當分の間。**—かりいれきん**〔一時借入金〕(名)●短期間の借金。●【經】公債證書を發行しないで、政府が日本銀行から短期の借入をする金。**—きん**〔一時金〕(名)いちじきん。**—しきん**〔一時賜金〕(名)軍人・官吏などに給與せられる一度限りの金。**—に**〔一時に〕(副)いちどきに同じ時に。**—ばたらき**〔一時働〕(名)常にはなまけてゐて、或る時期に急に働くこと。**—ばらい**〔一時拂〕(名)いちどきに支拂ふ又は償還すること。**—ぶげん**〔一時分限〕(名)(にわかぶげん)。**—ふじょきん**〔一時扶助金〕(名)【法】遺族に、一度限りに給與せられる扶助料。

いちじ〔一事〕(名)●一つの事件。●一つの物。**—ふさいり**〔一事不再理〕(名)【法】已に確定判決を經た事件は再び審理しないといふ訴訟法上の原則。**—が萬事**(句)一事を見れば他の凡ての事がわかる。

いちじ〔一字〕(名)一つの文字。**—いっせきとう**……〔一字一石塔〕(名)【佛】法華經の文字を一字づつ小石に書いて地中に埋め、其の上に建てた石碑。**—がき**〔一字書〕(名)●墨つきなしないで一筆に書きすること。●一枚の紙に一字づつ書くこと。**—ごめん**〔一字御免〕(名)(いちじごめんりょう)。**—さんらい**〔一字三禮〕(名)【佛】經文を書く時に、一字毎に三度禮拜すること。**—せんきん**〔一字千金〕(名)(桑の呂不韋が呂氏春秋を作った時に書中の一字を增減したものに千金を與へようといった話から出た)●立派な文字や文章。●厚い恩惠の譬。**—だい**〔一字題〕(名)和歌又は俳句の題の漢字一字のもの。**—はいりょう**……〔一字拜領〕(名)主君などから諱の一字を賜はって、自分の諱につけること。**—ふせつ**〔一字不說〕(名)【佛】佛の心機は文字では說明できないこと。**—の師**(句)詩文の文字を教へられた師匠。

いちじき〔一食〕(名)●一度の食事。●佛家で、一日に唯一回の食事をすること。**—きょう**……〔一食頃〕(名)【佛】一度、食事をする程の僅かの時間。

いちじく〔無花果〕(名)【植】いちじゅく。

いちじちにち〔一七日〕(名)人の死後七日目の日。ひとなぬか。初七日。

いちじつ〔一日〕(名)いちにち。**—さんしゅう**……〔一日三秋〕(名)(詩經國風に「一日不見如三秋」とあるに基づく)三秋は九箇月の意。一日逢はれば九箇月も逢はぬやうに思ふこと。いちじつせんしう。**—せんしゅう**……〔一日千秋〕(名)一日逢はなくても、千年も逢はぬやうに感ぜられる意で、慕ひ思ふ情の切なること。**—てい**〔一日程〕(名)一日で行かれる路程。**—の計は晨にあり**(句)(月令廣義の句)一日の計畫は其の日の早朝にきめておくがよい。**—の長**(句)(論語先進篇の句)年齡や知識の他人より長ずること。

いちじつ〔一實〕(名)【佛】眞實の教。大乘。平等の相。眞如。一乘の實教。**—えんとん**……〔一實圓頓〕(名)【佛】天台宗の教で、眞實の教たる法華經の教義によって、圓滿頓悟の功德を具へること。**—しんとう**……〔一實神道〕(名)【神】天台宗で、山王七社を三佛と四菩薩とにあてて、神道と佛教とを混じて呼んだ稱。山王一實神道ともいふ。

いちじーほうていしき……〔一次方程式〕(名)【數】代數で、式中の未知數が一乘冪ばかりの方程式。

いちじゅ〔一樹〕(名)一本のたちき。**—の蔭一河の流も他生の緣**(句)【佛】いっしょに同じ樹の蔭に宿り、同じ河の流の水を汲むのも、前世からの因緣によるものだとの意。

いちじゅう……〔一汁一菜〕(名)食膳に一品の汁と一品の菜とをつけること。

いちじゅく〔無花果〕(名)【植】桑科の落葉小喬木。葉は三裂した掌狀で、莖・葉を切れば乳狀の汁を出す。春夏の交、花軸の成長屈大した花嚢を葉腋に出し、內面に無數の花をつける。果實は倒卵形をなして食用となり、葉は藥用に供せられる。いちじく。

いちじゅん〔一旬〕(名)【佛】成佛する唯一の教。十日の日かず。旬日。

いちじゅう〔一乘〕(名)【佛】人人の身分や性質の如何を問はず、平等に同一最高の佛果に到達し得る法門。**—ぐせん**〔一乘弘宣〕(名)【佛】釋迦が鷲峯山で法華經を說いたこと。**—きょう**……〔一乘經〕(名)【佛】(ほけきょう)(法華經)。**—ほう**〔一乘法〕(名)【佛】法華經の一切成佛の教。

いちじょう〔一場〕(名)●その場かぎり。●わづかの間。●一度。**—の春夢**(句)榮華の極めてはかない事の譬。

いちじょう……〔一定〕(名)●しかときまったこと。●一つに定まること。

いちじょう……〔一條〕(名)●一筋。●當條者のひとくだり。●一項。

いちじょうかねよし……〔一條兼良〕(名)【人】室町時代の學者。關白經嗣の子。攝政・關白となり、一條禪閤と稱す。博學多聞、汎く文・古典に通じ、和歌に長じ、佛教にもくはしかった。文明十三年に「四一」寇。年八十。公事根源」「花鳥餘情」「樵談治要」「新玉集」等の著がある。俗に、かねら)と訓する。

いちじょうてんのう……〔一條天皇〕(名)第六十六代の天皇。御名は懐仁。圓融天皇の皇子。在位二十五年。我が中古文藝の興隆期に當り、紫式部・清少納言等の名流が輩出した。(一六八〇)

いちじるし〔著るし〕(形、一)明らかに知れ渡る。かくれない。著明である。(古語)

いちじるし〔著るし〕(形、一)前條に同じ。**—!**〔著るし〕(形、一)「いちじるし」の日語。

いちじろし〔著るし〕(形、一)いちじるし。

いちじん〔一人〕(名)●書經呂刑に「一人元良、万以貞萬とある」)天子の尊稱。●禮記に「凡自稱、天子曰予一人」と、又、白虎通に「王者自稱二一人一者謙也」とある)天子の謙稱。

いちじん〔一陣〕(名)●先陣。先發。●一つの軍隊。總ての軍隊。●風などの一しきり吹くこと。

いちじんぶつ〔一人物〕(名)一見識ある人物。

いちず……〔一途〕(名)ひとすぢ。ひたすら。一つのことを思ひこむこと。

いちぜんめし〔一先〕(名)一番さき。

いちぜんめし〔一膳飯〕(名)飯を椀に盛って價をきめて賣るもの。**—や**〔一膳飯屋〕(名)一膳飯を賣る店。

いちそうば……〔市相場〕(名)【經】市場で立て同族。**—だいみょう**……〔一族大名〕(名)一族すべてが大名となったもの。

いちぞめ〔市初〕(名)【經】市を開場するはじめ。

いちそん〔一存〕(名)自分だけの考。

いちだ〔一朶〕(名)ひとえだ。(一枝)。

いちだい〔一駄〕(名)馬一匹に負はせる荷物。

いちだい〔一代〕(名)❶一人の國主の戶主が家をついでゐる間。❷一生。**—かぞく**〔一代華族〕(名)華族の爵位を一代限りとすること。一八五六年、サーセームスパークが之を唱へたのが始で、我が國では、伯爵板垣退助がこれを唱へた。**—きょう**〔一代記〕(名)人一代の事蹟を記錄したもの。**—ごけ**〔一代後家〕(名)一生を寡婦で暮す女。

いちだいさんぜんせかい〔一大三千世界〕(名)【佛】一佛の教化の及ぶ範圍。大千世界。三千世界。全世界。

いちだいじ〔一大事〕(名)一つの大切な事件。**—いんねん**〔一大事因緣〕(名)【佛】衆生濟度の爲、佛が因緣を結んで此の世に出現し給ふこと。

いちだいせいとうせい……〔一大政黨制〕(名)【政】一政黨の對立のない統一的政治組織による支配制度で、イタリーのファシステム、獨制・ロシヤの共產黨獨裁の如きが共の例である。一黨獨裁制。

いちだくせんきん〔一諾千金〕(名)(漢書季布傳)男子が一たび承諾すれば、必ず之を實行するかち、その貴いことは千金の値があるといふこと。

いちだん〔一團〕(名)一つのかたまり。一つの仲間。團體。

いちだん〔一段〕(名・副)❶ひとしきり。❷ひとは。いっそう。**—かつよう**……〔一段活用〕(名)【文法】動詞の語尾變化の一段だけのもの。上一段活用と下一段活用とがある。**—と**〔一段と〕(副)ひときはいっそう。**—らく**〔一段落〕(名)ひとときりの。**—と**。❶極めて短い時間。❷指す一度はじくこと。

いちだんし〔一彈指〕(名)

いちだんな〔一旦那〕(名)❶最も多く財物を喜捨する檀家。第一の旦那。❷第一の得意先。

いちど〔一度〕(名・副)【佛】一念の中に三千の法界を具へること。**—は思案**〔一度は不思案〕(句)初め一度は思案するが、二度目からは無分別になること。

いちどう〔一同〕(名)❶同じこと。❷全體。

いちどき〔一同〕(副)みなみな。いづれも。

いちどき〔一時〕(名)いちど。一度。

いちどく〔一讀〕(名)一度讀むこと。ひとときほどの間。

いちどくかい……〔一讀會〕(名)【政】(たいいちどくかい)〔提案の第一讀會〕。

いちなん〔一男〕(名)❶一人の男の子。❷長男。

いちに〔一二〕(名)❶ひとつふたつ。わづか。❷第一番と第二番。❸つまびらかに。**—くじゅう**……〔一二九十〕(名)陰陽家が、人の脈とその死ぬ時期との關係を考へていふこと。「知死期、上旬一二九十子午卯酉、三四五丑未辰戌、六七八寅申巳亥」(留用大念)。**—を爭ふ**(句)少くとも一番目より下らぬこと。最もすぐれたこと。

いちにち〔一日〕(名)❶朝から夜までの間。終日。又、一晝夜。❷或日。❸月の第一日の日。**—いちや**〔一日一夜〕(名)一晝夜。**—さい**〔一日祭〕(名)一月一日の朝、宮中の賢所・皇靈殿・神殿で行はれる年始の祭典。**—じ**〔一日路〕(名)一日であるき得る道のり。**—はくさみ**〔一日挾〕(名)一日おき。隔日。**—へんじ**〔一日片時〕(名)しばらくの間。**—まし**〔一日增〕(名・副)日に日に。日ましに。逐日。

いちにょ〔一如〕(名)❶【佛】相異ならぬこと。二ならぬこと。不二。❷眞如の理の平等無差別で一なること。

いちにん〔一任〕(名)❶全部をまかすこと。❷或【官職に任ぜられてある間。

いちにん〔一人〕(名)❶ひとりの人。❷いちにんの人。**—いちやく**〔一人一役〕(名)一人に一役づつを與へること。**—いっとう**……〔一人一騎〕(名)【政】團體の一員が必ずしも團體の主義・主張に盲從しないで、各自の意見を主張し得ること。**—いっぴょう**……〔一人一票〕(名)【政】選擧人は、各自一票づつを投票する權利を有することを語の稱。文法上、自稱の代名詞の稱。**—とうせん**〔一當千〕(名)一人の力がよく千人にも當ること。**—まえ**〔一人前〕(名)❶人一人の責任額。❷人一人として與へるべき分量。❸人の責任額。❹人一人の資格。**—虛を傳ふれば萬人實を傳ふ**(句)(朝野群載の句)一人がうそをいひふらせば、これを聞いた多くの人は、之を眞實の事として言ひ撰げるものである。**—慶あれば兆民之に賴る**(句)(書經呂刑の句)天子が有德で慶事がつづけば民は之に賴する。

いちにんしょうきょく〔一人稱戲曲〕(名)【文】唯一人の俳優が、舞臺に出て「ぜりふ」で筋を運んで行く戲曲。

いちねい〔一寧〕(名)【人】宋の禪僧。一山と號する。我が國に來朝し、建長寺・圓覺寺の住持となり、又、後宇多天皇に歸ぜられて南禪寺の住職となった。文保元年(一九七七)歿。年七十一。

いちねん〔一年〕(名)❶十二箇月の間。❷世紀又は年號の最初の年。❸或年。**—ぎり**〔一年切〕(名)期限を一年とすること。**—こん**〔一年根〕(名)【植】一年限り枯れる根。一年生植物の根。幹部候補生の舊稱。**—じゅう**〔一年中〕(名)【軍】一年の始めから終りまでの間。年中。

いちねん〔一念〕(名)❶心に深く思ひこむこと。❷極めて短い時間。❸【佛】(又)事心に念佛をなすこと。◎一回の稱名。(多念の對)。**—おうじょう**……〔一念往生〕(名)【佛】❶一度阿彌陀佛を念すれば、極樂に往生するといふこと。❷一念によって往生の業は成就するから、その後の念佛は無用だといふ。**—けしょう**……〔一念化生〕(名)【佛】一念の力によって鬼とも佛ともなること。**—ごひゃくしょう**……〔一念五百生〕(名)【佛】僅かに一念の妄想を浮かべたものも、五百生の長い生死に互って其の報を受けること。**—さんぜん**〔一念三千〕(名)【佛】一念の中に三千の法界を具へること。**—しょうみょう**……〔一念稱名〕(名)【佛】一心に阿彌陀佛を信じ、南無阿彌陀佛と稱へること。**—しょうみょう**……〔一念唱名〕(名)【佛】前條に同じ。**—ふしょう**〔一念不生〕(名)【佛】念想を超越した境界で、華嚴の奧義。

いちねんせい〔一年生〕(名)【植】一年物に種子から成長し、花を開き實を結んで枯れる植物。

いちねんせいしょくぶつ〔一年生植物〕(名)【植】いちねんせいしょくぶつ(一年生植物)。

いちねんせいそうほん……〔一年生草本〕(名)【植】一年物。

いちのいと〔一絲〕(名)三味線の絲の中、最も太くして最も上にあるもの。いち。

いちのう〔一能〕(名)一つの才能又は技藝。

いちのかみ〔一上〕(名)左大臣の異稱。太政官の政務を統轄する故にいふ。いちのおとど。

いちのかみ〔市正〕(名)市司(いちつかさ)の長官。

いちのきさき〔一后〕(名)皇后の御異稱。

いちのご〔十五〕(名)長さ一寸五分の縫針。

いちのじつなき〔一字紫〕(名)❶【建】同形の材木を一文字のさまに積重ねること。❷前條の積み方の模樣。消防夫の衣類などに用ひる。

いちのたい〔一對〕(名)一大臣(名)左大臣の異稱。

いちのだいじん〔一大臣〕(名)左大臣の異稱。

いちのたに〔一谷〕(名)【地】兵庫縣武庫郡須磨の西。今、神戶市に入る。鐵拐・鐵伏の兩山が明石海岸に迫る長さ約三粁半の地域で、東西に千鳥川・堺川を控へ、その北に鵯越がある。元暦元年(一八四四)源義經が平家の軍を攻めた處。**—ふたばぐんき**〔一谷嫩軍記〕(名)【文】淨瑠璃の作。一谷の戰に、熊谷直實が平敦盛を討つて遁世し、又、岡部六彌太が平忠度を討つたことを脚色したもの。寶暦元年、大阪竹田座初演。

いちのつかさ〔市司〕(名)中古、京都の市政を司つた役所。東西兩京司に分れてゐた。

いちのて〔一手〕(名)❶始めになすべき手だて。

㊀第一番の計。おくのて。

いちのとりい……ゐ［一鳥居］(名)神社の一番外にある鳥居。

いちのひと［一人］(名)摂政・関白の異稱。

いちのみこ［一皇子］(名)第一番目の皇子。

いちのみや［一宮］(名)㊀第一の皇子。いちのみこ。㊁(鎌)我が國の各國中の由緒ある神社で、其の國の第一位のもの。

いちのみやし［一宮市］(名)【地】愛知縣の西北部にある機業都市。毛織物の産で名高い。

いちば［市場］(名)【經】毎日若しくは定期に商人が集まって、賣買を行ふ所。

いちはつ［鳶尾・一八・紫羅蓼］(名)【植】菖蒲(あやめ)科の多年生草本。支那の原産。葉は劍狀で高さ三〇糎ばかり。ひあふぎ(射干)に似てゐる。花は、かきつばたに似て、紫色、稀に白色。花蓋の外列の片上には、細襞した突起がある。

〔つはちい〕

いちはなかける(句)一番最初に驅ける。

いちはなたて(副)著るしく。きはだって。

いちはやし……し［逸速し］(形・ク)すぐれて早い。すばやい。勢がはげしい。(古語)

いちはやぶる……る［逸速ぶ］(自動・バ上二)すばやくなる。はげしくなる。(古語)

いちはらのおおきみ……み［市原王］(名)【人】奈良朝の歌人。天智天皇の御孫安貴王の子。正五位下・攝津大夫、造東大寺長官となった。生没年未詳。

いちばん［一番］(名)㊀一組。ひとつがひ。㊁一たび。㊂最初。第一。㊃同種のものの中で最もすぐれたもの。㊄歌舞・碁・將棋などの一曲。**—うし**［一番牛］(名)極めて大きい牛。**—おとこ**［一番男］(名)すぐれて大きな男。**—がけ**［一番駈］(名)㊀戰場で第一番に敵陣に駈入って喊ぶこと。㊁人に先んじて事をなすこと。**—きり**［一番切］(名)一回限り。**—くび**［一番首］(名)戰場で、第一番に敵の首を得ること。**—ご**［一番子］(名)最初に生まれた子。**—せんじ**［一番煎］(名)茶又は藥の第一番に煎じ出したもの。**—ぞなえ**……え［一番備］(名)第一番に備へた軍隊。**—だいこ**［一番太鼓］(名)芝居で、顔見世狂言の初日の八つ時(午前二時)に最初に打つ太鼓。**—ちゃ**［一番茶］(名)最初に摘みとった茶。**—て**［一番手］(名)第一番に敵陣に當る人人。**—てし**［一番手子］(名)門弟中、第一位にあるもの。一の弟子。高弟。**—にようぼう**……ぼう［一番女房］(名)最も働ある女奉公人。一流の女中。**—のり**［一番乘］(名)第一番に敵陣の敵城に馬を乘り入れること。**—め**［一番目］(名)㊀第一番。㊁芝居で、一興行中の最初の狂言。**—やり**［一番槍］(名)第一番に敵陣に駈入って槍を入れること。

いちばん［一番］(副)㊀こころみに。まづ。一度。㊁最も。甚だしく。この上もなく。

いちび［商麻］(名)【植】錦葵(ぶよひ)科の一年生草本。高さ二米位。葉は心臟形で先尖、絲邊に鋸齒がある。夏、黄色五瓣の花を開く。莖皮の纖維は、綱又は絲・粗布に製する。きりあさ。**—がら**［商麻稈］(名)「いちび」の莖のから。燒いて炭とし、ほくちを製する。**—はばき**［商麻脛巾］(名)「いちびの皮で編んだ「はばき」で、昔、隨身・舞人などが用ひた。

〔びちい〕

いちびと［市人］(名)㊀市民。㊁商人。

いちひめのかみ［市姫神］(名)【神】市店を守る神。市忙鳥蛇。

いちぶ［一部］(名)㊀一組。㊁全部。全體。㊂或組。㊃書籍一揃。㊄全部中の或部分。**—しじゅう**［一部始終］(名)㊀書物の始から終まで。㊁事の始から終まで。**—しゅけんこく**［一部主權國］(名)【法】Half sovereign state 內治上に於ては完全な主權を有するが、外交上の權利は、他國から制限・停止せられる國家。半獨立國。**—じゅんびほう**……ほう［一部準備法］(名)【經】兌換券發行制度の一種で、保證準備發行の最高額を法定し置き、其の額以上は一切正價準備なさしむるもの。**—はんけつ**［一部判決］(名)【法】訴訟の目的の數多ある場合にその一部に就いてなす終局判決。

いちぶ［一分］(名)㊀一尺の百分の一。㊁一分金又は一分銀。㊂一を十又は百に分ったもの。㊃こわけ。一部分。㊄國司の最下官の史生(ししょう)の異稱。**—きん**［一分金］(名)江戸時代の金貨幣で、一兩の四分の一。**—ぎん**［一分銀］(名)江戸時代の銀貨幣で、一兩の四分の一。**—じまん**［一分自慢］(名)ひとりじまん。**—だい**［一分代］(名)史生の代りに內舍人(ないとね)・助・主鷹の中一人を任すること。**—だめし**［一分試］(名)すたすたにためし斬にすること。**—ばん**［一分判］(名)ないちぶきん(一分金)。**—めし**［一分召］(名)昔、式部省で、諸國の史生を任命した除目。

いちぶつ［一佛］(名)【佛】㊀一體の佛。㊁阿彌陀如來。**—じょう**［一佛乘］(名)【佛】(いちじょうほう)(一乘法)。**—じょうど**……じょう［一佛淨土］(名)【佛】㊀一つの佛の極樂世界。㊁阿彌陀の淨土。**—じょうどう**……じょう［一佛成道］(名)【佛】衆生のいちやうに成佛すること。**—せかい**［一佛世界］(名)【佛】一つの佛が利益(りやく)を施す世界。一佛國土。一佛土。

いちぶぶん［一部分］(名)㊀全體の或部分。㊁僅かのぶわけ。

いちぶん［一分］(名)㊀十に分ったものの一。こわけ。㊁一身の面目又は職責。人の分際。㊂一身に負ふた義理。**—だて**［一分立］(名)一分を立つこと。

いちべつ［一瞥］(名)ちらと見ること。一目見ること。

いちべつ［一別］(名)ひとたびわかれること。**—いらい**［一別以來］(名)一たびわかれてからこのかた。

いちぼう［一棒］(名)【佛】一度棒をふって警醒すること。

いちぼう［一眸］(名・副)㊀一目に見渡すこと。㊁一見。

〔つづき繪の對〕

いちまい……い［一枚繪］(名)一枚摺の錦繪。

いちまいかんばん［一枚看板］(名)㊀狂言の外題・俳優などのすぐれた一人の名や、盡像を大きく一枚に書いた飾看板。㊁一座の俳優の座頭。㊂一團體の首領。㊃所有る唯一枚の衣服。

いちまいきしょう……しょう［一枚起請］(名)一枚だけの起請文。(多くの起請文を書くに對す)

いちまいずり［一枚摺・一枚刷］(名)㊀紙一枚に印刷すること。又、そのもの。㊁一枚繪。㊂辻番附。**—りゃくれき**［一枚摺略曆］(名)本曆を簡單にして一枚にすったこよみ。

いちまいだな［一枚棚］(名)㊀船の一種。兩側の板が一枚から成る扁平な漁船。㊁船の一種。田の中で稻などを運搬するに用ひるもの。たぶね。

いちまいまぜ［一枚雜］(名)鐵・革とを一枚おきに綴った鎧のこざれ(小札)。

いちまつ［一抹］(名)一なすり。

いちまつ［市松］(名)(いちまつもよう)の略。

—こもん［市松小紋］(名)市松模樣の小紋。

—ぞめ［市松染］(名)市松模樣を染め出したもの。

—にんぎょう……ぎょう［市松人形］(名)張子に藥品を塗ってこしらへた人形で、京都の產が上等。もと「市松」といふ孝子の姿をかたどったもの。

—もよう……よう［市松模樣］(名)黑と白とを打違へに菱盤縞を畝べた模樣で、德川吉宗の時代に、俳優佐野川市松が、この模樣の袴を用ひたのに起る。いしだたみ。いちまつ。

いちみ［一味］(名)㊀一つの味。一品。㊁(佛)佛說は機に應じて多樣であるが、その本旨は同一なること。㊂味方。同志。**—どうしん**［一味同心］(句)心を一つにして味方すること。又、その人。**—の雨**(句)(佛)雨が一樣に草木を潤すやうに、佛說が普く濕ひわたること。

いちみゃく〔一脈〕(名) 一すぢ。ひとつづき。

いちみょう〔一明〕(名)【佛】一章の陀羅尼。

いちみょう〔一名〕(名) 本名以外の名。いちめい。又の名。別名。異名。

いちむらざ〔市村座〕(名) 江戸の歌舞伎劇場。寛永十一年、堺の人村山又三郎が日本橋通屋町に創立。始め村山座といふ。寛文六年、市村宇左衛門が座元となつて市村座といふ。明治二十二年下谷區二長町に移した。江戸三座の一。昭和七年焼失。

いちめ〔市女〕(名) 市であきなふ女。女の商人。(古語)

—がさ〔市女笠〕(名) 中高な漆塗の笠で、平安朝の頃から用ひたもの。

いちめい〔一命〕(名) ❶一人のいのち。❷支那で士となつて官位を受けること。【名。❸一人の人。

いちめん〔一面〕(名) ❶本名の外の名。別名。異名。❷一方。❸全體。總體。❹一度の面會。

—しき〔一面識〕(名) 一度面會してちらと知てゐること。一度の見知り。

いちもう〔一望〕(名) 唯一の希望。

いちもうさく〔一毛作〕(名)【農】同一の耕地に一年に一回の作物を作ること。ひとけさく。

いちもうだじん〔一網打盡〕(名) 網をうつて一度に多くの魚を捕へること から轉じて、多くの犯罪人を一度に捕へること。

いちもく〔一目〕(名) ❶一つの目。片目。❷一度ちらと見ること。❸一つの項目。❹一箇の碁石。

—さん〔一目散〕(名・副) 急き走るさま。脇目もふらずに行くさま。一所懸命に。一散に。

いちもつ〔一物〕(名) ❶一つの物。❷よくない一つのたくらみ。❸金錢の異稱。❹陰莖の隱語。

—〔一物一果〕(名) 一つの物事に

—がさ〔一文字笠〕(名) 項が一文字のやうに平たくなつた菅笠。

—ぎり〔一文字切〕(名) 高さ三五糎位の竹製の花いけ。

—だな〔一文字棚〕(名) 床脇の棚の一直線に架けられたもの。

—ちょう〔一文字蝶〕(名)【動】蝶の一種。翅の表面は黒綠色、裏面は鮮菜黃色。前後翅を貫き、一列の白紋が並ぶので此の名がある。

—や〔一文字屋〕(名) 京都島原の遊女屋の名。

いちもんじすけのり〔一文字助則〕(名)【人】備前國の刀鍛冶で、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に大一文字といふ。

いちもんじすけむね〔一文字助宗〕(名)【人】備前國の刀鍛冶で、後鳥羽天皇の番鍛冶。世に一文字といふ。

いちもん〔一門〕(名) ❶一家族又は同姓の一族。❷同じ宗門のもの。

—がい〔一門甲斐〕(名) 一家・一族の間柄であるしるし。

—ふもん〔一門誓門〕(名)【佛】一つの敎に通ずれば、一切の敎に通ずる得ること。

いちもん〔一文〕(名) ❶一錢の十分の一。❷僅少の錢。❸一つの文字。

—あきない〔一文商〕(名) 一文づつのあきなひ。極めて少額の商賣。

—いちじ〔一文一字〕(名) 一つの文字。極めてすこし。

—うり〔一文賣〕(名) 一つ一文で賣ること。極めて少しの價で賣ること。

—おしみ〔一文惜〕(名) 僅かな金をも惜しむ吝嗇者。

—がし〔一文菓子〕(名) 一文賣の菓子。駄菓子。

—きなか〔一文半錢〕(名) 一文と半錢。卽ちわづかばかりの金錢。

—ぜに〔一文錢〕(名) 一文の價の錢。❷極めて少しの錢。❸紋所の名。

—せん〔一文錢〕(名) ❶一箇一文の價の錢。❷極めて少しの錢。

—なし〔一文無〕(名) 一文の錢も持たぬこと。甚だしい貧乏人。すかんぴん。

—ふち〔一文不知〕(名) 一つの文字をも知らぬこと。

—ふつう〔一文不通〕(名) ❶一つの文字をも識み得ぬこと。無學文盲。❷手紙のやりとりのない。

こ〔一文奴〕(名) 一文錢なる出すか 生爪を剝ぐかといはれれば、生爪を剝いでくれといふ程の吝嗇者。

—やっこ〔一文奴〕(名) つまらぬ人。値打のない人。

錢か生爪か(句) 僅かの錢を惜しんで、後に大損失なする事を知らぬおろかな事をいふ。

—惜しみの百知らず(句) 僅かの錢を惜しんで 大損失なする事を知らぬおろかな事をいふ。

いちもん〔一問〕(名) ❶一つの問に對して一つの答をすること。❷問に對して 一つの答をすること。

いちもんじ〔一文字〕(名) ❶一つの文字。❷「といふ文字。❸「一」の字のやうに眞直なこと。❹掛物の紙帛の上下に、横につける細いきれ。❺芝居で無釐の正面に垂れる黑幕。❻備前の刀工一文字則宗・助宗の鍛へた刀。❼兜の緒(ひも)の名。鉢形に垂れたもの。

いちもん〔一文〕(名) ❶一つの文字。❷「といふ文字。❸「一」の字のやうに眞直なこと。❹掛物の紙帛の上下に、横につける細いきれ。❺芝居で無釐の正面に垂れる黑幕。❻備前の刀工一文字則宗・助宗の鍛へた刀。❼兜の緒(ひも)の名。鉢形に垂れたもの。

いちもん〔一門〕(名) ❶一家族又は同姓の一族。❷同じ宗門のもの。

—がい〔一門甲斐〕(名) 一家・一族の間柄であるしるし。

—ふもん〔一門誓門〕(名)【佛】一つの敎に通ずれば、一切の敎に通ずる得ること。

いちもん〔一文〕(名) ❶一錢の十分の一。❷僅少の錢。❸一つの文字。

—あきない〔一文商〕(名) 一文づつのあきなひ。極めて少額の商賣。

—いちじ〔一文一字〕(名) 一つの文字。極めてすこし。

—うり〔一文賣〕(名) 一つ一文で賣ること。極めて少しの價で賣ること。

—おしみ〔一文惜〕(名) 僅かな金をも惜しむ吝嗇者。

—がし〔一文菓子〕(名) 一文賣の菓子。駄菓子。

—きなか〔一文半錢〕(名) 一文と半錢。卽ちわづかばかりの金錢。

—ぜに〔一文錢〕(名) 一文の價の錢。❷極めて少しの錢。❸紋所の名。

—せん〔一文錢〕(名) ❶一箇一文の價の錢。❷極めて少しの錢。

—なし〔一文無〕(名) 一文の錢も持たぬこと。甚だしい貧乏人。すかんぴん。

—ふち〔一文不知〕(名) 一つの文字をも知らぬこと。

—ふつう〔一文不通〕(名) ❶一つの文字をも識み得ぬこと。無學文盲。❷手紙のやりとりのない。

こ〔一文奴〕(名) つまらぬ人。値打のない人。

—やっこ〔一文奴〕(名) 一文錢なる出すか 生爪を剝ぐかといはれれば、生爪を剝いでくれといふ程の吝嗇者。

錢か生爪か(句) 僅かの錢を惜しんで、後に大損失なする事を知らぬおろかな事をいふ。

—惜しみの百知らず(句) 僅かの錢を惜しんで 大損失なする事を知らぬおろかな事をいふ。

いちや〔一夜〕(名) ❶日暮から夜明けまで。ひとよ。ひとばん。❷或夜。

—ぎり〔一夜切〕(名) 一夜限りの遊び。

—ぐさ〔一夜草〕(名)【植】べんけいそう。

—けんぎょう〔一夜撿挍〕(名) ❶江戸時代に千兩を納めて、俄かに撿挍になつたもの。❷(にわかぶげん)。

—さけ〔一夜酒〕(名) 一夜の間に醸した酒。あまざけ。

—ずくり〔一夜造〕(名) ❶唯一夜の中につくり出すこと。❷念を入れないで、急ぎ間にあはせにつくり出すこと。

—ずけ〔一夜漬〕(名) ❶一夜の間だけ漬けてならした漬物。❷きはものを急にこしらへた事柄を芝居用語。

—ずけ〔一夜附〕(名) ❶その時起つた書物。

—ずし〔一夜鮨〕(名) 鮎の腹に飯をつめ、苞(ゑ)に入れて火にあぶり、おもしをかけて、一夜の中にならした鮨。

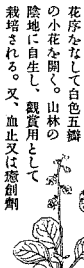
—びゃくしゅ〔一夜百首〕(名) 和歌・俳句・詩の題百を定めて、一夜に百首を詠ずること。

いちやかた〔市館〕(名) 市の家。「を詠ずること。

いちやく〔一躍〕(名) ❶一足に飛びあがること。❷順序をふまずに立身すること。

いちやく〔一役〕(名) ❶一つの役目。❷重要な役目。❸能で、仕手・脇・鼓・太鼓・笛などの役。

いちやくそう〔一藥草・鹿蹄草〕(名)【植】鹿蹄草科の多年生常綠小灌木。葉は厚く楕圓形で根生し、冬も萎まない。夏の初、花莖を抽ること約二〇糎、總狀花序なして白色五瓣の小花を開く。山林の陰地に自生し、觀賞用として栽培される。又、血止又は癒創劑として、毒蛇に咬まれた時、生葉を揉んで汁をつければ有效といふ。



〔一藥草〕

いちゃつく〔自動・カ四〕男女がふざけあふ。

いちゃ〔意中〕(名) ❶心の中。❷心の中に思ふこと。

—の人(句) おもふ人。想人。情人。

いちゅうるい〔異柱類〕(名)【動】軟體動物の瓣鰓類の一目。二枚貝で、前肉柱は後肉柱より小さく、又は之を缺き、外套膜は分離してゐる。貽貝・眞珠貝等がこに屬する。

いちょ〔遺著〕(名) 死後にのこされた著述。

いちょう〔一樣〕(名) 一つさま。同じさま。

いちょう〔一葉〕(名) ❶一枚の木の葉。❷小舟。❸人。

—らん〔一葉蘭〕(名)【植】蘭科の多年生草本。一莖一葉で、葉は廣楕圓形をなす。莖の高さ一〇糎餘、葉の長さ五糎位。夏、淡黃綠色の花を花莖の頂に單生する。觀賞用。

—落ちて天下の秋を知る(句)(唐詩に「一葉落知天下秋」とあ)桐は早く落葉するが、それを見て秋の來たことが知られる。それと同じく前兆によつて後に來ることが豫知することが出來るの意。

いちょう〔唯帳〕(名) とばり。たれぎぬ。「と。

いちょう〔威重〕(名) 威嚴があつて重重しいこと。

いちょう〔移牒〕(名) ❶外國の朝廷。❷外國からの命令。通知。傳へ。通ずること。

いちょう〔銀杏・公孫樹・鴨脚樹〕(名)(慣用上、「いてふ」を用ひ、語源的には「いちやう」を正しとす)❶【植】公孫樹科の落葉喬木。高さ三〇米位に達する。葉は扇形で、葉柄を具へ、秋、黃變すれば美觀を呈する。雌雄異株。春、新葉と共に綠黃

色の單性花を生じ、雄花は穗狀をなし、雌花は柄の先に二三箇をつけ、秋、黃色の種子を結ぶ。內に白色硬質の核果狀の部がある。これを「ぎんなん」と呼び、燒き又は煮て食ふ。材は緻密で美しい。㊁（いちょう）がしらの略。㊂紋所の名。種類が多い。

あし〔銀杏脚〕（名）膳などの足の末廣くして、銀杏の葉の形をしたもの。**—がえし**〔—ぢ返〕（名）女の髮の結び方。髻の上を兩分し、左右に曲げて輪形に結んだもの。しんてふてふ（新蝶蝶）。

がしら〔銀杏頭〕（名）江戸時代の男の髷の一種。刷毛先を銀杏の葉のやうに廣げたもの。**—がた**〔銀杏形〕（名）銀杏の葉の形で、半月形を眞中から二つ切にした形。**—くずし**〔—ぐづし銀杏崩〕（名）女の髮の結び方。江戸時代の末に流行し、髷の中に淺葱又は紫の地の縮緬を卷込んだもの。**—だいこん**〔銀杏大根〕（名）薄く輪切にした大根を十文字に切って銀杏の葉の形にしたもの。**—ば**〔銀杏羽〕（名）銀杏の葉の形にしたもの。**—ば**〔銀杏齒〕（名）銀杏の葉形に末の廣がった下駄の齒。**—まげ**〔銀杏髷〕（名）女の髮の結び方。島田髷を銀杏形にしたもの。**—も**〔銀杏藻〕（名）〔植〕苔類の一。葉狀體は銀杏狀で、下面に紫色の鱗片がある。水陸兩生で、雌雄異體。

〔崩杏銀〕

いちょうカタル〔—ちゃうかたる〕〔胃腸加答兒〕（名）〔醫〕胃と腸とが連續する消化器なるが爲に、彼此のカタルが相影響して起る疾患。

いちようらいふく〔—ちやうらいふく〕〔一陽來復〕（名）㊀陰きはまって陽がかへって來ること。㊁陰曆十一月の冬至の稱。㊂惡いことのみあつたのが、漸く善い方に向いて來ること。

いちよく〔—ぢき〕〔逸勅〕（名）天子の愚召に違ふこと。

いちらく〔一落〕（名）一件。

いちらく〔一樂〕（名）「いちらくみ」「いちらくおり」の略。**—あみ**〔一樂編〕（名）和泉の人、土屋一樂の發明した籐編工の編み方。**—おり**〔一樂織〕（名）㊀いちらくあみ。㊁浮織にした精巧な絹織物。

いちらす〔—らす〕〔射散らす〕（他動、サ四）矢を射て敵を追ひ散らす。

いちらん〔一覽〕（名）㊀一週り目を遍すこと。㊁一覽裏。**—ごていきばらい**〔—はらい〕〔一覽後定期拂〕（名）〔經〕手形支拂人が手形を一覽したのみで、手形所持人の呈示をした日に直ちに支拂はず、定まった期間を經過した後に支拂ふこと。一覽後六十日拂などいふ。**—ばらい**〔—はらい〕〔一覽拂〕（名）〔經〕手形所持人が、手形を呈示することによって、支拂人たる銀行が、一覽後直ちに支拂をすること。參著拂。**—ひょう**〔—ぢやう〕〔一覽表〕（名）種種の事項を一目で明瞭に見得るやうに作成した表。

いちり〔一理〕（名）㊀一つの道理。㊁一應の理由。

いちり〔一利〕（名）一つの利益。**—いちがい**〔一利一害〕（名）利益と損害と相半ばすること。

いちり〔一里〕（名）㊀尺貫法の里程の名。約四粁。又は三十六町。邑によっては五十町ないふ。昔は、支那の制度によって六町を一里とした。㊁一つの村。**—ずか**〔—づか〕〔一里塚〕（名）昔、街道一里毎に土を高く盛り、樹木を植ゑて里程の目標としたもの。榎塚、里塚。

いちりき〔一力〕（名）㊀一人のしもべ。㊁同じ工合。

いちりつ〔一律〕（名）㊀一つの規則。㊁同じ調子。

いちりつ〔一流〕（名）㊀第一等の地位。㊁一つの流儀。㊂他に異なった特別の流儀。

いちりゅうまんばい〔……ばい〕〔一粒萬倍〕（名）一粒の種子を蒔いておけば、萬倍の收穫を得るといふこと。轉じてわづかの資本から大利を得ること。

いちりょう〔一兩〕（名）㊀昔の貨幣單位。一分の四倍十六朱。銀では四匁三分。㊁秤目の單位。一斤の十六分の一、二十四銖。明治前期の一兩は昔の大一兩即ち三兩に當る。㊂一つ二つ。**—さし**〔一兩刺〕（名）竹串を二つ割にして小魚二匹を刺して燒き、其の串の元を紙に捲き束ねた料理法。

さつ〔一兩札〕（名）一札一兩に通用した太政官發行の紙幣。**—ばん**〔一兩判〕（名）一箇が一兩に通用する小判。

いちりん〔一輪〕（名）㊀車輪の一つ。㊁花一箇。㊂月。**—さし**〔一輪挿〕（名）二三輪の花枝を活ける小さい花瓶。**—そう**〔—ぢう〕〔一輪草〕（名）〔植〕毛茛（きんぽうげ）科の多年生草本。莖の高さ二〇糎位。葉は三回三出複葉で、小葉は深いきれめがある。春、一〇糎位の一花梗を抽き、白色で淡紅紫暈を帶び、梅花に似た一大花を開く。觀賞用。

いちる〔一縷〕（名）㊀一本の絲。㊁同じ種類。㊂同じ仲間。㊃同族。つづきあひ。

いちる〔一瓶〕（名）「ちょっと挨拶すること。

いちれい〔一禮〕（名）㊀一度禮拜すること。㊁一度禮拜。

いちれい〔一列〕（名）㊀ひとならび。㊁始めの列。㊂なかま。**—じん**〔—ぢん〕〔一列陣〕（名）【軍】艦隊の各艦が、一線上に並ぶ陣形。

いちれん〔一連〕（名）㊀ひとつづれ。㊁一つの連中。㊂律紙大判五百枚の稱。

いちれん〔一聯〕（名）㊀ひとならび。㊁律詩の一つの對句。

いちれんたくしょう〔……ぢやう〕〔一蓮託生〕（名）㊀佛菩に極樂往生を願ひて、死後まもなく蓮の上に生まれようとすること。㊁死後も極樂の蓮臺の上に生まれようと思ふこと。㊂善くも惡しくも人と行動を共にすること。

いちろ〔一路〕（名）㊀一すぢの路。㊁一すぢの道。㊂眞直に進むこと。**—こうめい**〔一路功名〕（名）一路功名を成す者は、必ず功名を成す者との意。（「路」は「盤」と音通なるか又は誤ていふ）。

いちろく〔一蘭〕（名）㊀【佛】僧が受戒して一夏を經ること。㊁年功によって長となった人。

いちろう〔……ぢう〕〔一六〕（名）㊀博奕の雙六で、采の目に一と六とが出ること。㊁一箇月中の一と六との日。この日は、明治九年四月以前は、官公署の休日であった。

—きんこう〔—ぢう〕〔一六銀行〕（名）（一と六と

の和は七で、「質」と音通であるからいふ）質屋。**—しょうぶ**〔一六勝負〕（名）㊀ばくちずごろく。㊁運任せに冒險を行ふこと。

いちわ〔一割〕（名）一分の一〇パーセント。

いちんち〔一日〕（名・副）「いちにち」の訛。

いつ〔稜威〕（名）尊嚴な威光。強い勢。（古語）

いつ〔揖〕（名）㊀拱を執って上體を少し屈して行ふ禮。㊁手をこまぬいて低頭する禮。

いつ〔乙〕（名）おつ。

いつ〔逸〕（名）㊀やすらか。㊁あやまち。あやまり。

いつ〔稜威〕（名）㊀はやい。㊁ゆるやかなこと。

いつ〔揖〕（名）㊀はしる。㊁みだら。㊂がる。にげる。㊃はやい。㊄ゆるやかなこと。㊅かくれる。㊆せる。

いつ〔一〕（數）いち（一）。**—を以て勞を待つ**（句）（孫子軍爭篇の句）安逸にして勢を貯へた兵を以て、倦みつかれた敵兵を待ちうける。

いつ〔一・壹〕（名）㊀同じこと。同一。㊁全きこと。

いつ〔一國〕。㊂或。「一說」。

いつ〔一・壹〕（數）いち（一）。**—を聞きて以て十を知る**（句）（論語公冶長篇の句）聰明で、ちょっと聞いても先の先まで理解するといふ。

いつ〔五〕（數）いつつ。一の五倍。

いつ〔何時〕（代・副）㊀いつか。㊁いつもの時。平生。

いつ〔何時〕（代・副）㊀いつの時。平生。㊁いつのまにか知らぬまに。㊂おそかれ早かれ。㊃或時。かつて。**—じぶん**〔何時時分〕（副）いつごろ。**—なんどき**〔何時何時〕（代）いつ。いつの時か。**—の**〔何時時間〕（副）いづれの時まで。**—までも**〔何時迄も〕（副）いづれの時までも。**—がいつまで**〔何時迄〕（副）いつといふきまった時もなしに。永久に。**—かは**〔何時迄〕（副）いつか一度は。**—か**〔何時〕（副）いつであらうと心がかりに待つこと。**—とても**〔何時迄も〕（副）いつでも。**—と無く**〔何時迄〕（副）いつといふきまりもなく。常に。**—とも**〔何時迄〕（副）何時といふきまりもなく。（古語）**—に無い**〔何時迄〕（形）平生とはちがって。**—の程にか**〔何時迄〕（句）いつといふことを知らぬ間に。

—はあれど（句）何時といふ定めはないが。（古語）—はさもあれ（句）いつもはとにかく。—はとは（句）いつが最もよいとは。（古語）—をいつと（句）いつかきまりの時と定めて。いっと（副）凍つ・冱つ（自動・タ下二）こほる。いてる。

いつうぁ…〔胃痛〕（名）〔醫〕胃が痛むこと。

いつえ…〔五重〕（名）衣服重なること。—がさね〔五重襲〕（名）衣服五枚を重ねること。（古語）—のおうぎ〔五重扇〕（名）檜扇の兩端の板を薄檜紙で五重に包み、種種の絲で綴ぢたもの。（古語）—のおんぞ〔五重御衣〕（名）五色の絲で模様を織出した衣。（古語）—のからぎぬ〔五重唐衣〕（名）五色の絲で模様を織出した唐衣。（古語）

いっか〔一家〕（名）㊀一家族。㊁一家族。㊂學術・技藝の一流派。—げん〔一家言〕（名）自分の主張する學說。—だんらん〔一家團欒〕（名）一家族が車座に坐って仲よく樂しむこと。一家族の集まり和して睦ましいこと。—ちゅう〔一家中〕（名）或大名に屬する諸臣。—を機杼す（句）新しい一派の言論・文章などをあみ出すこと。

いっか〔五日〕（名）㊀日數五つ。㊁その月の第五の日。㊂五月五日。端午の節句。—がえり〔五日歸〕（名）結婚後、五日目の里がへり。—のせち〔五日節〕（名）中古、毎年五月五日に行はれた節會。天皇が武德殿に出御あらせられて、群臣に粽を賜ひ、後、騎射を御覽になり、人人は菖蒲やめ〔菖蒲〕をかづら（縵）として參列した。

いっか〔一荷〕（名）㊀荷一つ。㊁天秤棒の兩端にかけて、一人の肩にのせふ荷。

いっか〔一花〕（名）㊀一つの花。㊁しばらく。

いっか〔一箇・一個〕（名）一つの物。

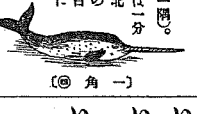
いっか〔一介〕（名）一人の下男。（介は芥に通ずる）。㊁一つの僅かなもの。

いっかい…〔一回〕（名）㊀ひとたび。㊁ひとまはり。—者〔一回忌〕（名）人が死んで、翌年の當月當日にする法事。一周忌。

いっかい・にく…〔一塊肉〕（名）㊀ひとかたまりの肉。㊁一つの人體。㊂ただ一人の子孫。

いっかく〔一格〕（名）自分一人の主義で立てた格式。一流。

いっかく〔一角〕（名）㊀ひとすみ（一隅）。ひとかど。㊁一角の牙。㊂一分銀又は一分金の異稱。㊃〔動〕鯨類の哺乳動物。北太平洋に棲む。長さ六米に達するものがある。形、海豚（いるか）に似て、腹部白質で、堅硬の長き二米許の長い牙があって、鑿鑿の具となってゐる。油は鯨油に勝り、その牙は、古來漢法で解熱劑として用ひた。角魚。ウニコール。


（一角）

いっかくせきぎん…〔一握千金〕（名）㊀ちょっとした仕事で千金を手に入れること。㊁たやすく大利を得ること。

いっかけ〔沃懸〕（名）（「いかけ」の音便）㊀漆器に金粉・銀粉などを流しかけたもの。いかけぢ。㊁器物の絲を銀・錫などで蔽ふこと。—じ—ぢ〔沃懸地〕（名）（いかけじ）。

いっかげんそ〔一價原素〕（名）〔化〕（Monad）原子量の同一な原素。鹽素・臭素の類。

いっかし〔一括し〕（形シク）きびしい。たふとい。おごそかである。（古語）

いっかつ〔一括〕（名）一つにくくること。

いっかどに〔一廉〕（副）ひとかど。ひときは。

いっかな〔如何な〕（副）どうしても。

いっかる〔一繋る〕（自動・ラ四）つながる。（古語）

いっかん〔一寒〕（名）㊀如何にも寒さうなこと。㊁如何にも淋しさうなこと。㊂如何にも貧しさうなこと。

いっかん〔一竿〕（名）一本のさを、又は一本の釣竿。—の風月（句）一本の釣竿に身を託し、俗事を忘れて風月を樂しむこと。

いっかん〔一貫〕（名）㊀ひとすぢにつらぬくこと。一理を以て萬事を貫き通すこと。㊁錢一千文又は九百六十文。㊂秤目一千匁。約三・七五瓩。

にち〔一貫日〕（名）百日。

いっかん〔一管〕（名）㊀一本の管。㊁一本の笛。㊂能樂で、笛のみを調にあはせて吹くこと。

いっかんばり〔一閑張〕（名）漆器の一種。紙で張つたりのち漆塗にした細工物。江戸時代の始、明の師化人飛來（ひらい）が一閑の創始に係るといふ。

いっき〔齋〕（名）㊀いっくこと。（古語）㊁いっきのみこと。（古語）

いっきのいん〔齋院〕（名）（さいいん）。—のいんのつかさ〔齋院司〕（名）（さいいんし）。—のみと〔齋御子・齋王〕（名）昔、天皇御即位の時、伊勢神宮・賀茂神社に仕へしめられた未婚の內親王又は女王。（古語）—のみや〔齋宮〕（名）㊀伊勢大神宮又は大嘗祭の悠紀（ゆき）・主基（すき）の神殿。（古語）㊁伊勢・賀茂の齋王の居所。（古語）—のみやのつかさ〔齋宮寮〕（名）（さいぐうりょう）〔齋宮寮〕。（古語）—むすめ〔齋女〕（名）大切にかしづき育てるむすめ。（古語）—め〔齋女〕（名）いみきまめて神に仕へる女子。（古語）

いっき〔羊婆奶〕（名）〔植〕（植婆多（ばた）の略）。

いっき〔五十槐〕（名）〔植〕樂多くして繁った槐の木。（古語）

いっきぁ…〔居著地〕（名）自己の所有地內に居所を構へる地主。

いっき〔五十嵯〕（名）㊀度を同じくすること。㊁心を一つにすること。㊂武士が團結してかけひきを同じくすること。

いっき〔一饋〕（名）一度の食事。（推南子の句）食事をしてゐる中に十たびもたちあがることで、政治に熱心なこと。

いっき〔一簋〕（名）㊀一つのあじかい。㊁一つのあじ。

いっき〔一騎〕（名）㊀馬に乘った一人の兵士。㊁一人のうまのり。—うち〔一騎打〕（名）㊀一騎づつ敵んで進むこと。㊁敵味方の一人づつの騎士が、鋒を交へて勝負を爭ふこと。—とうせん…〔一騎當千〕（名）一騎の武勇が千人の敵にも當るに足る程强いこと。

いっき〔一氣〕（名）㊀一呼吸。㊁萬物の元氣。

かせい〔一氣呵成〕（名）㊀一息に文章を作りあげること。㊁大急ぎで仕事をしをへること。

いっきょ・いちゆう…〔一喜一憂〕（名）喜んだり憂へたりすること。

いっきく〔一掬〕（名）兩手で一度すくふこと。ひとすくひ。—の涙（句）兩手ですくふ程の涙。悲しくなって涙のあふれおちること。

いっきぞ〔五十槐園〕（名）〔人〕荒木田久老（ひさおみ）の號。

いっきぬ〔五衣〕（名）中古の男子の服裝で、裘衣（きんのう）・下襲（したがさね）・半臂（はんぴ）・引袋（ひきぶくろ）・單（ひとへ）・袴（はかま）の五品。（古語）

いっきはんきのもの〔一季半季者〕（名）一年ぎめ又は半年ぎめの雇人。奉公人の總稱。

いっきゃく〔一客〕（名）第一の大切な客。—いってい〔一客一亭〕（名）一人の客と主人のみの不時の茶會。

いっきゅう…〔一休〕（名）〔人〕臨濟宗の僧。名は宗純。一休はその字。狂雲と號す。京都大德寺の第四十六世。狂歌に巧みで、書畫をよくし、奇行が多かった。後花園天皇崇信して紫衣を賜はった。文明十三年（一四一〇）寂。年八十八。

いっきゅうせんきょにん…〔一級選擧人〕（名）〔政〕等級選擧制に於ける納稅額が第一の等級にある選擧人。

いっきゅうひん…〔一級品〕（名）蟲道大食物の等級で、原料品や半製品の最低貨銀率のもの。

いっきょ〔逸居〕（名）仕事をせずに暮すこと。なまけて暮すこと。

いっきょ〔一擧〕（名）㊀一たび事をなすこと。㊁一たび兵を出すこと。—いっどう〔一擧一動〕（名）一つ一つのふるまひ。—しゅいっとうそく〔一擧手一投足〕（名）一度手を擧げ、一度足

を動かすことの意から轉じて少しの骨折の意。—!

りょうとく〔一舉兩得〕(名) 一つの事をして二樣の利益を收めること。

いっきょいちじつ〔一虛一實〕(名) 虛になったり實になったりして、變化の測りがたいこと。

いっきょいちらい〔一去一來〕(名) 或土地を去って又來ること。

いっきょう〔一驚〕(名) 一たび驚くこと。びっくりすること。—を喫す(句) びっくりする。

いっきょう〔逸興〕(名) たのしみ。面白みの一つの面白味。

いっきょく〔一輿〕(名) 音樂のひとさきり。

いっきょく〔一曲〕(名) 【音】音樂のひとさきり。

いっきょく〔一局〕(名) 一つの碁盤。

いっく〔齋く〕(自動、カ四) 物の一部分又は模樣などを前以て附けておいて嬉遊する。

いっく〔射附く〕(他動、カ下二) 射

いっく〔鐍附く〕(他動、カ下二) 鐍

いっくくる〔射附くくる〕(他動、カ下二) 射

いっくくる〔鐍附くくる〕(他動、カ下二) 鐍

いっくくる〔居著く〕(自動、カ四) 安心して住む。

いっくる〔居著く〕(自動、カ四) 有はすべて差別なく平等なこと。

いっくし〔厳し〕(形、二) いっくしむ。(古語)

いっくしび〔慈び〕(名) 慈しみ。(古語)

いっくしぶ〔慈ぶ〕(他動、バ四) いっくしむ。(古語)

いっくしま〔厳島〕(名) 【地】日本三景の一。廣島縣佐伯郡にある島。島の最高所は海拔五四六米の彌山(みせん)で、島の周圍二八粁。島の北部に嚴島町と嚴島神社がある。風光明媚、又、史蹟に富む。宮島。

いっくんねん〔厳島延年〕(名) 【神】七月十四日、嚴島神社で行ふ神事。

いっくんぎれ〔厳島切〕(名) 藍、天鼠絨地に、淺黄の菱入角の中に蟠龍紋を織出した緞子。

いっくんじゃ〔厳島神社〕(名) 【神】嚴島町にある官幣中社。安芸國一の宮。祭神は市杵島姫命・湍津姫命(いちきしまひめのみこと・たぎつひめのみこと)・田心姫命。殿堂嚴島居共に朱塗。

いっくんたたかい〔厳島の戰〕(名) 【歴】治承元年(一一七七)毛利元就が、大内義隆を弑した陶晴賢を、敗死させた戰。

いっくしみ〔慈み〕(名) いっくしむこと。かはゆがること。いっくしび。

いっくしむ〔慈む〕(他動、マ四) 愛する。大切にする。あはれむ。めぐむ。

いっくどうおん〔一口同音〕(名) 多くの人が聲を揃へて書を讀むこと。

いっくんぐん〔逸群〕(名) 多くの人にぬけ出ること。

いっけ〔一家〕(名) 同じ家のもの。同族。親族。

いっけいちもん〔一家一門〕(名) 一族。

いっけい〔一景〕(名) 一つの景色。一つの景物。一興。一つの趣向。

いっけい〔一系〕(名) 同一の血統。ひとつちすち。

いっけい〔一計〕(名) 一つのはかりごと。

いっけい〔一決〕(名) 一つにきまること。ひとたびきまること。

いっけつ〔一穴〕(名) 一つの穴。鳥類・爬虫類のやうに、肛門と生殖器との區別のないこと。大便所と小便所との區別のない便所。

いっけつ〔溢血〕(名) 【醫】身體の組織間に起る出血で、血管系から血液成分が出ること。破綻性出血と漏出性出血との二つに分れる。

いっけん〔一件〕(名) 一つの事柄。或事柄。

いっけんろく〔一件記錄〕(名) 【法】訴訟事件の書類を件毎にまとめた書類。—しょるい……る〔一件書類〕(名) 【法】一件記錄。

いっけん〔一見〕(名) 一たび見ること。ちょっと見ること。一度あふること。—舊の如し(句) 一度逢って氣心が合った結果、古親狎のやうに親しくなること。

いっけん〔一間〕(名) 一家の柱と柱との間。【數】Mono-bial expression)一項から成る代數式。2x, xの類。

いっけん〔逸言〕(名) いひすぎ。いひやまり。失言。過言。

いっけんしき〔一見識〕(名) 一かどの老。一種の見識。一見所。

いっけんしょ〔一見所〕(名) いっけんしき。

いっけんや〔一軒屋〕(名) 隣のないひとつや。獨立の家屋。

いっこ〔一戶〕(名) 一軒の家。一世帶の家。

いっこ〔一己〕(名) 自分ひとり。

いっこ〔一箇〕(名) ひとつ。一寸注意すること。

いっこ〔一顧〕(名) ちょっとふりかへって見ること。一立の家屋。

いっこ〔一口〕(名) 一ひとくち。一人。

いっこ〔一刀〕(名) 一つの刀劍。ひとふり。—に出づるが如し(句) 衆人の言が同じであるにいふ。

いっこう〔逸口〕(名) いひあやまり。いひすぎ。くちばしり。いっげん(逸言)。

いっこう〔一更〕(名) 五更の一。今の午後八時から十時までに相當する時間。初更。

いっこう〔一行〕(名) 一たび行くこと。同じく行くこと。連れだった人。一つ。一ならび。書面一通。他事をすて其の事を行ふこと。仕官すること。—更となる(句) (晉の番蹇の文の句)他事をなげうて官更となる。

いっこう〔一向〕(名) 或事にのみ心が向かって他顧みぬこと。ひたすら。いちづ。純粹でまじりけのないこと。全く役に立たぬこと。【佛】一向宗の略。—いっき〔一向一揆〕(名) 室町幕府の末、一向宗の門徒が、宗門保護と稱して、加賀・能登・越前・三河等で起した騷動。—しゅう〔一向宗〕(名) 【佛】淨土眞宗の異稱。一向に阿彌陀佛を念ずることを宗旨とするよりいふ。しんしゅう。—せんじゅ〔一向專修〕(名) 【佛】ひたすら修行し又は念佛すること。—せんねん〔一向專念〕(句) 【佛】ひたすら念佛すること。

いっこう〔一向〕(副) ひたすらに。ひとむきに。全く。すべて。まるで。少しも。いっそのこと。むしろ。

いっこうしき〔一項式〕(名) 【數】Mono-bial expression)一項から成る代數式。2x, xの類。單項式。

いっこく〔一國〕(名) 一つの國。全國。いっこくもの。—いちじょう〔一國一城〕(名) 一國を領し、一城を有する大諸侯。

いっこくもの〔一國者〕(名) 自分の國のしかたは和合するが、他國人は和合せぬもの。頑固で人の意見を納れぬ者。度立ち易い人。性急な人。—の主(句) 一國・一城を領する程の大大名。

いっこく〔一刻〕(名) 僅かの時間。昔のひとき(一時)の四分の一。ひとしき。—せめ〔一刻攻〕(名) 一氣に敵を攻めること。—せんきん〔一刻千金〕(名) (蘇軾の春夜の詩に「春宵一刻直千金」とあるに基づく)少しの時間にも大きな價値のあること。大切な時や樂しい時の過ぎ易いのを惜しむ時に用ひる。

いっこじん〔一個人〕(名) 【法】國家・社會、その他の公共團體を組織してゐる各人。公の資格を除いた一私人。

いっこてん〔一壺天〕(名) (後漢書方術傳の語)「小天地。

いっごろ〔何時頃〕(名・副) いつ。いつのころ。いつじぶん。

いっこん〔一獻〕(名) 一杯の酒。一たび盃を

いっこんぞめ〔一斤染〕(名) べに花一斤で、絹一匹を薄い紅色に染めたもの。

いっさい〔一切〕(名・副) 殘らず。全體。皆。ことごとく。—うい……る〔一切有爲〕(名) 【佛】(いっさいうゐ)萬有。—うじょう〔一切有情〕(名) 【佛】(いっさいうじょう)一切衆生。—きょう〔一切經〕(名) 【佛】經・律・論の三藏の經文の總稱。七千餘卷ある。(いっさいぞうきょう)大藏經。—しゅじょう〔一切衆生〕(名) 【佛】此の世に生きてゐるすべての物。—しゅだ〔一

切種智〕(名)【佛】佛の有する智慧。宇宙本體の平等と宇宙箇箇の差別とを觀得る最上の智慧。

いっさいたふ〔一妻多夫〕(名)一人の婦人が、正式に數人の夫を有すること。

いっさいてん〔一齋點〕(名) 佐藤一齋の始めた漢文直譯體の漢文訓讀法。

いっさく〔一昨〕(名) 年月日で、中一つ置いて過ぎ去った過去。**—じつ**〔一昨日〕(名) をととひ。**—ちょう**〔一昨朝〕(名) をととひのあさ。**—ねん**〔一昨年〕(名) をととし。**—ばん**〔一昨晩〕(名) をととひのばん。**—や**〔一昨夜〕(名) をととひのよる。**—ゆう**〔一昨夕〕(名) をととひの夕方。

いっさく〔一作〕(名) 一趣向。一工夫。一策。

いっさつ〔一札〕(名) ㊀一通のかきつけ。㊁一通の手紙。

いっさつたしょう……〔一殺多生〕(名)【佛】一人を殺して多くの人を救ふこと。一人が死んで多くの人を救ふこと。いっせったしょう。

いっさん〔一盞〕(名) ㊀一つの盃。㊁一杯の酒。

いっさん〔一山〕(名) ㊀一つの山。㊁【佛】④一つの大寺。㊂大寺にゐるすべての僧。

いっさん〔一粲〕(名)〔「粲」は清白の意で、白い齒を出して笑ふこと〕たゞ笑ふこと。**—を博す**(句) 物笑の種となる。

いっさん〔逸散〕(名) にげること。**—に**〔逸散に〕(副) ひたすらにいそぐさま。**—ばしり**〔逸散走〕(名) あとを見ずに走ること。

いっさんかたんそ……〔一酸化炭素〕(名)【化】炭素の化合物。木炭又は有機物が燃燒する時、空氣の供給が不足な爲に生ずる無味・無臭・無色の有毒瓦斯。酸化炭素。

いっさんまい〔一三昧〕(名)【佛】一心に修行すること。事なくひたすらに念をこめること。一心不亂。

いっし〔一絲〕(名) ㊀一本の絲。㊁秤目で、一毛の十分の一。**—いちごう**……〔一絲一毫〕(名) 極めて僅かの事柄。**—紊れず**(句) 秩序が整つてゐて、少しも亂れてゐない。

いっし〔一子〕(名) ㊀ひとりこ。㊁多くの子の中の一人。**—そうでん**……〔一子相傳〕(名) 學藝などの奥義を我が子の一人のみに傳へて他には漏らさぬこと。

いっし〔一紙〕(名) ㊀一枚の紙。㊁一枚の文書。㊂同じ紙。**—はんせん**〔一紙半錢〕(名) 紙一枚と錢半文。轉して僅かなもの。

いっし〔一死〕(名) 死ぬこと。一命をすてること。**—しちしょう**……〔一死七生〕(名)【佛】一度死んで七たび生まれかはること、卽ちこの世に生まれかはる限り。

いっし〔一矢〕(名) 一本の矢。**—を報ゆ**(句) ㊀敵から受けた攻擊に對してしかへしをする。㊁他人の論難に對して辯駁してしかへしをする。

いっし〔逸史〕(名) ㊀正史に漏れた事實の歷史。㊁【歷】中井竹山の德川家康歷代の事蹟を書いた漢文の史書。

いっし〔逸詩・軼詩〕(名) ㊀詩經から漏れた詩。「ちぬ詩。㊁詩經中に漏れて傳はらぬまこと。㊂いつか早く。おそかれ早かれ。早晩。

いっし〔一視〕(名) 差別をせずに同樣に見ること。**—どうじん**〔一視同仁〕(名) 親疎の差別をせずに一樣に仁愛を施すこと。

いっし〔逸事・軼事〕(名) 散逸して世にあらはれない事柄。**いっしか**〔何時しか〕(副) ㊀いつのまにか。知らぬまに。㊁いつか早く。おそかれ早かれ。早晩。

いっしき〔一色〕(名) ひといろ。ひとしな。

いっしき〔一式〕(名) ひとそろひ。全體。

いっしし〔一私人〕(名) いっこじん〔一個人〕。

いっしつ〔一室〕(名) ㊀ひとへ。㊁同じ部屋。㊂「ばかりの官位。低い地位。戒部屋。

いっしはんきゅう……〔一資半級〕(名) 僅か少しの酒を飲むこと。

いっしゃく〔一酌〕(名) ㊀一杯。㊁ごさかもり。小宴。

いっしゃせんり〔一瀉千里〕(名) 河の流の早くて、一たび瀉ぐやすぐに千里も流れ去ることから、物事の滯りなくはかどり進むこと。

いっしゅ〔一種〕(名) ㊀ひといろ。ひとくさ。㊁同種。㊂ひといろの酒の肴。いっすもの。**—いっぺい**〔一種一瓶〕(名) 一種の肴と一壺の酒といふことから わづかな酒肴。

いっしゅう……〔一週〕(名) 七日間。**—かん**〔一週間〕(名) 七日間。

いっしゅう……〔一周〕(名) ㊀ひとまはり。㊁滿一年。**—き**〔一周忌〕(名)〔いっかいき〕〔一回忌〕。

いっしゅきん〔一朱金〕(名) 江戸時代の金貨の一。一兩の十六分の一。形は長方形。

いっしゅぎん〔一朱銀〕(名) 江戸時代の銀貨の一。一兩の十六分の一。形は長方形。

いっしゅく〔一宿〕(名) 一夜とまること。**—いっぱん**〔一宿一飯〕(名) 一宿して一度食事を給せられること。ちょっとした世話になったこと。

いっしゅつ〔逸出〕(名) ㊀放れ出ること。のがれ出ること。㊁すぐれてゐること。ぬきんでること。

いっしゅん〔一瞬〕(名) ㊀ひとまたたき。㊁極めてわづかな間。**—かん**〔一瞬間〕(名) ひとまたたきする程の極めてわづかな時間。**—せんり**〔一瞬千里〕(名) ㊀極めて早い速力。㊁遠方まで一目に見渡されること。

いっしょ〔逸書〕(名) ㊀散逸した書物。㊁散逸した書物。

いっしょ〔一書〕(名) ㊀一通の文書。㊁一册又は一部の書物。㊂戒書物。㊃異本。

いっしょ〔一所〕(名) ㊀一つ所。㊁同じ所。**—けんめい**〔一所懸命〕(名) ㊀賜はった一箇所の知行所を命にかけて大切にすること。㊁物事を一心になってすること。**—ふじゅう**……〔一所不住〕(名) 住所がきまらないで一所に住まはぬこと。〔浪人・行脚僧などにいふ。

いっしょ〔一緒〕(名) ひとまとめ。同一。**—に**〔一緒に〕(副) ひとまとめに。ともに。同じく。

いっしょう……〔一將〕(名) 一人の大將。或大將。**—功成りて萬骨枯る**(句)〔唐の曹松の「己亥歲」の詩の句〕一人の大將が功名を立て得たのは、幾萬の兵士が屍を戰場にさらした結果である。

いっしょう……〔一生〕(名) 生まれてから死ぬまで。生涯。終生。**—がい**〔一生涯〕(名)〔いっしょうう〕。**—けんめい**〔一生懸命〕(名)〔一所懸命の訛〕。命がけで仕事をすること。**—ふしょう**〔一生補處〕(名)【佛】一生を通過すれば、佛になり得る菩薩の最高位。**—ふぼん**〔一生不犯〕(名)【佛】終生、邪淫戒を犯さぬこと。又、その人。

いっしょう〔一升〕(名) 一合の十倍。一・八〇三九リットル。**—ます**〔一升枡〕(名) 一升の量を容れる枡。內法四寸四方九分、深さ二寸七分一厘。

いっしょう……〔一笑〕(名) ㊀ひとたび笑ふこと。㊁一つのわらひぐさ。**—に附す**(句) 笑って相手にならない。笑って氣にかけない。

いっしょうさんたん……〔一唱三歎〕(名)〔「禮記樂記」の語〕一人が唱へて三人が助け唱へること。轉じて、一たび詩文を賞めるに用ひる。よい詩文を賞めるに用ひる。

いっしょうぞく……〔一裝束〕(名) 鎧に附屬する一揃の具。冠・佩楯・胄・鉢卷・腹當の總稱。

いっしん〔一身〕(名) ㊀一人のからだ。㊁自分のからだ。㊂總身。**—てん**〔一身田〕(名) 中古、一代を限って所有を許された田地。**—に味方なし**(句) 自分以外に味方とするものはない。

いっしん〔一心〕(名) ㊀心を一つの物事に集めること。㊁多くのものの一致した心。㊂自分の心。**—きょうりょく**……〔一心協力〕(名) 心をあはせ力をあはせること。**—さんがん**……〔一心三觀〕(名)【佛】天台宗の悟道法。自己の心中に空・假・中の三諦あることを知って、惑を斷じ、涅槃・菩提に入る道を辯ずること。**—ふらん**〔一心不亂〕(名) 一事に心を注いで他を顧みないこと。

いっしん〔一審〕(名)〔法〕訴訟の第一次の審判で、區裁判所・地方裁判所に於ける審判。第二審。

いっしん〔一新〕(名) すべてを改めること。すべて改まること。

いっしんかい……ゐ［一進會］(名) 日韓併合に賛獻した朝鮮の政黨。明治三十七年に朝鮮人尹始炳の組織した政治團體で、宮中・府中の混同、兩班の專横に反抗し、產業・教育の發達を計ちうとしたもの。

いっしんきょう……ゎう［一神教］(名)【宗】Monotheism) 基督教・マホメット教・猶太教等の如く造化の神は唯一であるとして、之を信仰する宗教。(多神教の對)

いっしんとう［一親等］(名)【法】親等の一。或人とその親又はその配偶者の親又は子との關係、又、或人とその配偶者の親又は子との關係のやうに、或人又はその配偶者より一世を隔つるものとの關係。一等親。

いっしんほっかい［一眞法界］(名)【佛】唯一眞實の宇宙の實相。絶對・無差別の宇宙の實相。

いっす（いそがせす）［逸す］(自動・サ變) ㊀はなれる。㊁のがれる。にげる。㊂うせる。ちる。㊃それる。

いっす（いそがせす）［逸す］(他動・サ變) ㊀はなつ。㊁のがす。にがす。㊂おとす。失ふ。

いっすい［一水］(名) ㊀一筋の流。㊁一滴の水。

いっすい［一醉］(名) 一度の酒の醉ひ。

いっすい［一睡］(名) ひとねむり。

いっすい［一炊］(名) 一たび炊ぐこと。—の夢 (句)（李泌の枕中記の句）唐の開元年中、支那直隸省邯鄲（かんたん）の地で、盧生が道士呂翁の枕を借りて榮華の夢を見たが、それは黄粱（あわ）がまだ煮えきらない時間であったといふことから、人生の榮華のはかないことにいふ。黄粱一炊。邯鄲の夢。盧生の夢。

いっすけ（つすけ）［居續］(名) ㊀連日妓樓に遊びつづけて家に歸らぬこと。流連。

いっすもの［一種物］(名) 昔、各人が一種づつの肴を出しあって、殿上に小酒宴を催したこと。(古語)

いっすん［一寸］(名) ㊀一尺の十分の一。二・五四糎。㊁短い距離。㊂小さいこと。—いた［一寸板］(名) 厚さ一寸の板。貫祿は八分五厘内外。—さき［一寸先］(名) ちょっと離れた前途。—だめし［一寸試］(名) すたすたに斬ること。—つぼね［一寸局］(名)【江戸吉原の河岸にあった遊女屋の局女郎の異代に一夜位のもの。—ぬけ［一寸拔］(名) 常座のがれ。一寸のがれ。—のがれ［一寸遁］(名) 自己の責任を少しづつのばしていってのがれようとすること。—ぼうし［一寸法師］(名) 身長の低い人を寫っていふ語。—先は闇 (句) 前途の全く豫知することの出來ないこと。—の光陰輕んずべからず (句) 朱の朱熹の詩「偶成」の句少しの時間をもむだに費してはならぬ。—延びれば尋延びる (句) 當座の困難を何とかして延ばして行けば、少しはくつろぎがでくる。—の蟲にも五分の魂 (句) 小さく弱いものにも、それ相應の考があるる。

いっせ［一世］(名) ㊀過去・現在・未來の三世の一。㊁いっせい。—いちだい［一世一代］(名) ㊀一生の中。㊁一生涯。—いちご［一世一期］(名) 一生涯。—いちげん［一世一元］(名) 天皇の御一代に唯一つの年號を用ひて改めぬこと。

いっせい［一世］(名) ㊀一生。一代。㊁當時。當代。㊂或人が國や家を治めてゐる間。㊃ヨーロッパで、同血統・同名の皇帝中の第一に卽位した人の稱。—いちげん［一世一元］(名) 天皇の御一代に唯一つの年號を用ひて改めぬこと。

いっせい［一齊］(名・副) ㊀同時。㊁不等。—しゃげき［一齊射擊］(名)【軍】一隊の兵が、一號令で同時に射擊すること。

いっせい［一聲］(名) ㊀ひとこゑ。㊁龍樂で、その狀景又は心持を役者が舞臺で語り出す一種の節。又、その唄子。㊂役者が舞臺に出場し又は退場する時の囃子。

いっせい［一成］(名) 支那で、十里四方の地。

いっせき［一跡］(名) ㊀あとつぎに讓る物のすべて。㊁特有。持前。㊂いちどき。またたく間。

いっせき［一夕］(名・副) ひとばん。一夜。

いっせきがん［一隻眼］(名) ㊀一つの眼。㊁特殊の眼識。

いっせきにちょう……ちゃう［一石二鳥］(名)（To kill two birds with one stone の譯）一發兩得に同じ。

いっせつ［一節］(名) 文章中の一くぎり。

いっせつ［一切］(名) どんなことがあっても。いっさい。全然。

いっせつ［一說］(名) ㊀一つの說。㊁或說。

いっせつたしょう……しゃう［一殺多生］(名)【佛】(いっさつたしょう)

いっせん［一錢］(名) ㊀一圓の百分の一。㊁一文(いちもん)。—ぎり［一錢切］(名) 戰國時代に、錢一文を盜んだ者をも斬に處したこと。一說に、犯人の持ってゐる錢は、一文でも取りあげたこと。—じゃや（じゃう）［一錢茶屋］(名) 江戸時代に煎茶一杯を一文にあきなった茶屋。一服一錢。—しょく［一錢職］(名) 江戸時代の髮結。いっせんぞり（一錢剃）。—ぞり［一錢剃］(名)（一人一錢で、剃髮・結髮をしたからいふ）みゆび。とこや。—得がたし

いっせんどばらい……ばらひ［一千度祓］(名)【神】祓の詞を神前で千度奏してはらひをすること。

いっそ（副）ほんたうに。—になる (句) 男女の仲が深くなって、人の譏りもかまはぬやうになる。

いっぞ（副）いつか。早晩。

いっそう（さう）［一左右］(名) たより。音信。

いっそう（さう）［一層］(副) ひときはだ。ひとしほ。よいに。さらに。

いっそうりゅう……ゅう［一噌流］(名)【音】龍樂の笛の流派。織豐時代の中村一噌を祖とするもの。

いっそく［一息］(名) ㊀ひといき。㊁わづかの息。ちょっとした息。

いっそく［一束］(名) ひとたば。一つにまとめること。—きり［一束切］(名) 髮（たぶさ）を一握程の長さに切ること。「すぐれたこと。㊁敏捷なこと。

いっそく［逸足］(名) ㊀足の早いこと。㊁伎倆の優れたこと。

いっそくとび［一足飛］(名) ㊀足をそろへて飛ぶこと。㊁順序を飛ばしてとばすこと。「頃であったか。

いつぞや［日外］(副) さきごろ。かって。いつの

いったい［一帶］(名) ㊀ひとすぢ。一筋。㊁全般。

いったい［一體］(名) ㊀一つのからだ。同一の體。㊁同類關係。㊂同じ實體。—りょうめんろん……ゎん［一體兩面論］(名)【哲】(Doctrine aspect theory) 一元論の一種。心と物とは、宇宙の實體の兩面のありはれに過ぎないといふ一元論。一致的一元論。

いったい［一體］(副) ㊀すべて。おしなべて。㊁元來。もともと。—ぜんたい［一體全體］(副) もとなべて。元來。ぜんたい。

いったん［一旦］(副) ひとたび。ちょっと。—緩急あれば (句)（史記袁盎傳の句）ひとたび國家に大事が生ずることがあれば。

いったん［一端］(名) 一方のはし。かたはし。

いったん［一擔］(名) 一つの竹製の飯を盛る器。かばかりの食物。—の貪（とん）一瓢の飲 (句)（論語雍也篇の句）

いっちげんろん［一致的一元論］(名)【哲】(いっちりょうめんろん)×一體兩面論。—は［一致派］(名)【佛】日蓮宗の一派。法華經の後の十四品（本門）と前の十四品（迹門）とは、理は一致してゐるとの說で、日朗を祖とする。久遠寺・本門寺・本圓寺・妙顯寺・法華寺等これに屬する。

いっち（副）いちはん。最も。

いっちく［一竹］(名)【音】雅樂で、笙の一節のみをめて滋潤なこと。なまものしり。

いっちゃく［一著］(名) ㊀最初に到著すること。

㊀最初に著手すること。

いっちゃくしゅ〔一磔手〕(名)〔「磔」は「閉く」「張る」の意親指と中指とをのばした長さ。佛像などを計る尺度。—はん〔一磔手半〕(名)一磔手にその半ばの長さを加へたもの。

いっちゅう〔一中〕(名)㊀〔佛〕禪宗で、一座の人人に普く茶菓を供すること。一普。㊁〔人〕都一中の略。㊂一中節の略。—ぶし〔一中節〕(名)〔音〕京淨瑠璃の一派。江戸時代の中頃(延寶年中)、都一中の創始したもの。

いっちょう〔一調〕(名)〔音〕謠曲中の要所一段を選んで謠ひ、それに合はせて、大鼓・太鼓(ぶ)を一役だけで打つこと。

いっちょう〔一朝〕(名・副)㊀ひとあさ。あるあさ。㊁一旦。一時。㊂豫期せぬ時。㊃朝廷全體のあさ。ひとばんか。㊄暫時。かりそめ。—の怒に其の身を忘る(句)(論語顏淵篇の句)一時の怒の爲に前後を忘れる。

いっちょう〔一張〕(名)㊀或時には氣を張り、或時にはゆるめること。㊁時には働かせ、時には休ませること。

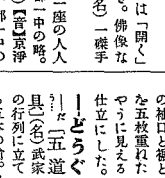
いっちょうさんしょ〔一丁三所〕(名)着物の縫目などのあらいこと。

いっちょうし〔一調子〕(名)㊀〔音〕二つ以上の音が合して一つになること。㊁一つの調子。同じ調子。

いっちょうら〔一帳羅〕(名)㊀持つてゐる着物の中で、一番上等のもの。唯一枚の晴着。㊁一枚しか着物を持つてゐないこと。

いっちょくせん〔一直線〕(名)㊀一つの直線。㊁まつすぐ。㊂ひとすぢ。

いっつ〔五〕(名)昔の時刻の名。今の午前と午後の五時。—あこめ〔五相〕(名)五枚重ねの袿を着ること。—きぬ〔五衣〕(名)平安朝の上流婦人の裝束。袿(けう)を五枚重ねて着たもの。後、一枚の衣の袖口と裾とを五枚重ねたやうに見える仕立にした。—どうぐ〔五道具〕(名)武家の行列に立てる五本の槍。又、槍の外に傘・打物を加へて五本となるのをもいふ。—のおしえ〔五教〕(名)(ごきょう)〔五常〕。—のかおり〔五香〕(名)稱檀・雞舌・香・沈水香・丁子香・安息香。—りもの〔五借物〕(名)〔佛〕地・水・火・風・空の五つ。佛説に此の五者が法界に周遍し、人間の身體なも機成してゐる元素であるとしてゐるので、「借物」といふ。—のくるま〔五車〕(名)ごしゃ。—のさわり〔五障〕(名)㊀〔佛〕婦人の有する五種の障礙。梵天・帝釋・魔王・轉輪聖王・佛身となられぬこと。㊁修道上の五つのさはり。煩惱障・生障・法障・所知障・業障。ごしゃう〔五障〕。—のたなつもの〔五穀〕(名)ごこく。(ごしょう)〔五濁〕。—のにごり〔五濁〕(名)(ごじょう)〔五常〕。—ぼし〔五星〕(名)紋所の名。圓形を、周圍に五つ並べ、中央に一つおいた紋。—もん〔五紋〕(名)羽織又は着物の背筋の上に一つ、左右の袖に一つづつ、胸の左右に各一つづつ、合計五箇所に家紋があらはしたもの。いつところもん。


〔ぬぎつつい〕

いっつう〔一通〕(名)㊀ひとつづき。㊁文書一篇。

いっつい〔一對〕(名)二箇で一組となるもの。又、その一組。

いっつお〔五緒〕(名)㊀牛車の簾の一種。簾の左右の縁と之に平行せる中央の革緒との間に、同じ革で二條の風帽を垂れたもの。㊁いつつおのくるま。—のくるま〔五緒車〕(名)五緒の簾を掛けた牛車。

いって〔五手〕(名)ごてん。

いっ〔一〕(名)自分一人の手で扱ふこと。ひとて。—はんばい〔一手販賣〕(名)〔經〕或商品を一手に引受けて賣捌すること。

いってい〔一定〕(名)㊀一つにきまつたこと。㊁きまつてあること。—ろん〔一定論〕(名)動かぬ議論。萬古にかはらぬ議論。「箇」に同じ)箇の文字。—無し(句)文字を少しも知らぬ。文盲である。

いっていじ〔一丁字〕(名)「丁」は「个の誤、「个」は「箇」に同じ)箇の文字。—せんきん〔一擲千金〕(名)運任せに冒險事業を行ふこと。英大の金錢を惜しげもなく投げ出すこと。

いってつ〔一轍〕(名)車の一筋のわだちのあること。

いってつ〔一徹〕(名)思ひこんだら動かぬこと。ひゐ込んだことを是非でもおしとほす人。強情短氣な人。いっこくもの。

いってん〔一天〕(名)㊀おほぞら。空一面。㊁一天下。—か〔一天下〕(名)天下全體。宇内。—しかい〔一天四海〕(名)いってんか(一天下)。—のきみ〔一天君〕(名)一天下の主。天皇。—ばんじょう〔一天萬乘〕(名)乘は車。支那で、天子は兵車一萬輛を出す國土を有する義による。天子は天皇の御位。

いってん〔一點〕(名)㊀一つの點。㊁少し。僅か。㊂漏刻(ろうこく)で一時(ひとき)(今の二時間)を四刻に分つた始の刻點。

いっこう〔一點紅〕(名)㊀多くの男の中で、特に目立つてすぐれたもの。—ばり〔一點張〕(名)㊀博奕で一所にばかり錢をかけること。㊁他を顧みず、思ひこんだことを頑固におしとほすこと。㊂すべてそればかりなこと。

いっと〔一途〕(名)同一の道。ひとすぢ。同一の方向。〔注〕

イット〔It〕(名)㊀あれ。それ。㊁〔クラレ・ボウ主演、米國國秀作家エリナ・グリン原作の映畫題イット」から出た言葉。性的魅力。

いっとう〔一刀〕(名)㊀一ふりの刀。㊁ひとたちの。—さんらい〔一刀三禮〕(名)〔佛〕佛像をきざむのに、一刀入れる毎に、三度禮拜すること。—ぼり〔一刀彫〕(名)一刀で簡單素朴に彫刻する刀法。又、その彫刻物。—りゅう〔一刀流〕(名)江戸時代の初期の劍道の一派で、伊藤一刀齋景久を祖とするもの。—りょうだん〔一刀兩斷〕(名)㊀一刀で二つに斬ること。㊁斷然と處置すること。

いっとう〔一等〕(名)第一の一番。最上。—こく〔一等國〕(名)國際上、最も優勢な國で、現今の日・米・英・佛等。主として互に特命全權大使を駐劄させる國。—しょう〔一等症〕(名)陸海軍軍人が戰鬪などの爲に得た病氣。—しょう〔一等傷〕(名)國民が警察官と同じ働なして不具となつた傷。又、公務の爲に斃つた死に至る程度の傷。—しん〔一等親〕(名)〔法〕第一等に當る親族。父母・養父母・子・養子をいふ。—せき〔一等星〕(名)〔天〕視眼で最も明るく見える恒星。一等から六等まである。

いっとう〔一頭〕(名)㊀一つの頭。㊁獸一匹。—ち〔一頭地〕(名)頭の高さ。〔地は接尾語〕—を抜く(句)多くの人より一段高くあらはれ出る。拔群。

いっとう〔一統〕(名)㊀一つにすべてくくること。まとめること。㊁ひとすぢ。㊂一同。全體。

いっとうえん〔一燈園〕(名)〔佛〕西田天香の創立した同信同戒の人人の道場の名。京都市伏見區山科町にある。この世の罪惡・苦患はその實が自己にあると懺悔し、天國淨土の基礎たる根本愛を祈り出さうが爲に托鉢奉仕を行じ、「光明所願」を主旨とするもの。

いっとき〔一時〕(名)㊀昔の一時(ひとき)(今の二時間)。㊁僅かの時。暫時。—ぜめ〔一時攻〕(名)むやみ

に攻め立てること。いっこくせめ。がせめ。**—だいく**〔一時大工〕(名) 一時(今の二時間)を限って雇ふ大工。**—のかれ**〔一時遁〕(名) いっすんのがれ。**—ぶみ**〔一時文〕(名) 一時ごとに書いてやる手紙。㊁多くの人が徳を同様に行ふこと。

いっとく〔一徳〕(名) ㊀一つの徳。㊁純一の徳。

いっとく〔一得〕(名) 一つの利得。**—いっしつ**〔一得一失〕(名) 一つの利益があれば、一つの不利益が伴なふこと。

いっとく〔一滴〕(名) ひとしづく。

いっところどう〔五所籐〕(名) 五箇所に籐を巻いた弓。

いっところもん〔五所紋〕(名) いっつもん。

いっとます〔一斗枡〕(名) 一斗卸ち約一八・三九リットルの量をはかる枡。内法一尺五分、深さ五寸九分一厘。

いっとも〔五部〕(名) 五組。(古語)**—のふみ**〔五部書〕(名) ㊀五種の書を一部としたもの。(古語) ㊁(こきょう)(五經)。(古語)

いっともものお……を〔五伴緒〕(名) 五部屬の長。天孫降臨杵尊に從って、この國に降られた五神。天兒根命(あめのこねのみこと)・太玉命(ふとたまのみこと)・玉屋命(たまやのみこと)・玉櫛命(たまくしのみこと)・玉櫛命(たまくしのみこと)・玉屋命(たまやのみこと)・太玉命(ふとたまのみこと)・天兒根命(あめのこねのみこと)。いっともものかみ。

いっとに〔一二〕(副) ひとつには。別に。或は。又。㊁等ら。ひとへに。

いっとのちわき〔殺威道別〕(名) 勢烈しく物をおしわけゆくさま。(古語)

いっとのぶとん〔五幅蒲團〕(名) 表裏共に五幅の神の御座に敷くむしろ。(古語)

いっとのむしろ〔殿席〕(名) いみ清めたむしろ。(古語)

いっぱ〔一波〕(名) ㊀一つの波。㊁一つの出來事。

いっぱ〔一派〕(名) ㊀一流のわかれ。㊁學藝・宗教の一つのわかれ。

いっぱい〔一杯〕(名) ㊀一つの杯。㊁一つの杯にはひる分量。㊂十分に充ちたこと。㊃物事の全體に亙ること。行きわたること。㊄ごさかもり。㊅相撲決

相撲ふこと。損益のないこと。**—きげん**〔一杯機嫌〕(名) 酒に酔って愉快なさま。**—さき**〔一杯醫〕(名)〔勸醫の一種。形小さく肉少く、値かに一杯の量に過ぎないからいふ。**—びらき**〔一杯開〕(名) 帆船が風に逆って進む時の航法の名。

いっぱい〔一敗〕(名) ㊀たびやぶれること。㊁一度失敗すること。**—地に塗る**(句) 一度戰に敗れて、再び起つことのできぬにいふ。

いっぱい〔一杯〕(副) ㊀すこし。ちょっと。㊁十分

いっぱかり〔何時許〕(副) いつごろ。(古語)

いっぱく〔一白〕(名) ㊀一面に白いこと。(古語) ㊁馬の一肢の下端に白い斑のあること。㊂九星の一。

いっぱし〔一端〕(副) 一人前に。人並顔に。

いっぱつ〔一髮〕(名) ㊀一筋の髮。㊁一筋の髮の毛を横たへた程にかすかに見えること。㊂少しのすきま。**—せんきん**〔一髮千鈞〕(名) 一筋の髮の毛で千鈞の重あるものを引くことで、きれようとして繊かいつながってゐるさまにいふ。極めて危險なこと。

いっぱつ〔俠罰〕(名) 不當な罰。

いっぱん〔一般〕(名) ㊀一般の人。㊁一般の帆前。

いっぱん〔一帆〕(名) ㊀一つの帆。㊁一つの帆前。

いっぱん〔一飯〕(名) ㊀いっぺんの食事。㊁一椀のめし。**—の德**(句)〔史記范雎傳の句〕漢の韓信が洗濯婆に一飯を惠まれた故事から、一度の飯を食はせられた恩、卽ち僅かばかりの惠み。

いっぱん〔一斑〕(名) ㊀一つのまだら。㊁一部分。

—を見て全豹を卜す(句)〔晉書の王獻之傳に「此郎亦管中窺豹、時見一斑」とあり、豹の皮の一部分の斑を見て他の部分の斑であることを推知するとから、物事の一部分を見てその全體を推知することにいふ。

いっぱん〔一班〕(名) ㊀一つの列。㊁一つの階級。

いっぱん〔一判〕(名) ㊀一つの判。一人の判。

いっぱん〔一般〕(名) ㊀全體。總體。㊁同一。世の常。一樣。**—かいけい**……〔一般會計〕(名)〔法〕會計法に準拠する國家の普通の會計。(特別會計の對)〔一般概念〕(名)〔論〕(General concept) 箇箇の事物に共通した特性を抽象した概念。**—かんかく**〔一般感覺〕(名)〔心〕(General sensation) 一般感情の基礎となる感覺。普通感覺。**—じん**〔一般人〕(名) 特別の地位・身分を有しない人。普通の人。**—すう**〔一般數〕(名)〔數〕文字を以てあらはされた數。**—とうひょう**〔一般投票〕(名)〔政〕制限しないで、一般に行はるる投票。**—ほう**〔一般法〕(名)〔法〕主權の下にある全國一般の人者しくは一切の事項に通用せられる普遍の法律。憲法・民法・刑法等。**—ほうりゃく**……〔一般方略〕(名) 演習などに於ける兩軍共通の方略。(特別方略の對)**—めいじ**〔一般名辭〕(名)〔論〕(General term) 一般概念を表はす名辭。多數の事物に共通な特徴を表はす名辭。**—ろうどうしゃくみあい**……〔一般勞働者組合〕(名)〔社〕勞働組合の一。一般の不熟練勞働者・半熟練勞働者等を一纏めにして組織したもの。

いっぴ〔溢美〕(名) 過分のほめかた。過賞。

いっぴ〔一匕〕(名) ㊀ひとさじ。㊁一本の短刀。

いっぴ〔一臂〕(名) ㊀かたうで。㊁少しの助力。**—の力**(句) 少しの力をへ。**—を假す**(句) 少しの助力を與へる。

いっぴつ〔一筆〕(名) ㊀一本の筆。㊁墨つぎせず通の書面。㊂ひとくぎりの田畠・宅地の記録。**—が**〔一筆書〕(名) 一筆で墨つぎをせずにかいた簡單な畫。**—がき**〔一筆書〕(名) ㊀一筆で書くこと。㊁一筆毎にわけて書くこと。**—けいじょう**……〔一筆啓上〕(名)〔一通の書面で申し上げるの意。又用事のみ一筆書くの意〕手紙の冒頭に用ひる語。

イッピードラマ〔獨 Ich-drama〕(名)〔文〕自己體驗の告白、卽ち主觀を極度に尊重するドイツ表現派の戲曲又は演劇。一人稱戲曲。

いっぴん〔一品〕(名) ㊀一つの品。㊁最もすぐれた品。「天下一」。**—りょうり**……〔一品料理〕(名) 西洋料理店で、一品づつの價をきめて客の自由選擇に應ずる料理。

いっぷ〔一夫〕(名) ㊀一人のかつぎ。㊁一人の男。㊂一人の武人。**—**(名) ㊀一人の夫に對して一人の妻のあること。(一夫一婦)(名) 一人の男が二人以上の妻を持つこと。(一夫一婦・一妻多夫の對)**—たさい**〔一夫多妻〕(名) 一人の男が二人以上の妻を持つこと。(一夫一婦・一妻多夫の對)**—開に當れば萬夫も開くなし**(句)〔李白の「蜀道難」の詩の句〕險阻な山路の形容。

いっぷう〔一風〕(名) 氣質・態度などの他とかはつた點。「てゐるかこと。

いっぷうりゅう……〔一風流〕(名) ㊀いっぷう(一風)。㊁一つの風流。

いっぷく〔一腹〕(名) 同じ母の腹から生まれること。同腹。**—いっしょう**……〔一腹一生〕(名) 同じ父母から生まれた兄弟・姉妹。

いっぷく〔一服〕(名) ㊀煎茶・煙草などを一回飲むこと。㊁一回飲むだけの粉藥一包の量。㊂ひとやすみ。㊃番藥。**—いっせん**〔一服一錢〕(名) 昔、路傍などで一服の煎茶を一錢で賣ったこと。又其の人。**—盛る**(句) 番藥を調合して人を殺すこと。

いっぷくがけ〔一幅掛〕(名) 床間に軸・軸一幅をかけて、其の下に置物・盆花などを一つ置くこと。

いっぷすす〔鑄潰す〕(他動・サ四) 金屬の器物を鑄かして、再び地金とすること。

いっぷん〔逸文〕(名) ㊀世にあらはれぬ文章。㊁散逸して知られぬ文章。

いっぷん〔逸聞〕(名) 世に傳はらぬ話。

いっぺ〔厳瓮〕(名) 神を祭るに用ひられる神酒を盛る器。(古語)

いっぺき〔一碧〕(名) 一面にあをい色となること。

いっぺん〔一遍〕(名・副) ひとたび。一度。ひととほり。**—こっきり**(名・副) 一度限り。

いっぺん〔一遍〕(名)〔人〕時宗の祖。越智氏。諱は智眞。伊豫國の人。別に融通念佛の一派を開く。

諸國を遊行したから、遊行上人と稱する。正應二年（一九四九）寂。年五十一。明治十九年、謚號を賜はって圓勝寺大師と稱す。

いっぺん〔一片〕(名) ㊀ひとひら。ひときれ。㊁一方。かたかた。すこし。

いっぺん〔一邊〕(名) ㊀いっぱう（一方）。㊁一箇

いっぺん〔一偏〕(名) 一方にかたよること。

いっぺん〔一變〕(名) 物事のまるでかはること。

いっぽ〔一歩〕㊀ひとあし。ひとあゆみ。㊁いちだん。**—は高く一歩は低く**(句) 醉客のふらふらとあるくさま。

いっぽう〔鵝鮮〕(名) しきりとはまぐりと。**—の爭**(句)（戰國策の燕策に出るしきりとはまぐりが爭つてゐる間に、兩方とも漁夫に得られたといふことから、二人が利を爭つてゐる間に、第三者に横どりせられて、共倒れになることを戒めた語。

いっぽう〔一方〕(名) ㊀一つの方面。㊁かたはう。㊂いちづ。專一。「武藝一」。**—ぐち**〔一方口〕(名) 三方ふさがつて、一方だけあいてゐる出入口。**—こういん**〔一方行爲〕(名)【法】たんどくこういん（獨行院）を見。

いっぽう〔一報〕(名) 一度の知らせ。ちょっと。

いっぽう〔一抔〕(名) 掌でひとすくひすること。

いっぽん〔一品〕(名)【佛】親王の位階の第一階。㊁【佛】經卷中の一卷。**—きょう**〔一品經〕(名)【佛】法華經二十八品を一品づつ一軸の卷に仕立てた經卷。又、それを順次に讀誦すること。

いっぽん〔一本〕(名) ㊀一冊又は一部の書籍。或書物。㊁異本。㊂單獨行爲。

いっぽん〔一本〕(名) ㊀一つ。ひとつ。㊁ひとかぶ。ひとしな。㊂ひとすぢ。㊃ひとたち。㊄一人前の藝妓。㊅同腹。同類。**—ぎ**〔一本氣〕(名) 一途に思ひ込む氣象。㊁ものしりけのない。こと。**しめじ**……〔一本濕地〕(名)【植】菌類の一。一本づつ生ずる淡紅灰色のしめぢ。**—ずり**〔一本釣〕(名) 手釣の一種。魚を釣るに竿を用ひず、釣糸に鉤と錘とをつけて釣ること。**—せおい**……〔一本背負〕(名) 相撲の手。相手の片手をとって背負ひなげにすること。**—だち**〔一本立〕(名) ㊀樹木が唯一本廣い野なとにあること。㊁他人の助けによらず、己一人の力で世を渡ること。獨立。㊂自分一人で仲間のないこと。孤立。**—の・どしょどころ**〔一本御書所〕(名) 內裏の建春門の外にあつて、獻進した本を藏めてあつた所。**—ば**〔一本歯〕(名) 高下駄の歯の一枚のもの。**—ばし**〔一本橋〕(名) ㊀一本の材木を渡した橋。㊁まるきばし。**—やり**〔一本槍〕(名) ㊀槍一突で勝負をなきほすこと。㊁唯一のすぐれたわざ。**—ぶる**(句) ㊀無理におしとほすこと。㊁相手を請負すること。

いつまき・のひ〔五卷日〕(名)【佛】最勝王經の五卷目を講ずる最勝講の中央に當る日。ごくわんのひ。

いつまでぐさ〔佛甲草〕(名)【植】「まんれんぐさ」の一品種で、葉の輪生せぬもの。めのまんれんぐさ。

いつ・みん〔逸民〕(名) ㊀世をのがれた人。㊁無位の人。

いつも〔何時も〕(副) 常に。**—ごと**〔何時も事〕(名) いつもあること。例の事。珍しくないこと。**—ながら**〔何時も乍ら〕(副) いつでも。**—何時も正月**(句) 常に無樂なさま。

いつ・や〔乙夜〕(名) 昔の二更。今の夜の十時。**—の覽**(句)（杜陽雜編の句）支那の昔、天子は雲間政務に多忙の爲、午後十時過に讀書されたこと。轉じて、天子の御書見。

いつ・ゆう〔佚遊・逸遊〕(名) 樂しみ遊ぶこと。ほしいままに遊ぶこと。

いつ・らく〔逸樂・佚樂〕(名) 遊び樂しむこと。

いつ・わ〔逸話〕(名) 世間によく知られぬ話。

いつわり〔偽〕(名) ㊀いつはること。事實でないこと。あてにならぬこと。㊁眞正でない事實。㊂誠實でないこと。㊃自然でないこと。㊄あざむくこと。だますこと。うそ。**—ごと**〔偽言〕(名) いつはりの言。つくりごと。そらごと。うそ。**—びと**〔偽人〕(名) いつはる人。うそつき。**—ひょうり**……〔偽表裏〕(名) 相撲の手。相手の片手を

〔偽者〕(名)（いつわりびと。）**—の時雨**(句) 陰暦十月に降る時雨。定家の歌の「偽のなき世なりけり神無月誰が誠よりしぐれそめけん」に基づく。**いつ・わる**〔偽る〕(自動、ラ四) だます。あざむく。たぶらかす。

いつわる〔偽る〕(自動、ラ四) まことをいはぬ。うそをいふ。たぶらかす。

いて〔凍〕(名) こほること。氷結。しみ。

いて〔射手〕(名) ㊀弓を射る人。㊁弓術に長じた人。**—ぞえ**〔射手具足〕(名) 射手の裝束と要具。**—すおう**〔射手素襖〕(名) 犬追物・笠懸などの時、射手の着る素襖。**—の・そう**〔射手奏〕(名) 往古、五月五日の節會の騎射の式に、射手の姓名を奏聞した事。**—ぶね**〔射手船〕(名) いくさの時、射手の乘る船。

いて(感) ふと思ひ立つ時、又は人を誘ひ促す時に用ひる語。どりゃあまあ。いやまう。贅に。(古語)**—いいで**(感) いさいさ。どれどれ。(古語)**—そよ**(副) いでそれよ。いやまうそれよ。いで。(古語)**—や**(感)「いで」を強めていふ語。

いて〔井手〕(名) ㊀用水をせきとめてある所。ゐぜき（井堰）。㊁地京都府綴喜郡にある町。**—の・さだいじん**〔井手左大臣〕(名)【人】橘諸兄の異稱。**—の蛙**(句) 昔、節信といふ人が、紙に包んで持つてゐたと傳へられる京都府綴喜郡井手の玉川の蛙（袋草子）。**—の下帶**(句) ㊀昔、山城國井手に行つた男が、少女に帶を解いて與へておいたが、年を經てそこでめぐりあつて契を結んだといふ傳說。（大和物語）㊁別れてゐた男女が、再びめぐりあつて契を結ぶこと。

いてあけみ〔井手曙覽〕(名)【人】江戸時代の歌人。稻氏。福井の人。その和歌は、萬葉集中の新樂と古今集中の古體とを採つて範とすべきことを唱へ、古今雅俗になづまない洒脫な格調である。明治元年（一八六八）歿。年五十七。「志濃夫廻舍集」「古今集垣間見」等の著がある。

いてい〔異體〕(名) 普通とはちがつた姿。

いてい……〔出居〕(名) ㊀出てゐること。(古語) ㊁來客に對面する座敷。客殿。客室。應接間。(古語)

—どの〔出居殿〕(名) 客殿。客室。(古語) **—のざ**〔出居座〕(名) 昔、朝廷で儀式を行はれる時に定められる座席。(古語) **—の・じじゅう**〔出居侍從〕(名) 昔、儀式の時、出居の座に就いた侍從。(古語) **—の・じしょう**……〔出居次將〕(名) 昔、儀式の時、出居の座に就いた近衛少將。出居の少將。出居のすけ。(古語)

イディオム〔Idiom〕(名) 慣用語。慣用句。

いでいぬ〔出往ぬ〕(自動、ナ變) 家や國を出て行くの。(古語)

いでいり〔出入〕(名) 出ることはひると。ではひり。でたりはけひったり。

いでいる〔出入る〕(自動、ラ四) 出たりはひったりする。

いでいる〔出居る〕(自動、ワ上一) 出てゐる。

いでおう〔出逢ふ〕(自動、ハ四行) 「きあふ。であふ。

いでおぶね……〔出小舟〕(名) 港を出る小舟。

イデオロギー〔獨 Ideologie〕(名)【哲】事物に對する基礎的思惟。觀念形態。意識形態。

いでかて〔出難し〕(副) 出にくく。出がたく。

いでき〔夷狄〕(名) 王化にうるほはぬ野蠻人。えびす。えみし。

いでき・え〔出消〕(名) すること。のはえばえしくない事。さまいでてはえばえしくないこと。（いでばえの對）(古語)

いでく〔出來〕(自動、カ變) ㊀出てくること。あらはれる。(古語) ㊁生まれる。成る。できる。生ずる。(古語) ㊂めぐりあふ。でくはす。(古語)

いでしお〔出潮〕(名) 月の出る頃にさして來る潮。でしほ。みちしほ。さししほ。

いですぎ〔出退〕(名) 出ようとしてあとへもどること。(古語)

いでずら〔出頬〕(名) 出しゃばること。又、その顏。「の顏を罵る語。

いでたたす〔出立たす〕(自動、サ四) 「出て立つ」の敬語。(古語)

いでたち[出立](名) ㊀出て行くこと。しゅったつ。㊁よそほひ。みだしたく。扮装。㊂すがた。㊃立身。(古語)**—いそぎ**[出立急](名) 出立の準備。(古語)**いでたつ**[出立](自動・タ四) ㊀出て行く。出て始める。(古語) ㊁旅立つ。㊂よそほふ。身支度する。(古語) ㊃しゅっぜする。(古語)

いてつ[鑄鐵](名)(いちゅうてつ)。

いてばえ[出榮](名) すること。いてきえの對。(古語)

いでばし[出船](名) 出帆する船。でぶね。入船。

いでまし[出座](名) 行幸。みゆき。(古語)**—どころ**[出座處](名) 行幸なさる處。(古語)

いでまじろう[出交ろふ](自動・ハ四) 世の中に出て交る。(古語)

いでます[出座す](自動・サ四) ㊀出で給ふ。㊁行幸なさる。(古語)

いでみのはま[出見濱](名)【地】大阪市住吉區住吉神社の西の海濱。潮干狩の名所。(歌枕)

いでむこう[出向ふ](他動・ハ四)出て對面する。出迎へる。(古語)

いでゆ[温泉・出湯](名)(おんせん)。(古語)

いてる[(ててる)](自動・ラ下一)㊀いつの日語。㊁こほって破壞する。

いてん[移轉](名) ㊀物事のうつりかはること。場所をうつすこと。

いでん[(位田)](名) 貴・五位以上の位階によって賜はった田地。親王・内親王は、一品の八〇町から四品の四〇町に至り、臣下は正一位の八〇町から從五位の八町に至る。

いでん[遺傳](名)【生】(Heredity)祖先の心身の性狀が子孫に傳はること。**—せい**[遺傳性](名)【生】病氣などの親から子孫に遺傳する性質。**—びょう**[遺傳病](名)【醫】先天的に親から子孫に遺傳する病氣。**—ぶっしつ**[遺傳物質](名)【生】生殖細胞内に存する物質で、親の心身の性狀を子に遺傳する特殊の能力を有するもの。

いと[絲・糸](名) ㊀蠶・繭・麻・毛などの纖維を細く長くひきのばして、よりをかけたもの。織物・縫絲・編物などに使用する。㊁琴・三味線に張って鳴らす絃。㊂三味線の異稱。㊃絹絲。㊄釣絲。㊅細長くして絲のやうな線狀。**—を引く**(句)長く線いて絶えない。

いと[意圖](名) ㊀考。おもはく。

いと[最](副) 甚だしく。至って。最も。(古語)**—いたし**(句)甚だきつい。(古語)**—なし**(句)小さい。(古語)**—もなし**(句)取立てていふ程のこともない。(古語)

いと[幼](接頭)或語に冠していとけない の意を表はす語。「宮」「姫宮」。(古語)

いど[緯度](名)【地】赤道に平行して地球の表面を南北に測る座標。赤道を零度として南北各九〇度に至る。北に測るを北緯、南に測るを南緯といふ。**—かんそくじょ**[緯度觀測所](名)【法】緯度の變化を測定する爲に、天體の觀測をなす所。岩手縣水澤緯度觀測所は、萬國觀測所中央局で、文部大臣の管理に屬する。**—へんか**[緯度變化](名) 地球の自轉軸が少しづつ變動する爲、地球上の緯度に週期的變化を來たすこと。

いど[異土](名) 異國。外國。

いど[井戸](名)「戸」は假借の文字。地を掘って湧いた地下水を溜め、吸上げ又は汲みとるやうにしたもの。**—がえ**[井戸替](名) 井戸の水をすっかり汲上げて、井戸を清く掃除すること。**わ**[井戸側](名)[井戸替](名) 井戸の水を落ちるのを防ぐ爲に、長大な圓筒狀の木又は石で周圍をかこったもの。**—ぐるま**[井戸車](名) 井戸の上の横木につるし、井戸繩をかけて釣瓶を上下させる滑車。**—ずな**[井戸網](名)(いどがえ)。**—ずなさらえ**[井戸網](名)(いどなわ)。**—ながし**[井戸流](名) 井戸の周圍に設けたながし。**—なわ**[井戸繩](名) 釣瓶につけて水を汲みあげる繩。**—ばた**[井戸端](名) 井戸のほとり。**—ばたかいぎ**……[井戸端會議](名) 共同井戸のあたりで、妻女などが、水を汲み、又はいろいろの仕事をしながら、人の噂や世間話をすること。又、其の人。**—ぼり**[井戸掘](名) 井戸を掘ること。又、其の人。**—やかた**[井戸屋形](名) 井戸のほとりに柱を立てて、上に屋根を設けたもの。

いとあやつり[絲操](名) 操人形の一種。人形に絲を附け、上からそれを動かしてあやつるもの。なんきんあやつり。

いとあせぜ……[絲合](名)二つの琵琶の絃をひきあはせて調子をとること。ねこ。

いとあやつり[絲操](名) 操人形の一種。人形に絲を附け、上からそれを動かしてあやつるもの。なんきんあやつり。

いとあせぜ……[絲合](名)二つの琵琶の絃をひきあはせて調子をとること。ねこ。

いとあわび[絲鮑](名) 生鮑を細く絲狀に細くきざんだもの。「刻んだ絲狀に細くきざんだ鮑」。

いとい[厭](名) いとふこと。きらひ。

いといり[絲入](名) 絹絲を絲綿の中にまぜて織つた織物。**—じま**[絲入縞](名) 絹絲をまぜて織つた縞織物。**—つむぎ**[絲入紬](名) いといりふたこ。**—ふたこ**[絲入雙子](名) 絹絲をまぜて織つた雙子。「ふたこ」は二筋よりあはせた絲で織つた織物。

いといん[絲印](名) 室町時代に明國から輸入した生絲におした銅印。刻した文字は讀み難い。つまみは、人物・動物等の形なるし、織豐時代の武將などが愛玩した。

〔いといん〕

いとう[(とふ)](他動・ハ四)に思ふ。きらふ。いやがる。㊁此の世をきらふ。㊂いたはる。かばふ。

いどう[異同](名) 異なること。同じくないこと。

いべん[異同辨](名) 異同の辨別。

いどう[移動](名) うつりうごくこと。ひきうつり。うごき。**—けいさつ**[移動警察](名)【法】鐵道關係の犯罪を取締る爲に、列車内に刑事巡査を乘り込ましめること。我が國では大正十一年から實施した。**—さつえい**[移動撮影](名) 活動寫眞で、動いてゐるものにつれて、キャメラを動かして寫す方法。**—ぶたい**[移動舞臺](名) 舞臺の兩側に、本舞臺の外に次の舞臺を作って置いて、車輪裝置で舞臺を移動する舞臺裝置。**—ほんぶ**[移動本部](名)【社】社會運動・勞働爭議などで、官憲捜索の手を免れる爲、その本部を絶えず移動させること。又、その本部。

いとう[伊東一刀齋](名)【人】江戸時代初期の劍客。伊豆の人。名は彌五郎。景久・友景と稱する。寛永九年、家光將軍上覽試合の時は、九十餘歳であった。

いとう[(とう)](名)【動】いとよりだいの(絲拉蛸)。

いとう[(とう)]**けいすけ**[伊藤圭介](名)【人】本草學者・植物學者・理學博士。美濃の名古屋の人。東京帝國大學名譽教授。明治三十四年(一九〇一)歳。年九十九。「泰西本草名疏」「日本植物圖說」その他の著述がある。

いとう[(とう)]**さちお**[伊藤左千夫](名)【人】明治時代の歌人。本名幸二郎。千葉縣の人。明治三十二年正岡子規の門に入り、子規の歿後「馬酔木」「アララギ」等を發刊し、子規の遺志を強調した。歌風は雄大・豪壯の萬葉風を以て聞え、門下に赤彦・茂吉・憲吉・千樫・文明等の俊秀を出した。大正二年(一九一三)歳。年五十。「左千夫歌集」「左千夫歌論集」等の著がある。

いとう[(とう)]**じゃくちゅう**[伊藤若冲](名)【人】江戸時代の畫家。名は汝鈞、字は景和。京都の人。狩野家に學び、後、元・明の古法を模し、光琳の筆意を混じて一派を開き、人物・山水・鳥獸に巧みであった。其の畫僧は米一斗であったから、斗米庵と號する。寛政十二年(二四六〇)歳。年八十五。

いとう[(とう)]**じんさい**[伊藤仁齋](名)【人】江戸時代の儒者。名は維楨。字は源佐。仁齋は其の號。又、古義堂と號する。京都の人。古學を京都堀川塾に教授した。門弟三千。寶永二年(二三六五)歳。年七十九。謚して古學先生といふ。その著に「論語古義」「孟子古義」「童子問」「古學先生文集」等がある。

いとう[(とう)]**すけちか**[伊東祐親](名)【人】工藤

一族。祐家の子。伊豆國賀茂郡河津に住んで河津二郎と稱した。時、始めは之を援けたが、後、之を惡み、石橋山の戰に之を襲撃した。壽永元年(一八四二)頼朝に捕はれ自刃した。

いとうあ〔絲打〕(名)絹絲で組んだ紐。

いとうとうがい〔伊藤東涯〕(名)【人】江戸時代の儒者。仁齋の長子。通稱源藏。名は長胤。博覽强記、經義に精通した。元文元年(一三九六)歿。年六十七。諡して紹道先生といふ。

いとうひろぶみ〔伊藤博文〕(名)【人】政治家。大勳位・公爵。初名は俊輔、春畝と號した。山口縣萩の人。帝國憲法・草案し、內閣總理大臣・樞密院議長に歷任し、又、明治二十七八年戰役に講和全權として偉勳を建て、明年、韓國統監となる。明治四十二年(一五六九)滿洲視察の際、哈爾賓で韓人に狙撃せられて薨。年六十九。

いとうゆうこう〔伊東祐亨〕(名)【人】海軍大將・元帥・伯爵・大勳位。鹿兒島縣の人。日清戰役當時の聯合艦隊司令長官。日露戰役當時の海軍軍令部長。大正三年(一五七四)薨。年七十二。

いとおし〔愛ほし〕(形、二)㊀かはゆい。愛らしい。いとしい。不憫である。㊁かはゆい。愛らしい。おしいの口語。—**がる**〔愛ほしがる〕(他動、ラ四)いとほしく思ふ。不便に思ふ。—**げ**〔愛ほしげ〕(名)いとほしいさま。—**さ**〔愛ほしさ〕(名)いとほしいこと。又、その度合。—**み**〔愛ほしみ〕(名)いとほしむこと。—**む**〔愛ほしむ〕(他動、マ四)いとほしく思ふ。(古語)

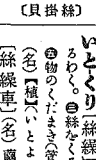
いとおす〔射通す〕(他動、サ四)矢を射て貫く。

いとおどし〔絲縅〕(名)甲冑の組絲でなどしたもの。其の絲の色によって赤絲縅・黑絲縅等、種種の名がある。(革縅の對)

いとおり〔絲織〕(名)機絲で織つた絹織物。—**ひめ**〔絲織姬〕(名)たなばたひめ(棚織姬)。(古語)

いとかい〔絲具〕(名)【動】(いとかけがい)。

いとかけがい〔絲掛具〕(名)【動】服足・氣の具。殼長三糎餘。蟻(ぢ)に似て小さく、圓錐形で純白、殼は螺をなし、外面の隆起縱線は、白絲をかけたやうである。


〔貝掛絲〕

いとかけぼら〔絲掛法螺〕(名)【動】(いとかけがい)。

いとがとうげ〔絲我峠〕(名)【地】和歌山縣有田郡糸我庄にある山。中將姬の古蹟といふ。

いとなし〔稚し〕(形、一)いとけなし。(古語)

いときり〔絲切〕(名)㊀陶器の底。「ろくろ」から絲で切りとった所。㊁いとぎこ。—**だんご**〔絲切團子〕(名)【生】人類の大腦。絲を食ひ切るに用ひるからいふ。

いとく〔懿德〕(名)善美な德。

いとく〔遺德〕(名)死後にのこる恩德。後世にのこる恩德。

いとく〔威德〕(名)威嚴があって德の高いこと。人を畏服させる威嚴と人を心服させる德。

いとくず〔遺毒〕(名)後世にのこる害毒。

いとくそく〔絲屑〕(名)㊀縫絲・拔絲の用をなさぬもの。㊁兩から取った殘りの絲の用をなさぬもの。

いとくぢ〔絲口緒〕(名)㊀絲の端。㊁はじまり。てがかり。發端。端緒。

いとくつ〔絲鞋〕(名)絲を編んでつくった靴で、代の天皇。安寧天皇の御二皇子。御名に大日本彥耜友尊(おほやまとひこすきとものみこと)と稱し、在位三十四年にして崩御。(一四四)

いとくてんのう〔懿德天皇〕(名)第四

いとくらげ〔絲座〕(名)三味線の棹の上の絲を卷く白色・透明で、さうめんに似た長い絲狀のものをひき、觸れればさわり。

いとくらげ〔絲水母〕(名)【動】くらげの一種。

いとくらべ〔絲競〕(名)琴・三味線などを彈いて調前をきそふこと。

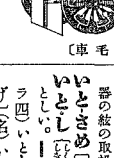
いとくり〔絲繰〕(名)㊀絲をくること。㊁絲をくること。㊂繭【植】(おだまき)・苧環。㊃物のくだまき(管卷)。(名)【植】(いとよりだい)(絲搓鍋)。—**らお**〔絲繰魚〕(名)【植】(いとよりだい)(絲搓鍋)。

いとくりぐるま〔絲繰車〕(名)繭や棉花から絲を引出し、又、よりあはせるに用ひる車。

いとぐるま〔絲車〕(名)いとくりぐるま。

いとげ〔稚げ〕(名)㊀いとけなさま。(古語)

いとげ〔絲毛〕(名)㊀いとけなさま。㊁(いとおとし)。—**のくるま**〔絲毛車〕(名)牛車の屋根を色染のよりの絲で菱のやうに甚きおろし飾つたもの。赤絲毛・青絲毛・紫絲毛などの種類がある。院・中宮・皇后・內親王・攝政・關白などの乘用。


〔車毛絲〕

いとけ〔稚し〕(形、一)いとけなし。(古語)

いとけなし〔稚し〕(形、一)㊀かはゆい子。他人の子を親しんで呼ぶ。㊁なさない。おとなげない。頑是ない。年がちひさい。

いとこ〔從兄弟・從姉妹〕(名)父又は母の兄弟姉妹の子。—**あわせ**〔從兄弟合〕(名)いとこ同志を夫婦にすること。—**おおおじ**〔從兄弟大小父〕(名)祖父母のいとこ。族伯祖父。—**おおおばあ**〔從兄弟大小母〕(名)祖父母のいとこ。族伯祖母。—**おじ**〔從兄弟小父〕(名)父のいとこ。(從祖父)。—**おば**〔從兄弟小母〕(名)父のいとこ。(從祖母)。—**ちがい**〔從兄弟違〕(名)父母のいとこ。—**どうし**〔從兄弟同士〕(名)互にいとこであること。—**に**〔從兄弟煮〕(名)(おびおびに入れて煮る意。甥鯛に似るをしゃれていふ)牛蒡・大根・豆腐・蒟蒻等を、味噌汁に入れて煮た料理。—**むこ**〔從兄弟聟〕(名)從兄弟に當る人の聟。—**め**〔從兄弟女〕(名)いとこに當る婦人。—**よめ**〔從兄弟嫁〕(名)いとこの妻。

いとところ〔居所〕(名)㊀ある所。ゐばしょ。座席。㊁單身でゐる所。(住所の對)

いとどんにゃく〔絲蒟蒻〕(名)絲のやうに細く切つたこんにゃく。しらたきに似る。

いとさき〔絲先〕(名)伊勢大神宮に奉る絲の初穗。

いとざくら〔絲櫻・軟條海棠〕(名)【植】「ひがし」(名)【植】「こうらいしば」(高麗柴)。

いとし〔絲芝〕(名)【植】(こうらいしば)(高麗柴)。

いとしぼ〔絲芝〕(形)かはいさうなさま。(古語)

いとしぼなげ〔絲芝なげ〕(名)かはいさうなさま。

いとしょう〔絲湊〕(名)昔、筑前國絲島郡怡土にあった城。上古の伊覩縣主の居址。孝謙天皇の天平勝寶八年(一四一六)大宰大貳吉備眞備が重修して大城となし、太宰府の防禦としたもの。

いとじり〔絲尻〕(名)いとぞこ。いときり。

いとしん〔絲心〕(名)絲を芯とした蠟燭。—**ろうそく**〔絲心蠟燭〕(名)彫刻の一。絲のやうに細い線を彫りすかしたもの。

いとすかし〔絲透〕(名)【植】「こうでかしは」の變

いとすぎ〔絲杉〕(名)【植】

種。幹は直上し、枝葉は纖細で下垂する。

いとずくり……【絲作】(名) 料理の名。魚肉などを絲のやうに細く切って作ったもの。

いとすげ【絲菅】(名)【植】莎草科の多年生草本。山崖や陰地に生ずる。莖は線狀をなし、高さ一〇—二〇糎、葉は狹線形で莖よりも越出。小穗は二乃至四箇、線形で長穗があり、雌花穗は黃褐色。

いとすじ【絲筋】(名) ㊀絲の筋。㊁絲の知く細長いもの。㊂樂器の柱。

いとすすき【絲薄】(名)【植】すすき」の變種。葉・莖共に細く、穗は紫赤色をなすもの。

いとぞこ【絲底】(名) 陶器の底にある座。いとどり。いときり。

いとたけ【絲竹】(名) ㊀樂器。琴・琵琶・笙・笛等の類。㊁音樂。音曲。**—の道**(句) 音樂の藝。

いとだて【絲立】(名) 絲を入れておく造紙の袋。

いとだて【絲經】(名) たてを麻絲・よこを楮で織たむしろ。旅行などに、日除・雨覆として著用するもの。

いとど【蟋蟀】(名)【動】(こおろぎ)。

いとど【最最】(副)(「いといと」の略)いよいよ。ますます。甚だしく。ことさらに。(古語)

いとどけ・し【形シク】(形、一)いとどし。(古語)

いとどし【形シク】(形、一)いよいよ甚だしい。(古語)

いととり【絲取】(名) ㊀蠶から絲を紡ぎ出すこと。又、その人。いとくり。㊁遊戲の名あやとり。

いとなし【絲取女】(名) 絲取をする工女。

いとなし【暇無し】(形、一)いとまがない。いそがしい。(古語)

いとなぶ【營ぶ】(他動、バ四)營む。(古語)

いとなます【絲膾】(名) 鮒の膾。大根・人參をこまかに刻み、魚肉を細長く切ったものを混に、三杯酢で和へた料理。

いとなみ【營】(名) ㊀いとなむこと。すること。しごと。しわざ。㊁世渡の仕事。營業。㊂したく。用意。**—に**【營に】(副) 常にいとまなく。(古語)

いとなむ【營む】(他動、マ四) ㊀すること。

—おんな……を【絲取女】(名) 絲取をする工女。又、その人。いとくり。㊁遊戲の名あやとり。

—なし【暇無し】(形、一)いとまがない。(古語)

—ぶ【營ぶ】(他動、バ四)營む。(古語)

—ます【絲膾】(名) 鮒の膾。大根・人參をこまかに刻み、魚肉を細長く切ったものを混に、三杯酢で和へた料理。

いとなむ【營む】(他動、マ四) ㊀すること。しごと。しわざ。㊁世渡の仕事。營業。㊂したく。用意。**—に**【營に】(副) 常にいとまなく。(古語)

いとなむ【絲むむ】(他動、マ四) ㊀すること。㊁蠶の仕事。㊂喪中にひきこもること。㊃離絲。㊄すきまもなく。(古語)㊅別れ去ること。**—ごい**……【暇乞】(名) ㊀別れを告げること。㊁いとまを賜はるやうに願ふこと。**—じょう**……【暇狀】(名) 暇をやる書狀。職務を免する辭令。離絲狀。**—ぶみ**【暇文】(名) 暇を請ふ願書。辭表。**—もうし**……【暇申】(名) 暇を請ふこと。(古語)㊁別れを告げること。(古語)**—明く**(句) いとまとなる。ひまになる。**—いる**(句) 時間を多く要する。**—の**ひま(句) ひま。無事の間。(古語)**—申す**(句) 暇間ゆ。**—を取る**(句) ㊀職を辭する。㊁夫婦の緣を切る。**—を遣る**(句) ㊀辭職を許す。㊁夫婦の緣を斷って去らせる。

いとまき【絲卷】(名) ㊀絲を卷いて置く具。㊁女の髮の結び方で、髮を卷いて結び、絲卷に似せたもの。㊂三味線の頭部に貫いて絲を卷きつけるもの。琵琶では轉手(てんじゅ)といふ。㊃紋所の名。かげのいとまき・かさね・いとまき・みつかさね・いとまき等種類が多い。㊄いとまきのたち(絲卷太刀)の略。**—あじ**【絲卷鯵】(名)【動】鰺の一種。體は菱形で側扁し、背部は碧色、腹部は白色、背鰭と臀鰭とは先端絲卷狀をなし、體長の二倍の長さを有する。**—のたち**【絲卷太刀】(名)柄及び帶取を平組の絲で卷いた太刀。いとまき。

〔鰺卷絲〕

ひとで【絲卷人手海燕】(名)【動】アステリナ科の動物。體は五稜形で絲卷に似、きりこみ淺く、口側は橙黃色扁平、反口側は鼠黑色と橙赤色とが入混った斑紋をなす。**—ゆば**【絲卷湯婆】(名) 方形に切った湯ばし。

いとまさ【絲柾】(名) 木材の木理の絲のやうに細まである。きそひあらそふさまである。(古語)

いとまし【絲柾し】(形シク)いとむさまである。きそひあらそふさまである。(古語)

—げ【挑ましげ】(名) いとましいさま。**—さ**【挑ましさ】(名) いとましいこと。又、その度合。

いとまゆ【絲眉】(名) 絲のやうに細くした眉。うぐひすまゆ(鶯眉)。

いとまるがわら……【絲丸瓦】(名) 直徑七糎ばかりの小さい丸瓦。

いどみ【挑】(名) いどむこと。きそひ。あらそひ。

—あい【挑合】(名) ㊀いどみあふこと。㊁【經】相撲で、賞手と賞手とが競爭すること。

—おうふ【挑合ふ】(自動、ハ四)(いどみおうふ)の口語。**—がお**【挑顏】(名) 競ひ爭ふ顏つき。**—かわす**【挑交はす】(自動、サ四)互にいどむ。いどみあふ。**—ごと**【挑事】(名) あらそふ事。勝負ごと。**—わざ**【挑業】(名) 前條に同じ。

いとみず【絲水】(名) 軒から絲のやうに細くゝ落ちる雨滴。

いとみち【絲道】(名) ㊀三味線・琴などのひき方。又、その後開。㊁常に三味線を彈く人の絃の摩擦によって生じた左の食指の爪端の凹み。

いとみや【稚宮】(名) 一番末の皇子。(古語)

いとむ【射止む】(他動、マ下二)射あてる。射殺す。

いどむ【挑む】(他動、マ四) ㊀きそひあらそふ。はりあふ。競爭する。㊁職をしかける。㊂戀慕をしかける。

いとむし【絲蟲】(名)【動】(こおろぎ)(蟋蟀)。

いとめ【厭目】(名) 快く手離さぬ氣味。けれん。心配。

いとめ【絲目】(名) ㊀絲筋。細い絲。㊁紙衾の表面につけた絲。㊂絲の目方。㊃柳のめだち。㊄蒔物に細く刻みつけた筋。㊅甲州金の名目、卽ち兩(六〇目)の六十四分の一。㊆【動】沙蠶(いとめ)科の動物。體扁平で細長、長さ二五糎位、體節數約三百。前端絲狀褐色、中部以後は紅色。レンズのない二對の眼と、第一環節には四對の觸鬚がある。淡鹹兩水の混ずる泥中に住み、釣魚の餌に供せられる。**—わん**【絲目椀】(名) 石川縣江沼郡山中町から產する絲目のある漆塗の椀。

いとめる【鑄留】(名) 金屬製の器物を鑄掛してつくろふこと。

いとめる【射止める】(他動、マ下一)(いとむ)の口語。

いともの【絲物】(名) 三味線に關係ある藝。

いとやなぎ【絲柳】(名)【植】しだれやなぎ。枝垂柳。

いとやもの【絲屋者】(名) 絲を賣る家に雇はれて、てゐる者。

いとゆる【絲遊】(名)(かげろう)(陽炎)。

いとゆう【絲遊】(名) ㊀九帳の腰立(たち)の緒の餘

むすび【絲遊結】(名)

りな蜷結などにして、左右に長く垂れたもの。〈古語〉
㊁花の形に結び連れた緒を、狩衣の袖に縫りつけたもの。

いとゆみ【絲弓】(名) 矢に絲をつけて弓を射ること。㊀いとよりぐるまの略。㊁(いとよりだいり)。㊂延年舞に伴なひ、歌ゐ歌ひながら、わくに絲を巻きつつ男を待つといふ所作をすること。**―ぐるま**【絲搓車】(名) 絲によりをかける具で、八丁輪と稱する輪を同轉して錘(おもり)によってよりをかけるもの。はっちゃうぐるま。**―だい**【絲搓舡・金・絲魚・紅魚】(名)【動・鯛科の魚。體長約三〇糎、鱗は大きく、淡紅色で黄色の六條の縱線があり、泳ぐ時には金絲をよるやうに見える。尾鰭は二叉して黄色、長い鰭刺を具へる。深海の泥底に棲息する。いとより。いとな。いとくりうを。**―め**【絲搓女】(名) 絲よりをする女。

いとらん【絲蘭】(名)【植】百合科の多年生草本。葉は短くして木質、葉は劍狀で、澁紅色で黄色の六條の縱線があり、泳ぐ時には金絲をよるやうに見える。尾鰭は二叉して黄色、長い鰭刺を具へる。深海の泥底に棲息する。いとより。いとな。いとくりうを。

〔いとらん〕

いとわ【絲割符】(名) 江戸時代に、支那・オランダ・ポルトガル等から輸入した生絲を買賣する權利を官から見崎商人に許可した獨占種。又、その證書。

いとん【猶頓】(名)【人】支那春秋時代の魯の人。陶朱公に致富の術を教へられて、猗氏(山西省河東道の南に半ば飼育し、又、製鹽業を起して、大富裕となる。今も金滿家を稱して「陶朱猗頓之富」といふ。

いな【艤】(名)【動】ぼらの幼魚。

いな【稻】(名)「いれの轉。多くは他の名詞の上に添へて熟語とする。「一穂」「一こき」。

いな【否】(名)こばむこと。不承知。不同意。

いな【否】(副) 不同意の意をあらはす語。人の言を打消す語。いや。いいえ。さうではない。**―いな**【否否】(副) いえいえ。いやいや。**―とよ**(句) 他人の語に不同意を表して、自分の心持を述べようとする時に發する語。**―もうも**(句)(「う」は「諾」の意)いやともおうとも。〈古語〉

いない【以内】(名) これから内。このうち。

いなう【否諾】(名) 否と諾。いやおう。〈古語〉

いなおおせどり【稻負鳥】(名) 古今傳授の三鳥(奥千鳥・百千鳥・稻負鳥)の一。「せきれい」「すずめ」「かん」「やまどり」「くびな」(水雞など種種の說があるが判然しない。〈語〉

いなおさ【稻長】(名) 稻の取扱ふかしら。〈古語〉

いなおり【居直強盜】(名) 搦盜にはのったものが家人に見つけられ、態度をかへて、強盜となっておどしつけること。

いなおる【居直る】(自動、ラ四)㊀改めて坐る。坐り直す。㊁ゐずまひを正す。態度をかへる。

いなか【亥中】(名) 亥刻の中頃。今の夜の十一時。**―のつき**【亥中月】(名)(亥中の頃、東天に上るから)陰暦二十日の夜の月。

いなか【田舍】(名)㊀都に遠い地。都の外で農家の多くある島。在鄕。僻地。遠鄙。ひな。㊁(いなかじこと)。㊂卑しく劣れる意をあらはす語。「五位」―檢非違使」。**―うた**【田舍歌】(名) 田舍に流行する俗歌。ひなうた。**―うど**【田舍人】(名) 田舍に住む人。**―がくもん**【田舍學問】(名) 迂遠・固陋の學問。**―かせぎ**【田舍稼】(名) 都の人が田舍に行って稼ぐこと。**―かたぎ**【田舍氣質】(名) 田舍に共通した特有の素樸・粗野な氣質。**―ことば**【田舍言葉】(名) 田舍者のつかふ言葉。**―さけ**【田舍酒】(名) 田舍で醸造した酒。地酒。**―ざむらい**【田舍侍】(名) 田舍に住んでゐる武士。粗野な武士。**―しばい**【田舍芝居】(名) 田舍で興行する貧弱な芝居。**―じまき**【田舍縞】(名)てかりじまの手織綿。**―じゐ**【田舍染む】(自動、マ四) 田舍風となる。ゐなかびる。ゐなかめく。**―じるこ**【田舍汁・粉】(名) つぶしあんの汁粉。**―ずと**【田舍世界】(名) 田舍の土地。〈古語〉**―せかい**【田舍育】(名) 田舍で育って都會の事を知らぬこと。又、その人。**―だいじん**【田舍大盡】(名) 田舍者の金持。**―だち**【田舍立】(名) ゐなかぶりだち。**―だんご**【田舍團子】(名) つぶしあんをまぶした團子。**―つべ**(名) 田舍者を罵っていふ語。**―なまり**【田舍訛】(名) 言葉に田舍のなまりのあること。くになまり。**―はいて**【田舍這出】(名) 田舍から近頃都會に出て來た人。やまだし。ほっとて。**―ぶ**【田舍ぶ】(自動・バ上二) ゐなかじむ。**―ぶう**【田舍風】(名) 田舍の風俗。ひなびた風。**―ぶし**【田舍武士】(名)(いなかざむらい)。**―ま**【田舍間】(名) 曲尺五尺八寸を一間とする。〈京間の對〉**―まわり**【田舍廻】(名) 方方の田舍をまはってかせぐこと。**―まんじゅう**【田舍饅頭】(名) つぶしあんを入れた饅頭。**―みそ**【田舍味噌】(名) 麥麹で製した色の赤黒く鹹い味噌。**―むき**【田舍向】(名) 田舍者の嗜好に適してゐるもの。**―むしゃ**【田舍武者】(名)(いなかざむらい)。**―むすめ**【田舍娘】(名) ゐなかそだちの娘。**―めく**(自動、カ四) 田舍めく。**―もの**【田舍者】(名)㊀田舍の人。田舍育ちの人。㊁不作法の人を罵ってつくった品物。**―や**【田舍家】(名) ゐなかの家。ひなびた家。**―やくしゃ**【田舍役者】(名) 田舍廻りの下等な俳優。**―わざ**【田舍業】(名) ゐなかめいた仕業。**―われ**【田舍忘】(名) 田舍ずまひのことを忘れること。**―わたらい**【田舍渡】(名)㊀田舍に行って生活すること。㊁田舍に出て商賣すること。〈古語〉

いなかえじ【否不慧】(名)「笙」の異名。〈古語〉

いながす【射流す】(他動、サ四) 射はいふ語。田夫野人。**―もの**【田舍物】(名) 田舍でつくった品物。**―や**【田舍家】(名) ゐなかの家。ひなびた家。**―やくしゃ**【田舍役者】(名) 田舍廻りの下等な俳優。**―わざ**【田舍業】(名) ゐなかめいた仕業。**―われ**【田舍忘】(名) 田舍ずまひのことを忘れること。**―わたらい**【田舍渡】(名)㊀田舍に行って生活すること。㊁田舍に出て商賣すること。〈古語〉

いながら【稻株】(名) 稻を刈ったあとの株。〈ゐて。

いながら【居乍・坐】(副) 坐った儘で。家にゐて。

いながる【居流る】(自動、ラ下二) 長く並んで坐る。ゐ並ぶ。

いなき【稻置】(名) ㊀國造(くにのみやつこ)に屬した縣邑の長。稻穀收稅を掌ったもの。㊁文武天皇の朝制定の八色の姓(かばね)の第八位。

いなき【稻城】(名) ㊀竹又は木を立てて、くり刈った稻を乾かす具。㊁上古、租稻を納め置いた所で、周圍に堀・土居・垣を設けた。㊂いくさの時、前記の稻城に模してつくった建物。〈古語〉

いなく【嘶く】(自動、カ四) 馬があへぐ。

いなぐ【稻倉】(名) 稻を貯へておく倉。

いなご【稻子・蝗・蝗・蝗蟲】(名)【動】直翅類の昆蟲。體長約三糎。觸角は絲狀又は劍狀。體色黄綠色。頭圓く眼大きく、後肢發達してよく飛び、雄は第一腹節部に聽器を具へ、後翅を以て前肢の兩側を擦って音を出す。稻の害蟲。**―まろ**【稻子麿】(名)【動】稻子の一種。體色綠色又は褐色で尾端は赤い。はたおり。

いなさ【稻扱】(名) いれこき。〈古語〉

いなさ(名) 東南の風。又、東風。

いなさやま[伊那佐山](名)【地】奈良縣宇陀郡にある山。

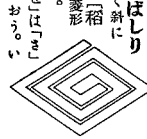
いなしき[稻敷](名)㊀稻幹を敷いた所。㊁なんか。「か(田舍)。(以上古語)

い・なじ・む[ゐなじむ]…[居馴染む](自動、マ四)久しくゐてなれしたしむ。

いなずか…[稻束](名)一束につかれた稻。

いなずま[ゐなづま]…[稻妻・電](名)㊀空中電氣の放電する時に閃く火花。いなびかり。㊁人力車・馬車などの幌を張るに用ひる金具。㊂刀身にあらはれる屈折した光ある筋。㊃動作の敏速な譬。㊄最も短い時間。瞬間。㊅(いなずまがた)。㊆(いなずまおれくぎ)。

—おれくぎ[ゐなづまおれくぎ]…[稻妻折釘](名)稻妻形に二重に折れ曲つた折釘。**—がた**[稻妻形](名)直線を屈曲した形で、いなびかりの形。**—ばしり**[稻妻走](名)電の如く斜に早く走ること。**—びし**[稻妻菱](名)㊀稻妻形を菱形にした模様。



〔㊁しびまづない〕

いなせ[否諾](名)(「せ」は「さ」の轉で、諾の意)いやおうのないこと。(古語)

いなせ[鰯脊](名)江戸時代に、江戸日本橋の魚河岸の勇肌の人人が鰯の脊の形に結んだ事から、「いさみはだ」の人をいふ。**—いちょう**[ゐなせいちよう]…[鰯脊銀杏](名)勇肌の人のゆつた髷。

いなだ(名)【動】ぶり(鰤)の幼魚。

いなだき[頂](名)いただき。(古語)

いなたま[稻魂](名)いなづま。いなびかり。

いなつるび[稻交](名)(いなずま)。

いなな・く[ゐなないく]…[嘶く](自動、カ四)馬が聲高く鳴く。いばゆ。

いなの・め[寢目](名)あけがた。あけぼの。しのめ。(古語)**—の**[寢目の](枕)「あく」(明く)の枕詞。

いなはき[稻掃](名)いなはきむしろ。**—むしろ**[稻掃筵](名)稻穗を拔ふに用ひるむしろ。

いなばた[稻機](名)稻を掛けて乾かす爲の木。いなぎ(稻架)。

いなば・どう[ゐなばだう]…[因幡堂](名)㊀【佛】京都市下京區烏丸松原にある眞言宗の平等寺。本尊藥師如來は釋迦の自作で、因幡に渡つたのを、一條天皇の朝、國守在原行平が京都に歸つた時、その邸に飛來したので、そこを寺として安置したと傳へられる。因幡藥師。㊁【文】能の題目。

いなば・のしろうさぎ[因幡白兎](名)【傳】神代神話の一。古事記にある傳說。隱岐から因幡に渡らうと自兎が、多くの鰐(ワニ)の背に乘つて飛んだが、最後の兎が、鰐に皮を剝ぎとられて悲しんでゐるのを、大國主神が療治を敎へて之を救はれたといふ。

いなびかり[稻光](名)(いなずま)。「の古稱。

いなびの[稻日野](名)【地】いなみの(印南野)の古語。

いなぶ[ゐなぶ]…[辭ぶ](他動、バ四)「いなむ」の同じ。

いなぶ[ゐなぶ]…[他動、バ上二]前條に準ずる。

いなぶね[稻舟](名)稻を積んで運ぶ舟。**—の**[稻舟の](枕)「いな」(否)の枕詞。

いなべ[稻贄](名)神に供へる稻の初穗。(古語)

いなぼ[稻穗](名)㊀稻の穗。㊁紋所の一。稻穗を束ねた形。

いなみ・の[印南野](名)【地】歌枕の一。兵庫縣加古・明石二郡に跨つた野。**—の**[印南野の](枕)「いな」(否)の枕詞。

いなみ・ぼし[牽牛星](名)ひこぼし(彥星)。

いな・む[ゐなむ]…[辭む・否む](自動、マ四)ゐぶ。「といふ。ことわる。不承知といふ。

いなむ[ゐなむ]…[辭む・否む](他動、マ四)いや前條に同じ。

いな・むし[稻蟲](名)【動】稻を食害する鱗翅・有用な名として子供がつかつたり毎に錢を乞ひあるいたこと。**—やま**[稻荷山](名)【地】京都市

いなむしろ[寢筵・寢蓆](名・枕)㊀寢床に敷くむしろ。(古語)㊁「は」「し」の枕詞。

いなむら[稻叢](名)稻を刈つて積重ねたもの。

いなむらがさき[稻村崎](名)【地】神奈川縣鎌倉郡七里ヶ濱と由井ヶ濱の間の岬。鎌倉町の西南。元弘三年(一九九三)新田義貞が鎌倉に攻入つた處。

いなもり・ぐさ[稻守草](名)【植】西草(ゐぐさ)科の多年生草本。葉は卵形對生で、四葉相向かふ。夏至の頃、漏斗狀の淡紫色の花を開く。

いなや[否や](副)㊀いな。いいや。㊁すぐに。㊂いやあけがたの。

いなら・ぶ[ゐならぶ]…[居竝ぶ](自動、バ四)竝んで坐る。席を連れて坐る。列座する。

いなり[稻荷](名)㊀【神】(の五穀を司るかのみたまのかみ)倉稻魂神を祀つたもの。㊁稻荷神社。㊂【地】稻荷山。㊃稻荷鮨。㊄狐の異稱。

—じんじゃ[稻荷神社](名)【神】京都市伏見區深草町稻荷山にある官幣大社。猿田彥命・倉稻魂神・大宮女命を祀る。元明天皇の和銅四年(一三七一)秦(ハタ)氏が鎭守神として創始した神社。**—ずし**[稻荷鮨](名)煮た油揚の中に、酢飯をつめた。その酢飯の中に牛蒡人參等を刻んで煮たものや炒つた麻の實をまぜたのもある。**—とり**[稻荷鳥居](名)形・明神鳥居に似て、鳥木と柱との間に蟇鱗ある鳥居。**—もうで**[稻荷詣](名)稻荷神社の祭禮の二月の初午の日に參詣すること。**—まち**[稻荷待](名)稻荷の祭。いなりまつり。**—まち**[稻荷町](名)稻荷明神を祀る側にあつたかちいふ。べいべいやくしゃ。**—まつり**[稻荷祭](名)㊀四月第二の午の日の稻荷神社の新祭の祭。㊁二月初午の日の稻荷の祭。昔、劇場の樂屋でも行はれた。**—まんねん・こう**[ゐまんねんこう]…[稻荷萬年講](名)江戸時代に、江戸で初午の稻荷祭日に祭の費用を名として子供がつかつたり毎に錢を乞ひあるいたこと。**—やま**[稻荷山](名)【地】京都市伏見區の北端にある山で、西麓に稻荷神社がある。

い・なり[ゐなり]…[居爲](名)㊀その場所から動かぬこと。㊁住所を他に移さぬこと。

いなわ[ゐなわ]…[稻](名)「うなゐ。(古語)

いなわしろ・こ[ゐなわしろこ]…[猪苗代湖](名)【地】福島縣にある堰塞湖で、安積・耶麻・北會津の三郡に跨り、海拔五一四米の高地にある。周囲五三粁。風景に富む。

いに[去](名)(往(ゐ))にし方(ヘ)の義)遠く過ぎ去つた時。昔。**—がたり**[古語](名)昔話。**—こうる・とり**[ゐにこうるとり]…[古戀鳥](名)【動】ほととぎす。(古語)〈萬葉集卷二「古へに戀ふる鳥かもゆづる葉の三井の上より鳴きわたりゆく」**—びと**[古人](名)㊀昔、生きて居つた人。㊁昔風の人。**—ぶり**[古風](名)昔の風習。昔のふう。**—まなび**[古學](名)古代の事蹟や古書を研究する學問。**—を好む**(句)古代の道德・學問・風俗などを好む。

いにしえ[ゐにしえ]…[去](名)(往(ゐ)にし方(ヘ)の義)遠く過ぎ去つた時。昔。**—がたり**[古語](名)昔話。**—こうる・とり**[ゐにこうるとり]…[古戀鳥](名)【動】ほととぎす。(古語)〈萬葉集卷二「古へに戀ふる鳥かもゆづる葉の三井の上より鳴きわたりゆく」**—びと**[古人](名)㊀昔、生きて居つた人。㊁昔風の人。**—ぶり**[古風](名)昔の風習。昔のふう。**—まなび**[古學](名)古代の事蹟や古書を研究する學問。**—を好む**(句)古代の道德・學問・風俗などを好む。

いにしとし[往年](名)まへ。かつて。前年。

イニシャティヴ[Initiative](名)㊀率先。創始。首唱。創意。㊁發議權。立案權。

イニシャル[Initial](名)姓名又は言葉の始の字。頭字。

いにあと[往足](名)去つたあと。「のついて。

いにかけ[往掛](名)歸りがけのついで。もとりとする時。

いにさま[往樣](名)㊀立去る樣子。㊁立去らうとする時。

いにゅう[移入](名)うつしいれること。うつりいること。

い・にょう[ゐにょう]…[圍繞](名)とりまくこと。かこむこと。

い・にょう[ゐにょう]…[遺尿](名)小便をもらすこと。しびたり。

い・にん[ゐにん]…[異人](名)いじん(異人)。

い・にん[ゐにん]…[委任](名)㊀ゆだねまかせること。㊁【法】當事者が之を相手方に委託すること。**—ながき**[委任裏書](名)【法】手形の裏書人が、手形面の金額を取立てる爲、被裏書人に自分に代つて手形上の權利を行はせる目的の裏書。取立裏書。

—けいえい[委任經營](名)【經】獨立經營の不能となった工場を債權者・新設會社・同業者に委任し、賃貸料によって漸次整理しようとする方法。**—じょう**[委任狀](名)【法】委任の意思をあらはした證書。**—だいり**[委任代理](名)【法】委任契約によって、本人にかはって法律行爲をすること。**—とうち**[委任統治](名)【法】或國が他國又は國際聯盟の委任によって、或地域を統治すること。**—めいれい**[委任命令](名)【法】法律上の委任によって發する命令。

いぬ[犬](名) ㊀【動】哺乳類・犬科の獸。家畜として廣く飼養せられ、人に馴れ、性怜悧で、嗅覺と聽覺によく發達し、狩獵用・夜の守とする。㊁まはしもの。間者。㊂大追物の略。㊃過去ることの謙語。**—に猿**(句) 仲のわるい聲。**—に論語**(句) 道理を說き聞かせても益のないこと。**—の川端あるき**(句) 飼食が洗ひ去られた川端を犬がぶらぶらあるく意から、いくら奔走しても何の得る所もないこと。又、懷に錢がなくて市街の店頭をぶらつくこと。**—の手も人の手にしたい**(句) 忙しい時に少しでも助力者のほしいことにいふ。**—の遠吠**(句) 臆病な者が人陰で扇動を張り、又は他人を攻撃方法でかへしする。**—の糞で酔を討つ**(句) 卑劣方法でかへしする。**—骨折って鷹の餌食になる**(名) 犬が追出した獲物を鷹に取られる。勞して得た物を他人に奪はれにいふ。**—も歩けば棒に當る**(句) 犬も出てあるくから棒にさわるの義から、でしゃばるから碍に遭ふ意。又、出歩く故に思はぬ幸に會ふ意。**—も喰はぬ**(句) 犬さへも喰はぬ意から、極めて忌み嫌ふべきことにいふ。**—も傍輩鷹も傍輩**(句) 同じ主を持つ者は、氣があはなくてもやはり傍輩である。仲がわるくても、同僚の義理がある筈。

いぬ[犬](接頭) 或語に冠らせて、劣れる意やいやしめ輕んずる意をあらはす語。「一死」「一侍」。

いぬ[戌](名) ㊀十二支の第十一位。㊁方角の一。西北。㊂昔の時刻の一。五つ。今の午後八時から午後九時まで。㊃年・月・日の各目の一。

いぬ[寢ぬ](自動、ナ下二)れる。

いぬ[往ぬ・去ぬ](自動、ナ變) ㊀行く。去る。㊁過ぎ去る。

いぬあわせ[犬合](名) 犬を互に嚙ませて勝負を決せしめること。鬪犬。いぬくひ。

いぬ・アカシヤ(名)【植】北米原產の喜科の落葉喬木。高さ一・五米位。枝幹に多くの刺を有し、葉は奇數羽狀複葉で初夏、白色の蝶形花を開き、總狀若しくは複總狀花序に配列する。街路樹等に用ひる。はりゑんじゅう。にせアカシヤ。

〔ナシカアぬい〕

いぬい[戌亥・乾](名) 方角の一。戌と亥との間。西北。

いぬい[犬居](名) 犬が前足を立てて坐して居るやうな形。屏風ついた形。(古語)

いぬうど[犬獨活](名)【植】しうど。

いぬえんじゅ[犬槐・槐槐](名)【植】喜科の落葉喬木。高さ一・五米位。葉は奇數羽狀複葉で、各小葉は楕圓形又は卵形で全緣。細毛を密生する。夏日、淡黃色の蝶形花を葉腋に開き、總狀花序に配列する。花後、線形の莢を結ぶ。おほゑんじゅ。しろゑんじゅ。

いぬおうもの[犬追物](名) 鎌倉時代に起った騎射の一。竹垣で方百米計の馬場をかこひ、十二騎の素襖・直衣を著た武士が三手に分れ、百五十疋の犬を追ひかけて、蟇目の矢で射ること。

〔物追犬〕

いぬおよぎ[犬泳](名) 初步の水泳の法。腹ばひになり、手で水を掻き、足で水を蹴る泳き方。いぬかきおよぎ。

いぬかい[犬飼](名) 鷹狩の時に鳥を追はせる獵犬を飼ひならす人。いぬかひびと。いぬやり。いぬひきの。(古語) **—ぼし**[犬飼星](名)【天】ひこぼし(彦牛星)。

いぬがい・つよし[犬養毅](名)【人】政治家。安政二年岡山縣に生まる。木堂と號す。西南役に新聞記者として從軍し、後、大隈重信と共に政治運動に從事し、明治三十一年、大隈內閣の文部大臣となる。大正十一年、革新倶樂部を組織し、大正十二年山本內閣の逓信大臣、同十三年護憲內閣に再び逓信大臣となり、昭和四年政友會總裁となり、六年、政友會內閣を組織し、七年(一九五二)いはゆる五・一五事件において刺客の爲に斃れた。年七十八。

いぬがし[犬樫](名)【植】樫科の常綠喬木。幹の高さ一〇米位、葉は狹長楕圓形で先尖、光澤があり、三行脈を有する。春、赤色の花を開く。

いぬがみ[犬神](名) 犬の靈を使ふ妖術。**—ずかい**[犬神使](名) 犬神を使役する人。**—づつき**[犬神憑](名) 犬の靈ののりうつったといふ精神病者。

いぬがや[犬榧・粗榧](名)【植】一位科の常綠小喬木。幹の高さ六米位。樹皮は暗褐色、葉は「かや」よりも廣く、下面に二條の白線があり、對生。花は雌雄異株で、四月頃開く。種子の核から燈油・機械油を採る。あぶらがや。(ばかや。

いぬがらし[犬辛子・蘿菜](名)【植】十字花科の多年生草本。高さ三〇糎位、葉は長楕圓形。春夏の交、黃色四瓣の花を總狀に著ける。あぜだいこん。のがらし。

いぬがり[犬狩](名) ㊀狂犬又は飼主のない犬を狩り殺すこと。㊁中古、濫口が禁中の虎虎で犬を射た式。

いぬきり[砌](名) 階下のいしだたみ。(古語)

いぬぎり[犬桐](名)【植】あぶらぎり。

いぬく[射貫く](他動、カ四) 射通す。

いぬくい[犬食](名) ㊀(いぬあわせ)。(古語)

いぬくぎ[犬釘](名) 鐵道のレールを枕木に密著させる爲に打つ釘で、釘の頭が犬の頭に似てゐるもの。「出入口の」㊁犬の出入の爲に設けた穴。

いぬくぐり[犬潛](名)【植】樟科の常綠喬木。幹の高さ十數米に達する。葉は長卵卵形乃至長楕圓形で光澤があって革質、裏は淡綠色。春、黃綠色の花を開く。

いぬぐす[犬樟](名)【植】樟科の常綠喬木。幹の高さ十數米に達する。葉は長卵卵形乃至長楕圓形で光澤があって革質、裏は淡綠色。春、黃綠色の花を開く。

いぬけい[犬蓼](名) 大なるもので種種の蓼の總稱。

いぬこうじゅ[犬香薷](名)【植】唇形科の一年生草本。葉は方形で、枝葉は對生、葉は長楕圓狀披針形、緣邊に淺鋸齒を有する。秋、總狀に淡紫色の小花を開く。

いぬごま[犬胡麻](名)【植】唇形科の多年生草本。高さ約六〇糎に達する。莖は方形で粗毛を密生し、葉は廣披針形で鋸齒があり、胡麻のやうな香氣を發する。夏、紅紫色の唇形花を開き、總狀花序をなす。實は瘦果で秋熟する。ちょろぎだまし。

いぬころ[犬ころ](名) 小犬。いのころ。

いぬころくらし[犬殺](名) 犬を撲殺する人。

いぬざくら[犬櫻](名)【植】薔薇科の落葉喬木。高さ一〇米位に達する。葉は卵狀長楕圓形或は楕圓形で鋭頭又は鋭尖頭。櫻に似て有臭、花は旅出の總狀花序をなし、白色。實は帶黃赤色で扁卵形。「ふ語」

いぬざむらい[犬侍](名) 武士爲ていの芸香(ダイダイ)科の落葉灌木。高さ二米位。葉は山椒に似て細長く、辛香がない。夏、淡綠色の花を總房花序に綴る。

いぬじに[犬死](名) 無益に死ぬこと。むだじに。

いぬじもの[犬ものの](名) 犬のやうなもの。犬に似たもの。(古語)

いぬじらみ[犬蝨](名)【動】蝨の一種。灰色を帶び、犬に寄生して血を吸ふもの。

いぬそらまめ[犬蠶豆](名)【植】(からすのえ

んとう)。

いぬたで[犬蓼](名)【植】蓼科の一年生草本。高さ三〇糎位、葉は互生し、長楕圓形。夏、葉腋及び莖頭に紅色の花を穗狀花序に綴る。子供のままごとに、花を赤飯として玩ぶ。あかのまま。

いぬだら[犬楢](名)【植】はりぎり。

いぬちくしょう[犬畜生](名) ㊀人を罵っていふ語。㊁犬や其の他の畜生。

いぬつくばしゅう[犬菟玖波集](名)【文】山崎宗鑑が救濟の菟玖波集に倣って著はした俳諧連歌集。永正十一年(一一七四)編。

いぬつげ[犬黄楊](名)【植】冬青(もち)科の常綠灌木。葉は倒卵狀楕圓形で淺鋸齒を有する。夏、帶白綠色の花を雌雄異株に開く。實は紫黑色の核果で小さい。材は櫛や印材などにする。

〔げつぬい〕

いぬつり[犬釣](名) ㊀犬をわななどにかけて捕へ、その皮を剝いで賣ることを職業とするもの。いぬころし。㊁淫賣婦。

いぬなし[犬梨](名)【植】薔薇科の落葉喬木。高さ二〇米位、葉は長卵形で先尖、鋸齒がある。表面綠色、裏面に白毛を帶ぶ。春、白色の五瓣花を開き、梨に似た圓形の果實を結び、食用に供せられる。材は器具の製作に用ひ、樹皮は黃色の染料となる。やまなし。

いぬの-ふぐり[犬陰囊婆婆納](名)【植】玄參(ごまの)科の一年生草本。高さ約十五六糎。葉は卵形で粗鋸齒がある。春、葉腋に淡紫色の花を開く。實は圓扁で、縱に凹線があり、二箇のやうに見える。

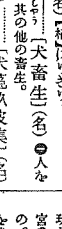
いぬのみ[犬蚤](名)【動】犬、猫に寄生する蚤。背上に櫛齒狀の剛毛がある。飛びはねるとは稀である。

いぬはえ[犬蠅](名)【動】蠅の一種。茶色扁平で翅に濃褐色の斑點がある。犬にたかって血を吸ふ。

いぬばこ[犬箱](名) いぬはりこ。

いぬばしり[犬走](名) ㊀水股に早く走ること。㊁築地の外壁と堀との間に設けた狹い空地。後世は城郭の壕に其の制がのこった。

いぬはりこ[犬張子](名) 玩具の一。犬の立姿の張子細工。宮參(みやまゐり)の時の贈物とするもの。昔のは、顏を子供に似せ、體を犬の姿に作り、子供の寢床に備へ、三月の節句の飾にも用ひた。いぬぼこ。


〔子張大〕

いぬひえ[犬稗](名)【植】禾本科の一年生草本。水田に生ずる。高さ八〇糎位。葉は細長く平行脈を有し、夏、穗を出して小花を開く。實には芒がある。家畜の飼料とする。

いぬひと[犬人・狗人](名) 往古、犬吠を以て宮門を守った人。

いぬびわ[犬枇杷・犬仙果](名)【植】桑科の落葉小喬木。高さ約四米、葉は卵形又は楕圓形で互生。花は夏咲き、隱花果は無花果(いちじく)と同じであるが、それよりも小さい。雌雄異株。果實は秋熟して紫黑色となる。生食し又はジャム・珈琲の代用品とする。

いぬふせき[犬防](名) 佛堂の前に設けた低い格子。社寺の前にある駒寄(こまよせ)の別名。

いぬぶな[犬櫸・山毛欅](名)【植】楊科の落葉喬木。葉は楕圓形乃至長楕圓形、其の表面は綠白色で平滑、裏面は灰白色で長い絹毛がある。その材は建築材・器具材・船舶材・機械材・土木用材・薪炭等用途が廣い。

いぬほうさき[犬吠崎](名)【地】千葉縣利根川河口南右岸地の一角。九十九里濱と鹿島灘との分界。その燈臺は高さ二七米餘で、旋轉白光、その北方犬蹄ヶ鼻には無線電信所がある。

いぬほえ[犬吠](名) 昔、大晉會に外番の參朝した時、華人(はじん)が宮門の左右にゐて、犬の遠吠の聲を出した事。

いぬほおずき[犬酸漿・龍葵](名)【植】茄科の一年生有毒草本。莖の高さ五〇糎位、葉は卵形で互生。夏三糎計の花梗を出し、白花を撒形花序に綴り、秋、球形の果果を結び、熟すれば黑色となる。果實にはソラニンを含み、之を食すれば、腹痛・痙攣を起す。莖葉の煎汁は頭癬(たむし)を治し、解熱劑となる。

いぬまき[犬槇・羅漢松](名)【植】松柏科の常綠喬木。樹皮は灰白色で、淺く縱裂し、葉は披針形で、互生する。材は淡黃色で、器具用となる。

いぬむぎ[犬麥](名)【植】こうぼうむぎ。

いぬめもどり[犬目戻](名) 涙の出ぬ目。

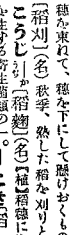
いぬやまい[犬山](名) ㊀犬を逃れて山野に狩すること。㊁【地】愛知縣犬山町から出る陶器。釉に粗い鉄入があり、素地は背灰色を帶ぶ。繪附を施し、花・楓の繪を特徴とする。

いぬよもぎ[犬蓬](名)【植】菊科の多年生草本。頭花を總狀花序に配列する。秋、淡黃綠色の小頭花を總狀花序に配列する。きくよもぎ。

いぬわし[犬鷲](名)【動】鷲の一種。鷲中最大のもの。頭上から後頭にかけて柳葉狀の羽毛を有して黃赤色をなす。背面は濃褐色、尾や翼は黑褐色。ヨーロッパ・北アフリカ・北アメリカ・アジヤに產し、兎・犬・猿等を捕食する。

いぬわらび[犬蕨](名)【植】水龍骨(ほうじ)科の多年生草本。高さ約六〇糎に達する。根莖には赤褐色披針形の鱗片がある。葉は卵狀長楕圓形で二回羽狀複葉に分裂し、中脈・側脈は赤色を帶び、各小鋸齒があって軟質。側脈に沿って多數の子嚢群を密生する。子嚢は成熟すれば褐色となる。

いね[稻](名)【植】禾本科の一年生草本。莖は高さ約一—一・五米。內部は中空で數節の節がある。葉は長線形で平行脈を有してゐる。初秋の頃、圓錐花序に花を開く。外殼の上端から芒(のぎ)を稱する絲狀突起が出てゐる。雄蕊六本、雌蕊一本。秋、果實が熟する。これを米といふ。一穗の實の數は百粒乃至二百粒。農業上、最も重要な植物となってゐる。通常水田に植ゑるが、畑地のものを陸稻(おかぼ)・畑稻(はたつ)の別があり、米粒の含有する澱粉の性質によって糯(もち)・籾(もち)の二種とする。**—かけ**[稻懸](名) 刈った穗を束ねて、穗を下にして懸けておくもの。**—かり**[稻刈](名) 秋季、熟した稻を刈りとること。**—こうじ**[稻麹](名)【植】稻穗に寄生して黑穗を生ずる寄生菌類の一。**—こき**[稻扱](名) 稻・麥の穗を扱く時に歌ふ一種の勞作歌。地方によって種種の種類がある。**—すり**[稻磨](名) 米を磨白で粉にする時に歌ふ一種の勞作歌。**—つきうた**[稻春歌](名) 大臼で搗く時、神前に供へる稻を春きながら歌ふ歌。**—つきこまう**[稻春子麿](名)【動】きりぎりす(蟋蟀)。(古語)**—つきむし**[稻春蟲](名)【動】はたおりむし(機織蟲)。**—つむ**[稻積む](自動、マ四)「嫁る」を忌んでいふ正月の祝ひの詞。


〔きこれい〕

いねがて[寢難](名) 嫁にくいこと。(古語)

いねさまに[寢樣に](副) 嫁とうとする時に。

いねさまがし[寢樣がし](寢騷がし)(形、二)ものの音が嫁耳にひびいて騷がしい。(古語)

いねぶり[居眠・居睡](名)(いねむり)。

いねぶりる[居眠・居睡](名)(いねむり)。

いねむり[居眠・居睡](名)ねむること。

いねむる[居眠・居睡](名)居眠る・居睡る[自動、ラ四]坐りながらねむる。眠る姿勢にならずにねむる。

いねん[意念](名) 念慮。意識。

いねんぼう[懶然坊](名)【人】江戸時代の俳人。廣瀨氏。本名麿本屋清右衛門。別號を鳥落人。

梅花佛といふ。美濃の人。瘤髮して芭蕉の門に入った。蕉門十哲の一人。奇行が多い。正德五年(一三七五)没。但し没年に異說がある。「藤の實」「二葉集」等の著がある。

いの (感)〔こよな〕の縮。或語の下につけて感歎の意なあらはす語。

いの 〔一番〕(名) いろは番附の。

いのいちばん 〔いの一番〕(名) いろは番附の。

いのう ……なう 〔衣嚢〕(名) かくし。ポケット。

いのうえあやおお 〔井上文雄〕(名)【人】江戸時代末期の歌人。國學者。調鶴・柯堂・歌堂と號し、獨自の個性の表現を主張した。「伊勢の家苞」「調鶴集」等の著がある。明治四年(一八七一)没。年七十二。

いのうえいんりょう 〔井上圓了〕(名)【人】哲學者。文學博士。新潟縣の人。西洋哲學を背景として佛教の新解釋を試みた。又、東洋大學を創立す。大正八年(一九一九)没。年六十二。多くの佛教哲學の著書の外「妖怪學講義」の著がある。

いのうえかおる 〔井上馨〕(名)【人】明治維新の功臣。侯爵・大勳位。通稱聞多。山口縣の人。松下村塾に學ぶ。財政・經濟に著眼して功がある。外務大臣・內務大臣・大藏大臣となる。大正四年(一九一五)没。年八十一。

いのうえこわし 〔井上毅〕(名)【人】政治家。子爵。梧陰と號する。熊本の人。教育勅語の草案及び法律制定に與って力があった。文部大臣となる。明治二十八年(一八九五)没。年五十二。

いのうえはりまのじょう 〔井上播磨掾〕(名)【人】人工方淨瑠璃の開祖。通稱は市郎兵衛。淨瑠璃を虎屋源太夫に學んで一派を開き、大阪道頓堀に操芝居を起こした。貞享二年(一六八五)没。年五十四。

いのうただたか 〔伊能忠敬〕(名)【人】本邦最初の實測地圖作製者・曆學者。通稱は三郎右衛門。勘解由と稱する。字は子寧。號は東河。上總國の人。武藏國佐原町の伊能氏の養子となる。幕府の命によって全國を測量して、地圖を製した。文政四年(一八二一)没。年七十七。「國郡畫夜時刻對數表」「紀源術」に用法「求割圓八線表」等、地理・數學に關する著がある。

いのがしら ……〔井頭〕(名)【地】東京府北多摩郡武藏野町にある地名。舊神田上水の水源地。東京市の井頭恩賜公園がある。

いのく ……〔居退く〕(自動・カ四)座席から退き去る。

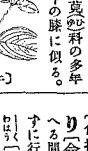
いのくち ……〔堰口〕(名) 井戸から水を落す口。

いのこ ……〔豕〕(名)【動】ぶた(豚)。

いのこ ……〔亥子〕(名) ⊖陰暦十月上の亥日。昔、此の日の亥の刻に餅を食べば、萬病を除くといひ、又、猪は多產であるから、子孫繁昌を願ふ爲だといった。これを亥子の祝と稱する。江戸時代には、此の日から炬燵を開いた。⊖亥子餅の略。

いのこし 〔射遺〕(名) 昔、正月の射禮の式に來なかったものに、翌日射させたこと。(古語)

いのこずち 〔牛膝〕(名)〔植〕莧科の多年生草本。莖は青紫色方形で、節高く牛の膝に似る。全株に毛がある。高さ一米位。葉は長卵形又は楕圓形で全緣・對生。秋、綠色五瓣花を穗狀花序に開く。果實は脆果で楕圓形・刺を有し、花後反風する事內に宿在する。根は收斂劑・利尿劑となる。ふしだが。こまのひざ。


〔牛膝〕

いのこり ……〔居殘〕(名) ねのころこと。又、そ

いのこる ……〔居殘る〕(自動・ラ四)あとにのこってゐる。おそくまでとどまること。

いのこ ……〔猪〕(名) ⊖〔動〕偶蹄類の獸。黑褐色の剛毛を混じ、頸部短く、眼小にして脚は長い。毛色は黑色で、逆立てる。大齒は口外に突出し、上方に向かって曲出して食を求め、冬は穴居する。ぬし。夜間、田野に猪。⊖前後の考もなくむやみに突進する者。⊖舊拾圓紙幣の異名。

いのこ ……〔猪武者〕(名) 前後の考もなく、むやみに敵に突進する武者。

いのしりぐさ ……〔猪尻草・天名精〕(名)〔植〕菊科の惡藥。高さ約一米。葉は煙草に似て小さく、鋸毛と鋸齒とを有し、一種の臭氣がある。夏秋の際、葉腋毎に綠色の小頭花を著ける。やぶたばこ。

〔草尻猪〕

いのち 〔命〕(名) ⊖生物の生活する原動力。生きてゐる間。壽命。生命。⊖生涯。いきのを。たまのを。⊖唯一のたのみ。唯一のよりどころ。**—かえ** 〔命換〕(名) 生命にかへる程の重大事。**—かぎり** 〔命限〕(名) ⊖命のつづくだけ。⊖いきながらへる間。**—がけ** 〔命懸〕(名) 命を失ってもかまはずに行ふこと。死ぬ覺悟ですること。**—かほう** 〔命果報〕(名) 生命の運の强いこと。運よく命の助かること。**—からがら** 〔命辛辛〕(副) からうじて。やっと生命だけ失はずに。**—がわり** 〔命代〕(名) 全く命を捧げること。**—ぎり** 〔命限〕(名) 生命をかけて行ふこと。**—くらべ** 〔命較〕(名) ⊖生命の長短なくらべあふこと。⊖精力をくらべあふこと。**—げ** 〔命毛〕(名) 睫先の毛。**—ごい** 〔命乞〕(名) ⊖命の長いやうにと神佛に祈ること。⊖殺されるべき人の助命を乞ふこと。**—ざた** 〔命沙汰〕(名) 命にかかはる沙汰。**—しだい** 〔命次第〕(名) 命のまに任せること。**—しらず** 〔命不知〕(名) ⊖命を大切に思はぬこと。⊖命の危險なかまはずに事をすること。又、その人。⊖物の丈夫で永い間つかはれること。**—すく** ……く 〔命盡〕(名) ⊖命縮。⊖命改第。**—だい** 〔命代〕(名) 殺されるべき命を償ふ金。**—とり** 〔命取〕(名) 重病・毒藥・酒・美人・過勞等の、生命を奪ふもの。**—ぬすびと** 〔命盜人〕(名) ⊖徒らに長命する人。⊖死ぬべき時に死なぬ人。**—ひろい** ……ひろう 〔命拾〕(名) 生命を失はうとしたのを幸に免れたこと。**—みょうが** ……がう 〔命冥加〕(名) 死すべき場合に、ふしぎに助かったこと。**—もらい** ……ひ 〔命貰〕(名) 命乞。**—あっての物種** (句) 命が何事にももとなること。**—限り根限り** (句) 命のある限り、精力のある限りを盡くして事をなすこと。**—長ければ辱多し** (句) 莊子天地篇の句。長命の人は、恥辱を受けることが多い。**—なりけり** (句) 命があったればこそ、この事も出來たのに、捨てるべき所を助けてくれた人。**—の恩** (句) 死ぬべき場合を救はれた恩。**—の限り** (句) いのちかぎり。**—の霞** (句) 仙人の命。長命。**—の際** ……きわ (名) ⊖命の終ろうとする時。死にぎは。⊖死ぬるか生きるかのきまる場合。**—の境** (句) 前條に同じ。**—の洗濯** (句) 氣ばらしをして、平生の勞を慰めること。**—の洗濯講** (句) 氣ばらしの爲、時時寄りあって遊ぶこと。**—の相場が一分五厘** (句) 命の輕いことの譬。**—の玉** (句) きんたま。**—の露** (句) ⊖いつ消えるかわからはかないこと。⊖涙。**—の後** (名) 死後。**—の水** (句) 涙。**—は義に篤くして輕し** (句)〔後漢書朱穆傳の句〕命を義の爲に捨てるのは、少しも惜しくない。**—は鴻毛より輕し** (句)〔燕丹子の語及び司馬遷の報任安書の句〕命を捨てるときの惜しくないことにいふ。**—は風前の燈の如し** (句)〔俱舍論の疏に出る〕危險の身に迫ることの譬。人生の無常なことの譬。**—待つ間** (句) 命の終るのを待つ間。**—脆し** (句) 人の死ぬことの早いときにいふ。わか死するときにいふ。世のはかないことにいふ。**—を懸く** (句) ⊖命を的にして事をする。⊖一命を託するときにいふ。**—を縮む** (句) 危い所にからまって生きてゐる。**—を捨てる** (句) 君父の爲に命をさし出

す。**—を投げ出す**（句）死ぬ覚悟をきめる。**—を拾ふ**（名）死ぬ者が場合に発れる。**—を二つ持つ**（句）自分のほかに一人の子があるといふ。**—を的に懸く**（句）命がけでする。

いの・なか［井中］（名）❶井戸の中。❷狭い眼界。**—の蛙**（句）せいあ（井蛙）。

い・のはやた［猪隼太］（名）【人】豪勇の士。源頼政の臣。堀河天皇の朝、頼政が怪獣を射た時、落ちた怪獣を刺殺した。

い・のふ［胃腑］（名）【生】胃。胃袋。

いのり［祈・禱］（名）いのること。神佛に祈願すること。**—いただす**［祈出す］（他動、サ四）無かつた物を法力に依つて出す。**—のく**［祈退く］（他動、カ下二）祈禱の力で逐ひ拂ふ。**—のし**［祈師］（名）禍福吉凶に就いて祈禱する法師。『佛に願をかける。❷願ふ。望む。

いの・る［祈・禱る］（他動、ラ四）❶神佛に願をかける。❷願ふ。望む。

いのんど［蒔蘿］（名）【植】繖形科の多年生草本。高さ一米位、葉は大形、絲狀に細く分裂し、夏日、黄色の小花を複繖形花序に配列する。扁球狀の果實を結ぶ。果實から油を採つて香料又は藥用に供する。

いは［異葩］（名）珍しい花。

いば［意馬］（名）狂つて容易にとめおきへることのできない慾情を、駿け出した馬に譬へた語。**—しんえん**［意馬心猿］（名）【佛】煩惱・慾情の狂動してとめ難いことを、奔り逸しようする馬と騒ぎ立つ猿のごとくにいつまでも鎮へた語。

いば［射場］（名）❶弓を射る處。射的場。矢場。❷射的場で射手の立つ位置。**—どの**［射場殿］（名）同上。宮廷における射場。ゆばどの（弓場殿）。**—はじめ**［射場始］（名）昔、宮中の射場殿で行つた弓術始めの儀式。

いはいや［違背］（名）たがひにむくこと。

いはいや［位牌］（名）死者の戒名を記した木牌。**—どう**［位牌堂］（名）位牌を並べおく堂。**—ちきょう**［位牌知行］（名）祖先の勳功によつて相傳された知行。**—を汚す**（句）祖先の名譽を汚す。

いはい・もとおる［い這回る］（自動、ラ四）はひまはる。（古語）

いはかせ［醫博士］（名）古昔、典藥寮に屬し、醫術・調劑術を教授した職。

いはく［醫伯］（名）傑出した醫師。醫師の敬稱。

いはく［威迫］（名）おどかしせまること。おどして從はせようとすること。

いはく［帷薄］（名）たれぎぬとすだれと。閨門。**—修らず**（句）閨門のみだれたるにいふ。

いはく［帷幕］（名）❶たれぎぬとひきまくと。❷機密の事を相議する所。

いばしょ［居場所］（名）ゐどころ。ゐる所。

いはつ［衣鉢］（名）❶【佛】①師傅から沙門に傳へる袈裟と鉢。②師から傳へる佛教の奥義。❷師から傳へる斯道の奥義。えはち。えはつ。

いはつ［遺髮］（名）死者が記念に殘した頭髮。（古語）

いばら［薔薇］（名）【植】薔薇科の灌木。多くは直立して刺がある。葉は羽狀複葉で互生し、托葉が葉柄に著生する。花は美麗で、多くの雌蕊が壺狀の花床内に隙在する。ばら。

いばら［茨］（名）❶【植】とげのある小木の總稱。❷とげ。はり。❸唐破風などで弧線の集まつて生じた角點。**—がき**［茨垣］（名）「からたち」「薔薇」等の刺のある樹で結はへた生垣。**—ぐさ**［茨草］（名）【植】「とげ」「刺」のある小木。**—ぐろ**［茨畔］（名）荊刺の生えてゐるあぜ。**—ひげ**［茨鬚］（名）とげとげしたこはいひげ。**—も**［茨藻］（名）【植】茨藻科の一年生淡水草。池沼等に生じ、莖は細長く、葉は鋸齒を有する線形で淡綠色。夏日、上部の葉腋に帶黄綠色の小さい裸花を開く。雌雄異株。

いばらぎどうし［茨木童子］（名）❶近松戯曲「傾城酒呑童子」の主人公で、大阪の豪商、新町妓樓の主人が常に綴子の外套を着るので、綴子大盡と呼ばれた茨木屋孫兵衛の子。❷謡曲「茨木」の主人公で、大江山の鬼。

いはらさいかく［井原西鶴］（名）【人】江戸時代の浮世草子作家。俳人。本名平山藤五。宗因の門に入つて談林風を學び二萬堂を號し、後、浮世草子を出して有名となつた。その作品はよく雅俗語を折衷し、物語の傳統を破つて、深い觀照を以て人間生活を深刻に描出し、性慾・物慾に支配されて行く人間性を生生と見せてゐる。元祿年間（一六八八—一七〇四）頃の著に「西鶴吟千句」「好色一代女」「好色一代男」「日本永代藏」「世間胸算用」「織留」「諸國噂」「俗つれづれ」等がある。

いばり［尿］（名）ゆばり。小便。**—ぶくろ**［尿袋］（名）ゆばりぶくろ。（ばうくわう）膀胱。

いはる［威張る］（自動、ラ四）はばをきかす。おごりたかぶる。

いはろう［射掠ふ］（他動、ハ四）矢を射て敵を追ひはらふ。

いはん［違犯］（名）法にそむき、罪を犯すこと。

いはん［違反］（名）たがひにそむくこと。

いはん［夷蠻］（名）王化にうるほはぬ民。えびす。

いび［猗靡］（名）女のなまめかしいさま。たをやかなこと。

いび［萎靡］（名）なえなびくこと。しなれふすこと。

いびき［鼾］（名）寢てゐる間に出る鼻息の音。**—をかく**（句）いびきを發する。

いびつ（副）ぐつぐつ。ふつふつ。

いびたり［寢浸］（名）睡眠中に小便を漏らすこと。

いびたり［居浸］（名）❶他の家に行つて永く滯在すること。❷坐つたまま小便をもらすこと。

いびたる［居浸る］（自動、ラ四）入り込んだままで他に移らぬ。いりびたる。

いびたる［寢浸る］（自動、ラ四）同上。

イヒチオール［獨 Ichthyol］（名）【藥】褐色油狀の液藥。鎮痛・止痒に用ひる。

いびつ［飯櫃］（名）❶楕圓形。小判形。❷楕圓形や圓形のゆがんだもの。**—なり**［飯櫃形］（名）いびつ。いびつのかたち。圓い形のゆがんだもの。

いびつ・こころが［意必固我］（名）論語子罕篇に「子絶四、毋意、毋必、毋固、毋我」と、私意と必期と頑固と彼我の區別との四つを孔子が斷つて、その心に玲瓏たるものがあつたといふ聖人の修養。

いびょう［意表］（名）思の外。意外。案外。

いびょう［異病］（名）普通とはちがつた病氣。奇病。

いびょう［胃病］（名）【醫】胃に關する一切の病氣。急性慢性胃カタル・胃癌・胃潰瘍・胃酸過多症・胃弛緩症・胃擴張症等。

いびり（名）いびること。**—だす**［責出す］（他動、サ四）いためて、ゐるにゐられないやうにして逐ひだす。

いびる［責りる］（他動、ラ四）❶虐げ苦しめる。❷あぶる。せめる。

いびる［遺品］（名）❶死後にのこした品物。❷おとしもの。

いふ［移付］（名）一箇轄から他の管轄に移し渡すこと。

いふ［依附］（名）よる。よりかかる。

いふ［夷俘］（名）❶とりこになつたえびす。❷とりこ。

いふ［異父］（名）母が同じで父の異なること。**—きょうだい**［異父兄弟］（名）母は同じで父の異なる兄弟。たれがはりの兄弟。いふけいてい。

—けいてい［異父兄弟］（名）（いふきょうだい）同上。

いふ［委付］（名）❶ゆだね觀ること。ゆだね渡すこと。❷【法】(abandonment) 自己の所有物又は權利を相手方に附與し、自己と相手方との間に存する法律關係を消滅せしむること。海上保險に於いては、被保險物が全損に至らざる時、被保險者の一切の權利を保險者に附與して保險金全額を取得すること。

いふ［畏怖］（名）おそれること。

いふ［畏附］（名）おそれてつき從ふこと。

いふ［位封］（名）諸王及び三位以上の諸臣の位

階に靡して賜はった食封。

いふぶ……【慰撫】(名) 慰め安んずること。

いふぶ……【威武】(名) たけきこと。勢の強いこと。武力。勢。武威。

いふう【異風】(名) ㊀異なった風俗。㊁異なったすがた。

いふうす……【遺風】(名) ㊀後世に遺る風習。㊁後世に遺ってゐる教。

いふうす……【威風】(名) 威光の他に及ぶ有様。威光。

いふぎ【堂堂】(名) 威風の立派なさま。

いふかし【訝し】(形シク) 怪しい。疑はしい。不審だ。

—い【訝しい】(形シク) 「いぶかしい」の古語。

—がる【訝しがる】(他動、ラ四) いぶかしく思ふ。

—げ【訝しげ】(名) 不思議さう。合點のいかぬさま。

—さ【訝しさ】(名) いぶかしいこと。又、その程度。

—み【訝しみ】(名) いぶかしいこと。いぶかしいこころもち。おぼつかなくゆかしいこと。

いぶかしみ・みす【訝しみす】(他動、サ変) いぶかしがる。(古語) 「ふ。怪しむ。疑ふ。

いぶかる【訝かる】(自動、ラ四) 不審に思ふ。

いぶき【息吹】(名) 息を吹くこと。呼吸。(古語)

—まどわす【息吹惑はす】(他動、サ四) 風が人を吹き惑はす。(古語)

いぶき【檜柏】(名) 【植】松杉科の常緑喬木。高さ二〇米乃至一五米。樹皮は赤褐色で、枝の全形は圓錐狀を呈する。葉に、杉葉の如く尖ったものと小鱗狀のものとあり。單性花は四月頃蘚葉のものに咲く。紫黑色の雌性毬果を結ぶ。いぶきびゃくしん(伊吹柏槇)。

〔きぶい〕

いぶきおろし【伊吹颪】(名) 滋賀縣伊吹山から吹きおろす風。

いぶきじゃこうそう……じゃ……【伊吹麝香草・石薄荷】(名) 【植】脣形科の常緑小灌木。莖は地上を這って多くの枝を分つ。葉は對生し、小形の長卵形である。夏、梢に淡紅色・紫色又は白色の小花を開く。葉と花穗とは香料又は藥用とし、又、揮發油を採取する。ひゃりかう。

いぶきど【氣吹戸】(名) 神が罪穢をお祓になる場所。(古語)

いぶきとらのお……【伊吹虎尾・拳參】(名) 【植】蓼科の多年生草本。高山に自生し、高さ一米位。地下莖は太くて彎曲してゐる。葉は廣披針形深綠色で、下部のものは長い葉柄を有する。夏日、莖端に長さ五糎位の穎合穗狀をなす帶紅色又は白色の花を開く。觀賞用。地下莖は收斂劑に用ひられる。「き。

いぶきびゃくしん【伊吹柏槇】(名) 【植】いぶ

いぶきぼうふう……【伊吹防風・邪蒿】(名) 【植】繖形科の宿根草。高さ三〇—六〇糎位。葉は細かく切れ込み、又、複繖形花序に白色の小花を開く。根は藥用となる。

〔風防吹伊〕

いぶきもぐさ【伊吹艾】(名) 伊吹山中の「よもぎ」の葉で製した上等のもぐさ。

いぶきやま【伊吹山】(名) 【地】滋賀縣と岐阜縣との境にある山。海拔一三三七米。山中には藥草多く、スキー場として有名である。又、日本武尊の賊を討伐された史蹟として名高い。

いふく【異服】(名) 普通とちがった衣服。

いふく【異腹】(名) 父が同じで母の異なるもの。はらがはり。

いふく【倚伏】(名) 互に寄りあって伏在すること。

いふく【衣服】(名) ころも。きもの。衣裳。

いふく【遺腹】(名) 父の死後に生まれた子。わすれがたみ。

いふくぶ……【威福】(名) ㊀威壓と福德と。㊁時に威壓を加へ、時に福德を與へて人を服從しめること。

いふくぶ……【畏服】(名) おそれ從ふこと。

いふくぶ……【畏伏】(名) おそれて顔の上らぬこと。

いふくぶ……【威服】(名) 權威を以て從はせること。

いふくぶ……【氣吹く】(自動、カ四) ㊀氣息を吹く。(古語) ㊁呼吸する。(古語)

いふくぶ……【鼾く】(自動、カ四) いびきをかく。

いふくろ……【胃袋】(名) 【生】(ハ)胃。

いふし【燻】(名) ㊀硫黃をいぶして金物に煤色をつけること。㊁かいぶ(蚊燻)。かやりび(蚊遣火)。

—ぐすり【燻藥】(名) 【醫】患部をいぶして療治する藥。

いふす【射伏す】(他動、サ下二) 射て煙を起こさせ、ひるませる。くすべる。くゆらせる。

いふす【燻す】(他動、サ四) ㊀物を燒いて煙を起こさせる。㊁金屬の器具にいぶしをかける。㊂蚊遣火をたく。

いふせげ(名) いぶせきさま。きたなくていとはしい。

いふせさ(名) いぶせきこと。又、その程度。

いふせし【形、ク】(形、ク) ㊀氣がふさぐ。心が晴しくない。㊁むさくるしい。見苦しい。きたなくていやだ。㊂おぼつかない。

イプセニズム[Ibsenism](名) 【人】イプセン主義。

イプセン[Henrik Ibsen](名) 【人】ノールウェーの劇作家。近代劇の始祖。現實主義の立場から社會生活の深刻を描いた。「人形の家」「鴨」「海の夫人」「人民の敵」等の名作がある。(一八二八—一九〇六)

—主義(名) 【社】イプセンの作物にあらはれた思想傾向。個人主義に立脚して人間性を拘束する一切の社會的傳統的道德宗教の桎梏を批評し、個性解放を叫んだこと。

いふたきぶ……【韻塞】(名) 昔の遊戯の一。古人の詩の韻字を隱してこれを言ひあてるもの。(古語)

いふつ【異物】(名) ㊀普通とはちがった物。あやしい物。㊁死餓。

いふつぶ……【遺物】(名) 死後に遺ったもの。かたみ。

いふりぶ……【燻】(名) ㊀けぶること。㊁心强く無情なこと。殘忍なこと。すれること。無理を言ふこと。㊃人を苦しめること。

—だす【燻出す】(他動、サ四) 人を苦しめて追び出す。いびりだす。

—もの【燻者】(名) 無情の人。すれもの。

いふるぶ……【燻る】(自動、ラ四) けぶる。くすぶる。

いふんぶ……【以聞】(名) 奏上すること。上申すること。「申し上げること。

いふんぶ……【異聞】(名) かはった風聞。珍しい話。

いふんぶ……【異文】(名) 普通とは異なった文書。

いふんぶ……【移文】(名) ㊀同狀。㊁上級官廳又は他官廳よりの公文書の照會文。「文章。

いふんぶ……【遺文】(名) ㊀よい文章。善美な學藝。

いぶんぶ……【遺文】(名) 死者が生前に書き遺した仕事の厚いこと。

いぶんし【異分子】(名) 一團體中に加入してゐて、他の多數のものとは性質や種類のちがってゐるもの。「で、相互の分母の數量の異なるもの。

いぶんぼ【異分母】(名) 【數】二つ以上の分數式

いべい【衣袂】(名) 着物のたもと。

いへきぶ……【胃壁】(名) 【生】胃を形成する壁。筋肉層及び粘膜・漿液膜から成る。

いへん【異變】(名) かはった出來事。變事。

いへん【移變】(名) うつりかはること。うつりかはり。

いへんぶ……【違變】(名) 契約を履行しないこと。「習にたがふこと。へんがへ。

いへんぶ……【章編】(名) 革紐の書籍。

いぼ【疣】(名) ㊀醫)飯粒ぐらゐの大さまで筋肉の塊の皮膚上に凸起したもの。角質の肥厚に基づき、表皮が限局的に增殖して圓形又は不正形の扁平小隆起をなすものも。㊁物の表面にあらはれる小凸起。

—あみ【疣編】(名) 疣の數の多くついたもの。「編む毛絲の編み方。

—いし【疣石】(名) 外部は黑褐色で、砂石が雜りつき、內部は空虛であるもの。いはつぼ。多くついたさま。

—いぼ【疣疣】(名・副) 物にいぼの多くついたさま。

—いぼ【疣瘤】(名) 【醫】風邪の熱によって皮膚に細かくできる發疹。

—うじり【疣毛】(名) ㊀)動)かまきり(螳螂)。㊁いぼむしり。

—がえる【疣蛙】(名) 【動】色黑くて大形で背部に疣の多い蛙。へっぽこがへる。

—かなもの【疣金物】(名) 金物を絲側などの兩に鋲の並列するやうに打ったもの。

—がに【疣蟹】(名) 【動】

甲殻類の節足動物。甲殻は三角形で扰のあるもの。全體に毛を有する。**―くさ**[疣草](名)【植】ぼとりぐさ。**―じり**[疣痔](名)【醫】肛門の邊に扰狀を生ずる痔疾。**―だい**[疣鯛](名)【動】眞魚鯉科の硬骨魚。體長約一五糎。體色は銀白色で斑紋はない。背に扰狀のものがある。**―たけ**[疣茸](名)【植】しめちの一種。叢り生するさまが疣狀を呈するやうに見える。**―とり**[疣取](名)【植】鴨跖草科の草本。水田・池沼に生じ、葉葉共に柔軟で、葉は披針形、尖頭、平行脈を有する。夏、淡紅紫色の小花を開く。扰を治する效がある。**むし**[疣蟲](名)【動】かまきり(螳螂)。**―むしり**[疣毟](名)【動】この蟲で扰を擦でれば、なくなるとの俗説がある。かまきり(螳螂)。**―ゆい**[疣結](名)結び方の一。縄又は紐の結び目を扰のやうに突出した結び方。**―ゆわい**[疣結](名)(いぼゆい)。

いぼ[異母](名)父は同じだが、母の實母ならぬもの。ままはは。

いぼい[炎傷・炎瘡](名)炎の痕のただれること。

いぼう[醫方明](名)【佛】五明の一。印度の古代婆羅門教徒の醫術の研究。

いぼう[異寶](名)世にめづらしい寶。

いぼう[異邦](名)外國。

いぼう[移封](名)諸侯の領地を他へ移すこと。

いぼう[遺法](名)古人ののこした法則。

いぼう[違法](名)法則にそむくこと。反則。**―しょぶん**[違法處分](名)【法】法則に違背した場合の行政處分。

いぼう[彙報](名)類によって集めた報告。

いぼう[位袍](名)位階によって一定した色の袍。

いぼう[後世芳](名)㊀後世にのこる名譽。㊁後世にのこる筆蹟。遺墨。

いぼう[貽謀](名)子孫の爲に考へておくこと。

いぼう[遺忘](名)忘れること。忘却。

いぼう[威望](名)威光と人望。

いぼう[異望](名)常ならぬ望。野心。

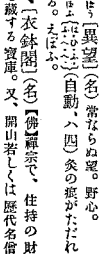
いぼう[自動、ハ四]灸の痕がただれる。いぼる。えぼふ。

いぼかく[衣鉢閣](名)【佛】禪宗で、住持の財物・衣鉢を藏する寶庫。又、開山者しくは歴代名僧の遺影・衣鉢を納める寶藏。**―か**[衣鉢閣下](名)僧侶あての書狀の脇附に用ひる語。

いぼく[以北](名)それより北。

いぼく[異木](名)珍しい樹木。

いぼた[疣取](名)㊀[遺墨](名)生前に書いておいた筆蹟。㊁【植】木犀科の落葉灌木。枝葉共に對生し、葉は長楕圓形。五月頃小白花をつけ、小圓錐花序に配列する。實は黒く圓い。**―の き**[疣取樹・水蠟樹](名)【植】木犀科の落葉灌木。枝葉共に對生し、葉は長楕


〔きのたぼい〕

樹に生じて枝葉を害する。形、芋蟲に似る。蹄結核・胃病等の妙藥とされてゐる。**―ろう**[疣取蠟・蟲白蠟](名)疣取蠟蟲の雄の幼蟲の分泌した白粉を蠟質物に變化せしめたもので、醫具に光澤をつけ、疣を治するに效がある。**―ろうむし**[疣取蟲・水蠟樹蟲・蟲](名)【動】有吻目の小蟲。雄は體色橙黄色で背面に赤褐色斑がある。觸角と翅とを有し、尾端に一對の白色尾狀器を具へ、脚も發達する。雌は怒生無翅で、灰褐色、尾端に凹部がある。

いぼこ[衣鉢箱](名)【佛】禪寺の金錢出納源。

いぼり[燻](名)霧・雾などのもやもやとたちのぼること。(古語)

いぼり(名)いぼること。灸のあとのただれること。

いぼる[自動、ラ四]灸の痕がただれる。いぼふ。

いぼん[異本](名)㊀普通本とはちがった書物。珍本。㊁同じ書であるが文字や文句の違った部分のある書。

いまん[遠犯](名)(いはん)遠犯。「る書。

いま[今](名)㊀現在。眼前の時。現今。㊁少し前。たった今。**―とういふ今**(句)ただいま。ほんのいましがた。**―の間**(句)暫しの間。目前。**―のまさか**(句)今の此の時。(古語)**―は昔**(句)今から見れば昔。古い物語などの始に用ひる語。たねうちに。やがて。おっつけ。㊁更に。其の上に。**―いちど**[今一度](副)更にもう一度。**―いまと**[今今と](副)今か今かと。ちきに。**―いまと**[今今と](副)今か今かと。**―ごろ**[今頃](名・副)いまじぶん。**しくわ**[今しくは](副)今となっては。**に**[今に](副)なほ。今となっても。**―にも**[今にも](副)すこし程經てやがて。間もなく。**―が今**(句)すぐに。**―か今かと**(句)物事のすぐに來るかとあせって待つこと。**―こそあれ**(句)今はこんなだけれど、昔はさうではなかった。**―今となる**(句)臨終になる。(古語)**―に始めぬ**(句)從來からあったことで、今に始まったことではない。**―は斯うと**(句)㊀今は斯くの如くなった。㊁もうこれまでだ。**―はかも**(句)今頃はまあ。(古語)

いま[今](接頭)現在すぐれる人を・背の名人になぞらへていふ語。「一業平」「一牛若」。

いま[居間](名)常に起臥する室。屋室。

いまいまし[忌忌し](形、二)㊀癪にさわる。㊁忌きらふ(きことだ。憎むべきことだ。(古語)㊂腹だたしい。殘念だ。**―しい**[形]いまいましいの口語。**―げ**[忌忌しげ](名)いまいましいさま。**―さ**[忌忌しさ](名)いまいましいこと。又、その程度。

いまいり[今入](名)㊀しんいり。しんざん。㊁牢屋に新しくはひって來ること。又、その人。

いまえ[射前](名)矢を射る時の姿勢。

いまき[異本](名)㊀普通本とはちがった書物。珍本。㊁同じ書であるが文字や文句の違った部分のある書。

いまん[遠犯](名)(いはん)遠犯。「る書。

いま[今](名)㊀現在。眼前の時。現今。㊁少し前。たった今。**―とういふ今**(句)ただいま。ほんのいましがた。**―の間**(句)暫しの間。目前。**―のまさか**(句)今の此の時。(古語)**―は昔**(句)今から見れば昔。古い物語などの始に用ひる語。たねうちに。やがて。おっつけ。㊁更に。其の上に。**―いちど**[今一度](副)更にもう一度。**―いまと**[今今と](副)今か今かと。ちきに。**―いまと**[今今と](副)今か今かと。**―ごろ**[今頃](名・副)いまじぶん。**しくわ**[今しくは](副)今となっては。**に**[今に](副)なほ。今となっても。**―にも**[今にも](副)すこし程經てやがて。間もなく。**―が今**(句)すぐに。**―か今かと**(句)物事のすぐに來るかとあせって待つこと。**―こそあれ**(句)今はこんなだけれど、昔はさうではなかった。**―今となる**(句)臨終になる。(古語)**―に始めぬ**(句)從來からあったことで、今に始まったことではない。**―は斯うと**(句)㊀今は斯くの如くなった。㊁もうこれまでだ。**―はかも**(句)今頃はまあ。(古語)

いま[今](接頭)現在すぐれる人を・背の名人になぞらへていふ語。「一業平」「一牛若」。

いま[居間](名)常に起臥する室。屋室。

いまいまし[忌忌し](形、二)㊀癪にさわる。㊁忌きらふ(きことだ。憎むべきことだ。(古語)㊂腹だたしい。殘念だ。**―しい**[形]いまいましいの口語。**―げ**[忌忌しげ](名)いまいましいさま。**―さ**[忌忌しさ](名)いまいましいこと。又、その程度。

いまいり[今入](名)㊀しんいり。しんざん。㊁牢屋に新しくはひって來ること。又、その人。

いまえ[射前](名)矢を射る時の姿勢。

いまき[今來](名)(いまきいり)新參。(古語)

いまき[今木](名)㊀昔、貴人の御湯殿に奉仕した人の腰にまとった布。㊁婦人の腰にまとふ布。ゆまき。ゆもじ。こしまき。

いまぎさき[今后](名)今上天皇の皇后。(古語)

いまぎさき[今切](名)【地】駿河縣濱名湖の海に續く邊の稱。江戸時代に渡津を設け新の渡といった。

いまさか[今坂](名)いまさかもち。**―もち**[今坂餅](名)餡を包んだ櫛間形の餅。多く紅・綠等の色を著け、燒蔵の上で焙る。今となって。今改めて。事新

いまさら[今更](副)今となって。今改めて。事新

いまし[汝](代)汝。きさま。あなた。(古語)

いまし[今し](副)今。たった今。(し)は上の語を強める助詞。**―がた**[今方](副)いますこし前。いまがた。**―もあれ**(句)今といふ今。ちやうどいま。

いまし き[今しき](名)今。(古語)**―のまし き**[今しきの間](名)いま。いましき。

イマジズム[imagism](名)【文】寫象主義。一九〇九―一九年の間に米詩人アミ―ロ―ウェル、英詩

いまおり[今織](名)今風の織り方。

いまかがみ[今鏡](名)【歴】歴史物語。「大鏡」の後を受けて、後一條天皇の萬壽二年(一〇二四)から高倉天皇の嘉應二年(一一七〇)まで十三代凡そ一四〇年間の帝紀・公卿列傳・逸話・傳説を採録した書で、「續世繼」ともいふ。一〇卷。

いまがた[今方](副)少し前に。今しがた。

いまがわじょう[……ぜう]今川狀(名)今川了俊の案範の書。其の弟仲秋を訓誡したもの。一卷。江戸時代に習字用としたもの。今川聖書。

いまがわやき[……ぜ]今川燒(名)水で溶かした餡餅粉を銅板の鍋に注ぎ、中に餡を入れて燒いた菓子。昔、江戸神田今川橋邊の者が製し始めたもの。

いまがわよしもと[……ぜ]今川義元(名)【人】武將。氏親の子。威を駿・遠・參の間に振ふ。永祿三年(一二二〇)、織田信長と戰って桶狭間に戰死した。年四十二。

いまき[今來](名)(いまきいり)新參。(古語)

いまき[今木](名)㊀昔、貴人の御湯殿に奉仕した人の腰にまとった布。㊁婦人の腰にまとふ布。ゆまき。ゆもじ。こしまき。

いまぎさき[今后](名)今上天皇の皇后。(古語)

いまぎさき[今切](名)【地】駿河縣濱名湖の海に續く邊の稱。江戸時代に渡津を設け新の渡といった。

いまさか[今坂](名)いまさかもち。**―もち**[今坂餅](名)餡を包んだ櫛間形の餅。多く紅・綠等の色を著け、燒蔵の上で焙る。

いまさら[今更](副)今となって。今改めて。事新

いまし[汝](代)汝。きさま。あなた。(古語)

いまし[今し](副)今。たった今。(し)は上の語を強める助詞。**―がた**[今方](副)いますこし前。いまがた。**―もあれ**(句)今といふ今。ちやうどいま。

いまし き[今しき](名)今。(古語)**―のまし き**[今しきの間](名)いま。いましき。

イマジズム[imagism](名)【文】寫象主義。一九〇九―一九年の間に米詩人アミ―ロ―ウェル、英詩

人エズラパウンド等によって唱へられた英詩上の自由詩派の主張。浪漫主義の反動として起こり、影像の正確自由な表現、新しい韻律の創造等を主張し、我が俳句の影響を受けた。

「架空的。

イマジナリー[imaginary](英、形) 想像上の。想像力。空想。構想。

イマジネーション[imagination](名) 想像。

いましむ[ましむ・しめ・しむる・しむる・しむれ・しめよ](他動、マ下二)㊀注意して過のないやうにする。㊁前以て用心させる。禁する。㊂叱る。とがめる。㊃しばる。禁錮にする。㊄過のないやうにとつとめる。㊅守備を厳にする。

いましめ[戒・誡・警](名)㊀いましめること。㊁いまいきめ。さとし。㊂禁制。禁止。㊃守備。警戒。警戒。㊄しばること。

いましめる[ましめる・しめる・しめる・しめれ・しめよ](他動、マ下一)「いましむ」の口語。

いまじる[まじる・まじり・まじる・まじる・まじれ・まじれ](居交る)(自動、ラ四)入りまじって坐る。

イマジン[imagine](英、動) 想像する。考へる。

います[ます・ます・ます・ます・ます・ます・ませ・ませ・ませ

齋院に奉仕する女子。(古語)**—ごと**〔忌事〕(名) 忌むべき事。五戒・十戒等。**—ことば**〔忌詞〕(名) ❶物忌の期間などに不祥な言語を使はぬこと。卽ち忌んでいはぬ詞。❷忌み嫌つて代用する言葉。「經」を「染紙」、「僧」を「髪長」、「寺院」を「瓦葺」、「墓」を「つちくれ」、「病」を「息ぬし」、「血」を「赤汗」、「四」を「よ」、「硯箱」を「あたり箱」、「梨」を「有りの實」といふ類。**—ごめん**〔忌御免〕(名) 官吏などが、忌服を許されて出仕すること。除服出仕。**—ずき**〔忌月〕(名) 忌むべき月。正・五・九月の類。**—だけ**〔忌竹・齋竹〕(名) 神事に不淨を防ぐ爲に立てる竹。❶**な**〔諱・忌名〕(名) ❶死後、忌んで使はぬ生前の名。❷實名。❸死後に尊んで設けた稱號。おくり名(號)。**—び**〔忌日〕(名) ❶死者の命日。❷神佛に仕へて、精進する日。❸陰陽家などで、禍ありといふ日。(古語)**—もの**〔忌物〕(名) 忌んで食べぬ物。用ひぬもの。**—もん**〔忌門〕(名) 凶事ある際に開く門。

いみ〔齋〕(名) 不淨を避け愼むこと。(古語)**—がき**〔齋垣〕(名) 神社の周圍の垣。いがき。みづがき。(古語)**—ぐし**〔齋串〕(名) 玉と幣とを掛けた榊又は竹で、神前に奉るもの。ぐし。(古語)**—くら**〔齋藏〕(名) 祭事に用ひる神物・官物を納めておく藏。(古語)**—さぶらい・や**〔齋侍屋〕(名) 伊勢神宮で、潔齋したもののねる家。(古語)**—だち**〔齋館〕(名) 神殿の傍にあつて、潔齋の爲、神官の籠る處。かむだち(神館)。(古語)**—どの**〔齋殿〕(名) ❶いみだち。❷伊勢神宮にあつて潔齋する殿。(古語)**—ば**〔齋場〕(名) 神を祭る場所。(古語)**—はたどの**〔齋服殿〕(名) 神衣を織る所。いむはたどの。(古語)**—び**〔齋火〕(名) 上古に、祭器を造り、又、神事をつかさどつた人。いむべ。(古語)**—べどの**〔齋部殿〕(名) 神祇官八神殿の東南にあつた殿舍で、御璽を祭つたが、後には所將を行ふ所となつた。(古語)**—みや**〔齋宮〕(名) いさい(齋宮)。(古語)

いみじ〔忌じ・忌じき・忌じけれ〕(形、二) ❶甚だしい。著しい。❷すぐれてゐる。❸かりそめにしまい。大切である。(古語)

イミテーション〔Imitation〕(名) 眞似。模倣。「模造品。

いみょう〔異名〕(名) ❶本名以外の名。別名。❷あだな(綽名)。

いみん〔移民〕(名) ❶他所に移り住む人民。❷勞働する目的で支那以外の外國に渡航する者と其の家族。**—かいしゃ**〔移民會社〕(名) 移民の募集・渡航の周旋をなす營利會社。**—せいげんしゅぎ**〔移民制限主義〕(名) 國內の勞働者を保護する目的で、外來の移民を制限する主義。

いみん〔遺民〕(名) 君主が滅びて、後に遺つてゐる民。

いむ〔醫務〕(名) 醫事に關する事務。**—きょく**〔醫務局〕(名) 陸軍省・海軍省の一局で、醫事及び衞生に關することを掌る。

いむ〔忌む・ま四〕(他動) ❶物忌をする。❷憚る。❸きらふ。さける。(古語)❹愼む。(古語)

いむ〔齋む・ま四〕(他動) 神に供へる食物を煮炊する。(古語)

いむおの〔齋斧〕(名) 神殿を造營し、又は神に奉る材木を伐るに用ひるいみ清めた斧。

いむかま〔齋鎌〕(名) 神社の境內の草木を刈るいみ清めた鎌。(古語)

いむおまど〔齋竈〕(名) 神に供へる食物を煮炊するいみ清めた竈。(古語)

いむけ〔射向〕(名) 弓手卽ち左手。弓を射る時、自然に敵の方に向かふかたいふ。**—の・そで**〔射向袖〕(名) 鎧の左の袖。

いむこう〔い向ふ〕(自動、ハ四)「いに接頭語」向かふ。(古語)

いむこやおとめ〔齋子八少女〕(名) いむこやめ(齋火八女)の古語。

いむこやめ〔齋火八女〕(名) 大嘗會の時、稻春歌を歌ふ八人の童女。(古語)

いむしろ〔射筵〕(名) 弓場で敷くむしろ。いさきむしろ。(古語)

いむしろ〔藺薦〕(名) 藺で編んだむしろ。

いむすき〔齋鋤〕(名) 神事の造營などに地を掘るに用ひるいみ清めた鋤。(古語)

いむたな〔齋棚〕(名) 神事用のいみ清めた棚。(古語)

いむたまする〔齋玉磨〕(名) 神に捧げる玉を磨ること。身を清めて玉をつくる人。(古語)「の砌。

いむつき〔忌月〕(名) 物忌すべき月。正・五・九月

いむばしら〔齋柱〕(名) いみ清めて立てる正殿の心の柱。(古語)

いむび〔齋火〕(名) 神に供へる物を煮炊するいみ清めた火。いみび。(古語)**—や**〔齋火屋〕(名) 齋火を主り出す殿舍。(古語)

いむべ〔齋釜〕(名)〔いわいべ×齋釜〕。(古語)

いむべ〔齋部・忌部〕(名) ❶いみべ(齋部)。(古語)❷伊勢大神宮忌部姓の使の一。

いむみぞ〔齋御衣〕(名) 齋宮・齋院のお召しになつたいみ清めた御衣。(古語)

いめ〔夢〕(名) ゆめ。(古語)

いめ〔射部〕(名) 多くの射手。(古語)

いめ〔異名〕(名) ❶いみょう(異名)。

いめ〔遺命〕(名) 臨終の時のいひつけ。

イメージ〔Image〕(名) 像。肖像。影像。偶像。心像。姿。形象。概化。「國に屬して射る。

いめぐらす〔射繞らす〕(他動、サ四)

いめたてて〔射部立てて〕(枕)「とみ」の枕詞。

いも〔夷・滅〕(名) 滅ぼしつくすこと。

いも〔名〕贈物の包紙の上に書いた平假名文字。「以上」の草體とも、財斗廚の略體で「のし」と同じだともいふ。

いも〔芋〕(名) ❶〔植〕天南星科の栽培草本で、發分貯藏器官たる塊狀の地下莖又は根を有し、高さ七〇糎位。葉は大形の楕圓形。「さといも」「たうのいも」「やつがしら」「あぐいも」等の總稱。❷いもすけ。❸いもほり。❹いもつぎ。**—の煮えたも御存じない**(句) 多人數の雜香するまの醫。**—を洗ふ**(句) 多人數の雜香するまの醫。

いも〔蕷・薯〕(名)〔植〕「つくねいも」「かしらいも」「やまのいも」「ながいも」等の總稱。❶薩摩國人を罵つていふ語。顏面にある疱瘡のあと。あばた。

いも〔痘痕〕(名) 顏面にある疱瘡のあと。あばた。❷すぐれてゐる。❸かりそめにしまい。大切である。(古語)

いも〔妹〕(名) ❶男が女を親しんで呼ぶ語。❷妻。❸いもうと。(以上古語)薩摩琴・馬鈴薯等を原料として製した餡。

いもあん〔薯餡〕(名) 物忌をしてゐること。(古語)

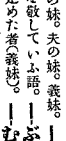
いもい〔齋屋〕(名) 齋居宮子。(古語)**—みやこ**〔齋居宮子〕(名) いつきのみや(齋宮)。(古語)

いもい〔齋〕(名) ものいみ。(しょうじん)(精進)。(古語)**—の玉**(句) 精進潔齋の清らかなことを玉に譬へていふ。「むこの延。(古語)

いもう〔齋ふ〕(他動、ハ四) いむ(齋)。

いもうと〔妹〕(名) ❶後に生まれた同胞の女子。❷年少の女を親しんでいふ語。❸妻の妹。夫の妹。義妹。**—ぶん**〔妹分〕(名) 假に妹と定めた者(義妹)。**—むこ**〔妹婿〕(名) 妹の夫。**—むつび**〔妹睦〕(名) 妹に通ずること。(古語)

いもがい〔芋貝〕(名)【動】卷貝の科名。介殼は略、圓錐狀をなし、螺層があり、里芋の子に似てゐて、種類が多い。腰海の砂底に棲息する。「くろみなし」「たがやさんみなし」等之に屬する。



〔貝 芋〕

いもがいえに〔妹が家に〕(枕)「いく」の顏。あばたづら。じゃんづら。

いもがおど〔痘痕顏〕(名) ❶入り出づ」「出で入る」の枕詞。❷〔宮〕催馬樂の曲名。

いもがかど〔妹門〕(枕名) ❶入り出づ」「出で入る」の枕詞。❷〔宮〕催馬樂の曲名。

いもがかみ〔妹髮〕(枕)「あぐ」の枕詞。

いもがきる〔妹が着る〕(枕)「みかさ」の枕詞。

いもかけどうふ〔薯掛豆腐〕(名) 煮た豆腐にすつた山芋の汁をかけた食品。やまかけどうふ。ところどうふ。

いもがさ〔痘痕〕(名)(ほうそう)疱瘡。もがさ。「古語)

いもがしら[芋頭・芋魁](名) 里芋の球茎。おや

いもがそで[妹袖](枕)「まくの枕詞。**—いも**。

いもがてお[妹が手を](枕)「とる」の枕詞。

いもがひも[妹紐](枕)ゆふ(結ふ)の枕詞。**—詞**。

いもがめお[妹が目を](枕)「見る」の枕詞。

いもがゆ[薯粥](名) ㊀山芋を煮て甘葛(あまづら)・飴・蜜等を入れて炊いた粥。㊁麻摩等を入れて炊いた粥。

いもがら[芋幹・芋莖](名) 芋の地上茎を日に乾かしたもの。生のものを「すぬき」といふ。「語」

いもがり[妹許](名) 妹のゐる所。妹のもとへ(古ふ語。

いもこ[妹子](名) いも(妹)。「子」は親しんでいふ語。

いもごみ[薯籠](名) 米の粉に「やまのいも」を混ぜて、昆布で包み、だれ味噌で煮て、小口切にした食品。

いもざけ[薯酒](名)「やまいも」をすりまぜた酒。

いもさし[芋刺](名) 芋を竹串で刺貫くやうに人を槍で突き刺して殺すこと。

いもし[歌](名) いもがら。(古語)

いもじ[い文字](名)【動】いが(鳥賊)。(禁中の女房の語)

いもじ(名) ゆもじ。湯具。

いもじ[鑄物師](名) いものし。(古語)【魏。

いもしゅうとめ[妹姑](名) 夫の姉妹。

いもしょうちゅう[薯燒酎](名) さつまいも(甘藷)を原料として醸造した燒酎。

いもじる[薯蕷汁](名) とろろじる。

いもしんじょ[諸糝薯](名)「やまのいも」又は「つくねいも」をおろし、豆腐にまぜてゆでたものの。無器用な人。

いもすぐる[芋蔓・芋蕷蔓](名) ㊀山芋又は薯蕷の蔓。㊁それからそれへ縁を求めて立身すること。次から次へと事実の露はれること。

いもせ[妹脊](名) ㊀女と男と。㊁夫婦。㊂妹と兄と。姉と弟と。(以上古語)

いもせ[妹脊](名) 夫婦の縁を結ぶこと。**—やま**[妹脊山](名) ㊀妹山と脊山。㊁いもせやまおんなていきん。

いもせやまおんなていきん[妹脊山婦女庭訓](名)【文】近松半二・三好松洛・近松東南等合作の浄瑠璃。蘇我入鹿が中臣鎌足の子淡海に滅されることを背景として、種種の情事をしくんだもの。その中で「妹脊山道行」は特に名高い。明和八年(一四三一)大阪竹本座初演。

いもだい[芋臺](名) 芋の莖葉で作り立てた臺で、鰹鑑の酒事に島蒐などと共に作る。

いもだね[芋種](名)

いもちびょう[稻熱病](名)【植】禾本科植物の莖葉に生ずる病の一種で、莖葉に斑点が寄生し、白斑を現はし、次第に衰弱して穂を出さぬやうになるもの。

いもつき[芋繼](名)【建】煉瓦積又は石積等で或層の壁の繼目が次層の同じ繼目と一直線上にあるもので、工事の弱點として忌む。

いもでんがく[芋田樂](名) ㊀里芋を串にさし、味噌をつけて燒いた料理。㊁男と妾との姦通。

いもと[妹](名) いもうと。「愛の意。(古語)

いもなな[妹なな](名) 妹又は兄。(なれ)は親

いもなろ[妹なろ](名) いもなれ。(古語)【同。

いもにこい[妹に戀ひ](枕)「まよ」の枕詞。

いもねらら[妹根等](名) いもなれ。(古語)

いもの[鑄物](名) 金屬を熔かし、鑄型に流して造った器物。

—し[鑄物師](名) 鑄物を造る人。いもじ。**—ぼり**[鑄物彫](名) 鑄物のかけた部分を補って丸彫のやうに見せるもの。

いものこ[芋子](名) ㊀親芋についた小塊。こいも。㊁瀬戸燒業人の一種。

いものやま[芋山](名) 連歌で、山芋を轉倒していふこと。轉じて物事の齟齬すること。

いものらら[妹能等](名) いもなれ。(古語)

いもびな[芋雛](名) 顔長くして、里芋の皮をむいたのに似て雛形。

いもぼり[芋掘・薯掘](名) ㊀芋を掘ること。又、その人。㊁ゐなかものの為ふていふ語。土百姓。**—**

いもぼうず[芋掘坊主](名) 無能な坊主。

いもむし[芋蟲](名)【動】㊀蝶や蛾の幼蟲で毛を有しないものの總稱。㊁天蛾科の蛾の幼蟲。尾端に一本の角を有し、體に美麗な斑紋がある。春夏の候、草木の葉を食害する。

いもめいげつ[芋名月](名) 陰曆八月十五夜の月。「いも」を供へるによって名づく。中秋名月。

いもめんぐ[薯蕷麵麭](名) 稲米と糯米との粉に山芋のおろし汁を混じてこれ、ゆでて冷水を注ぎ、蕎麥醤油をかけて食するもの。

いもやま[妹山](名)【地】㊀歌枕の一。和歌山縣伊都郡笠田村脊山の附近にある丘の古稱。(脊山の對)㊁歌枕の一。奈良縣吉野郡上市町の東、吉野川の北岸にある茂山の古稱。(脊山の對)㊂歌枕の一。石見國にあるといふ山。妹脊山。「詞。

いもり(名) 「いまき」(今來の枕

いもらがり[妹等許](枕)「井守・蠑螈」(名)【動】有尾目の兩棲動物。池沼・井戸などに棲むが、肺なほ以て空氣を呼吸する。「やもり」に似て稍大きく、背面は、暗褐橄色乃至黑褐色。腹面は赤色地に黑色斑點がある。長さ四糎位。四肢不分で歩行は拙劣であるが、尾はひらたくて游泳に適する。**—の黑燒**(句) 雌雄交尾せるゐもりを黑燒にし、之を粉末にしたもの。之をひそかに戀人によこされば、又は酒に混ぜて飲ませれば、その人が我に戀くやうに迷信的媚藥。

いもろ[妹ろ](名) いも(妹)。(古語)

いもん[倚門](名)(戰國策、齊國の句)門戸によりかかること。**—の望**(句) 母が我が子の歸るのを待ちわびて、門戸に倚りかかること。

いもんぐ……[聞門](名) おくこてん。後宮。

いもんぐ……[慰問](名) 慰める爲に訪問すること。みまふこと。**—し**[慰問使](名) 慰問に遣はされる使者。**—じょうじ**[慰問狀](名) 慰問の爲に送る手紙。**—テント**[慰問—](名) 出征軍人を慰問する爲、戰地に張ったテント。慰撫その他の設備を設ける。**—ぶくろ**[慰問袋](名) 出征軍人又は罹災者などを慰問する爲に、思ひ思ひに袋の中に種種の日用品・雜誌などを入れた袋。其の筋の手を經てくばる。

いや[否・嫌](名) 好まぬこと。欲ぜぬこと。厭ふこと。いや。**—!おとこ**[嫌男・否男](名) いやと思ふ男。**—かたぎ**[嫌氣質](名) いやにかたくなな性質。きまじめ一方の氣質。**—つとめ**[嫌勤](名) 厭はしい勤め。いやな仕事。**—ふうふ**[嫌風](名) いやらしい風。感じのよくない恰好。**—もの**[嫌物](名) いとはしいもの。きらひな人。**—でも應でも**(句) 是非とも。承知でも不承知でも。**—といふ程**(句) もうしたくないといふ程。飽と迄。ひどく。「はも。

いや[否](副) ㊀いいえ。いえ。いな。㊁或は。又

いや[彌](副) 次第に進んで。いよいよ。ますます。

いや(感) 驚いた時の發聲。やあ。

いや[禮](名) うやまふこと。禮。禮儀。(古語)

—!いやし[禮](名) うやうやし。恭敬。**—ごと**[禮事](名) 禮儀。(古語)**—じ**[禮代](名)(いやじろ)。(古語)**—じろ**[禮代](名) 敬意を表する爲に贈る物。れいもの。(古語)**—なし**[禮無し](形・一) 無禮である。不作法である。生意氣である。(古語)

イヤー・ブック[Year-book](名) 年鑑。年報。

いやいとこ[彌從兄弟](名) 父のいとこの子。またいとこ。

いやいや[否否](副) ひどくいやがって。かぶりを振ること。

いやいや[否否](副) ㊀いいえ。いなないな。㊁いやいやではあるが。**—三杯十三杯**(句) いやだと思ひながら、知らず識らず飲みすごすこと。いやだと思ひながら思はず深入すること。

いやいや[彌彌](副) いよいよ。ますます。

いやおい[彌生](名) ㊀草木がいやが上に生えること。(古語)㊁陰暦三月の異稱。やよひ。いや

おひのつき 閏生の月。（古語）

いやおう［否應］（名）いなむとうべなふと。不承知と承知と。**—なし**［否應無し］（形、一）（名詞の如く用ひる）是非みいはず。いやでもおうでもとんちゃくせず。**—なしに**［否應無しに］（副）無理にでも。おしつけて。

いやおちに……［彌遠に］（副）いよいよ遠く水しく。（古語）

いやがうえに……［彌が上に］（副）あるがうへにますます。更に重れて。

いやがる［嫌がる］（他動・ラ四）いやだと思ふ。きらふ。

いやき［嫌氣］（名）㊀いやだと感ずる氣持。氣の進まぬこと。㊁經相場で、自分の思ふ通りにならぬため、缺損を顧みずに處分的行動を取る氣分。

いやく［意譯］（名）原文の意味を取って飜譯すること。（直譯の對）

いやく［醫藥］（名）藥で病氣をなほすこと。醫療の藥品。**—ぎょうせい**……［醫藥行政］（名）醫生行政の一。疾病の治療に從事する人、及び藥物に對する行政。卽ち醫師・藥劑師・藥種商・製藥者・產婆・看護婦及び藥品等の取締に關する行政。**—の**

かみ［醫藥神］（名）醫療を掌る神で、大國主神・少彥名命・及び佛教で藥師如來の如きをいふ。

ぶんぎょう……［醫藥分業］（名）診察は醫者がなし、投藥は藥劑師がすること。

いやく……［違約］（名）約束をたがへること。**—きん**［違約金］（名）【法】契約の債務不履行の損害賠償として支拂ふ金錢。**—しょぶん**［違約處分］（名）【法】違約者に對する制裁としての處分。

いやさ［否さ］（感）言ひかけた言を外にそらす時に發する語。

「よいよ遠く離れる。（古語）

いやさか［弥栄］（名）いよいよ榮ること。

いやさかる［離る］（自動・ラ四）いよいよ遠く離れる。

いやし［賤し・卑し］（形、二）㊀身分が低い。位が低い。㊁貧しい。みすぼらしい。㊂下品である。おとってゐる。心がけがらはしい。㊃わるい。㊄價が安い。**—い**［賤しい・卑しい］（形、二）いやいしの口語。**—げ**［賤しげ］（名）賤しい姿。賤しい樣子。**—さ**［賤しさ］（名）いやしいこと。又、その程度。**—ざと**［賤人］（名）身分の低い人。四天。（古語）**—き名**（句）卽あって官位を下げられた人のよくない名。

いやじ……［忌地・彌地］（名）【農】同一作物を同じ地に二回以上續けて作る時、其の作物のよく生育せぬ土地。**—びょう**……［忌地病］（名）【農】作物を忌地に續ける爲に發する作物の病氣。

いやしく［彌重く］（自動・カ四）いよいよげくなる。たび重なる。（古語）

いやしくしく［苟も］（副）いよいよますます。（古語）

いやしくも［苟も］（副）㊀かりそめにも。かりにも。㊁若しも。萬一。果して。㊂ただ。ただに。さげすみ。けいべつ。

いやしみ［賤・卑］（名）いやしむこと。あなどり。

いやしむ［賤しむ・卑しむ］（他動、マ四）みさげる。かるしめる。あなどる。さげすむ。

いやしむ［彌めむ］［賤しむ・卑しむ］（他動、マ下二）前條に同じ。

いやしめる［彌めるる］［賤しめる］（他動、マ下二）「いやしむ」の口語。

いやしんぼう……［賤坊］（名）物を貪る人。もの欲しがる人。

いやしんぼう……［慾す］（他動、サ四）病をなほす。

いやすかし［彌高し］（形、一）いよいよ高い。（古語）

いやたかに［彌高に］（副）いよいよ高く。（古語）

いやたつ［彌立つ］（他動、タ下二）いよいよことだて（言立）をする。（古語）

いやちこ［灼］（名）神佛のりやく（利益）の著しいこと。あらたか。（古語）

いやつぎつぎに［彌次次に］（副）いよいよ長くつづいて。いよいよ次に續いて絕えざまに。（古語）

いやつぐ［陪臣］（名）まだけらい。（古語）

いやとおながし……［彌遠長し］（形、一）時々遥のいよいよ遠く長いのにいふ。（古語）

いやとおに……［彌遠に］（副）いよいよ遠く。

いやときじくに［彌時じくに］（副）（いやとこしえに）。（古語）

いやとこしえに……［彌常に］（副）いよいよ永久に かはらずに。ますます盛んに榮えつづいて。（古語）

いやとこわ……［彌常葉］（名）いよいよ常磐なラ四）年月がいよいよ遠さかる。

いやとしさかる［彌年離る］（自動、ラ四）年月がいよいよ遠さかる。

いやとしに［彌年に］（副）年ごとに。年年に。（古語）

いやとしのはに［彌年毎に］（副）いやとしに。永久に。（古語）

いやとよ［否とよ］（副）いえ。いいえ。

いやに（副）變に。妙に。

いやは［彌齒］（名）重なってはえる齒。や（八）ば（八）。

いやはし［彌端］（名）一番の端。最極端。（古語）

いやはつはな［彌初花］（名）最も早く咲く花。

いやはて［彌果］（名）一番のはて。最後。

いやはや（感）驚きあきれた時に發する聲。まことに。おやおや。いやもう。

いやはやに［彌早に］（副）いよいよ早く。（古語）

いやひけに［彌日異に］（副）毎日毎日つづいて。多くの日を經て。（古語）

いやぶ……［禮ぶ］（他動、バ上二）あやまる。うやまふ。（古語）

いやまさり［彌增り］（副）いやましに。

いやまさる［彌增る］（自動、ラ四）だんだん多くなる。いよいよまさる。

いやまし［彌增し］（副）いよいよますます。

いやましに［彌增しに］（副）いよいよますます。

いやみ［否味］（名）相手に不快な感じを抱かせる言葉や態度。

いやみおし［見がほし］（形、一）いよいよ見たい。ますます美しいままである。（古語）

いやむ［否む］（他動、マ四）きらふ。いなむ。（古語）

いやめ［否目］（名）涙ぐんだ目つき。（古語）

いやめずらし［彌珍し］（形、一）いよいよめづらしい。（古語）

いやもう……［敬ふ］（他動、ハ四）うやまふ。

いやもう（感）いやはや。

いやもて［否持］（名）心ではきらひながら、表面

いややかし［敬］（名）虛飾の正しいさま。

いやよつき［彌世繼］（名）【歷】年鑑。（書名）

いやらし［否らし］（形、一）眼はしい。きらはしい。**—い**［厭らしい］（形、二）眼はしいまでに色めかしい。みだりがましい。**—い**［否らしい］（形、二）「やらし」の口語。

いゆ［癒ゆ］（自動、ヤ下二）病がなほる。全快する。全治する。本復する。いえる。

いゆ［慰諭］（名）なぐさめさとすこと。（語）

いゆ［射ゆ］（動）㊀射る。（古語）㊁射られる。（古語）

いゆう［畏友］（名）畏んじうやまふ友人。

いゆきあいの……［い行遇の］（枕）「さか」（坂）の枕詞。

いゆし［い行し］（自動、カ四）行く。

いゆしし［射ゆ鹿の］（枕）「いたし」（痛し）。「死ぬ」の枕詞。

いよ［彌］（副）「いや」（彌）の轉。いよいよ。ますます。

いよ（感）賞めはやす時に發する聲。（古語）

いよいよ［愈］（副）㊀その上に。ますます。㊁たしかに。㊂とうとう。終に。

いよう……［威容］（名）いかめしい姿。威嚴のある姿。かはつたみなり。

いよう［異容］（名）異樣。異なったさま。かはったやうす。

いよかずら……［伊豫葛］（名）【植】羅摩（ばが）科の多年生草本。葉莖を有して他物に纏繞する。花は對生し、卵形又は楕圓形。夏、葉腋から花梗を抽き、黃綠色の小花を開き、蕚微花序に配列し、花後、乾果

を結ぶ。種子は長毛を有して飛散に便する。

いよがすり〔伊豫絣〕(名) 松山市附近から産出する絣の木綿織物。松山絣。

いよく〔意慾〕(名) 心の欲する所。何かを得ようと思ふ心。**—しゅぎ**〔意慾主義〕(名)【法】刑法上、犯罪事實を知って犯罪行爲を決意し、犯罪事實を生ぜしめんと欲するものにして、始めて刑事上犯罪の故意ありとすべしとする主義。

いよこさね〔伊豫小札〕(名) 鎧の小札の一種。形は鉄刷の小札のやうで、一文字に切ってその端を圓くしたもの。

いよ……〔……〕(名) 居心地がよい。

いよすだれ〔伊豫簾〕(名) 昔、伊豫國浮穴(うけあな)郡露峯に産する篠竹で編んだ簾で、その篠は細長く太さの均一なもの。

いよせたつ〔……〕〔い寄せ立つ〕(他動、ラ下二)(「い」は接頭語)寄せかけて立てる。(古語)

いよぞめ〔伊豫染〕(名) 伊豫簾を重れて透かした時に見える水目のやうな模様を絹等に染めたもの。

いよだつ〔……〕〔彌堅つ〕(自動、タ四)喪き又は恐怖の爲に身の毛が立つ。よだつ。(古語)

いよと〔伊豫砥〕(名) 愛媛縣伊豫郡北山崎村及砥部町に産する白色の砥石。

いよまさ〔伊豫柾〕(名) 伊豫國から産出する和紙で、楮皮にパルプを混じて抄いたもので、多く鯨幕に用ひられる。【(古語)】

いよやか(名)(副) 森などのいよいよ高く繁えるさま。

いよよ〔愈〕(副) いよいよ。

いよよか(名) いよいよか。(古語)

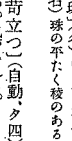
いよよる〔……〕〔い寄る〕(自動、ラ四)(「い」は接頭語)よる寄る。

いよ・る〔……〕〔居寄る〕(自動、ラ四)① 坐りながら近寄る。② 近づいて坐る。「彦すると木蝦蟇」

いよろう……〔伊豫蟾〕(名) 愛媛縣の中部以南に産する木蛙の一種。はり。

いら〔苛・刺〕(名) ① 草木のとげ。はり。② 魚類の矛の鰐。③【植】いらくさ。

いらく〔……〕(名)【植】蕁麻科の多年生草本。高さ一米足らずで、山野の陰地に自生する。葉は對生、卵圓形で尖り、緣邊に粗鋸齒がある。莖は四稜で澁生し、莖葉共に厥毛があり、刺戟性の液(蟻酸)を含み、人が之に觸れれば痛みを感ずる。冥秋の候、葉脇に淡綠白色の小花を穗狀花序に綴り、雌・雄花共に同一株である。莖の內皮から纖維を採取し、絲や織物の原料から製した絲で織った織物。


〔さくらい〕

いらこさき〔伊良湖崎〕(名)【地】愛知縣渥美半島西端の岬。志摩の答志島と相對して伊勢海を扼し、尾張の師崎と相對して遠州灘を扼してゐる。風景絕佳。歌枕の一。

いらし〔貸〕(名) いらすこと。貸しつけること。(古語)

イラショナル〔Irrational〕(英、形・名)① 不合理なこと。② 數(すう)もりすう(無理數)。

いらす〔……〕〔貸す〕(他動、サ四) 貸して利息なとる。(古語)

イラストレーション〔Illustration〕(名)【圖解】。插繪。

いらせらる〔……〕〔入る〕(自動、ラ下二)① 入る。の敬語。② 居る。「在り」の敬語。③ 他出の敬語。

いらだか〔苛高・刺高〕(名)① 角立ったこと。角の多いこと。② いらだかすること。**—じゅず**〔刺高數珠〕(名)【動】鎧の一種。長さ約一〇糎、皮厚く刺が多い。

いらだつ〔苛立つ・刺立つ〕(他動、タ四) 心がいらいらする。せきたつ。氣がいれる。

いらだつ〔……〕〔苛立つ〕(自動、タ四) いらいらさせる。いらだたせる。せかせかさせる。

いらだてる〔……〕〔苛立てる〕(他動、タ下二)「いらだつ」の口語。

いらち〔苛〕(名) 心のおちつかぬ性。あわてる性。

いらつ〔……〕〔苛つ〕(自動、タ四) いらいらする。いらだつ。

いらつ〔……〕〔苛つ〕(他動、タ下二) いらする。いらだたせる。

いらつ・ぎみ〔郎君〕(名)(苛つ)(他動、タ下二) いらつ。(古語)

いらつ・こ〔郎子〕(名)(苛つ) 若い男を親しんで呼ぶ語。いらつぎみ。(古語)

いらつ・しゃい(句)「入られよ」の口語。人の尊れて來た時に挨拶に用ひる語。おいでなさい。

いらつ・しゃる〔……〕(自動、ラ四)「いらせらる」の口語。

いらつ・ひめ〔郎姫〕(名) いらつめ。(古語)

いらつ・めい〔郎女〕(名) 年若い女を親しんでいふ語。(古語)

いらなし〔刺菜・花芥〕(名)【植】からしな。の一種。葉は大きく帶紫色で緣邊に細かい鋸齒がある。

いらなけし〔……〕〔苛甚し〕(形・一) いらいらしい。(古語)

いらなし〔……〕〔苛甚し〕(形・一) いらいらしい。ことことしい。烈しい。(古語)

いらひどし〔苛酷し〕(形・一) きはめて厳しい。

いらぼ〔伊羅保〕(名) 高麗古渡の茶碗。帶黃色で小石を含み、面は粗である。

いらぼし〔苛星〕(名) 兜の星の先の尖ったもの。

いらむし〔刺蟲〕(名)【動】刺蛾(がが)の幼蟲。體長約二糎。黃色の體に短い絲毛を帶び、紫褐色の斑紋を有する。各環節毎にある肉角突起上に毒針があるので、之に觸れれば刺痛を感ずる。柿・梅・梨等の葉を食害する。九月酔化して繭を作る。翌年五月頃成蟲となる。

いらめかす〔……〕〔苛めかす〕(他動、サ四)

いらめく〔……〕〔苛めく〕(自動、カ四) いらするやうに見える。かどかどしく。(古語)

いらめかす〔……〕〔苛かす〕(他動、サ四) 怒らせる。かどだてる。いらいらやうにする。(古語)

いらめく〔……〕〔苛く〕(自動、カ四)① かどだつ。いかる。② 奏きて肌に粟つぶができる。(古語)

いらめく〔……〕〔苛く〕(他動、カ下二) いらいらかす。(古語)

いらる〔……〕〔苛る〕(自動、ラ下二) いらいらする。(古語)

いられがまし〔……〕(形・一) いらいらしい。(古語)

いらん……〔遠亂〕(名)① 秩序の亂れること。② 佛教用語。

いらん〔伊蘭〕(名)① 佛印度傳說の香木で、惡

臭を發し、麝香の香を失はず、果實食食すれば狂ぜざるといふ。隨つてこれを煩惱に譬へる。❹【地】ペルシヤ帝國の地理的稱呼。

イラン〔Iran〕(名)【地】アジヤ洲西南部の高原。トルコとアラビヤ海とに挾まれ、メソポタミヤからインドに至る間にあつて、ペルシヤ・ペルチスタン・アフガニスタンを包含する。高度三千米乃至五千米。四邊に山脈を繞らし、内部に沙漠・鹹湖が多い。雨少く世界最熱地の一。

いらん〔恚亂〕(名)うらみいかつていらいらすること。

いり〔執〕(名)❶山間の谷川の上流。❷いりひ(執樋)。

いり〔入〕(名)❶いること。はいること。❷見えぬやうになること。かくれること。没すること。❸いりよう。入費。❹收入。あがり。❺人や物のはひる量。

いり〔熬・炒〕(名)いること。

いり〔委・吏〕(名)(孟子萬章下篇に出る)昔、支那で米穀の出納を掌つた官吏。くらびと。

いり〔選・利〕(名)おちこぼれてある利益。殘された利益。餘つてゐる利益。

いりあい〔入・相〕(名)❶日の暮れる頃。日没。❷(いりあいのかね)。——**の・かね**〔入相鐘〕(名)日暮頃、寺で撞く鐘の音。晩鐘。

いりあいけん〔入會權〕(名)【法】村民が定の山林・原野・池沼等を共用・收益し得る權利。

いりあいば〔入會場〕(名)【法】山野・漁場等の共同使用・收益を許可せられた場所。

いりあぐ〔入揚ぐ〕(他動、ガ下二)情人などの爲に浪費する。いれあげる。

いりあげる〔入揚げる〕(他動、ガ下一)「いりあぐ」の口語。

いりあや〔入綾〕(名)舞手の一。一曲舞ひ終つて、退場に際して繰返して舞ふこと。

いりうど〔入夫〕(名)(いりゆうど)。

いりうみ〔入海〕(名)【地】陸地に入り込んだ海。

いりえ〔入江〕(名)【地】湖又は海が陸地に長く入り込んだ部分。

いりえ〔入・縁〕(名)いりむこ。入夫。いりへ(入家)。

いりえ〔入家〕(名)いりむこ(入聟)。

いりおう〔入・王〕(名)將棋で、王將が敵地に入りこむこと。又、その王將。

いりおんじょう〔入音聲〕(名)【音】舞樂で、舞人が舞ひながら退場しようとする時の奏樂。

いりか〔入費〕(名)にふひ。つひえ。

いりがく〔入角〕(名)なでがくのかどの凹入したもの。いりすみ。

いりかげん〔入加減〕(名)はひるに都合のよいこと。

いりかた〔入方〕(名)日や月などのはひらうとする時。

いりかど〔入門〕(名)いりくちと戸口。「る時。

いりがね〔入金〕(名)まうけ。收入金。

いりがや〔炒榧〕(名)菓子の名。榧の種子を炒つたもの。

いりかよう〔入通ふ〕(自動、ハ四)立入りして往來する。(古語)

いりがら〔炒殼〕(名)❶鰹皮を細く切り、いつて脂を取つたものを乾かした食品。❷豆腐のからに味なつけていつたもの。

いりかわ〔入・側〕(名)❶書院造の座敷と縁側との間にある一間幅の通路。❷ひきだし(抽斗)の左右の側の板。

いりがわら〔炒・瓦〕(名)いりなべ。

いりかわり〔入代〕(名)いりかはること。交代。——**たちかわり**〔入代・立代〕(副)多人數が、絶えずかはりあつて出入するさま。はげしい交代。

いりかわる〔入代はる〕(自動、ラ四)❶他人にかはつてはひる。❷かはりあふ。いれかはる。

いりきゆう〔入寄留〕(名)【法】他から或地にはひつて來て寄留すること。(出寄留の對)

いりく〔入・來・く〕(自動、カ變)はひつてくる。「くち。❷物事のしはじめ。端緒。

いりくち〔入口〕(名)❶はひり口。かどぐち。戸

いりくむ〔入組む〕(自動、マ四)こみいる。複雜である。入りまじる。入り亂れる。

いりくりうた(名)詞ととのはず、意の通ぜぬ歌。

いりこ〔海參・熬海鼠〕(名)海鼠の腸をとり去り、ゆでて乾かしたもの。「けて乾燥した食品。

いりこ〔熬子〕(名)煮た小さい鰯を炮烙にかけ

いりこ〔炒粉〕(名)米の粉をいつて製した菓子だね。

いりこい〔煎鯉〕(名)鯉の肉をあぶつて蒸して來て水作をすること。又、その人。

いりこさく〔入小作〕(名)【農】他村からはひつ

いりこみ〔入込〕(名)❶多人數入りまじること。❷芝居などの下等の機數。おひこみ。

いりこむ〔入込む〕(自動、マ四)❶いりくむ。❷しつてはひる。おしわけてはひる。

いりごめ〔炒米〕(名)やきごめ。

いりこもる〔入籠る〕(自動、ラ四)はひりこんで出ないやうにひきこもる。

いりごら〔煎肴〕(名)いりなべ。

いりざかな〔煎肴〕(名)いつた魚肉。

いりさく〔入作〕(名)【農】他村から入りこんで耕作すること。又、その人。

いりさけ〔煎酒・熬酒〕(名)酒に醬油・鰹節を加へて煎じたもの。調味料又は肴などの味つけに用ひる。

いりさだまる〔入定まる〕(自動、ラ四)【佛】にふちゃう入定する。

イリジウム〔Iridium〕(名)【化】白金屬の一元素。熔解し難く硬度が高い。銀白色で耐酸性に富み、萬年筆のペン先などにつけて用ひられる。「潮の對」

いりしお〔入潮〕(名)(ひきしお)(引潮)。(出

いりしお〔炒鹽〕(名)いつた鹽。やきしほ。

いりしごと〔入仕事〕(名)いりでまでする仕事。

いりすみ〔炒炭〕(名)火におぶつて濕氣を去り、火の移り易いやうにした炭。

いりすみ〔入角〕(名)いりがくの入角。

いりだい〔煎鯛〕(名)鯛の肉をあぶつてこまかくむしつたもの。

いりたける〔入猛る〕(自動、ラ四)我が家に歸つて妻子などにどなりちらす。

いりたち〔入立〕(名)❶入り立つこと。入りこむこと。立入ること。❷昔、禁中の盞盤所に參入することを許された三位以上の人。れんちゅういりたち(簾中入立)。(古語)

いりたつ〔入立つ〕(自動、タ四)❶たちいる。いりこむ。(古語)❷親しく出入する。親しく交はる。(古語)

いりちがい〔入違〕(名)いりちがふこと。

いりちがう〔入違ふ〕(自動、ハ四)(いりちがうの口語)

いりちがえる〔入違へる〕(自動、ハ下一)(いりちがうの口語)

いりちがふ〔入違ふ〕(自動、ハ四)❶我入り彼出でなどして食はない。❷たがひちがひに入り込む。

いりつく〔煎附く〕(自動、カ四)煎られて水氣がなくなる。煮つまる。こげつく。

いりつく〔煎附く〕(他動、カ下二)煎つて水氣をなくする。

いりつける〔煎附ける〕(他動、カ下一)「いりつくる」の口語。

いりつけ〔入手間〕(名)手間仕事の賃銀。

いりどうふ〔煎豆腐〕(名)豆腐を濾煮にして水氣を去り、醬油・味醂などでいりつけたもの。

いりとり〔煎鳥〕(名)醬油・味醂などで煎りつけた鳥肉。

いりどり〔入取〕(名)【農】人の家にはひつて物を盜むこと。

いりなべ〔煎鍋〕(名)鐵又は土などで作つた平たい鍋でものを煎るに用ひるもの。

いりなみ〔入浪〕(名)沖からさす潮。(古語)

いりに〔入荷〕(名)荷物の到著すること。又、その荷物。にふか。

いりはま〔入濱〕(名)鹽田の一。海面より低くして滿潮の時、海水を流入させるもの。

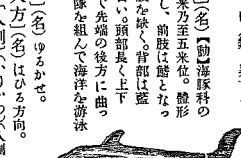
いりひ〔入樋・入樋〕(名)ある樋・樋の口。

いりひ〔入日〕(名)西に入らうとする日。落日。——**かげ**〔入日影〕(名)夕日のかげ。

いりひたり〔入浸〕(名) いりびたること。
いりびたる〔入浸る〕(自動、ラ四) ㊀水に つかる。㊁絶えず他の家にはひって起臥する。
いりびょうし〔入拍子〕(名) 打ちこむ拍子。
いりふす〔入臥す〕(自動、サ四) 寝室にはひって臥す。〔語〕
いりぶち〔入淵〕(名) 海・河などの入江の淵。(古語)
いりほが(名) 心を入れ過ぎて、事實に過ぎかつたこと。「言葉の—」。
いりまい〔入舞〕(名) 入綾の舞。いるまひ。
いりまえ〔入前〕(名) ㊀収入。みいり。㊁つひえ。かかり。
いりまじる〔入雑る〕(自動、ラ四) さまざまにまじる。入り亂れる。入り込む。
いりまだけ〔煎松茸〕(名) 土鍋で松茸を水氣の乾く程煎りつけ、生姜醤油を注ぎかけた食品。
いりまめ〔炒豆〕(名) ㊀炒つた大豆。㊁まめいり。
—に花が咲く(句) 老朽者の再び榮えることの譬。決してあるまじきことの譬。
いりみ〔入身〕(名) ㊀相撲・柔道で、相手の手許に身を入れこんで相手を倒す術。㊁白刃でむかつて來る人に、空手で相手になること。
いりみだる〔入亂る〕(自動、ラ下二) 入りまじる。紛亂する。
いりみだれる〔入亂れる〕(自動、ラ下二)「いりみだる」の口語。
いりむき〔炒麥〕(名) 大麥を炒り焦し、濃いて粉としたもの。砂糖を和して食べ、又、菓子種などにする。むぎこがし。
いりむこ〔入婿〕(名) 婦人のある家に入つて婿となること。又、其の人。入夫。婿養子。
いりめ〔入目〕(名) ㊀費用。入費。㊁入る方。いちばんて心が急く。
いりもの〔炒物〕(名) ㊀肉類などをいりつけたもの。㊁豆・米・麥などをいつたもの。
いりもみ〔煎揉〕(名) いりもむこと。(古語)
いりもむ〔煎揉む〕(他動、マ四) ㊀はげしく揉む。揉みに揉む。(古語) ㊁おしあひへしあひする。(古語) ㊂是非願を叶へ給へと願る。(古語)
いりもや〔入母屋〕(名)【建】屋根の上部は切妻で、下方は勾配附になつてゐるもの。**—ずくり**〔入母屋造〕(名)【建】入母屋の様式の屋根。法隆寺の金堂などは其の例である。

〔造屋母入〕

いりやき〔熬燒〕(名) 鳥獣の肉を熬り炙つたもの。
イリヤッド〔Iliad〕(名)【文】トロヤとギリシヤとの戰爭を中心とした叙事詩で、古代ギリシヤの最大文學。「オディッセー」と共に ホーマーの作と稱せられてゐる。二四卷。
いりやまがた〔入山形〕(名) 紋所。山形を入の字のやうにして二つ重れたもの。〔移したもの。
いりゆ〔炒湯〕(名) 炒つた飯を湯に入れてその香を
いりゆう〔遺留〕(名) ㊀死後にのこすこと。㊁おきわすれたこと。**—ぶん**〔遺留分〕(名)【法】相續財産中、被相續人の自由處分を禁じ、且その相續人に遺留せねばならぬもの。即ち其の額は相續人が直系卑屬の時は其の半額、さうでない時はその三分の一で、家督相續人又は遺産相續人が、他に先だつて受けるべき權利のもの。
イリュージョニズム〔Illusionism〕(名) ㊀〔哲〕外界は單に早に幻影に過ぎないといふ說。迷妄說。㊁〔文〕幻想によつて製作する主義。幻想主義。
イリュージョン〔Illusion〕(名) 幻影。幻想。妄想。錯覺。〔にふふ。
いりゆうど〔入夫〕(名) 婿養子として入つた夫。
いりょ〔衙閭〕(名) 親の喪中に起臥する假屋。(衙慮。〔必要。
いりょう〔入用〕(名) ㊀入費。費用。いりめ。㊁
いりょう〔醫療〕(名) 醫術で病をなほすこと。治療。治療。**—きかい**〔醫療器械〕(名) 診察・治療用の器械。
いりょう〔遺領〕(名) 死後に遺した領地。
いりょう〔遺令〕(名) 令(りやう)の規定に違反すること。
いりょく〔威力〕(名) 人を強制して服從させる力。**—ていさつ**〔威力偵察〕(名) 敵を攻撃してその兵力を計り、敵狀を探る偵察。〔紐。
いりわけ〔彝倫〕(名) 人の常に守るべき道。一定不易の倫理。「かして婦型に流し込んで器物を造る。
いる〔鑄る〕(他動、ヤ上一) 金屬を熔
いる〔射る〕(他動、ヤ上一) ㊀矢を放つ。㊁はげしく照らす。
いる〔入る〕(自動、ラ四) ㊀はひる。內へ行く。㊁かくれる。沒す。㊂必要である。㊃生ず。でてくる。㊄至る。**—を量りて出づるを制す**(句)(論語記王制篇の句)收入を考へて出費をきめる。
いる〔入る〕(他動、ラ下二) ㊀內へやる。中へ置く。㊁しまつておく。蓄す。㊂用ひる。費す。㊃間にはさむ。㊄從へる。さしはさむ。容。
いる〔炒る・煎る・煮る〕(他動、ラ四) ㊀食物を熱してかつ。㊁鍋で煮つめて水分を去る。㊂油などで煮かためる。
いる〔いいる〕〔入る〕〔後尾〕動詞の連用形に重れて、その意を強める語。「恐れ—」。
いる〔ゐる〕〔居る〕(自動、ワ上一) ㊀或場所に止まる。おちつく。動かぬ。㊁すわる。㊂位にすわる。㊃その場所に在る。在宅する。㊄助詞「て」を有する動詞の下に附いて、上の動詞の動作が完了又は繼續する意を示す語。「鳥が飛んでゐる」。
いる〔ゐる〕〔率る〕(他動、ワ上一) ひきゐる。率る)。(古語)
いる〔いいる〕〔癒る〕(自動、ヤ上一) いゆる。なほる。「腹が—」。
いる〔遺類〕(名) 遺族。
いる〔彙類〕(名) 同じたぐひ。なかま。
いる〔衣類〕(名) きもの。衣服。衣裳。
いる〔異類〕(名) ㊀類の異なるもの。㊁妖怪や鳥獣のやうに人類と異なるもの。
いるか〔海豚〕(名)【動】海豚科の海獣。長さ二米乃至五米位。體形は紡錘狀をなし、前肢は鰭となつてゐるが、後肢を缺く。背部は藍黑色、腹部は白い。頭部長く上下の顎に圓錐形で先端の後方に曲つた齒がある。隙を組んで海洋を游泳する。


〔かるい〕

いるかせ〔忽〕(名) ゆるかせ。
いるかた〔入方〕(名) はひる方向。
いるかわ〔入側〕(名)(いりかわ)(入側)。
いるかん・こく〔伊兒汗國〕(名)【歴】(Ilkhan) 元の太祖の孫旭烈兀(フラウ)の子孫の君臨した國。其の領土はアム河から西方ペルシヤを中心とした地方で、ウルミヤ湖の東方マラグアを都とした。一四〇〇年、帖木兒(チモル)に滅ぼされた。蒙古四大藩の一。
イルクーツク〔Irkutsk〕(名)【地】シベリヤの極東地方の大都市。バイカル湖の西北六〇粁、アンガラ河畔にある。帝政ロシヤが東方經營の根據地と定め、「しめた處。
いるさ〔入る・さ〕(名) 入る方。(古語)
いるさやま〔入佐山〕(名)【地】兵庫縣出石郡出石町の北、宮內にある此隅山の嶺つづき。歌枕。
いるす〔居留守〕(名) 在宅しながら、不在をよそほふこと。
いるちょう〔入帳〕(名) 入金を記しておく。
いるまい〔入舞〕(名) ㊀(いりまい)。㊁世の
いるまがわ〔入間川〕(名) ㊀(地)埼玉縣入間郡にある川。秩父郡に發し、荒川に入る。全長五

二杆。◎埼玉縣入間郡の町。㊀【文】能の狂言の名。

いるまことば[入間詞](名)順序を倒にし、又、意を反對にいふ詞。いるまやう。

いるまやう[入間樣](名)いるまことば。

イルマン[伺Imao](名)【宗】(兄弟の意)基督教の教職の伴天連の次に位するもの。

イルミネーション[Illuminatio.](名)照明。點燈裝飾。電光飾。電飾。

イルリガートル[獨Irrigator](名)【醫】灌腸用・陰洗滌用の醫療器械で、藥液を容れる圓筒狀の容器と藥液を導くゴム管とゴム管の先端をはさむ嘴子管とからなる。

〔ルートーガリルイ〕

いれ[入](名)【經】相場で、損失を見切つて賣買を買ふこと。

いれあぐ[ヰレアゲル](他動、ガ下二)いりあぐ。

いれあげる[ヰレアゲル]〔ヰレアゲラレル〕[入揚げる](他動、ガ下二)「いれあぐ」の口語。

いれあわす[ヰレアワス]〔ヰレアワサセル〕[入合はす](他動、サ下二)うめあはせる。

いれあわせ[ヰレアワセ]〔ヰレアワセル〕[入合せ](名)いれあはすこと。

いれあわせる[ヰレアワセル]〔ヰレアワセラレル〕[入合はせる](他動、サ下二)(いれあわす)の口語。

いれい[異例](名)㊀前例のないこと。ためしがないこと。㊁常ならぬこと。病氣。不例。

いれい[威令](名)威力と命令と。

いれい[威靈](名)おごそかで神神しい力。威德。

いれい[逆令](名)命令に違反すること。|反した罪。

いれい[逆令罪](名)【法】陸海軍刑法で、軍令に違反した罪。

いれい[逆例](名)㊀常例に違ふこと。㊁病氣。不例。

いれい[逆戻](名)たがひもとること。

いれい[違令](名)死後に遺した命令。|**そう**[違令奏](名)昔、女院崩御の際、その遺令を奏聞したこと。

いれいすうはい[偉靈崇拜](名)【宗】偉人の神靈を崇拜すること。宗教學上、神人同格教の形式に屬する。

いれかえ[入代](名)いれかへること。うめあはせ。|**ご**[入代子](名)(とりかへご)(取替子)。

いれかえる[入代へる](他動、ハ下一)(いれこうの口語。

いれかけ[入掛](名)相撲・芝居などで、其の日の興行を中途でやめること。

いれかける[入掛ける](他動、カ下一)入れようとして中途でやめる。

いれかたびら[入帷子](名)衣服などを箱に入れる時に、それを包む紗絽の如きもの。

いれがみ[入髮](名)髮を結ふ時に添へて入れる毛。いれげ。えべがみ。

いれかわり[入代](名)㊀いれかはること。いりかはり。㊁江戸時代に、江戸の俳優が十一月に劇場を交代して興行する芝居。㊂男・女中が任期滿ちて、新しく雇はれた者と交代すること。

いれかわる[入代る](自動、ラ四)入つて他にかはる。いりかはる。「すること。

いれき[入木](名)彫刻物をなほす時、うめ木をすること。

いれげ[入毛](名)いれがみ。

いれこ[入子](名)㊀匣などを順次に大小重れて組入れるやうにしたもの。㊁船の橋杭の頭を入れる孔。㊂我が子の死んだあとへ入れて我が子とすること。|**いた**[入子板](名)唐戸の框と桟との間に差込んだ板。大將の首らしく見せるため。|**ことば**[入子詞](名)文章中に他の詞を插入したもの。|**さかずき**[入子盃](名)大小の盃を順次に組合はせたもの。|**さけ**[入子鮭・內子鮭](名)【動】はらちごを持つた鮭。|**じゅう**[入子重](名)大小組合はせるやうにした重箱。|**はち**[入子鉢](名)大小のものを組合はせた鉢。|**ぶた**[入子蓋](名)入子になつて蓋となるもの。|**ぶち**[入子緣](名)唐戸の入子板の周圍にあるくりがた。|**ぶね**[入子船](名)入子にせられる程の小さい船。|**まくら**[入子枕](名)入子にした箱枕。|**ます**[入子枡](名)入子にした大小組合はせの枡。

いれこう[入代こう](他動、ハ下二)いりかはらせる。かへていれる。

いれこ[入代こ](他動、ハ下二)「又、その場所。

いれごみ[入込・入籠](名)一盞に入れること。

いれこむ[入込む・入籠む](他動、マ下二)おし詰めて入れる。入りこませる。

いれじえ[入智慧](名)他から教へこまれた謀。つけぢえ。いれしやうね。

いれしょうね[入性根](名)人から教へ込まれるちえ。いれぢえ。

いれずみ[入墨](名)㊀昔の五刑の一。皮膚に墨汁を刺入れて前科のしるしとすること。(醫)。㊁人の肉體に施したほりもの。(刺青・文身)。㊂入筆。筆を加へること。|**もの**[入墨者](名)入墨の刑に處せられた前科者。

いれたて[入立](名)自ら費用を負擔すること。

いれちがい[入違](名)(いれちがえ)。

いれちがえ[入違](名)㊀誤つて入れること。㊁たがひちがひにはひること。

いれちがえる[入違へる](他動、ハ下一)(いれちこうの口語。

いれちごう[入違ふ](自動、ハ四)(いりちこう)。

いれちごう[入違ふ](他動、ハ下二)㊀間違へて入れる。㊁いりちがはせる。

いれちゃがゆ[入茶粥](名)(ちゃがゆ(茶粥)。

いれつ[威烈](名)(後世)威力。勢のはげしいこと。

いれつ[偉烈](名)すぐれたいさをし。「ま。

いれつま[入手間](名)手間仕事の賃銀。いりで

いれなす[入爲す](他動、サ四)入れ爲す。(古語)

いれば[入歯](名)㊀ぬけ又は缺けた齒のおぎなひに入れる人造の齒。義齒。㊁歯の齒。|**し**[入歯師](名)義齒を入れることを職業とする人。

いればな[入花](名)㊀俳句・狂歌などの題料又は印刷料。㊁湯を注いだばかりの茶器の煎茶。てばな。

いれひも[入紐](名)袍・直衣・狩衣などの紐の一方を結び玉にし(雜結)、他の一方を輪にして(雌結)、さし入れてかけおくもの。(古語)|**の**[入紐の](枕)「同じ心」の枕詞。

いれぶた[入札](名)(にゅうさつ)(とうひょう)。

いれぶつ[入佛事](名)㊀佛事をなする時の施物又は費用。㊁入費多くして利益の少いこと。

いれふで[入筆](名)㊀後より書き足すこと。補筆。㊁入墨。「さくほりものにすること。(刺青)。

いれぼくろ[入黑子](名)腕に情人の名などを小交ぜ入れる。

いれます[入ます](他動、サ下二)入りまじらせる。混ずる。

いれまぜる[入雜ぜる](他動、ザ下一)(いれます)の口語。

いれまぜ[入雜ぜ](名)いれまぜること。又、その物。

いれまず[入雜ず](他動、ザ下二)「物。

いれめ[入目](名)眼球のない人の眼窠にはめる硝子などで造つた人造の眼球。

いれもじ[入文字](名)和歌の中に隱して入れた文字。(古語)

いれもとゆい[入元結](名)元結の上に更に結び飾る童子用の元結で、松竹・鶴亀などを畫いて金箔を太くたたみ、兩端に芯を入れたもの。おほもとゆひ(大元結)。ふもとゆひ(袴元結)。

〔結元入〕

いれもの[入物](名)(ものを入れる器物。

いれる[入れる](他動、ラ下一)(自動、ラ下一)㊀いられてゐる。㊁いれたこと。「入る」の口語。

いれる[入れる](他動、ラ下一)開發場所の崩れるのを防ぐ爲に、木材を組合はせて支へるもの。とめさ。支柱。

いれわた[入綿](名) 蒲團などを縫ひ、中央の袋目から綿を入れること。

いろ[色](名) ❶眼の網膜が、光波から受けろ一種の刺戟感から起る現象。その主な色は赤・黄・青である。❷顔色。❸きんじき(禁色)。紫。(古語) ❹喪服のにびいろ。(古語) ❺つや。いろどり。❻容貌のうるはしこと。又、その人。❼なまめき。愛情。❽色慾。男女の春情。❾遊女。❿色男。色女。情婦。⓫しなつくり。ひび。⓬きざし。様子。⓭髪色のうるはしこと。⓮調子。ひびき。⓯醤油。**—上がる**(句) 色が美しくなる。**—添ふ**(句) ❶物事が度々加はる。❷色が一きは濃くなる。**—の寒暖**(句) 赤・黄等は暖い色、青・藍・緑等は寒い色の如く、色彩が人に與へる感覚。**—の象徴**(句) 白は高潔、赤は情熱、青は沈静をあらはすやうに、色が精神狀態を象徴すること。**—の白いは七難隠す**(句) 女の顔色の白いのは、醜貌なも美しく見せる。**—の無い酒**(句) 酌をする女のない酒。**—は思案の外**(句) 男女の情事は常識では判断することが出來ない。**—深し**(句) 容貌が美しい。**—も香もあり**(句) 姿美しくしかも有徳なにいふ。**—を失ふ**(句) 驚いて顔色が青ざめる。**—を替ふ**(句) 種種に工夫をめぐらす。**—を正す**(句) 顔の様子を正しくする。**—を作る**(句) 顔に化粧を施す。**—を附ける**(句) お愛想に幾らかのしなを出す。**—を取る**(句) いろどる。**—を作をす**(句) 怒って顔色をかへる。

いろ[倚廬](名) いりょ(倚廬)。

いろ[愛](接頭) 親しみ愛する意の語。「—れ」。

いろ[色合](名) 色の工合。色の程度。いろさい。色調。

いろあく[色悪](名) 芝居で、容貌の端麗なあくがた。

いろあぐ[色揚ぐ](他動、ガ下二) 色揚げする。「してする」こと。

いろあげ[色揚](名) 古いきれを染めなほして美

いろあそび[色遊](名) 遊郭で遊ぶこと。

いろあらそい[色争](名) ❶色の美しさを競ふこと。❷痴情の爲のあらそひ。

いろあわい[色合](名)(いろあい)の。

いろい[綺・斐](名) ❶いろふこと。かかりあひ。干渉。❷取扱。❸爭。口論。(古語)

いろいた[色板](名) ❶色摺に用ひる版木。❷種種の形の板に種種の色をつけたもの。

いろいと[色絲](名) ❶種種の色に染めた絲。❷染の絲。❸三味線の絲。三味線。

いろいろ[色色](名) さまざまの色。種種の色。

—おどし[色色威](名) 鎧の威毛の名。鎧の板一枚毎に種種の色の絲や革で、一段毎に威したもの。**—ごろも**[色色衣](名) いろいろのきれを綴りあはせた衣服。(古語) **—し**[色色し](形シク) いろめかしい。好色のさまである。はなばなしい。(古語) **—におい**[色色匂](名) 鎧の威毛の名。色色の絲で過淡あるやうになどしたもの。**—むらご**[色色村濃](名) 鎧の威毛の一。種種の色で村濃になどしたもの。

いろいろ[色色](副) 種種に。さまざまに。かれこれと。**—と**[色色と](副) さまざまに。

いろいろに[色色に](副) さまざまに。

いろいろ(名・副) 人の流・変。おろおろ。(古語)

いろいろ[遺老](名) 生きのこった老人。

いろいろ[慰労](名) なぐさめいたはること。ねぎらふこと。**—かい**[慰労會](名) 慰労の爲に開く宴會。**—きん**[慰労金](名) 勉勵をねぎらふ爲に出す金。

いろ-ろ……[胃瘻](名)【醫】❶動物の實驗又は治療の目的で手術によって作った胃の内腔と腹壁との交通管。❷腹壁を通じて胃と外氣との交通する瘻孔。銃創・外傷によって生ずる。

いろう[遺漏](名) もれること。おちのこること。

いろう[弄ふ](他動、ハ四)いじる。

いろう[嘲ふ](自動、ハ下二) 返答する。答へる。うけ…たへる。

いろう[擧ふ](自動、ハ四) 貸して利益を取る。(古語) 「しくなる。色が染まる。(古語)

いろう[彩ふ](自動、ハ四) 色が美

いろう[彩ふ](他動、ハ下二) 美しくする。いろどる。(古語)

いろう[綺ふ](自動、ハ四) ❶關係する。かかりあふ。あづかる。❷取扱ふ。❸めうりする。(古語) ❹干渉する。

いろう-さき……[石廊崎](名)【地】伊豆半島の西南端の岬。燈臺不動紅色と海軍の望樓とがある。

いろうし[色漆](名) 繪具を調合した漆。朱漆・黒漆・青漆等。**—え**[色漆繪](名)【美】色漆で畫いた繪。

いろうわさ[色噂](名) 色事のうはさ。

いろえ[愛兄](名)(いろとは接頭語)「兄」を親しんで呼ぶ語。(古語)

いろえ[色繪](名) ❶美彩色を施した繪。著色畫。彩畫。❷彫金術の一。刀劍などの装飾に象眼・艶消などをすること。「子。

いろえぼし[色烏帽子](名) 鼠・茶土・白墨等に鐵物質染料を洗じて芯とした鉛筆。

いろえんぴつ[色鉛筆](名) 蝋・茶土・白墨等に鐵物質染料を洗じて芯とした鉛筆。**—が**[色鉛筆](名)【色】情夫。みそか男。

いろおとこ[色男](名) ❶好男子。美男。

いろおんな[色女](名) ❶美人。❷情婦。みそか女。「こと。❸顔色。顔つき。

いろ-か[色香](名) ❶色と香。❷きりやうのよい

いろ-がい[色貝](名) さまざまの色の貝。

いろ-かご[色籠](名) 遊女などの乗る駕籠。

いろ-がたき[色敵](名) 情事の競爭者。一人の情人を巡りの遊女に爭ふ人同士。

いろ-がまし[色がまし](形シク) ❶花・果物などの色がめだつ。❷色情を解する。

いろ-けし[色消](名) ❶【理】レンズの色收差を消すこと。❷美人の卑しい言葉や振舞。❸面白みを消すこと。不粋。やぼ。**—レンズ**[色消](名)【理】(Achromatic lens) 色收差の現象をなくしたレンズ。

いろ-こ[鱗](名) ❶うろこ。(古語) ❷ふけ。(古語)

いろ-かわら……[色河原](名)【地】京都四條河原。昔、此處に芝居小屋があり、男色な賣る若衆がるたからいふ。

いろ-かわり[色變](名) ❶色のかはったこと。又、その物。❷種類のかはったこと。又、その物。❸婚禮の式後、新婦が白色又は白碧・黒紋附を改め他の色物の衣服に着かへること。いろなほし。

いろ-かんしつ[色乾漆](名) 硝子面に塗った色漆の乾ん故を待って剥いで細末にしたもの。色蒔繪に用ひる。

いろ-きちがい……[色狂](名) ❶色情が原因で、精神の狂ふこと。又、その人。色情狂。❷特別に色情を好むこと。又、その人。

いろ-きぬ[色絹](名) 色染の絹布。

いろ-きゃく[色客](名) 情人の客人。

いろ-きわ[色際](名)(いろあい)(色合)。

いろ-く……[位祿](名) ❶位と祿と。❷昔、正四位以下の者に位階の高下によって賜はった祿。三位以上に賜はるのを位封といふ。**—さだめ**[位祿定](名) 昔、毎年二月の吉日に、公卿が、位祿を賜はる人の詮議をした儀式。「(古語)

いろ-くさ[色種](名) ❶種種の種類。❷種種の草。

いろ-くず[鱗](名) ❶いろこ(鱗)。うろこ。(古語) ❷魚類。(古語) ❸ふけ。(古語)

いろ-くらべ[色競](名) 互に容貌の美を競ふこと。

いろ-ぐるい……[氣狂](名) 女色に溺れて放蕩すること。女狂。

いろ-け[色氣](名) ❶(いろあい)(色合)。❷色好みの心。❸色慾。❹面白み。❺(あいきょう)。愛敬。

いろ-げ[色氣](名)(いろけ)。

いろ-ごと[色事](名) ❶(いろあい)(色合)。❷色好みの心。❸色慾。❹面白み。❺(あいきょう)。愛敬。

いろ-ずく[色付く](自動、カ四) ❶色情を解する。❷花・果物などの色がめだつ。

いろ-けし[色消](名) ❶【理】レンズの色收差を消すこと。❷美人の卑しい言葉や振舞。❸面白みを消すこと。不粋。やぼ。**—レンズ**[色消](名)【理】(Achromatic lens) 色收差の現象をなくしたレンズ。

いろこ[鱗](名) ❶うろこ。(古語) ❷ふけ。(古語)

いろこ——**がた**[鱗形]うろこがた。

いろ-こ[色子](名)昔、歌舞伎芝居の青年女形役者で男色を賣つたもの。かげま。ぶたいこ。——**ぼうし**——[色子帽子](名)色子が前髪にあてて戴いた紫色の帽子。

いろ-こい[色戀](名)男女相思ふ心。こひぢ。

いろ-ごえ[色聲](名)色めかしい聲。

いろ-ごと[色事](名)㊀男女間のみだらな行ひ。

いろ-ごころ[色心](名)色情。いろけ。

いろ-ごのみ[色好](名)女色を好むこと。又、その人。女好き。漁色。

いろ-ごろも[色衣](名)美しい色染めの衣。(古語)

いろ-さかぶり[色酒振](名)色めかしく酒の座を巧みにもてなすさま。

いろ-さかり[色盛](名)㊀女子の容貌の最も美しい年頃。㊁色情の盛んな年頃。

いろ-ざけ[色酒](名)色茶屋で飲む酒。

いろ-さし[色差](名)㊀色合。㊁彩色。いろどり。

いろ-ざしき[色座敷](名)藝者・遊女などの集まつてゐる所。いろまち。遊里。遊郭。待合街。

いろ-さま[色樣](名)顏色の色合・色つやの模樣。

いろ-ざみせん[色三味線・色三絃](名)遊里で彈く三味線。

いろ-ざ-む[色ざむる]—[色褪む](自動、マ下二)㊀色があせる。つやがうせる。㊁顏の色が青くなる。

いろ-わぎ[色聲](名)㊀痴情に原因したもめ。㊁遊女などを相手に囁くこと。

いろ-しかえ[色仕替](名)相手の遊女をかへること。

いろ-じかけ[色仕掛](名)美貌をたてに誘惑する手段。

いろ-しな[色品](名)㊀色の品物。㊁ささやき。

いろ-じゃしん[色寫眞](名)實物と同一の色の寫眞。

いろ-じゃみせん[色三味線・色三絃](名)いろ

いろ-じゃや[色茶屋](名)遊女をかかへておく茶屋。青樓。

いろ-しゅうさ[色收差](名)【理】(Chromatic aberration)物質の屈折率は光の波長によつて異なる爲、レンズを通過する光は分散して、各異なる位置に焦點を作り、レンズの作る物像の周圍に著しく不鮮明になること。色收差を除くことを色消といふ。

いろ-じょうご[色上戶](名)酒を飲めば顏に出る人。

いろ-じり[色知](名)色の道をよく知つてゐる人。

いろ-じろ[色白](名)人の肌の色の白いこと。

いろ-すか[色柄](名)遊里で、色事の權勢。

いろ-ず-く[色附く](自動、カ四)㊀成熟する。㊁色情が生ずる。

いろ-ず-く[色附く](他動、カ下二)いろづかす。いろどる。

いろ-ずくめ[色盡](名)㊀多くの色彩を用ひること。㊁色事の限りをつくすこと。

いろ-すけ[色附](名)㊀色を染めること。彩色。㊁藥品で金屬に美しい色を出すこと。㊂短期諦習などで學力補充をすること。

いろ-すけ-る[色附ける](他動、カ下一)(いろずくるの口語。

いろ-すこ-う[色附かふ](自動、ハ四)色附くの。(古語)

いろ-すり[色摺](名)彩色した刷物。

いろ-そ[愛兄](名)姉妹より兄弟を親しんで呼ぶ語。(古語)

いろ-たえ[色妙](名)各種の色に染めること。又、その物。

いろ-だ-つ[色立つ](自動、タ下二)㊀色がめだつ。㊁顏色が變する。㊂きざす。

いろ-だま[色玉](名)【植】さくらの(桜樹)。

いろ-ちがい[色違](名)驚佛の爲に顏色のかはること。いろちがへ。

いろ-ちがえ[色違](名)[色違]の(名)繪具をまぜて作つたチョーク。パステル。

いろ-チョーク

いろ-つや[色艷](名)㊀色とつやと。㊁色さし。光つや。㊂顏色。㊃情愛。㊄修飾。

いろ-と[愛弟](名)兄姉から弟妹を親しんで呼ぶ語。(古語)

いろ-どうき[異路同歸](名)(淮南子本經訓)方法はちがふが、おちつく所は同じであること。

いろ-どこ[色床](名)男女がいつしよに寢る床。

いろ-どころ[色處](名)㊀色遊するに都合のよい處。色の本場。㊁人情のこまやかな處。

いろ-どめ[色止](名)染物などの色のさめぬやうにすること。

いろ-どり[色取](名)㊀彩色。著色。㊁化粧。㊂裝飾。

いろ-どり[色鳥](名)㊀種種の小鳥。㊁秋、空を飛ぶ鳥。(雪玉集に、さらにまた渡るも悲し山路行く秋やかぎりの一の聲)。

いろ-とりすき[色取月](名)陰暦九月の異名。

いろ-とりのこがみ[色鳥子紙](名)著色した鳥子紙。越前の色紙產書。大阪の五色紙などの類。

いろ-どる[彩る]—[色取る](他動、ラ四)㊀著色する。彩色する。㊁つやを出す。㊂種種の色をとりあはせて飾る。㊃化粧する。

いろ-なおし[色直](名)昔、結婚後三日又は出產後百日に、新夫人又は產婦・產兒の著けた白衣裳又は室內裝飾などを色あるものに取替へること。今は色直は結婚の當夜行ひ、衣服だけを改める。——**の-さかずき**——[色直盃](名)結婚の當夜新夫婦が床に入る時、改めて盃をとりかはすこと。

いろ-ながし[色流](名)染料などを水に落して、水面に浮かびあらはれた模樣を、紙や布帛に染めつけたもの。すみながし。

いろ-なぐさ[色無草](名)【植】松の異名。(古語)

いろ-ぬき[色拔](名)染物の色を拔き去ること。

いろ-ね[色音](名)㊀・われ。れいろ。㊁花の色と鳥の音。

いろ-ば[愛姉](名)兄姉を親しんで呼ぶ稱。(古語)

いろ-は[愛母](名)母を親しんで呼ぶ語。(古語)

いろ-は[伊呂波](名)㊀平假名四十七文字の稱。この四十七字にんまたは「京」を加へて四十八字となし、中古以來習字手本の文字として採用せられた。㊁「いろは」は手習の始に習ふから、物事の初步。㊂いろはうた。——**うた**[伊呂波歌](名)平假名四十七文字の歌。同一文字を重用しないで、涅槃經寂滅爲樂の意を和譯した今樣歌。卽ち「色は匂へど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ、有爲の奧山今日越えて、淺き夢見じ醉ひもせず。」弘法大師の作だと稱せられる。——**がルタ**[伊呂波骨牌](名)骨牌の一種。伊呂波短歌又は伊呂波喩の謠を記した四十八枚と、その意味を繪解とこれに背字をしるした四十八枚と、都合九十六枚を一組とした骨牌。繪札を撒き、散らし取にして多数を爭ひ、又は組に別けて上りを競ふもの。——**ぐみまちびけし**[伊呂波組町火消](名)江戸時代に、江戸市中に設けられた伊呂波四十七文字によつて組を分つた町火消。——**こもん**[伊呂波小紋](名)いろはの模樣を染め出した小紋模樣。

いろはぢゃや[伊呂波茶屋](名)江戸時代に、あつた芝居茶屋。㊁昔、江戸谷中にあつた水茶屋。——**じゅん**[伊呂波順](名)物の順序をいろは假名の順に排列すること。——**ずけ**[伊呂波付](名)番號をいろは順につけること。——**だとえ**[伊呂波喩](名)いろは數詞喩歌又は數詞のまたは謠歌の俗稱。「祈る身は邪ならぬ願こそ神もあはれとうけ給ふらん」「一寸先は闇の鬼」——**たんか**[伊呂波短歌](名)いろは四十七文字と「京」の字を冒頭に置いた數詞譬喩の謠歌。——**ぶんこ**[伊呂波文庫](名)【文淨瑠璃の假名手本忠臣藏に取材した赤穗義士外傳で、爲永春水作の人情

本。一八編五四卷。天保七年、初編出版。明治五年完結。五編以下は二代爲永春水作といはれる。

いろはな〔色花〕(名) ❶花やかなもの。❷美しい物。(古語)

いろばなし〔色話〕(名) 色事の話。情話。痴話。

いろびと〔色人〕(名) ❶色を賣る人。色男の相手となる人。遊女。❷好色の男。「こ。(古語)

いろふし〔色節〕(名) きらびやかなこと。はれなこと。

いろぶみ〔色文〕(名) 愛の意を書いた手紙。艷書。ラヴレター。

いろぼうし〔色法師〕(名) 色好みの法師。

いろぼうしょ〔色奉書〕(名) いろぼうしょがみ。

—がみ〔色奉書紙〕(名) 色をつけて抄いた奉書紙。福岡縣・福井縣の名産。

いろまきえ〔色蒔繪〕(名) 金銀粉の外に種種の色をあらはした蒔繪。又は彩色だけを用ひた蒔繪。

いろまち〔色町〕(名) 色里。遊郭。花柳街。

いろみなと〔色湊〕(名) 色里のある船つき場。

いろめ〔色目〕(名) ❶色合。衣服の色合の名目。❷ながし目。❸色めかしい目つき。秋波。❹樣子。

いろめいしょ〔色名所〕(名) 名ある色里。

いろめかし〔色めかし〕(形シク) 色好みらしい。色げがあるやうである。**—い**〔色めかしい〕(形シク) 「いるめかし」の口語。

いろめかす〔色めかす〕(他動サ下二) なまめかしく飾る。人目をひくやうに飾る。

いろめがね〔色眼鏡〕(名) ❶著色の玉の眼鏡。❷感情に支配せられた觀察。

いろめく〔色めく〕(自動カ四) ❶色づく。花やかになる。❷色好みらしく見える。

「(古語)

いろも〔愛妹〕(名) 妹を親しんで呼ぶ語。❷妻。

いろもの〔色物〕(名) 講談などの堅いものに對して、落語・音曲・踊・奇術等に關するもの の稱。

いろやど〔色宿〕(名) 遊興する時の宿。遊女屋。

いろり〔囲爐裏〕(名) ろ(爐)。

いろり〔色利・煎汁〕(名) 鰹節又は大豆を煎じた汁。煮物に加へて味を添へるもの。

いろわけ〔色分〕(名) ❶地國などを彩色で區別すること。❷物を種類によって區別すること。

いろん〔異論〕(名) 他に異なる議論。

いわ〔岩・巖・磐〕(名) ❶石の大きいもの。❷〔地〕地殼を構成する天然無機物の一。がんせき。いはほ。**—の戸**(句) 岩が立ちならんで、戸の如く見えるもの。(古語)**—の橋**(句) 荒岩を組立ててつくった橋。

「鉛などでつくったおもり。❷石の硯。

いわ〔錘・沈子〕(名) ❶漁網の下緣に附ける鐵。

いわあな〔岩・磐〕(接頭) 「堅固」の意をあらはす語。

いわあな〔岩穴〕(名) 岩の穴となった處。ほらあな。

いわい〔齋〕(名) ❶神を祀ること。いみ。❷かしづき守ること。❸(いわいのみや)。(以上古語)**—おのご**〔齋斧〕(名) 不淨な祓が清めた斧。(古語)**—すぎ**〔齋杉・齋杉〕(名) 神社の境内にある神木の杉。**—ずまい**〔齋妻〕(名) 大切にあつかふべき妻。愛妻。(古語)**—どの**〔齋殿〕(名) 神を祭る殿堂。(古語)**—ぬし**〔齋主〕(名) 神に仕へる人。かんぬし。(古語)**—ぬしのかみ**〔齋主神〕(名) 神よつぬしのかみ(經津主神)。しづきまもる子供。(古語)**—の**〔齋〕(名) ❶やたのかがみ(八咫鏡)。(以上古語)**—のみてぐら**〔齋御幣〕(名) かしづき仕へる神殿に捧げるぬさ。(古語)**—のみや**〔齋宮〕(名) ❶かしづき祭る宮殿。❷いつきのみや。きさいぐう。(以上古語)**—びと**〔齋人〕(名) (いわいぬし)。(古語)**—べ**〔齋瓮〕(名) 神酒を盛る陶器の壺。(古語)

いわい〔祝〕(名) 祝ふこと。ことほぎ。賀。

いわう〔祝歌〕(名) 御代賛美の他を祝ふ意をあらはす歌。**—ぎ**〔祝木〕(名) (柳・椿の枝のさきを削りかけて茅花のやうにしたもの の一種)新年の祝に用ひる。之を以て女の腰を打てば孕むといふ。北越地方で流行する。けづりかけ(削掛)。**—ぐそく**〔祝具足〕(名) 昔、武家の子息の元服に着せた甲冑。**—ごと**〔祝事〕(名) 喜び祝ふ言葉。**—ごと**〔祝言〕(名) 喜び祝ふ言葉。**—ごと**〔祝酒〕(名) 祝事に飲む酒。**—ずきん**〔祝頭巾〕(名) 祝ふ時に被る頭巾。**—ずき**〔祝月〕(名) 正月・五月・九月の凶月なるを以て忌んでいふ。**—そす**〔祝過す〕(自動サ四) 祝ひすごす。(古語)。**—だけ**〔祝茸〕(名) 鍔の[梅岩]

たくぼくみどし(啄木鳥)の絲。**—のいと**〔祝絲〕(名) 鍔の絲。**—のぜん**〔祝膳〕(名) 祝儀の膳に、殳斗・昆布・勝栗などを盛って出すこと。「(古語)。**—のつえ**〔祝杖〕(名) (うすえ)(卯杖)。**—び**〔祝日〕(名) 喜び祝ふべき日。しゅくじつ。**—ぼう**〔祝棒〕(名) (いわいぎ)(祝木)。

いわい〔井〕(名) ❶岩の間から湧き出る泉の井。❷石を積み重ねてつくった井戸。

いわうめ〔岩梅〕(名)〔植〕岩梅科の高山生の常綠矮小灌木。高さ約六糎。匍匐性で、葉は倒卵狀楔形圓頭、革質で光澤がある。七月頃葉の間から花柄を出して白色鐘形の花を開き、五裂して梅の花に似てゐる。花後、蒴果を結ぶ。

いわうら〔岩占〕(名) いしうら(石占)。

いわうら〔巌・石〕(名) 大きな岩。

—なす〔巌なす〕(枕) 「常磐」の祝詞。「で固めた菓子。

いわおこし〔岩粗粉〕(名) おこしごめな飴

いわおとぎりそう〔岩弟切草〕(名)〔植〕金絲桃科の多年生常本。高さ約三〇糎。葉は對生し、楕圓形全緣で、小黑點を散布する。夏日、葉腋から花梗を抽き黃色の小花を開く。

いわおもだか〔岩澤瀉〕(名)〔植〕水龍骨(あたもだか)科の羊齒類。葉は「おもだか」に似、質は厚く、葉身は三裂し、長き葉柄を有し、子囊群は葉の裏に密生する。

いわかがみ〔岩鏡〕(名)〔植〕岩梅科の多年生草本。莖の高さ一〇—一五糎で往往橫臥する。葉は根生で長い葉柄ある圓形、葉脈は稍心臟形、緣邊に鋸齒を有し、革質で光澤がある。春夏の候、花莖を抽き、上部に多數の淡紅色の花を著ける。

いわがき〔岩垣〕(名) ❶岩石の自然に垣のやうにめぐりつづいてゐるもの。(古語) ❷いしがき。

—みず〔岩垣水〕(名) 岩垣の間から流れ出る清水。

いわがきまつなえ〔巌垣松苗〕(名)〔人〕江戸末期の儒者。專ら古學・國史を研究し、「國史略」を著はした。嘉永二年(一五〇九)歿。年七十六。

いわがくる〔岩隱る〕(自動、ラ下二)(石棺の中に隱るの意) ❶崩御。薨御。薨去。(古語) ❷岩の かげに隱れる。

いわかげ〔岩陰〕(名) 岩にかくれた所。岩下の陰。

いわかたがくる〔岩片隱る〕(自動、ラ下二)(岩の傍のくぼんだ所に隱れる)。(古語)

いわかど〔岩角〕(名) 岩石のかど。

いわかど〔岩門〕(名) ❶岩の左右に峙って門の如き形をしてゐるもの。(古語) ❷堅牢な門。(古語) ❸岩屋の入口。(古語)

いわがね〔岩根〕(名) 岩のねもと。いはね。

いわかねそう〔岩根草・蛇眼草〕(名)〔植〕水龍骨(あたもだか)科の羊齒類。高さ約三〇糎。葉は葉裏に密生する。根莖を有し、これから葉を生ずる。葉は一回羽狀複葉で、各小葉は披針形鋭尖頭。子囊群は葉の裏に針に配列する。

いわがは〔岩間〕(名) 岩のあひだ。(古語)

いわき〔岩木〕(名) ❶岩と木。木石。❷感じのないもの。情愛のないもの。**—を分けぬ人心**(句) 岩木をわけて生まれたでもない、流石に情を知った人心。

いわき〔岩城〕(名) 岩で築いた墓。(古語)

いわきし〔岩岸・磐崖〕(名) 岩のそばだってゐる岸。「わげら)。

いわきつつき〔岩啄木鳥〕(名)〔鳥〕(い

いわきぼうしゅ〔岩擬寶珠〕(名)【植】❶百合科の多年生草本。「だうさぼ」うしゅ」の變種。根莖太く楕圓し、葉は擬寶珠に類して短小。夏、花梗を抽き、白色に紫雖ある花を開く。❷「ゆきのしたし」の異稱。

いわぎりそう〔岩切草〕(名)苦苣苔(ばこだ)科の多年生草本。葉は根生で廣卵形、鈍鋸齒で葉柄を有し、初夏、花莖を抽き、淡紫色漏斗狀の花を開く。

いわきんばい〔岩金梅〕(名)【植】薔薇科の多年生草本。高さ一〇糎餘、葉は三小葉から成る複葉で長き葉柄を有する。春季、黄色の小花を葉腋に開く。【古語】

いわく〔行けくくる〕(自動、カ下二)驚きあわてる。

いわく〔行けけくる〕〔稚く童く〕(自動、カ下二)いとけない。をさない。かよわい。(古語)

いわく〔曰〕(名)わけ。仔細。事情。理由。

いわく〔曰く〕(副)いふことには。いふには。**—言ひ難し**(句)(孟子公孫丑上篇に出る)詞でいひにくい。

いわく〔分れて〕(他動、カ下二)〔分れてゐさせる。

いわくえ〔居分く〕(他動、カ下二)場所。(古語)**—の**〔岩崩〕(名)岩のくづれること。其の場所。

いわくすぶね〔岩樟船〕(名)樟でつくった堅固な船。神代に用ひたもの。(古語)

いわぐつ〔おぐつ〕(名)〔麻香〕。

いわくにちじみ〔岩國縮〕(名)山口縣岩國町及び玖珂村附近から産出する木綿縮で、夏の單衣地とする。

いわくにちょう〔岩國町〕(名)【地】山口縣玖珂郡の町。岩國縮等を産する。錦帶橋は岩國川に架けられ、長さ二三〇米。

いわくにばんし〔岩國半紙〕(名)山口縣岩國地方産出する楮製の半紙。天正年間玖珂郡小瀬村の農、大郎右衛門の創製に係るといふ。

いわくまど〔日窗〕(名)横木を入れて「日」の字の形に似せた窓。

いわぐみ〔岩組〕(名)❶庭園に於ける岩の配置。岩が組みあったやうになってゐる所。❷【植】(いわひば)(巻柏)。

いわぐも〔岩雲〕(名)夏の雲。岩石の狀に似てゐるからいふ。

いわくら〔岩座・磐座〕(名)神のいらっしゃる所。神の御座。

いわくら〔岩倉〕(名)❶石造の倉。❷【地】京都市上京區岩倉町。藤原藤房の遊世地、又、岩倉具視の閉居した地として名高い。歌枕の一。

いわくらともみ〔岩倉具視〕(名)【人】明治維新の功臣。政治家。堀川康親の子。岩倉具慶の養子。右大臣に任ぜられ、明治十六年薨、年五十九。子具定、父の功によって公爵を授けられた。

いわけなげ〔稚なげ〕(名)いわけないさま。

いわけなさ〔稚なさ〕(名)いわけないこと。「い。あどけない。

いわけなし〔稚し〕(形、一)〔きつつき〕(名)【動】きつつき」の一種。深緑色で、頭と腹とは紅色。

いわげら〔岩啄木鳥〕(名)深緑色で、頭と腹とは紅色。

いわこ〔岩苔〕(名)【植】(いわひば)(巻柏)。

いわことす〔岩越〕(名)琴柱の絲をのせる滝座。❶神佛を安置して、祈禱・法事を行ふ壇。

いわさ〔岩座〕(名)岩の形をした佛像の臺座。

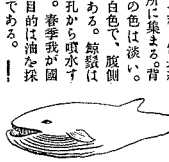
いわさか〔磐境〕(名)昔、神を祭った場所で、岩をめぐらした所。(古語)

いわさき〔岩崎〕(名)岩の突きでたみさき。

いわさきやたろう〔岩崎彌太郎〕(名)【人】明治の實業家。富豪。三菱の創業者。名は弥。高知縣の人。海運業に從事し、明治七年、三菱會社を起し、近海の航海權を掌握した。明治十八年歿。年五十二。

いわさまたべえ〔岩佐又兵衛〕(名)【人】浮世畫の元祖。號は勝以。浮世又兵衛と稱する。荒木村重の子。越前の岩佐氏に養はれた。慶長年中、土佐光則に大和繪を學んで一家をなし、浮世畫を始めた。慶安三年(一六五〇)歿。年七十三。

いわし〔鰯・鰮〕(名)【動】軟鰭類の海產硬骨魚。體は紡錘狀で、背青黑く、腹は銀色、鱗は細密。常に群集して海の上層を游泳する。燒又は煮て食用とし、又、油搾、乾鰯とする。**—あぶら**〔鰯油〕(名)鰯から採取した油で、不快な臭があって褐色である。機械油・ペンキ又は魚蠟などの原料とする。**—あみ**〔鰯網〕(名)鰯を捕るに用ひる網。伺取網・瀬引網・船引網・持旋網・刺網等の種類がある。**—かす**〔鰯粕〕(名)鰯の油と水分とを去って乾かしたもの。肥料とする。**—くじら**〔鰯鯨〕(名)【動】鯨の一種。體長約十四米。鰯の群集する所に集まる。背部の色は暗灰色で腹部の色は淡い。咽喉から胸にかけて乳白色で、腹側に一條の灰色帶狀斑がある。鯨鬚は帶青黑色。頭上の噴水孔から噴水すること、高さ三—四米。春季我が國の近海に來る。捕獲の目的は油を採取して工業用とする爲である。**—ぐも**〔鰯雲〕(名)秋、鰯の產卵する爲に集まる頃の鱗の紋狀の雲。**—ぐれ**〔精進おち〕(句)鰯のやうなつまらぬ魚で精進落をするのは馬鹿馬鹿しいといふ所から、つまらぬ者を相手として不義の名を取ること。つまらぬものに信心すれば光の出りやうに見えるか。至誠は大切である。【鯉、がんえん。


〔鯨 鰯〕

いわしおい〔岩鹽〕(名)山から出る自然結晶の鹽。

いわしみず〔石清水〕(名)【枕】❶岩の間から湧き出る清水。❷「言はで」の枕詞。**—でんそう**〔石清水傳奏〕(名)室町時代から、石清水八幡宮に關することを奏聞する職。**—はちまんぐう**〔石清水八幡宮〕(名)【神】官幣大社。京都府綴喜(つづき)郡八幡(やはた)町男山に鎮座。祭神は應神天皇・神功皇后・比賣大神の三座。勅祭に預り、例祭九月十五日。伊勢大神宮・賀茂神社とともに三社の稱がある。男山八幡宮。

いわすき〔齋鋤〕(名)いむすき。

いわずなし〔岩綱・錘綱〕(名)網におもりを結びつける綱。**—の**〔岩綱の一〕(枕)「若がへりの」の枕詞。

いわずろう〔居煩ふ〕(自動、ハ四)そこにゐることをうるさく思ふ。ぐづくづ思ふ。

いわせきしょう〔岩石菖〕(名)【植】百合科の多年生草本。地下に短小な根莖を有し、毛茸ある鬚根を出す。葉は線形、深緑色平滑。六七月頃、花莖を抽き、莖頭に白色にして背部に淡紫色な帶び た總狀花を開く。

いわせきょうさん〔岩瀬京山〕(名)【人】江戸時代の戲作家。名は百樹、通稱利一郎。戲筆堂・方半居士等の號がある。山東庵京傳の弟。安政五年(二五一八)歿。年九十一。

いわたおび〔岩田帶〕(名)ゆはたおび・結肌帶の轉。又、齋肌(だ)帶の義ともいふ。妊娠した婦人が、五箇月目から腹に纏ふ帶。

いわたがらし〔岩田芥〕(名)【植】十字花科の一年生草本。高さ二〇糎位、莖は叢生する。葉は羽狀複葉、小葉は廣楕圓形。春日、莖頭に白花を開く。

いわたき〔岩瀧〕(名)岩の上に落ちる瀧。

いわたけ〔岩茸・石茸〕(名)【植】地衣類の一。山中の岩面に生じ、扁平な葉狀凹形をなす。表面に褐色毛がある。裏面は黑色。乾かして貯へ、食用に供する。

いわたす〔射渡す〕(他動、サ四)こちらからあっちに矢を射る。

いわたす〔居渡す〕(他動、サ四)居並ばせる。

いわだたみ〔岩疊〕(名)平な岩の重なった山地。

いわたばこ〔岩煙草・苦苣苔〕(名)【植】苦苣苔科の多年生草本。

〔草煙 岩〕

山地の陰濕なかげに著生する。一根から二葉を出し、葉は楕圓狀卵形で鋸歯多く、光澤を有し、鋸齒があり、タバコの葉に似る。夏二〇糎位の花莖を出し、その先端に數

箇の花をつける。花冠は輻形五裂で紫色を呈し、花後、蒴果を結ぶ。

いわたりうと[いはたりうと]〔岩田涼兎〕(名)【人】江戸時代の俳人。伊勢山田の祠官。守武の風を慕ひ、又、蕉門に入り、後、伊勢風を開き、門下に乙由・千代女・闌更・蒼虬等がある。享保一年(一三七七)歿。其の著に「皮籠摺」がある。

いわたる[いはたる]〔居渡る〕(自動・ラ四)ゐ

いわどり[いはどり]〔岩千鳥〕(名)❶【動】千鳥の一種。體は黒く胸部の白い。脚の短く尾は分岐し、河上を群がり飛ぶ。❷【植】蘭科の多年生草本。深山の岩間に生じ、高さ約一〇糎。一莖一葉。葉は長楕圓形で先端微かに凸出する。六月頃淡紅紫色の花を開く。

いわつきねぎ[いはつきねぎ]〔岩槻葱〕(名)埼玉縣岩槻地方から産出するねぎ。形狀太く白色部は長。

いわつきもめん[いはつきもめん]〔岩槻木綿〕(名)埼玉縣岩槻地方から織り出す木綿織物。地質強く、暖簾又は風呂敷などに用ひる。

いわつくみ[いはつくみ]〔岩鶫〕(名)【動】いそつぐみ。

いわつつじ[いはつつじ]〔岩躑躅〕(名・枕)❶【植】躑躅科の落葉矮小灌木。高さ一五糎内外。葉は圓形乃至廣卵形で膜質、邊緣に細鋸齒を有する。夏、葉腋に淡紅色の筒狀花を開く。果實は蒴果で紅熟する。❷[枕]の色目。表紅・裏紫。❸「言はれば」の枕詞。

〔躑躅 岩〕

いわつばめ[いはつばめ]〔岩燕〕(名)【動】燕の一種。燕より形稍小。深山に棲み絕壁に巣をつくる。尾羽短く分岐して淺い。喉は黑色、背部は黑く、腰腹部は白色。秋季南邊に去る。

いわつぼ[いはつぼ]〔岩壺〕(名)❶凹穴。❷【鱗】内部の空虛な石。鈴石・袋石・殼石の類。

いわつらら[いはつらら]〔岩垂氷〕(名)【動】鹿子(しかこ)(鯉乳石)。

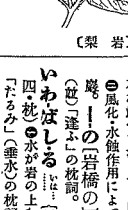
いわと[いはと]〔岩戸〕(名)岩窟の入口。—**かぐら**〔岩戸神樂〕(名)❶天照大神の岩戸隱の時、岩戸の前で神神の奏ぜられた神樂。又、それにちなんだ神樂。❷芝居の囃子。太鼓・笛でする神樂拍子。—**がくれ**〔岩戸隱〕(名)【神】天照大神が素盞嗚尊の暴狀を怒って天岩戸にお隱れになったので、天地が眞っくらになったといふ故事。

いわとこ[いはとこ]〔岩床〕(名)❶岩の面の平らかな處。❷人を葬った處。墓所。

いわとび[いはとび]〔岩飛〕(名)高い岩の上から水に飛びいること。又、ひろくする水練に達した男のあだ名。

いわな[いはな]〔岩魚・嘉魚〕(名)【動】鮭科の淡水產硬骨魚。形狀鯵に似て小さく、鱗細かく、背部は暗色、腹部は淡黃紅色。體側には暗褐色の斑點がある。體長約三〇糎。内地の山間の諸溪流に產し、肉は淡白で美味。

いわなし[いはなし]〔岩梨・岩菜子〕(名)【植】躑躅科の常綠小灌木。地上莖は地を匍ひ、その長さ一五—三〇糎。葉は長楕圓形で互生し、葉裏は褐色の剛毛を生ずる。早春、總狀に淡紅色の筒狀花を著ける。果實は蒴狀形で褐色。本州の諸高山及び北海道に產する。



〔梨 岩〕

いわなだれ[いはなだれ]〔岩波〕(名)岩にうちかかる波。

いわなんて[いはなんて]〔岩南天〕(名)【植】石蓋(いしぶた)科の常綠小灌木。高さ三〇糎餘。葉は長卵形鋸尖頭で鋸齒を有し、厚くして光澤がある。夏日、鐘狀の白花を下垂する。ついで、りんごに似た光澤の赤色の果實を結ぶ。

いわにがな[いはにがな]〔岩苦菜〕(名)【植】菊科の草本。長い匍枝を出して畠地に繁茂する。葉は圓形又は卵圓形。春夏の候、黃色の頭狀花を開く。

いわにし[いはにし]〔岩螺〕(名)【動】腹足類の貝。大きさ拇指大。介殼は黑色螺旋狀をなして拆がある。內面紫色、肉は赤黃色。味は辛い。からにし。いぼにし。「枕詞。

いわに・ふり[いはに・ふり]〔岩に觸り〕(枕)「割れて」の

いわぬいろ[いはぬいろ]〔不言色〕(名)くちなし・梔子)色の異稱。「はがれ。

いわね[いはね]〔岩根〕(名)いはのねもと。いはの

イワノフ[Vsevolod Ivanov](名)【人】ロシヤの詩人。後期近代派象徵詩人の代表的人物。一八六六年モスコーに生まれ、革命後、教育人民委員會の文學部長となった。抒情詩集「北斗星」「透明」「ヒロス」等の著がある。(一八六六—)

いわの・ほうめい[いはの・ほうめい]〔岩野泡鳴〕(名)【人】明治大正時代の評論家・小說家。名は美衛。淡路洲本の人。一元描寫論を提げて文壇各方面の注意を惹いた。大正九年歿。年四十八。その著に「神秘的半獸主義」「耽溺」等がある。

いわはしま[いはばしま]〔岩峽〕(名)岩と岩との間。い

いわばし[いはばし]〔石橋・岩橋〕(名)❶川の淺瀨に飛石を並べて渡るやうにしたもの。庭園等に見られる。❷風化・水蝕作用によって、天然に橋の形をなした奇巖。!—**の**〔岩渕の〕(枕)「ま近し」「寄る」「なび」(枕)「逢ふ」の枕詞。

いわばしる[いはばしる]〔石走る〕(自動・ラ四)❶水が岩の上を走り流れる。❷「瀧」「瀧つ」「たるみ」(垂水の枕詞。

いわひと[いはひと]〔岩檜葉・巻柏〕(名)【植】巻柏科の羊齒類。深山の岩上に生ずる。多は美衛。名は美衛。淡路洲本の人。一元描寫論を提げて文壇各方面の注意を惹いた。大正九年歿。年四十八。その著に「神秘的半獸主義」「耽溺」等がある。

いわひば[いはひば]〔岩檜葉〕(名)【植】巻柏科の羊齒類。深山の岩上に生ずる。多は美衛。名は美衛。淡路洲本の人。一元描寫論を提げて文壇各方面の注意を惹いた。大正九年歿。年四十八。その著に「神秘的半獸主義」「耽溺」等がある。

いわぶき[いはぶき]〔岩款冬〕(名)【植】ゆきのした科の多年生草本。高さ約六〇糎。葉は七月至九月の冬期に出て、暗褐色を呈する。

いわぶし[いはぶし]〔岩藤・胡豆〕(名)【植】蝶科の灌木。葉は鋸齒狀で長い。葉柄がある。春、莖頂に短花梗を出し、淡黃綠色の花を密接して開く。種子は廣楕圓形で、暗褐色を呈する。

いわぶち[いはぶち]〔岩淵〕(名)峙った岩に圍まれた淵。

いわまくら[いはまくら]〔岩間〕(名)岩と岩との間。

いわまくら[いはまくら]〔岩枕〕(名)岩を枕として寢ること。岩の邊に旅寢すること。(古語)

いわまして・ごと[いはましてごと]〔言はましごと〕(名)言はまほしこと。(古語)

いわまほし[いはまほし]〔言はまほし〕(形・シク)いひたい。いひたいと思ふ。(古語)

いわまほしげ[いはまほしげ]〔言はまほしげ〕(名)いはまほしさ。言はまほしさ。言はまほしさ。(名)いはまほしいこと。又、その度合。

いわみぎさん[いはみぎさん]〔石見銀山〕(名)❶【地】石見國邇摩郡大森町の銀山。❷【藥】石見銀山の礦石を製した殺鼠劑。

いわみち[いはみち]〔岩路〕(名)岩石の多い路。

いわみ・じゅうたろう[いはみ・じゅうたろう]〔岩見重太郎〕(名)【人】劍客。名は秀相。小早川家の臣。諸國を周遊して劍法を練る。天橋立で仇討の助太刀をして大川八左衛門を討つ。豐臣秀吉に仕へて薄田隼人と稱した。元和元年(一二七五)大阪の陣に戰死。

いわみず[いはみず]〔岩水〕(名)谷間から流れる水。

いわむ[いはむ]〔聚む・滿む〕(自動・マ四)多く集まる。滿ちる。

—の〔岩淵の〕(枕)「隱り」の枕詞。

いわ・ふね[いはふね]〔岩船〕(名)天上にあったといふ想像上の船。神代に神のお乘りになったといふ堅牢な船。(古語)

いわ・ぼたん[いはぼたん]〔岩牡丹〕(名)【植】虎耳草(ゆきのした)科の多年生草本。葉は小形、卵形又は楕圓形、對生。葉緣は鋸齒狀で長い。葉柄がある。春、莖頂に短花梗を出し、淡黃綠色の花を密接して開く。種子は廣楕圓形で、暗褐色を呈する。

いわむろ[いはむろ]〔岩室〕(名)(いわや)(窟)。

いわもと[いはもと]〔岩本〕(名)岩の根もと。岩根。

いわもの[いはもの]〔岩物〕(名)鐵石から採取した顏料。群青・綠青の類。

いわもだて[いはもだて]〔岩樅〕(名)【植】石蓋(いしぶた)科の小灌木。高さ約一〇糎。枝を分けて地をはふ。葉は小形

線狀で密生し、裏面は褐色。初夏、長柄ある淡紅色の鐘狀花を著ける。つがさくら。つがまつ。

いわや いはや **—**【岩屋・窟】(名)❶岩を穿って造った住所。❷天然にできた岩間の洞穴。**—ぎく**【岩屋菊】(名)【植】あぶらぎく。**—ど**【岩屋戸】(名)岩屋の入口。

いわやいちろく いはやいちろく【巖谷一六】(名)【人】畫家。名は修。号水口(みなくち)藩士。官、元老院議官に至る。書は、菱湖・趙子昂を學んだが、清朝の金石學者楊守敬の說を聞いて大いに悟る所あり、險勁飄逸、洒脫の風韻を成すに至った。又、詩文の造詣もあった。明治三十八年(一九〇五)歿。年七十一。

いわやさざなみ いはやさざなみ【巖谷小波】(名)【人】童話作家。名は季雄。別號、樂天居・遲山人。一六居士の子。明治三年東京に生まる。紅葉・眉山等と硯友社を興し、新文學を鼓吹した。尙、デンマーク童話文學の紹介の功によって同國から二等勳章を贈られた。その著に「洋行土産」「世界お伽噺」「日本お伽噺」等があり、見童間に「お伽噺のおじさん」として親しまれてゐた。昭和九年(一九三四)歿。年六十四。

いわやなぎ いはやなぎ【岩柳】(名)【植】❶楊柳(やなぎ)科の落葉溜木。高さ三米に達し、葉は長楕圓形で裏に毛茸を密生し、形「やなぎ」に似る。春日、淡黃綠色の穗狀花を開く。❷こめぢな。

いわやま いはやま【岩山】(名)いしやま。「もいふ。

いわらじ【家童子】(名)(いおうじ)。

いわれ いはれ【謂】(名)ゆゑしよ由緣。理由。**—**

いんねん いんねん【磐余】(名)いはれ。ゆかり。

いわれんげ いはれんげ【岩蓮華】(名)【植】景天(けいてん)科の多年生草本。岩壁又は屋上に生ずる。葉は肉厚く根もとから白色の多葉が重なり生じ、莖端のやうである。夏秋の候、莖を抽ること二〇—三〇糎、頂及び葉腋に白色五瓣の花を開く。ほとけのつめ。

いわろくしょう いはろくしやう【岩綠青】(名)【化】綠色の顏料。綠青の色濃く粗なるもの。孔雀石を碎き、水簸して製する。

いわわだ いはわだ【岩曲】(名)岩の輪の如く曲ってゐる處。(古語)

いわわれみず いはわれみず【岩割水】(名)岩にせかれて割れわかれて流れる水。

いわん・かた・なし いはん・かたなし【言はん方無し】(形・一)いひようがない。

いわんや いはんや【況んや】(副)言ふまでもなく。其の上に。まして。なほさら。

いん【印】(名)❶文字を木・牙・角・水晶・石・金等に彫刻して、個人・官廳・團體等のしるしとして、文書に押捺して證左とするもの。❷昔、支那で官位のしるしとして佩用した金石類の彫刻物。❸足跡。殘留せる痕跡。❹【佛】眞言宗で、指先を種種の形に結ぶこと。概れ袖又は袈裟等の下で結び露顯を避け、頂の上で解き去るを法とする。

いん【因】(名)❶おこり。もと。原因。❷わけ。❸ゆかり。❹【佛】いんがやう(因明)の略語。❺理由・根據の義で、論理學でいふ綱概念に當たる。

いん【飲】(名)❶酒を飲むこと。酒盛。❷飲物。飲料。

いん【陰】(名)❶易學で、天地の元氣の一。「月」は陽、「月」は陰。「女」は陰の類。(陽の對)❷山の北。水の南。❸かげ。ひかげ。

いん【音】(名)おん。聲。

いん【引】(名)❶漢文の一體。序。はしがき。❷樂府(がふ)の一體。

いん【尹】(名)❶彈正臺の長官。❷左右京職の長官。❸支那で、宰相の地位。

いん【陰・蔭】(名)❶かげ。かげ。❷たすけ。❸「父祖の餘光。

いん【淫・婬】(名)❶いろごと。色慾。❷むさぼること。❸色慾を恣にすること。❹程度をすごすこと。❺淫水。精液。(古語)**—を蠱く**(句)女が男から金をもらって色を賣る。

いん【院】(名)❶周圍に垣をめぐらした一構への大きな家。❷役所。❸學校。寺。❹上皇・法皇・女院の味方の人人。**—かた**【院方】(名)

いん【院・接尾】大人の戒名に添へて用ひる語。

いん【員】(名)❶かず。人かず。❷やくにん。りで役に立たぬ。

いん【韻】(名)❶音の末のひびき。❷漢字をその發音の末のひびきによって、平(ひやう)・上(じやう)・去(きよ)・入(につ)の四聲に分ち、更に細別して、元時代には百七韻に分類したが、元時代には百六韻とした。❸文中に同一若しくは類似の音韻を隨意に又は一定の間隔を置いて配列するもの。❹詩賦。❺おもむき。

—に次ず(句)次韻をする。**—を押す**(句)同韻の文字を句脚に用ひる。**—を探る**(句)多人數集まって詩作する時、各人が韻字本を無心にあけて、そこに出た韻字を其の人の作らべき詩の韻とする。たんぬる。**—を蹈む**(句)韻を押す。

いん【殷】(名)【歷】支那古代の王朝。西曆紀元前一七八三—前一一二二)前朝の夏と後朝の周とを併せて三代といふ。その祖は湯王、第二十八代紂王に至って、周の武王に滅ぼされた。

いんあく いんあく【隱惡】(名)表面にあらはれぬ惡事。

いんい いんい【因位】(名)【佛】佛果を得る爲に修行する地位。佛法の修行が未だ成佛に達しない菩薩の地位。いんに。

いんえい いんえい【陰蔭】(名)【醫】男子の生殖器の萎縮

いんえん いんえん【陰蔚】(名)樹木の茂りこもるさま。

いんい いんい【陰位】(名)(おんい)(陰位。

いんいオオン いんいオオン【陰イ—】(名)【理】(Anion)陰電氣のイオン。

いんいん いんいん【陰陰】(名・副)❶遊興に耽ること。❷男女間のみだらなこと。

いんいつ いんいつ【淫佚】(名)❶世を過れ隱れたこと。

か くわ【隱逸花】(名)【植】(周茂叔の愛蓮說に「菊、花之隱逸者」とあるに基づく)菊の異稱。

いんいん いんいん【隱隱】(名・副)❶憂へ傷むさま。❷どろきひびくさま。

いんいん いんいん【陰陰】(名・副)❶かすかにて明らかならぬさま。❷盛んなさま。

いんいん いんいん【殷殷】(名・副)❶盛んなさま。❷雷や大砲などの轟く形容。❸憂ふるさま。

いんいん いんいん【淫淫】(名・副)❶進むさま。❷流れるさま。❸遠ざかるさま。❹往來するさま。

いんう いんう【陰雨】(名)空が曇って雨の降ること。

いんう いんう【淫雨】(名)ながあめ。霖雨。穀物に害をなす雨。【種】二重廻に似て袖狹く丈の短いもの。

インヴァネス [Inverness](名)男子の外套の一

インヴェンション [Invention](名)【經】輸出貨物の送狀。卽ち輸出貨物の詳細を記錄せる案內狀。

インヴォイス [Invoice](名)❶陰鬱で鬱陶しいこと。❷氣がむすぼれて晴晴しくないこと。

いんうん いんうん【陰雲】(名)空を蔽ふ雲。

いんえい いんえい【陰翳】(名)❶かげ。❷くもり。

いんえい いんえい【胤裔】(名)血筋をひいたもの。ちつづき。子孫。

いんえい いんえい【印影】(名)印を押したあと。

いんえい いんえい【陰影】(名)光を受けない暗い部分。かげ。**—が・ほう** わがほう【陰影畫法】(名)物體の陰影をつけて畫く畫法。

いんえん いんえん【蜜緣】(名)❶蔓草などの物にすがりつくこと。❷ものにくっつて離ちがたくこと。❸緣故によって地位を求めること。てづる。たより。

いんえん いんえん【因緣】(名)❶【佛】物事を成立させる起原卽ち因と、因を助けて果を結ばせる力卽ち緣とによって定められた生滅の關係。いんれん。❷由來。來歷。ゆかり。ゆゑしよ。

いんか いんか【印可】(名)(「印」は信用、「可」は許可)❶【佛】師僧が弟子に悟道の熟達を認めて、奧義の許を與へること。❷藝道のゆるし。免許。

いんか いんか【姻家】(名)配偶者の相方の家。

いんか いんか【允可】(名)(「允」は「諾」の意)ききとどけ。ゆるし。許可。(名)(「允」は「諾」の意)ききとどけ。ゆるし。許可。(名)(「允」は「諾」の意)

いんか いんか【陰火】(名)おにび(鬼火)。

いんが いんが【陰畫】(名)寫眞の乾板に感光させて現像した畫像。その映像は左右入換り、明暗は實景と反對になってゐる。ネガ。

いんが[引果](名)❶原因と結果と。❷原因と結果との關係。因縁あつて結果あること。善を行へば善い報のある類。❸【佛】前世の惡業の應報。不幸。不運。❹【哲】一が他に對して變化の原因となり、他が一に對して變化の結果となる關係。**—おうほう**[因果應報](名)【佛】我の作爲する因業が善惡共に之に應じて果報あること。**—ざらし**[因果晒](名)惡業の結果を世人にあらはし知らせること。又、その人。**—てきめん**[因果覿面](名)惡事の報しの卽座にあらはれること。**—にん**[因果人](名)前世の惡業の報を受けた人。不運な人。因果者。**—りつ**[因果律](名)【哲】原因・結果の關係に於ける自然律。宇宙間に於て、一現象の起こるには、必ず其の原因あり、又、同一の原因からは同一の結果を生ずるといふ法則。**—ほね**[因果骨](名)勃起した陰莖。**—の小車**(句)因果の循環することを車輪のめぐるに譬へていふ語。**—の胤を宿す**(句)私通した結果、子を孕む。**—は皿のうち**(句)因果は巡つて來るの譬。**—を含める**(句)物事の始終をいひ聞かせて納得させる。

インカーヴ[In-curve](名)「著の側で急に打者の近くに曲ること。

いんかい[陰晦](名)くもつてうすぐらいこと。そらの薄闇いこと。

いんかい[湮晦](名)知德をくらますこと。

いんがい[員外](名)定員外。

いんがいかん[員外官](名)定員外の官吏。

いんがいだん[院外團](名)【政】代議士でない政黨員が衆議院の形勢に應じ運動する團體。

いんがく[韻學](名)音韻を研究する學問。

いんがしょく[印度紙](名)寫眞の陽畫調製に用ひる感光紙。

いんかしょくぶつ[隱花植物](名)【植】顯花植物と相對して植物界二大別の一。羊齒類・蘚苔類・菌類・藻類・地衣類等の總稱。雌雄兩蕊の別なく、概ね胞子・芽胞を有して蕃殖する。

いんかてん[引火點](名)【化】Flashing-point 氣體・液體等が燃燒を起こすに要する溫度。

いんかん[印鑑](名)❶【法】擬め市區町村役場に届け出た一定の印影で、印の眞僞を鑑定する爲に用ひるもの。いんかがみ。いんよ。❷關門・城門などを通過するに用ひる爲の烙印手形。**—しょうめい**[印鑑證明](名)【法】市町村長等が、本人提出の印鑑届と照合して、印鑑の眞正を證明すること。

いんかん[殷鑑](名)(殷の國民は、前代の夏が滅亡したことを鑑として戒めるの義)鑑み戒むべき前例。**—遠からず**(句)(詩經大雅に「殷鑑不遠、在ニ夏后之世一」とあるに基づく)かんがみるべき戒め目の前にある。

いんかん[陰姦](名)表面にあらはれぬやうにして處罰せられること。

いんかん[院勘](名)上皇・法皇の忌諱に觸れて處罰せられること。「途に窒扶せられること。

いんかん[陰氣](名)❶陰の元氣。❷物に蔽はれて暗暗せぬこと。いとせきこと。

インキ[Ink](名)筆記又は印刷に用ひる有色の液體で、種種の色のものがある。インク。**—つぼ**[—壺](名)インキを入れておく壺。

いんぎ[院議](名)院と稱する機關の會議。

いんぎゃく[韻脚](名)詩の韻をふんだ句脚。

いんぎゃく[淫虐](名)みだらで人を虐げること。

いんきゅう[飲泣](名)聲を立てずに泣くこと。すすりなき。しのびなき。

いんきょ[允許](名)(「允」は諾の意ゆるし。許讓)「可」。允可。

いんきょ[隱居](名)❶官職を辭し又は家督を讓つて閑居すること。又はその人。❷【法】戶主が自己の自由意思によつて、戶主の地位から退き、家族の一員となること。❸江戸時代の公卿・士人の別の一。致仕・退隱して食祿を其の子孫に讓らしめたもの。❹戶主の祝の稱。**—じょ**[隱居所](名)隱居した人の住所。**—ばんとう**[隱居番頭](名)主家の番頭を勤め終へて、尚引續き牽公する者。**—ぶん**[隱居分](名)隱居の身分。**—りょう**[隱居領](名)隱居した人の領地。**—りょう**[引據](名)隱居した人の生活費。

いんきょ[引據](名)引用して、根據とすること。

いんきょ[陰虛](名)房事過度から來る神經衰弱。じんきょ(腎虛)。

いんきょ[韻鏡](名)【文】支那の音韻に就いて、開・輯・清・濁・四聲・七音等の區別を記した書。著者未詳。唐末の書。一卷。

いんきょ[陰莖](名)男子の生殖器。男根。陽物。

いんきょ[陰敎](名)女子の敎。女子のしつけ。

いんぎょ[印形](名)實印・認印等の總稱。

いんぎょてんのう[允恭天皇](名)第十九代の天皇。仁德天皇の第四皇子。御名は雄朝津間雅子宿禰豐(あさつまのまさこ)。卽位の四年、姓氏の紛亂を正し給うた。在位四十二年。寶算七十八。(一説に八十七。)(一〇一)

いんきょく[陰極](名)【理】(Negative pole)陰電氣の極。眞空管の負の電極。電解液槽の負の極。電流の流れ込む極。磁石の南極。**—せん**[陰極線](名)【理】(Cathode rays)眞空管内で放電を行ふ時、陰極から發する放射線。之を固體に抵觸させると X 光線を生ずる。

いんきん[印金](名)金箔の一。紗・帛の知き織物に、漆と糊とで模樣を描き、其の上に金箔をおいたもの。**—どう**[印金堂](名)京都所葛野郡妙光寺の山上にある堂で、方九尺、壁に印金で五色の模樣を現はしてある。

いんきん[引磬](名)(「きん」は磬の唐音)梯の實程の大きさの底に疵のあるものを付けつるして、鐵製の「ばち」で鳴らして時刻を報知する具。禪家の用。

いんきん[陰金](名)いんきんたむし。

いんきんたむし[陰金田蟲・陰部濕疹](名)【醫】陰部・股等に生ずる濕疹。白癬菌の傳染によつて起こり、紅疹或は漿液性丘疹等が圍繞狀に染になる。男子のは主に陰莖に始まり、女子のは主に大陰唇に始まる。甚だかゆく強延し易い。いんきん。

いんきん[慇懃](名)❶男女の情交。❷ていねい。れんこう。

いんく[慇懃](名)❶禮儀を重んじてする寒會。(無禮講の對)講)(名)禮儀を重んじてする寒會。(無禮講の對)—**びろう**[慇懃尾籠](名)慇懃に過ぎて却つて無禮なこと。—**ぶれい**[慇懃無禮](名)いんぎんびろう。—**を通ずる**(句)男女がひそかに情交を結ぶ。

いんく[印矩](名)印を おす時に、印影のゆがまぬ爲に用ひる丁字形の定規。

インク[Ink](名)インキ。—**スタンド**[Ink-stand](名)インキ壺。インキ容器。—**ホルダー**[Ink-holder](名)萬年筆のインキをいれる部分。

イング[William Ralph Inge](名)【人】イギリスの宗敎家・文明批評家。セントポール大寺院の僧正。一八六〇年ヨークシャーのクレークに生まれる。宗敎・道德に關する論文多く、保守的な英國思想の文明批評家の代表者である。その著に「進歩の觀念」「敎會と時代」「基督敎倫理」「近代問題」等がある。(一八六〇)

インクイジション[Inquisition](名)ローマ敎會撰述の爲、十二世紀から十六世紀に亙つて行はれた殘酷な宗敎裁判。異端者を摘發・撲滅する爲に設けられ、之を焚刑に處した。宗敎改革によつて跡を絕つに至つた。

インクライン(名)【工】(Inclined-plane の略)傾斜面にレールを敷き、動力によつて臺架に載せた船舶・荷物等を昇降させる一種のケーブルカー。我が國では琵琶湖疏水線路中、京都市南禪寺の蹴上にあるものが有名である。

イングランド[England](名)【地】大ブリテン島南部の大部を占め、文化・富力等英國の中心をなす地。南部の中心はロンドンで、政治・商業の中心。北部は北は石炭・鐵の產多く、工業最も發達し、煤煙天を蔽ひ、黑鄉と稱せられ、人口十萬以上の都市三〇餘

に達し、バーミンガム・マンチェスター等は其の中心である。

インクリネーション [Inclination] (名) 傾斜。傾向。性癖。嗜好。

いんくんし [隠君子] (名) ❶世を遁れて山野などにゐる有徳の人。❷[隠]遁の異稿。隠逸花。

いんげ ぇん [院家] (名) [佛]門跡の法統を承けつぐ寺格。

いんいん [印契] (名) [佛]手に印を結び、口に陀羅尼を稱へること。印呪。

いんけい [淫刑] (名) 常を得ぬ刑罰。

いんけい [陰莖] (名) 男の生殖器。いんきやう。

いんけつ [引決] (名) 責任を引受けて自殺すること。

いんげつ [陰月] (名) 陰暦四月の異稿。

いんげつ [隠月] (名) 琵琶の一部で撥を納める所。

いんけん [引見] (名) 引入れて對面すること。

いんけん [隠見] (名) ❶隠れたり見えたりすること。❷ほのかに見えること。

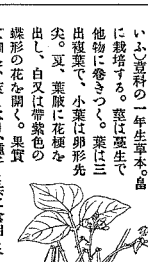
いんけん [陰険] (名) 表面はよく見せて内心のわるがしこいこと。はらぐろ。

いんけん [隠顯] (名) かくれたりあらはれたりすること。隠見。**—インキ** [隠顯—] (名) [化]隠顯自在のインキ。鹽化コバルトの稀薄溶液。火であぶれば、菊色のインキあらはれ、水蒸氣を飼れさせ、又は、空氣の中に放置すれば再び消失する。**—ほう** [隠顯砲] (名) 隠顯砲架に据ゑつけた火砲。**—ほうか** [隠顯砲架] (名) 火砲の裝塡を掩體の陰へ行かず、發射の際に砲身を高位置にのぼせて障壁の上に現はし、發射後、再び自動的に低位置に降下させる裝置の砲架。**—ほうだい** [隠顯砲臺] (名) 隠顯砲を据ゑつけた砲臺。

いんけん [因言] (名) ❶自慢らしいものいひ。❷しまでがましいこと。自慢。**—がお** [因言顔] (名) 自慢顔。

いんげん [隠元] (名) ❶[人]明の福州の僧。我が國黄檗宗の開祖。俗名は、林隆琦。承應三年(一六五四)歸化して、山城國宇治に黄檗山萬福寺を創立した。延寶元年(一六七三)寂。年八十二。後水尾天皇、大光普照國師の號を賜ふ。❷いんげんさまり。

—さささげ [隠元大角・菜豆] (名) [植](隠元が明國から持って來たものといふ)蔓莢の一年生草本。畠に栽培する。莖は蔓生で他物に卷きつく。葉は三出複葉で、小葉は卵形先尖。夏、葉腋に花梗を出し、白又は帶紫色の蝶形の花を開く。果實は細長い莢となり、種子と共に食用とする。五月ささげ。**—ずきん** [隠元頭巾] (名) 隠元のかぶつたもので、おこそ頭巾と同じだといふ。**—ちゃ** [隠元茶] (名) 隠元の始めた唐茶の鍋煎。出し茶。煎じ出して飲む茶。**—な** [隠元菜] (名) [植]❶(とうな)唐菜。❷はぼたんの異名。❸油菜の一種。**—まめ** [隠元豆] (名) [植]❶いんげんささげ。❷(ふじまめ)藤豆。**—らっし** [隠元らし] (形シク) 禪坊主らしい。高徳の僧らしい。


〔げささんげんい〕

いんこ [齋火] (名) いむび。

いんこ [鸚哥] (名) [動]鸚鵡科の鳥。鸚鵡に似て小さく、稍人語をまねる。種種の色が交つて美しい。熱帶の産。

いんご [隠語] (名) 仲間同士以外の者に知れぬように、用語に特定の意味を隠しておく語。かくしことば。暗號。

いんご ぇん [韻語] (名) 漢文で韻をふんだ語。

いんこう [印行] (名) 印刷・發行すること。

いんこう [淫行] (名) みだらな行ひ。

いんこう [咽喉] (名) ❶のど。のんど。❷大切な地。要害の場所。**—こう** [咽喉腔] (名) [生]上は會厭軟骨より下は聲門までの腔。咽頭と喉頭と。

いんごう ぎん [院號] (名) ❶居住の院の名を以て高貴の人に賜はせた稱號。❷戒名の院の字あるもの。❸修驗者の年功を經て院の字を附けたもの。**—さだめ** [院號定] (名) 院號を宣下する議定。

いんごう [引業] (名) [佛]來世の果報を引起すべき力ある所業。前世の所業の如何によって現世の運命をつくること。

いんごう [因業] (名) ❶[佛]固と業と。又、因となる惡業。❷殘酷。無情。頑固で無情なこと。**—もの** [因業者] (名) 頑固で些のおもひやりもない人。むこい人。

イン・コーナー [In corner] (名) 野球用語。内角。(アウトコーナーの對)

いんこく [陰谷] (名) 山陰の谷あひ。奥深く暗い谷あひ。

いんこく [印刻] (名) 印材や印版にほること。

いんこく [隠國] (名) 國に隠退すること。生國に隠れ住むこと。

いんこく [陰國] (名) 北方の國。

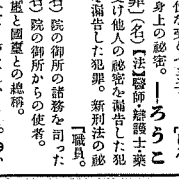
いんさく [引座] (名) [佛]導師を說法の高座に案内すること。

いんさい [允裁] (名) ゆるし。裁可。

いんさい [印材] (名) 彫刻して印とする材料。石・木・ゴム・牙・角・竹・金屬等を用ひる。

インサイド [Inside] (名) ❶内側。❷庭球・排球などで、球が境界線内に落ちること。

いんさつ [印刷] (名) 文字や圖畫などの版面にインキをつけて印刷機械によって紙面に刷り出すこと。版面の樣式に凸版・平版・凹版の三種がある。面を紙に印刷する機械で、蒸氣力・電力等を動力として、ロールでインキを版面に塗り、版面に紙面をおしつける裝置のもの。その種類に、一、凸版印刷機、(a)平壓式(b)圓壓式(c)二回轉式及び輪轉式二、平版印刷機、三、凹版印刷機がある。**—きょく** [印刷局] (名) [法]内閣總理大臣の直轄で、官報・法令全書・職員錄等の編輯・印刷並に發賣、及び印紙・郵便切手・諸證券の製造及びそこに要する用紙の製造等を掌る所。**—ばん** [印刷版] (名) (名) 印刷の版。凸版・凹版又は石版等の總稱。**—ぶつ** [印刷物] (名) 書籍・圖畫等の印刷したもの。


〔いかきつさんい〕

イン・ザ・ネーム・オヴ・ピープル [In the name of people] (句) (不戰條約締結の後、議會で問題になった同條約中の句)人民の名に於いて。人民に代って。人民の責務で。

いんさ ん [院參] (名) 院の御所に參上すること。**—しゅう** [院參衆] (名) 院參の公卿。

いんし [印紙] (名) ❶印をおした紙。❷[法]手數料・稅金等を納付したことを證明する爲に書類などに貼附する法定の紙片。收入印紙。❸郵便切手。**—ぜい** [印紙稅] (名) [法]財産稅に關する證書・帳簿などを作成する者に課する稅金。印紙稅法によって、證書又は帳簿に印紙を貼って納めるを普通とする。

いんし [因子] (名) [數]數多の數を順次に乘じた積に對して、其の數多の數の各の名。いんすう。因數。**—ぶんかい** [因子分解] (名) [數]いんすうぶんかい。

いんし [隠士] (名) 世をのがれて隠れてゐる人。隠者。

いんし [禋祀] (名) 清め祭ること。神を祭ること。

いんし [淫祀] (名) 邪神を祭ること。

いんし [淫祠] (名) 祭るべからざる神を祭ったやしろ。

いんし [蔭子] (名) 蔭位を受くべき子。

いんし [陰私] (名) 一身上の祕密。**—ろうしくさい** [陰私漏告罪] (名) [法]醫師・辯護士・藥剤師・產婆等が、委託を受け他人の祕密を漏告した犯罪。又、軍事上の機密を漏告した犯罪。新刑法の祕密漏泄罪に當たる。

いんし ぇん [院司] (名) 院の御所の諸務を司つた職。

いんし [院使] (名) 院の御所からの使者。

いんし [印璽] (名) 御璽と國璽との總稱。

いんし [淫事] (名) ❶みだらなことば。❷いろごと。房事。

いんし [淫辭] (名) ❶みだらなことば。❷よこしまなこと。

いんじ [陰事] (名) 隠して世にあらはれぬ事柄。

いんじ [隠事] (名) 隠して世にあらはれぬ事柄。

いんじ ぢ [印地] (名) (いんじうち)。**—うち** [印地打] (名) 子供が小石を投げあって戰のまねを

する遊戯。石合戦。

いんじ[韻事](名)風流な事柄。

いんじ[韻字](名)韻脚に用ひる文字。

いんじ[姪姒](名)容色と貿るもの。遊女。

いんじ……ぢ[因地](名)〔佛〕佛教の修行全く成就せぬ菩薩の地位の稱。因位。

インジウム[Indium](名)〔化〕金屬元素の一。銀白色で、鉛より軟く、普通温度では空氣中で酸化しないが、赤熱すれば氣體となる。閃亞鉛鑛・方亞鉛鑛に伴なって天然に存する。

いんじき[印字機](名)〔機〕❶自動的に電信の受信の點・線を紙面に記す機械。❷タイプライター。

いんじつ[陰湿](名)かげになって日影がささず、しめつてゐること。又その所。

いんしつ[隱室](名)隱居の室。

インシデント[Incident](名)出來事。

いんじゃ[隱者](名)世を捨てて山野などに隱れてゐる人。隱遁者。**—じょうご**……ぢ[隱者上戶](名)飲むに從つて氣の塞い不行く癖のある酒。

いんじゅ[飲酒](名)酒を飲むこと。

いんじゅ[印綬](名)支那で、官印を身につけるくみひも。**—を帶ぶ**(句)官に就くこと。**—を解く**(句)官を辭する。

いんじゅ[印呪](名)〔佛〕眞言宗で、僧侶が手に印を結び、陀羅尼を唱へること。かうすれば、護法の神が所願を助け成就せるといふ。

いんじゅいん[院主](名)〔佛〕院家の主僧。寺院の書幅の首に押す印。

いんじゅいん[引首印](名)で、多くは長方形。

いんしゅう……[因習](名)古くから傳來した風習。

いんしゅう……[因襲](名)前からの習慣・作法をうけつぐこと。**—しゅぎ**[因襲主義](名)盲目的に因襲を固執して、更に自覺することのない主義。**—どうとく**……[因襲道德](名)❶舊道德。❷現代生活に適合しない因襲に囚はれた無自覺な形式的道德。

いんじゅう[淫縱](名)みだらで我儘なこと。

イン・シュート[In-shoot](名)野球で、投手の投げた球が、打者に近く鋭く突進して過ぎること。

いんじゅん[因循](名)❶從來の方法にのみ從つて改めぬこと。❷進歩的精神なく舊弊を固守すること。

いんしょ[音書](名)おとづれ。たより。音信。

いんじょ[隱所](名)❶隱れた所。❷便所。

いんしょう……[印章](名)(いんざう)印形。

いんしょう……[印床](名)彫刻する時に、印材を插んで動かぬやうにする具。堅い木で造る。

いんしょう……[引聲](名)〔佛〕音聲に曲節をつけて彌陀の名・經文・偈頌(げじゅ)を唱へること。**—どう**[引聲堂](名)〔佛〕引聲念佛をなする堂。**—ねんぶつ**[引聲念佛](名)〔佛〕音聲に曲節をつけて、阿彌陀佛の名號を唱へること。

いんしょう……[飲章](名)(「飲」は「隱」の意)匿名の文。匿名狀。

いんしょう[引證](名)❶古語などを引いて證據だてること。❷引用して證據立てること。

いんしょう……[隱症](名)體內に籠つて外部に發しない病氣。

いんしょう……[印象](名)❶心(Impression)吾人が現在直接に物に觸れて得た感情が深く心に銘じて活活としてゐる心の狀態。❷內・外的知覺が精神に表現せられたもの。卽ち觀念の根柢となるもの。刺戟を受けて感覺を起す動的作用。❸强く感じて忘れられぬこと。**—し**[印象詩](名)〔文〕觀想の第一刹那的印象を點描する手法の詩。**—しゅぎ**[印象主義](名)(Impressionism)インプレッションズムの譯語。事物が作家に與へる直接の印象を作品に表現することを目的とする藝術上の主義。繪畫に於いては外光の直接的效果を主眼とし、音樂に於いては、旋律的形態よりも、音響・色彩的效果を活用しようとし、文學上に於いては、觀念の中心として、經驗するよりも對照の主點を點彩的に鮮明に描出することを目的とする。**—てき**[印象的](名)特異な感銘を殘す性質・態度・音響・傾向の形容。**—は**[印象派](名)〔美〕(Impressionist)印象主義を奉する藝術家の仲間。**—ひょう**……[印象批評](名)〔文〕作品の自己に與へる印象に基づいての批評。又は、これに關する文藝批評。

いんしょう……[引照](名)引合はせくらべること。

いんじょう……[引接](名)〔佛〕阿彌陀佛が念佛行者を來迎して極樂淨土に導き、往生を遂げさせること。

いんしょく[飲食](名)飲むことと食ふこと。

いんしょく[印色](名)いんにく(印肉)。

いんじょく[印褥](名)印をおす時、下に敷く臺で、板を紙で蔽ひ、上を布帛で包んだもの。

いんしん[音信](名)おとづれ。たより。**—ふつう**[音信不通](名)音信の絕えること。**—もの**[音信物](名)贈物。おとづれの時に贈る物。いんもつ(音物)。

いんしん[殷賑](名)盛んでにぎやかなこと。富むこと。

いんすい……[淫心](名)みだらな心。

いんすい……[印す](自動・サ變)形迹が殘す。あとがつける。

いんす……[印す](他動・サ變)形迹を殘す。あとをつける。

いんす[印子](名)❶よく精錬した舶來の純金。❷純金で造つた器物。

いんす……[淫す](自動・サ變)❶貪り好む。❷度に過ぎる。❸みだらなことをする。❹ほしいままにする。

いんず……[引頭](名)〔佛〕法會の時、衆僧の先導たるすもの。いんとう。

いんず[員數](名)かず。たか。

いんすい[淫水](名)雄性の生殖腺から分泌する粘液。精液。

いんすい[引水](名)人工的に他より水を導き入れること。

いんせい……[因襲道德](名)❶舊道德。❷現代生活に適合しない因襲に囚はれた無自覺な形式的道德。

いんせい……[陰晴](名)❶後宮の政。內政。❷女官。

いんせい[淫縱](名)みだらな音樂。又はその音樂。

いんせい[淫栖](名)世をのがれて閑居すること。

いんせい[隱栖](名)世をのがれて閑居すること。

いんせい[殷盛](名)甚だ盛んなこと。

いんせい……[院政](名)天子が御位を讓られて河上皇の時に始まる。

いんせい……[隕星](名)〔天〕地上に落下する流星。

いんせい[印稅](名)〔法〕印紙稅。❷著者が著書に自分の印をおした部數に應じて、出版者から著者に納める金。

いんせき[姻戚](名)婚姻によつて生じた姻族。

いんせき[茵席](名)しとね。しきもの。

いんせき[引責](名)責任を自分の身にひきうけること。

いんせき……[因數分解](名)〔數〕或數又は或代數式を其の因數に分かつこと。$a+ab+b^2$ を分解して $(a+b)^2$ にする類。

いんすぎん[印子金](名)❶昔、支那から渡來した純金。形、舟形に似る。❷純金で作つた器物。

インスティチューショナリズム[Institutionalism](名)〔經〕經濟學に於いて統計的方法を重視する學派。

インスティチューション[Institution](名)❶制度。慣例。❷學會。協會。

インスティチュート[Institute](名)定則。原理。主義。協會。學校。會館。

インスティンクト[Instinct](名)本能。天性。

インストラクション[Instruction](名)〔武〕指令。活動方針の指示。

インスパイヤ[Inspire](英・動)鼓吹する。激感。神來。神靈を吹込まれたやうに感ずること。

インスピレーション[Inspiration](名)靈感。

インスペクター[Inspector](名)戰技者の反則を監視する者。

いんせ[印施](名)衆人の利益となる事柄を印刷して分配すること。

いんせ……[陰政](名)❶後宮の政。內政。❷女官の取締。

いんせ……[陰晴](名)みだらな音樂又はその音樂。

いんせ……[淫樂](名)みだらな音樂又はその音樂。

いんせ……[隱栖](名)世をのがれて閑居すること。

いんせ……[殷盛](名)甚だ盛んなこと。

いんせ……[院政](名)天子が御位を讓られて河上皇の時に始まる。

いんせ……[隕星](名)〔天〕地上に落下する流星。

いんせ[印稅](名)〔法〕印紙稅。❷著者が著書に自分の印をおした部數に應じて、出版者から著者に納める金。

いんせき[姻戚](名)婚姻によつて生じた姻族。

いんせき[茵席](名)しとね。しきもの。

いんせき[引責](名)責任を自分の身にひきうけること。

いんせき[隕石](名) 流星の地上に落下したもの。天隕石。

いんせきし[引赤紙](名)【薬】貼布薬の一種。皮膚を腫れ刺戟し、血液を集めるに效あるため諸種の炎症・神經痛などに用ひる。

いんせつ[引接](名) ❶ひきいれて對面すること。❷ひきあはすこと。

いんぜん[隱然](名・副) 判然とおもてにあらはれぬが、どこともなく其の勢を現はすさま。むっくり。

いんぜん[院宣](名) 上皇又は法皇の宣旨。

いんぞく[姻族](名)【法】婚姻によって配偶者の一方と他方との間に生ずる緣類關係。

いんそつ[引率](名) 率ゐること。

インターヴィュー[Interview](名) ❶面會。會談。謁見。❷新聞・雜誌記者が記事の種取りに訪問すること。

インターカレッジ[Intercollege](名) 大學及び專門學校の對抗。主としてスポーツの場合に用ひられる。

インターコース[Intercourse](名) 通信。交際。

インタータイプ[Inter-type](名)【機】自動活版文選植字機の一種。鍵盤を叩くと、一行宛一塊となった活字組版が鑄造される機械。一九一四年アメリカ合衆國インタータイプ會社の創製。

インターナショナリズム[Internationalism](名) ❶國際主義。世界主義。❷國際關係。❸國際勞働者同盟主義。

インターナショナル[International](英・形・名) ❶國際的な。世界的の。❷國際社會主義團體。❸國際勞働者同盟。

インターフェアー[Interfere](名)競技者が、故意に相手のチームの競技者のプレーを妨害すること。

インターフォーン[Interphone](名) 室內電話。一構の建物內で交換する仕掛ある電話。

いんたい[隱退](名) 世事を避けて閑居すること。

いんたい[引退](名) 職を止めて退くこと。

いんだい[院代](名) 院家の寺格ある寺の住持の代理。

いんたく[隱宅](名) ❶隱居した人の住宅。隱居所。❷かくれが。

インダクション[Induction](名) ❶誘導。❷【論】歸納法。

インダストリヤル・デモクラシー[Industrial democracy](名)【社】產業民主主義。產業の管理並びに統制・勞働條件の決定等に對して勞資雙方に平等の發言權と責任を持たせようといふ主張。

インタッチ[In-touch](名) ラグビー蹴球で、球が「タッチ・ライン」の上又は外に出ること。

インタレスト[Interest](名) ❶利子。利益。❷興味。趣味。

インタロゲーション[Interrogation](名) 疑問。**—マーク**[Interrogation mark](名) 疑問の符號。即ち?。

インチ[Inch][吋](名)【數】イギリス國の長さの單位。「フート」の十二分の一。我が國の曲尺八分三厘八毛一糸に當たる。

いんち[印池](名) 印肉を入れる器。

いんち[引致](名)【法】被告人若しくは被疑者又は證人等を、強制的に官署に出頭させること。ひきゆくこと。つれ行くこと。

いんち[韻致](名) 風雅な趣。おもむき。風致。

いんち[賭博の際、相手の眼をぬすんで不正を行ふこと。❷ごまかし。でたらめ。いいかげん。

インチュイショニズム[Intuitionism](名)【倫】直覺主義。道德の認識に推理的・經驗的でなく、直覺的だといふ倫理學說。

インチュイション[Intuition](名)【心】直覺。

いんちゅうはっせん[飲中八仙](名) 酒を飲んで詩文を友とした支那の八文人。李白・賀知章・李適之・汝陽王璡・崔宗之・蘇晉・張旭・焦遂の稱。

いんちょう[引重](名) 互に尊重しあふこと。

インディヴィデュアリスト[Individualist](名) 個人主義者。

インディヴィデュアリティ[Individuality](名) 個人性。

インディヴィデュアリズム[Individualism](名) 個人主義。利己主義。

インディヴィデュアリティー[Individuality](名) 個人の。各自の。

インディヴィデュアル[Individual](英・形) 一個人の。

インディウム[Indium](名)【化】十九世紀の半ば頃發見せられた化學元素。アルミニウム族に屬し、原子價は三〇。

インディケーター[Indicator](名) ❶【機】指示計器。蒸氣機關・內燃機關等にとりつけられ、氣壓の變化を示す装置。❷野球審判官が、その打球數を忘れぬ爲に用ひる計數器。❸【化】指示藥。色の變化によって化學反應の終局を指示する試藥の總稱。例へばメチルオレンジは酸性液中では赤色、アルカリ液中では青色を呈する事により、酸又はアルカリの定量を指示する類。

インディゴ[Indigo]藍靛・洋藍(名) 染料の一。帶銅赤色の青色粉末で、水・酒精・エーテル・酸・アルカリの水溶液には溶けない。鹽基で還元すると白藍を生ずる。藍草などから採る藍色の外國染料。印度藍。

インディヤン[Indian](名) ❶印度人。❷アメリカインディヤン。**—ペーパー**[Indian paper](名) 雜書などに用ひられる强韌で緻密な薄い西洋紙。**—レッド**[Indian red](名) 帶紫赤色の顏料。

インデックス[Index](名) 索引。見出し。目次。指數。**—カード**[Index card](名)カードの間に插入するA・B・C等の見出しカード。

インデペンデンス[Independence](名) ❶獨立。❷財產。

インデペンデンツ[Independents](名)【宗】基督教の一派で、政治上・宗教上の權力に對してすべて獨立自由をとなへ、基督教のみに服從するもの。

インテリ[Intelli](名)【俗語】インテリゲンツィアの我が國に於ける略稱。知識階級。有識階級。

インテリゲンチャ(名)【社】インテリゲンツィア。

インテリゲンツィア[露 Intelligentzia](名)【社】八十九世紀の六十年代にロシヤのベー・ボボイキンの創めた語。アルジョア的敎養を有し、小アルジョア的觀念の所有者であり、生活狀態としては プロレタリア的狀態に從われた中間的存在。自己の知識的勞働によって生活するを特色とするもの。知識階級。有識階級。

インテル[Inter](名) 活版植字の際、行間・字間をあける爲に插入する込物(こみもの)。

インテルメッツオ[伊 Intermezzo](名) ❶希臘劇で幕間に演ぜられた獸曲又は雜劇から發達したもので、悲喜劇の喜劇中で演する音樂を伴なった輕い一幕物。❷【音】シンフォニー・ソナタの各部をつなぐ短い音樂。

インテレクチュアル[Intellectual][英・形・名] ❶智的。智能的な。❷智者。賢者。

インテレクト[Intellect](名) 知能。知力。智者。

インテレスト[Interest](名) インタレスト。

いんてん[院展](名) 日本美術院主催の繪畫展覽會の略稱。

いんでん[印傳](名)(いんでんがわ)。**—がわ**[印傳皮](名) 初め印度から渡來したもの。羊又は鹿のなめしがはで、小皺があり、肌柔かで袋物などにする。いんでやがは(應帝亞革)。甲斐市の名產。

いんでんき[陰電氣](名)【理】Negative electricity 比較的低い力の電氣で、封緘又は樹脂をフランネルで摩擦する時、又は硝子棒を絹布で摩擦する時に生ずる電氣と同一性質の電氣。負電氣。陽電氣の對)

インテンシティー[Intensity](名) 强度。强さ。

インテンション[Intention](名) 意思。目的。

いんでんりゅう[陰電流](名)【理】Zinc current) 電池の陰極から發生する電流。

いんど[印度][India](名)【地】南部アジヤの中央にある一大半島。一八七七年イギリスの領土となった。北はヒマラヤ山脈によって中華民國の新疆・西藏及びネパール・アータンの二國と境し、東は中華民國及びシャム國に隣し、西はアフガニスタン・ベルシャの兩國と接する。國樣約四七〇萬方粁。ヒンヅー族と原人種ドラヴィダ等大部を占めてゐる。廣大な原野を有し、農產・畜產に富み、礦產も亦豐かでイギ

リスの一大貿庫である。**―あい**……[印度藍](名)インディゴ。**―きょう**……[印度教](名)【宗】紀元前八世紀の頃、グマラ・サンカラ等の婆羅門によって唱道された多神教の宗教で、其の教理は信仰的・世俗的で、一般民衆の信奉を得、佛教の勢力を駆逐してこれに代り、十九世紀に入って更に盛運の兆あらはれ、近時ガンヂーが出て全印度人の信望をつないでゐる。**―ゲルマンご・ぞく**[印度語族](名)(Indo-Germanic languages)印度語族。西は印度から西は太西洋沿岸に至り、北はスカンディナヴィヤより南は地中海に及る地域を占めた言語で、その言語の最東部の代表インド人及び最西部の代表ゲルマン人の名を取って名づけた。形態的には屈折語なる特徴とする。現存する者は、インドイラン語・バルトスラヴ語・アルメニヤ語・ギリシャ語・ゲルマン語・アルバニヤ語・ケルト語・イタリック語である。アリヤン語。印歐語族。

インドアー・スポーツ室内戯技の總稱。屋内スケート。卓球・擯球の類。(アウトドアースポーツの對)

いんとう[印刀](名)はんを彫る刀。

いんとう[淫蕩](名)❶酒色に耽ること。❷みだらな行ひをすること。**―ぶんがく**[淫蕩文學](名)【文】花柳界の情事や男女間の猥褻な方面を題材とし、色慾的の描寫をなす文学。

いんとう[咽頭](名)【生】上方は鼻腔に、前方は口腔に、下方は食道の上端に位する漏斗狀をなす部分。**―えん**[咽頭炎](名)【醫】咽頭に起こる炎症。**―カタル**[咽頭加答兒](名)【醫】咽頭がはれて聲のかれる病、即ち咽頭粘膜の炎症。

いんどう[引導](名)❶導くこと。てびき。❷死人を葬る前に、僧侶が棺前に立って轉迷・開悟を説くこと。❸迷ふ衆生を導いてさとりの道に入らせること。**―せき**[引導石](名)大阪市天王寺西門石鳥居の南手にある石で、ここの石の邊に葬送の柩を置き、無常院の鐘を撞くと、聖德太子が同向して、亡魂を養導し給ふといふ。**―を渡す**(句)❶死者に引導を與へること。❷最後の決意を宣告してあきらめさせること。

いんとうか……[隱頭花](名)【植「いちじゅく」のやうに花軸の頂端が凹んでその内面に多くの花をつけるもの。

いんとく[隱匿](名)❶隱すこと。秘密にすること。かくまふこと。❷かくれること。❸隱れた惡事。心中に藏する罪惡。**―しん**。**―けん**[隱匿權](名)【法】他人の所有物を隱匿したことによって成立する犯罪。

いんとく[陰德](名)人に知れぬやうに施す恩德。陰德を積んだ人には、必ずよい報がある。

いんどしな[印度支那][Indo-China](名)【地】アジヤ大陸の東南部に突出する一大半島で、印度と支那の中間に位するから名づける。政治上では、フランス領印度支那・シャム・イギリス領のマライ聯邦・ビルマ・海峡植民地に分かれてゐる。面積約一九六萬方粁。

インドラ[Indra](名)[因陀羅](名)【宗】印度吠陀(アヴェ)神話の主要神。雷霆の神格化であり、「あらし」に關與し、後には偉大な勇者軍神となった。Indra の體・髮・髭は悉く茶褐色、四手で、電戟・弓箭・鉤・繩を武器とし、戰車に乘して空中を疾驅し、猛威を振ふ。其の居はヒマラヤの北メル山と信ぜられた。

イントレランス[Intolerance](名)狹量。頑冥。偏執。特に宗教上、他説に耳を傾けぬこと。

イントロス・ペクション[Introspection](名)内觀。内省。反省。

イントロダクション[Introduction](名)序。緒言。序論。入門書。前奏曲。紹介。紹介狀。

インドロップ[In-drop](名)インドロ。野球で投手の投じた球が、ベースの邊で急に下りながら打者の近くを通るもの。

いんとん[隱遁][隱遯](名)世事をすてて隱れること。

インナー・ライフ[Inner life](名)内面生活。精神生活。

いんない[院内](名)貴族院又は衆議院の内部。**―かんじ**[院内幹事](名)【政】衆議院で、其の政黨の諸案其の他の事務を取扱ふもの。**―そうむ**[院内總務](名)【政】衆議院内に於ける政黨員に關する事務を總べる者。**―そうり**[院内總理](名)【政】衆議院内で、その政黨の議員を統率・操縱する者。

いんにく[印肉](名)印をおすに用ひる肉ぶもぐさに、ひまし油・松脂・白蠟をまぜて著色したもの。色は、朱・黑・青などがある。

いんにん[隱忍](名)苦痛をこらへて、表面にあらはさぬこと。

インニング[Inning](名)【野】野球やクリケットで試合の同數。ファーストイニングは第一回。

いんねん[因緣](名)いんえん。**―ずく**[因緣づく](名)何事も因緣によること。

いんのう[陰囊](名)【生】陰莖の後部に垂れた嚢狀のもので、その中に睾丸があって精液を分泌する。ふくろ。きんたま。

いんのくそ[犬糞](名)いぬのくそ。

いんのこ[犬子](名)❶いぬのこ。❷小兒が夢におそはれ、又は物に怖れる時などに唱へる呪文の詞。

いんのごしょ[院御所](名)法皇又は上皇の御所。

いんのしょう[院庄](名)【地】岡山縣苫田郡にあるだ地。今は津山市に入る。元弘二年三月後醍醐天皇が隱岐に遷幸の途、行在所を置かれ、兒島高德が重祚を奉はうとして成らず、櫻樹を刪って「天莫空勾踐、時非無范蠡」の詩を書いたと傳へられる所。

インノセント[Innocent](英・形)潔白な。無邪氣な。罪のない。イノセント。

いんのちょう[院廳](名)上皇又は法皇の政治をなさる所。

いんのべっとう[院別當](名)院廳の長官。

いんばい[淫賣](名)色を賣ること。又、其の女。ばいいん(賣淫)。**―くつ**[淫賣窟](名)淫賣屋の集まってゐる所。**―ふ**[淫賣婦](名)色を賣る女。娼妓以外の密淫賣の女。**―や**[淫賣屋](名)淫賣婦をかかへておく家。**―やど**[淫賣宿](名)淫賣婦が客をつれこむ家。

いんばこ[印匣・印箱](名)印を入れておく箱。

インパスト[伊 Impasto](名)❶【工】異色の種種の材料を煉り合はせて固めること。油絵細工の類。❷【美】油繪で、繪具を高く盛りあげること。

インパルス[Impulse](名)【心】衝動。

いんハルト[印判][Inhalt](名)内容。目次。

いんばん[印判](名)いん。いんぎやう。

[印判師](名)印判をほって賣る家。又、その人。

[印判屋](名)印判を業とする人。**―し**

[印版](名)印刷する文字・繪畫をほった版面。**―**「分解に於いて、陽イオンの附著する金屬板。

いんばん[陰板](名)【理】(Negative plate)電氣

いんび[陰徴](名)❶かすかであらはれぬこと。❷おくぶかくして知り難いこと。

いんぴ[淫靡](名)みだらなこと。風儀の正しくないこと。

いんぴ[陰庇](名)かばふこと。おかげ。ひきたて。

いんぶ[允武](名)武德のまことに盛なこと。

いんぶ[陰部](名)男子の陰莖又は女子の陰門。かくしどころ。

いんぶ[陰符](名)❶兵法の書。❷まじないのふだ。

いんぶ[陰府](名)地獄の異稱。冥府。

いんぶ[殷富](名)富み榮えること。

いんぶ[淫婦](名)多情な女。いたづら女。

いんぶ[殷阜](名)(樹子法言孝至篇の句)民を富ましめ、財を多くすること。

いんぶ[韻譜](名)韻字をその所韻によって排列した書。

インフィールダー[Infielder](名)野球の内野手。即ち一塁手・二塁手・三塁手・遊撃手の四人。時には投手・捕手をも加へて稱する。

インフィールド[Infield](名)野球場で、ホームベースと他の三塁とを結合する線の區域内。内野。

いんぷう[陰風](名)陰鬱な風。冬の風。

いんぷう[淫風](名)みだらな風習。

いんふたき[ふたん]**ー**[韻塞](名)古詩の韻字をふさいで、それをいひあてる勝負事の遊戯。

インフルエンザ[Influenza](名)【醫】流行性感冒。インヌルエンザ菌の傳染によって起こる感冒で、羅漢・惡寒を發し、しまま急性肺炎を起こす。「毒化。

インフルエンス[Influence](名)影響。感化。

インフレ(名)【經】「インフレーション」の略。

けいき[景氣](名)【經】通貨の膨脹によって景氣の活氣を呈すること。

インフレーション[Inflation](名)❶【經】通貨膨脹。❷【經】値上。騰貴。❸詩張。「打出す側のもの。

インプレーヤー[In-player](名)【蹴】庭球で球を歌劇に於ける演出者や音樂會の指導者をいふ。

インプレッサリオ[伊 Impressario](名)【音】

インプレッシヴ[Impressive](英、形)印象的な。感銘を與へること。心に深く徹すること。

インプレッショニズム[Impressionism](名)印象主義。

インプレッション[Impression](名)印象。

いんぶん[印文](名)印刻した文字。記號。

いんぶん[陰文](名)印章又は鐘・鼎の銘などの、文字を彫りくぼめたもの。いんもん。

いんぶん[韻文](名)❶韻をふんだ文。❷律格による文。挾義の詩歌。**ーげき**[韻文劇](名)【文】韻文で書いた戯曲。ゲーテの「フヴウスト」の類。

いんぶん・いんぶん[允文・允武](名)(詩經魯頌泮水篇の句)天子の御德を頌美する語で、まことに文武の德を備へ給ふこと。

いんぶんし[尹文子](名)【人】支那春秋時代の思想家。齊の宣王の御。形名論を唱へ、「大道」を著し、老子の無形・無名の大道から說き起こして、仁義・禮樂・法術論に論及してゐる。

いんべ[齋瓮・忌瓮](名)(いわいべ)。いむべ。

いんべい[隱蔽](名)おほひかくすこと。**ーち**[隱蔽地](名)軍事行動を敵にさとらせない地で、隱蔽物があって、起伏高低ある地。**ーぶつ**[隱蔽物](名)敵の遠望を遮る地物。

いんべやき[伊部燒](名)岡山縣和氣郡伊部町から產出する陶器で、赤褐色で釉藥を施さないもの。備前燒。

インペリヤリズム[Imperialism](名)【政】帝國の。

インペリヤル[Imperial](英、形)帝國の。皇室の。

いんぼ[陰補](名)父祖の功勞によって官に補せられること。おんぼ。

いんぼう[陰謀](名)❶密かにたくらむ謀。❷反逆の謀。❸【法】二人以上の者が團結して犯罪行爲をなすこと。**ーだん**[陰謀團](名)陰謀を企てる團體。

インポータンス[Importance](名)重大。重要。

いんぼく[陰木](名)ときはぎ(常磐木)。

いんぼつ[湮沒](名)しづむこと。うせること。

インポッシブル[Impossible](英、形)不可能な。

いんぼん[淫犯](名)【佛】女色の戒を犯すこと。

いんぼん[印本](名)印刷した書籍。

いんぼん[淫奔](名)いたづら。みだら。

いんぼん[院本](名)(行院本の略。「行院は支那で俳優のゐる所)淨瑠璃本。脚本。

いんみつ[隱密](名)隱して祕密にすること。

いんみょう[因明](名)【哲】(梵 Hetuvidyā)五明の一。古昔、印度に起こつた論理學。宗・因・喩・合・結の五段又は宗・因・喩の三段の式を立て、物事の眞僞を考定する法。「ること。

いんめつ[湮滅・堙滅](名)あとかたの消え失せ

いんめつ[隱滅](名)❶隱れて見えぬこと。❷【天】一つの天體が他の天體に蔽はれて見えぬこと。

インメルマン[Max Immelmann](名)【人】ドイツの有名な飛行將校。ドレスデンに生まれ、世界大戰當時、西部戰線に活躍して職死した。インメルマンターンは氏の得意とした高等飛行術である。(一九一九)

いんめん[印棉](名)印度產棉花の略稱。

いんめん[印面](名)印の文字を彫刻した面。

いんも[怨靡・癡什・甚麼](副)(支那宋時代以後の俚語)いかに。いかなる。いづれ。

いんもう[陰毛](名)陰部の毛。

インモータリティー[Immortality](名)不朽。不滅。不死。

インモータル[Immortal](英、形)不朽的の。「不死の。不滅の。

インモーラル[Immoral](英、形)不道德な。

いんもつ[音物](名)好意を表する爲に贈る物。つかひもの。おくりもの。進物。

いんもん[陰門](名)【生】女子の外部生殖器。

いんもん[陰文](名)いんぶん(陰文)。

いんや(副)いえ(否)に同じ。

いんや[隱約](名)❶隱微にして簡約なること。かすかで知り難いこと。❷世に埋れて困窮すること。

いんや[印鑰](名)天皇の御正印と請司の藏のかぎと。

いんゆ[引喩](名)文中に故事や成語を引く修辭法。あんゆ(暗喩)。

いんゆ[隱喩](名)【哲】譬喩の形式によらず本義と譬喩とを一つにして「如し」「似たり」などを用ひぬ修辭法。あんゆ(暗喩)。

いんゆう[陰憂](名)いたみ憂へること。

いんよう[陰陽](名)❶支那の易學で、天地間の萬物を作り出す相反對した性德を有する二樣の氣。一を陰、一を陽と稱する。而して萬物の化成は、此の二氣の消長による。日・春・南・晝・男等は陽、月・秋・北・夜・女等は陰。❷【理】電氣・磁氣の消極と積極。

ーか[陰陽家](名)支那で、天文・曆數・方位に基づいて、人の行事の吉凶・禍福を說く人。(おんようし)。**ーどう**[陰陽道](名)(おんようどう)。

ーりょう[陰陽寮](名)(おんようりょう)。政道宜しきを得れば、天地悉應して陰陽自ら調和する。いふ。

いんよう[引用](名)❶他の文章や事例又は古人の語を引いて考證すること。❷ひきあげて任用すること。**ーしょ**[引用書](名)文句や例を引用した書物。**ーほう**[引用法](名)有名な詩歌・文章・語句等を、自己が表現發表する場合に引いて用ひる修辭法。

いんよう[飲用](名)飲むに用ひること。**ーす**(する)[飲用水](名)飲料に用ひる水。のみみづ。

いんようかく[淫羊藿](名)【植】「いかりそうこの」の別名。

いんよく[淫慾](名)男女の情慾。色慾。

いんらく[淫樂](名)みだらな樂しみ。

いんらく[淫亂](名)みだらな行ひをほしいままにすること。いろごとひ。

いんりつ[韻律](名)律格。詩の形式。

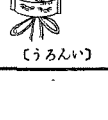
いんりょう[飲料](名)飲物の總稱。**ーす**(する)[飲料水](名)のみみづ。

いんりょく[引力](名)【理】(Gravitation)物質の通有性として互にひきあふ力。英國人ニュートンの發見せるもの。萬有引力。

いんりん[隱淪](名)世なのがれて隱れ出でぬこと。又、その人。

いんれい[引例](名)證據として引く例。

いんろう[印籠][陰暦](名)楕圓形の三重乃至五重の小匣。左右兩端に鎖鑰・根附をつけて帶に挾むもの。江戸時代の禮服用の裝飾品で、梨地蒔繪・螺鈿・堆朱は甲印肉を入れたものであつたが、江戸時代には其の中に丸藥や當座藥を入れた。**ーきんちゃく**[印籠巾著](名)印籠に結び合はせて腰にさげる布又は革の巾著。**ーし**[印籠師](名)印籠を作る職人。**ーずけ**[印籠漬](名)胡瓜・白瓜などのなかこを去り、中に紫蘇・唐辛などを入れて鹽漬にしたもの。**ーぶた**[印籠蓋](名)かぶせぶたの一。印籠のやうにふたとみと平かに重なるもの。**ーゆば**[印籠湯葉](名)印籠の形につくつたゆば。卽ち湯葉を厚く重ねて卷き、大種位の長さに切つたもの。


〔うろんい〕

いんわ[淫猥](名)みだらなこと。わいせつ(猥